

にし おさ かべ にし はら い せき  
西 刑 部 西 原 遺 跡  
( E 区 )

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区  
土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 22 年 6 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

## 序

ここに報告する西刑部西原遺跡は、宇都宮市の南部、インターパーク周辺に存在する東谷・中島地区遺跡群に含まれる遺跡となります。この一帯は主に古墳時代以降各時代の遺跡が多く、笹塚古墳や上神主・茂原官衙遺跡など重要遺跡のある地域ですが、とくに東谷・中島地区遺跡群は砂田遺跡、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡遺跡、立野遺跡などの大規模集落や推定東山道といった貴重な遺跡が密集する地域であります。

これらの貴重な文化財を開発による破壊から保護し、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。そこで宇都宮市では、消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を後世に伝えるため事業者のご協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行うことにより、その記録保存に努めている次第であります。このたびもその保存措置につきまして、関係機関や事業者等と協議を重ねましたが、現状での保存は難しいとのこと、やむを得ず万全の調査をもって記録という形で後世に伝えることになったものです。

今回の発掘調査は、都市再生機構による土地区画整理事業にともなって、平成21年度に実施されました。調査を行った範囲は西刑部西原遺跡の一部にすぎませんが、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが数多く発見されました。これらの成果は、宇都宮市のみならず栃木県における古代の人々の生活の実態や変遷を知るうえで重要な資料となるでしょう。

この発掘調査によって出土した考古資料が学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護ならびに普及のため、さらには郷土の歴史を知り、じかに歴史と接することのできる資料として多くの方々に広く活用されるよう努力していく所存です。また、本書が地域史の理解を深める資料として役立つことを願うとともに、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にあたり、諸氏諸機関及び地元関係各位から多大なご助力とご理解を賜り深く感謝しております。今後ともご理解とご協力をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

平成22年6月

宇都宮市教育委員会  
教育長 伊藤文雄

## 例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市インターパーク4丁目7-5, 7-6に所在するにしおるまへにしほら西刑部西原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、独立行政法人 都市再生機構埼玉地域支社 栃木開発事務所による東谷・中島地区土地区画整備事業に伴う事前調査として、発掘調査から整理・報告書刊行に至るまで業務を同機構より委託を受けて、宇都宮市教育委員会の指導のもと、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合が平成21年度に実施したものである。
3. 図版1等に掲載したラジコンヘリコプターによる空中撮影は、株式会社栗田商事に依頼して実施した。
4. 調査で検出した炭化種実の同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、同定結果は附章に掲載した。
5. 報告書に掲載した遺物写真は、杉原豊氏に撮影を依頼した。
6. 本報告書の執筆・編集は、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合 調査研究員 白崎智隆が行った。ただし、第1章第1節(1)調査に至る経緯は、宇都宮市教育委員会文化課によるものである。
7. 発掘調査、資料整理及び報告書執筆にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導並びにご協力を賜った。ここにご芳名を記して感謝の意を表したい(五十音順、敬称略)。  
都市再生機構埼玉地域支社栃木開発事務所、株式会社福田屋百貨店、大澤伸啓、後藤信祐、小中美幸、竹内順一、中村岳彦、永井智教、橋本澄朗、水野順敏、宮本久子、谷中 隆
8. 調査に係わる図面・写真等の諸記録及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第1章 総説		第7章 時期不明の遺構	
第1節 調査の概要	1	第1節 概要	106
第2節 調査体制	4	第2節 欄列	106
第2章 遺跡の環境		第3節 土坑	107
第1節 地理的環境	5	第4節 溝跡	113
第2節 歴史的環境	5	第5節 小穴	113
第3節 基本層序	7	第5章 調査の成果	
第3章 調査方法		第1節 出土遺物について	139
第1節 発掘作業	8	第2節 検出した遺構について	140
第2節 整理作業	9	第3節 遺構の変遷	145
第3節 報告書作成作業	9	附章 自然科学分析	
第4章 古墳時代以前の遺構と遺物		西刑部西原遺跡（E区）	
第1節 旧石器時代	13	出土種実遺体の同定調査	149
第2節 縄紋時代	14	写真図版	
第5章 古墳時代の遺構と遺物		報告書抄録	
第1節 概要	16		
第2節 竪穴住居跡	16		
第3節 掘立柱建物跡	56		
第4節 円形周溝遺構	64		
第5節 土坑	68		
第6節 溝跡	70		
第7節 小穴	71		
第8節 遺構外出土遺物	72		
第6章 奈良・平安時代の遺構と遺物			
第1節 概要	73		
第2節 竪穴住居跡	73		
第3節 掘立柱建物跡	89		
第4節 円形有段遺構	97		
第5節 土坑	99		
第6節 井戸跡	101		
第7節 溝跡	104		
第8節 小穴	105		
第9節 遺構外出土遺物	105		



## 挿 図 目 次

図1	本調査範囲と周辺地形	2	図47	3号掘立柱建物跡 (SB003)	59
図2	確認調査トレンチ配置図	3	図48	7号掘立柱建物跡 (SB007)	60
図3	遺跡の位置と周辺遺跡	6	図49	15号・16号掘立柱建物跡 (SB015・016)	61
図4	基本層序図	7	図50	17号掘立柱建物跡 (SB017)	62
図5	調査区全体図	11~12	図51	19号掘立柱建物跡 (SB019)	63
図6	旧石器調査範囲	13	図52	1号円形周溝遺構 (SX001)	64
図7	5号・16号・27号土坑 (SK005・016・027)	14	図53	2号・3号円形周溝遺構 (SX002・003)	65
図8	遺構外出土遺物	15	図54	5号・6号円形周溝遺構 (SX005・006)	66
図9	1号竪穴住居跡 (S1001)	17	図55	7号円形周溝遺構 (SX007) 及び出土遺物	67
図10	1号竪穴住居跡 (S1001) 掘形・電	18	図56	18号・30号・32号・34号・35号土坑 (SK018・030・032・034・035)	69
図11	1号竪穴住居跡 (S1001) 出土遺物-1	19	図57	30号・32号・34号・35号土坑 (SK030・032・034・035) 出土遺物	70
図12	1号竪穴住居跡 (S1001) 出土遺物-2	20	図58	4号・5号・6号溝跡 (SD004・005・006)	71
図13	2号竪穴住居跡 (S1002)	22	図59	299号小穴 (P299) 及び出土遺物	72
図14	2号竪穴住居跡 (S1002) 電	23	図60	遺構外出土遺物	72
図15	2号竪穴住居跡 (S1002) 出土遺物	24	図61	7号竪穴住居跡 (S1007)	74
図16	3号竪穴住居跡 (S1003)	25	図62	7号竪穴住居跡 (S1007) 出土遺物-1	75
図17	3号竪穴住居跡 (S1003) 掘形	26	図63	7号竪穴住居跡 (S1007) 出土遺物-2	76
図18	3号竪穴住居跡 (S1003) 電	27	図64	8号竪穴住居跡 (S1008)	77
図19	3号竪穴住居跡 (S1003) 出土遺物	28	図65	8号竪穴住居跡 (S1008) 電	78
図20	4号竪穴住居跡 (S1004)	29	図66	8号竪穴住居跡 (S1008) 出土遺物	79
図21	4号竪穴住居跡 (S1004) 出土遺物	30	図67	9号竪穴住居跡 (S1009)	81
図22	5号竪穴住居跡 (S1005)	31	図68	9号竪穴住居跡 (S1009) 出土遺物	82
図23	5号竪穴住居跡 (S1005) 出土遺物	32	図69	10号竪穴住居跡 (S1010)	83
図24	6号竪穴住居跡 (S1006)	33	図70	10号竪穴住居跡 (S1010) 出土遺物	84
図25	6号竪穴住居跡 (S1006) 出土遺物	34	図71	11A・B号竪穴住居跡 (S1011A・B)	85
図26	12号竪穴住居跡 (S1012)	36	図72	11A・B号竪穴住居跡 (S1011A・B) 出土遺物	86
図27	12号竪穴住居跡 (S1012) 遺物出土状況	37	図73	14号竪穴住居跡 (S1014) 及び出土遺物	87
図28	12号竪穴住居跡 (S1012) 電	38	図74	15号竪穴住居跡 (S1015) 及び出土遺物	88
図29	12号竪穴住居跡 (S1012) 出土遺物-1	39	図75	4号掘立柱建物跡 (SB004)	89
図30	12号竪穴住居跡 (S1012) 出土遺物-2	40	図76	5号掘立柱建物跡 (SB005)	90
図31	12号竪穴住居跡 (S1012) 出土遺物-3	41	図77	6号掘立柱建物跡 (SB006)	91
図32	13号竪穴住居跡 (S1013)	43	図78	8号掘立柱建物跡 (SB008)	92
図33	13号竪穴住居跡 (S1013) 遺物出土状況-1	44	図79	9号掘立柱建物跡 (SB009) 及び出土遺物	93
図34	13号竪穴住居跡 (S1013) 遺物出土状況-2	45	図80	10号掘立柱建物跡 (SB010)	94
図35	13号竪穴住居跡 (S1013) 掘形	46	図81	11号掘立柱建物跡 (SB011)	95
図36	13号竪穴住居跡 (S1013) 貯蔵穴	47	図82	12号・13号掘立柱建物跡 (SB012・013)	96
図37	13号竪穴住居跡 (S1013) 電	48	図83	14号・18号掘立柱建物跡 (SB014・018)	97
図38	13号竪穴住居跡 (S1013) 出土遺物-1	49	図84	17号土坑 (SK017)	98
図39	13号竪穴住居跡 (S1013) 出土遺物-2	50	図85	17号土坑 (SK017) 出土遺物	99
図40	13号竪穴住居跡 (S1013) 出土遺物-3	51	図86	7号・21号・31号土坑 (SK007・021・031) 及び出土遺物	100
図41	13号竪穴住居跡 (S1013) 出土遺物-4	52	図87	1号・2号・3号井戸 (SE001・002・003)	102
図42	16号竪穴住居跡 (S1016)	54	図88	1号・2号・3号井戸 (SE001・002・003) 出土遺物	103
図43	16号竪穴住居跡 (S1016) 出土遺物	55			
図44	17号竪穴住居跡 (S1017) 及び出土遺物	56			
図45	1号掘立柱建物跡 (SB001)	57			
図46	2号掘立柱建物跡 (SB002)	58			

図89	2・3号溝跡 (SD002・003) 及び出土遺物 …	104	図95	19号・20号・22号～26号土坑 (SK019・020・022～026) ……………	111
図90	243号・244号小穴 (P243・244) 及び出土遺物 ……………	105	図96	33号・36号～41号土坑 (SK033・036～041) ……………	112
図91	遺構外出土遺物 ……………	105	図97	1号溝跡 (SD001) ……………	114
図92	1号櫛列 (SA001) ……………	106	図98	文字・記号資料集成 ……………	139
図93	2号～4号・6号・8号土坑 (SK002～004・006・008) ……………	107	図99	遺構変遷図-1 ……………	146
図94	9号～15号土坑 (SK009～015) ……………	109	図100	遺構変遷図-2 ……………	147

## 表 目 次

表1	遺構番号対照表 ……………	9	表5	竪穴住居跡出土土器計量表 ……………	142
表2	出土遺物観察表 ……………	115	表6	掘立柱建物跡主軸方位 ……………	143
表3	小穴一覧表 ……………	132	表7	遺構時期一覧表 ……………	145
表4	竪穴住居跡主軸方位 ……………	141			

## 図 版 目 次

### 図版1

1. 調査区全景空撮 (合成)
2. 調査区北側全景 (南から)
3. 調査区南側全景 (南から)
4. 調査前風景 (西から)
5. 作業風景

### 図版2

1. 旧石器時代調査完了状況 (東から)
2. 調査区南側基本土層 (南から)
3. S1001 遺物出土状況 (南から)
4. S1001 遺物出土状況 (東から)
5. S1001 遺物出土状況 (東から)
6. S1001 完掘 (南から)
7. S1001 電完掘 (南から)
8. S1001 掘形 (南から)

### 図版3

1. S1001 電掘形 (南から)
2. S1002 遺物出土状況 (南から)
3. S1002 完掘 (南から)
4. S1002 電完掘 (南から)
5. S1002 旧電完掘 (南から)
6. S1002 掘形 (南から)
7. S1002 電掘形 (南から)
8. S1002 旧電掘形 (南から)

### 図版4

1. S1003 遺物出土状況 (南から)
2. S1003 完掘 (南から)
3. S1003 電完掘 (南から)
4. S1003 柱穴及び貯蔵穴 (東から)
5. S1003 掘形 (南から)

6. S1003 電掘形 (南から)
7. S1004 遺物出土状況 (南から)
8. S1004 完掘 (南から)

### 図版5

1. S1004 掘形 (南から)
2. S1005 遺物出土状況 (南から)
3. S1005 遺物出土状況 (西から)
4. S1005 完掘 (南から)
5. S1005 電完掘 (南から)
6. S1005 掘形 (南から)
7. S1005 電掘形 (南から)
8. S1006 遺物出土状況 (南から)

### 図版6

1. S1006 遺物出土状況 (西から)
2. S1006 遺物出土状況 (南から)
3. S1006 電 (南から)
4. S1006 完掘 (南から)
5. S1006 掘形 (南から)
6. S1006 電掘形 (南から)
7. S1007 遺物出土状況 (南から)
8. S1007 遺物出土状況 (西から)

### 図版7

1. S1007 遺物出土状況 (南から)
2. S1007 電遺物出土状況 (南から)
3. S1007 完掘 (南から)
4. S1007 電完掘 (南から)
5. S1007 掘形 (南から)
6. S1007 電掘形 (南から)
7. S1008 遺物出土状況 (南から)
8. S1008 遺物出土状況 (南から)

図版 8

1. SI008 遺物出土状況
2. SI008 完掘 (南から)
3. SI008 完掘 (西から)
4. SI008 1号電完掘 (南から)
5. SI008 2号電完掘 (南から)
6. SI008 3号電完掘 (西から)
7. SI008 掘形 (南から)
8. SI008 1号電掘形 (南から)

図版 9

1. SI008 2号電掘形 (南から)
2. SI008 3号電掘形 (西から)
3. SI009 遺物出土状況 (南から)
4. SI009 遺物出土状況 (南から)
5. SI009 完掘 (南から)
6. SI009 電完掘 (南から)
7. SI009 掘形 (南から)
8. SI009 電掘形 (南から)

図版 10

1. SI010 遺物出土状況 (南から)
2. SI010 電遺物出土状況 (南から)
3. SI010 掘形 (南から)
4. SI010 電掘形 (南から)
5. SI011A 完掘 (南から)
6. SI011A 電完掘 (南から)
7. SI011B 完掘 (南から)
8. SI011B 遺物出土状況 (南から)

図版 11

1. SI011B 電完掘 (南から)
2. SI011B 掘形 (南から)
3. SI011B 電掘形 (南から)
4. SI012 遺物出土状況 (南から)
5. SI012 遺物出土状況 (南から)
6. SI012-P1 遺物出土状況 (南から)
7. SI012 電遺物出土状況 (南から)
8. SI012 完掘 (南から)

図版 12

1. SI012 電完掘 (南から)
2. SI012 貯蔵穴完掘 (北から)
3. SI012 掘形 (南から)
4. SI012 電掘形 (南から)
5. SI013 遺物出土状況 (南から)
6. SI013 遺物出土状況 (東から)
7. SI013 遺物出土状況 (南から)
8. SI013 遺物出土状況 (東から)

図版 13

1. SI013 電前遺物出土状況 (南から)
2. SI013 電横遺物出土状況 (南から)
3. SI013-SK1 遺物出土状況 (西から)
4. SI013-SK1 遺物出土状況 (西から)
5. SI013 完掘 (南から)
6. SI013 電完掘 (南から)
7. SI013-SK1 完掘 (南から)
8. SI013 掘形 (南から)

図版 14

1. SI013 電掘形 (南から)
2. SI014 完掘 (南から)
3. SI015 遺物出土状況 (西から)
4. SI015 電完掘 (西から)
5. SI015 掘形 (西から)
6. SI015 電掘形 (西から)
7. SI016 完掘 (南から)
8. SI016 電完掘 (南から)

図版 15

1. SI016 貯蔵穴 (南から)
2. SI016 掘形 (南から)
3. SI017 検出状況 (南から)
4. SI017 完掘 (南から)
5. SI017 掘形 (南から)
6. SB001-002 (西から)
7. SB001 完掘 (南から)
8. SB002 完掘 (南から)

図版 16

1. SB003 完掘 (東から)
2. SB004 完掘 (南から)
3. SB005～011 (南から)
4. SB005 完掘 (南から)
5. SB006 完掘 (東から)
6. SB007 完掘 (西から)
7. SB008 完掘 (東から)
8. SB009 完掘 (西から)

図版 17

1. SB010 完掘 (西から)
2. SB011 完掘 (南から)
3. SB012 完掘 (南から)
4. SB013 完掘 (南から)
5. SB014 完掘 (西から)
6. SB015-016-019 (南から)
7. SB016 完掘 (南から)
8. SB017 完掘 (南から)

図版 18

1. SB018 完掘 (南から)
2. SA001 完掘 (東から)
3. SX001 完掘 (東から)
4. SX002 完掘 (南から)
5. SX003 完掘 (西から)
6. SX005 完掘 (東から)
7. SX006 完掘 (西から)
8. SX007 完掘 (北から)

図版 19

1. SK002 完掘 (東から)
2. SK004 完掘 (東から)
3. SK005 完掘 (北から)
4. SK006 完掘 (東から)
5. SK007 完掘 (南から)
6. SK008 完掘 (東から)
7. SK009 完掘 (北から)
8. SK010 完掘 (東から)

図版 20

1. SK011 完掘 (東から)
2. SK012 完掘 (東から)
3. SK013 完掘 (東から)
4. SK014 完掘 (西から)
5. SK015 完掘 (東から)
6. SK016 完掘 (北から)
7. SK017 遺物出土状況 (西から)
8. SK017 出土瓦 (西から)

図版 21

1. SK017 セクション (南から)
2. SK017 完掘 (西から)
3. SK018 完掘 (東から)
4. SK019 完掘 (南から)
5. SK020 完掘 (東から)
6. SK021 完掘 (西から)
7. SK022 完掘 (南から)
8. SK023 完掘 (東から)

図版 22

1. SK024 完掘 (西から)
2. SK025 完掘 (東から)
3. SK026 完掘 (東から)
4. SK027 完掘 (南から)
5. SK030 完掘 (南から)
6. SK031 完掘 (南から)
7. SK032 遺物出土状況 (北から)
8. SK033 完掘 (西から)

図版 23

1. SK034 遺物出土状況 (西から)
2. SK035 遺物出土状況 (東から)
3. SK036 完掘 (東から)
4. SK037 完掘 (南から)
5. SK038 完掘 (南から)
6. SK039 完掘 (東から)
7. SK040 完掘 (東から)
8. SK041 完掘 (北から)

図版 24

1. SB001 セクション (南から)
2. SB001 完掘 (北から)
3. SB001 断ち割り状況 (南から)
4. SB002・003 検出状況 (南から)
5. SB002 完掘 (南から)
6. SB002 断ち割り状況 (東から)

図版 25

1. SB003 完掘 (北から)
2. SB002・003 断ち割り状況 (南から)
3. SB003 断ち割り状況 (南から)
4. SD001 完掘 (南から)
5. SD002 東側完掘 (北から)

図版 26

1. SD002 南側完掘 (西から)
2. SD004 完掘 (西から)
3. SD002～007 (南から)
4. SD005・006 完掘 (西から)
5. P244 遺物出土状況 (西から)

図版 27

S1001 出土遺物 (1～24)

図版 28

S1001 出土遺物 (25～53)

図版 29

S1001 出土遺物 (54～63)

S1002 出土遺物 (1～12)

図版 30

S1002 出土遺物 (13～21)

S1003 出土遺物 (1～19)

図版 31

S1003 出土遺物 (20～31)

S1004 出土遺物 (5～13)

図版 32

S1004 出土遺物 (14～22)

S1004 出土遺物 (1～4)

S1005 出土遺物 (1～7)

圖版 33

SI005 出土遺物 (8~15)

SI006 出土遺物 (1~10)

圖版 34

SI006 出土遺物 (11~20)

SI007 出土遺物 (1~4)

圖版 35

SI007 出土遺物 (5~17)

SI008 出土遺物 (1~5)

圖版 36

SI008 出土遺物 (6~24)

SI009 出土遺物 (1)

圖版 37

SI009 出土遺物 (2~6)

SI010 出土遺物 (1~6)

SI011 出土遺物 (1~6)

SI012 出土遺物 (1~5)

圖版 38

SI012 出土遺物 (6~16)

圖版 39

SI012 出土遺物 (17~31)

圖版 40

SI012 出土遺物 (32~49)

SI013 出土遺物 (1~6)

圖版 41

SI013 出土遺物 (7~30)

圖版 42

SI013 出土遺物 (31~47)

圖版 43

SI013 出土遺物 (48~56)

圖版 44

SI013 出土遺物 (57~68)

圖版 45

SI013 出土遺物 (69~76)

SI014 出土遺物 (1~3)

SI015 出土遺物 (1・2)

SI016 出土遺物 (1~7)

圖版 46

SI016 出土遺物 (8・9)

SI017 出土遺物 (1~3)

SB009 出土遺物 (1)

SX007 出土遺物 (1)

SK017 出土遺物 (1~7)

SK021 出土遺物 (1)

SK030 出土遺物 (1~3)

SK032 出土遺物 (1)

圖版 47

SK032 出土遺物 (2・3)

SK034 出土遺物 (1~6)

SK035 出土遺物 (1)

SE001 出土遺物 (1)

SE002 出土遺物 (1~7)

SE003 出土遺物 (1)

圖版 48

SE003 出土遺物 (2~5)

SD002 出土遺物 (1)

P244 出土遺物 (1・2)

P299 出土遺物 (1)

遺構外 (古墳) 出土遺物 (1~8)

遺構外 (平安) 出土遺物 (1・2)

遺構外 (繩文) 出土遺物 (1・2)

## 第1章 総説

### 第1節 調査の概要

#### (1) 調査に至る経緯

平成20年9月16日付で事業者である有限会社日環より、同社の施設建設のため、宇都宮市インターパーク4丁目7-5、7-6（面積6,000㎡）について、宇都宮市教育委員会文化課に文化財保護法93条による土木工事等の進捗依頼があった。当事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である西刑部西原遺跡に含まれており、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（以下、とちぎ埋文）による隣接地の調査では、古墳時代～奈良・平安時代の堅穴住居跡などの遺構が多数検出されており、平成20年2月～3月に、栃木県教育委員会立会いのもと行われた当該地における土砂採取の際にも、古墳時代以降の遺物が確認されていた。以上の結果を勘案すると、事業予定地内に遺構が存在する可能性は極めて高いものと考えられた。

その結果に基づき、意見を付して栃木県教育委員会あて進捗したところ、確認調査を実施すべきとの指示が同県教委より事業者あてに発せられた。

確認調査は、平成20年11月5日から11月12日に宇都宮市教育委員会が実施した。図2のようにトレンチを8ヶ所設定し調査を行ったところ、近現代の攪乱が事業地全体に広く確認されたが、堅穴住居跡1軒、円形溝遺構3基、多数の土坑・小穴等を検出した。

以上の結果から、上記事業予定地のうち埋蔵文化財の存在が推測される6,000㎡について、引き続き保存協議が必要な旨を平成20年11月20日付で通知した。事業者と土地所有者である都市再生機構栃木開発事務所及び宇都宮市教育委員会3者による保存協議の結果、事業計画の変更は難しいとの結論に至ったため、現状保存の措置が困難な4,400㎡について記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

平成20年12月9日、上記の決定を受け、独立行政法人都市再生機構栃木開発事務所より、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合（以下埋文協）へ、栃木県宇都宮市インターパーク4丁目7-5、7-6埋蔵文化財発掘調査委託業務に関わる見直し依頼があり、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査は埋文協が委託を受けることとなった。平成21年1月5日に都市再生機構と埋文協との間で委託契約が締結され、同日より発掘調査を開始した。

#### (2) 本調査の経過

発掘調査は平成21年1月5日から作業を開始、同年6月12日に作業を終了した。

1月5日に基準点測量、調査範囲の設定作業に着手し、1月9日にユニットハウスや便所などの施設を設置した。1月12日及び13日に発掘機材の搬入を行い、1月13日に重機を搬入した。施工者である清水建設の工事手順の都合から、南側調査区の建物建築範囲より表土掘削を開始し、次いで北側調査区のトラック駐車場範囲の表土掘削を行った。攪乱が広範囲に確認されたため、攪乱内に遺構が残存する可能性を考慮し、その範囲も重機により80～100cmの深さまで掘削を行った。表土掘削による排土は、施工者が事業地の道路を挟んで西側の用地に搬出した。また、表土掘削に伴い、動力を用いた人力による遺構の検出作業に努めた。

南側の建物建設範囲については、1月14日より遺構の精査を開始した。これに並行して、遺構の実測作業及び写真撮影を行った。遺構平面図はトータルステーションによる測量を行い、土層断面図・遺物出土状況図等に關しては人手による測量で作成した。2月5日にラジコンヘリによる空中撮影を実施し、2月12日に宇都宮市教育委員会の立ち会いのもと、上層遺構の調査終了確認を行った。2月16日より旧石器時代の調査を開始し、2月27日に都市再生機構及び宇都宮市教育委員会の立ち会いのもと、旧石器時代の調査終了確認を行った。なお、仕様に基づき発掘調査終了後に調査区の埋め戻しは行っていない。

北側のトラック駐車場範囲については、2月16日に重機による表土掘削を完了した。2月3日より南側調査区の作業に並行して、一部の遺構の精査を開始した。遺構の精査とそれに伴う測量作業及び写真撮影は、井戸跡など一部の遺構を除き5月28日に終了した。北側調査区の空中撮影は、5月29日に実施した。井戸跡については約2mの深さまで精査を行ったが、それ以上は補助員の安全が確保できないと判断し、人力による掘削をあきらめた。宇都宮市教育委員会に井戸跡の状況説明を行ったところ、重機により井戸の断ち割りを行うようにとの指導を受けた。しかし、重機により深掘りを行うことによって調査後の駐車場への影響

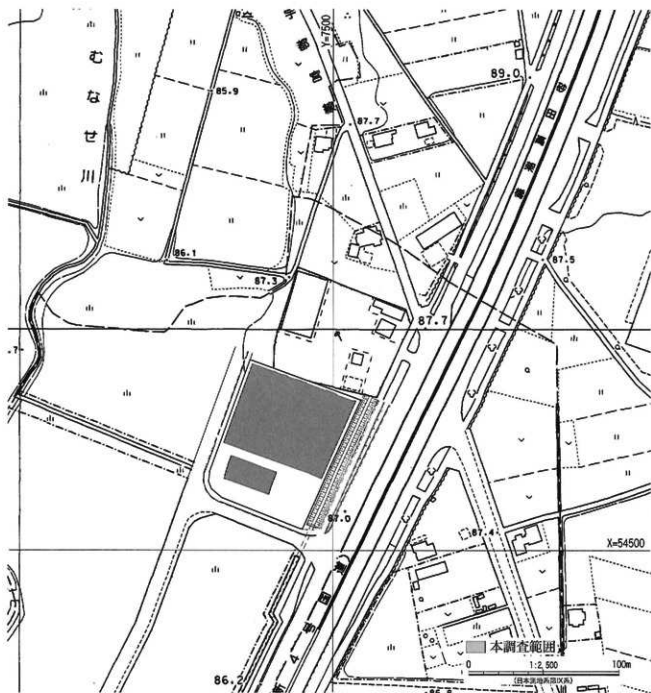


図1 本調査範囲と周辺地形

が心配されたため、施工者である清水建設株式会社に確認したところ問題ないとの回答を得た。その旨を都市再生機構に伝え、空撮終了後の6月2日に再度重機を搬入し、井戸の断ち割り調査を実施した。井戸跡の調査は6月5日に終了し、深掘りした箇所は重機の法面バケットで20～30cm毎に填圧しながら埋め戻しを行った。6月8～9日に機材及び施設の撤出・撤去作業を行い、翌10日に宇都宮市教育委員会及び都市再生機構の立ち会いのもと、北側調査区の調査終了確認を行った。その後、測量杭やごみの撤去、測量の補完作業を行い、6月12日に発掘作業を終了した。なお、南側調査区同様、発掘調査終了後に埋め戻し作業は行っていない。

### (3) 整理作業の経過

整理作業のうち、遺構の図面については埋文協北関東整理事務所（栃木支部：株式会社真和技研）で原因

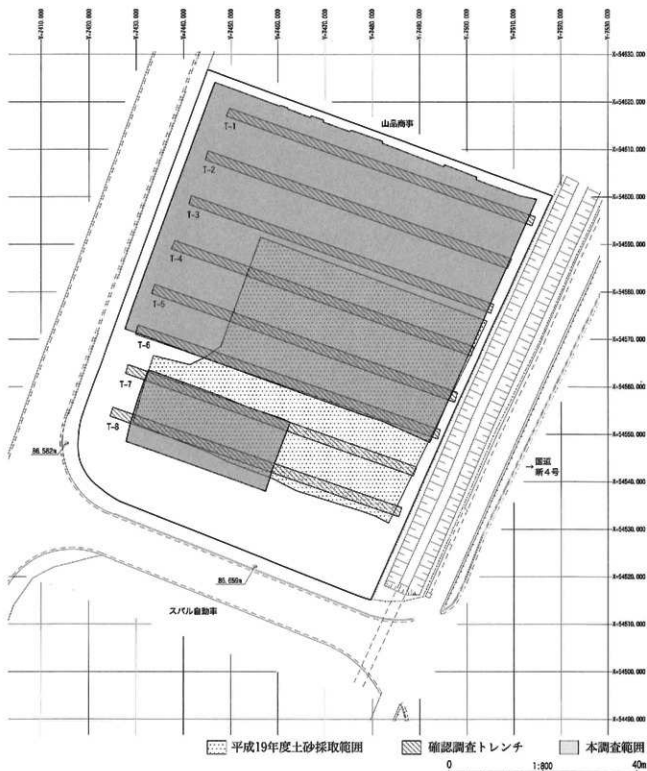


図2 確認調査トレンチ配置図

を作成した。その他の作業については埋文協千葉事務所で実施した。

出土遺物量は、整理箱（内寸：545 × 336 × 270 mm）50箱であった。整理作業の工程は次の通り。

【遺物の移送（H 21.7/1）・水洗（7/6～8/21）・注記（8/21～9/29）・接合（10/1～12/2）・復元（11/2～2/19）・実測（11/6～H 22.3/23）・トレース（1/12～4/7）・写真撮影（4/13～22）】

以上の作業と並行して、写真整理・台帳浄書を行い、報告書編集作業を終了後、印刷所に入稿した。



## 第2節 調査体制

調査は宇都宮市教育委員会が指導し、埋文協が実施した。発掘作業補助員は、発掘調査の経験を有する者を近隣地域から募集し、21名が従事した。整理作業は、埋文協が千葉事務所で雇用した6名が従事した。

以下に、調査担当者及び関係者名を掲げる。(50音順)

調査担当者：白崎智隆（調査主任：埋文協調査研究員）、山田雄正（調査員：埋文協調査研究員<sup>※1</sup>）

測量担当者：上野高嗣（真和技研）、笹口芳男（真和技研）、田中貴浩（真和技研）

補助員：磯崎恵子、大滝安良、大塚昭男、大福地時治、片桐昇、小池正昭、小池幸求、坂本キミ子、佐藤利義、篠原信三、鈴木文子、高橋洋子、田中征子、鶴見あつ子、野沢勇、羽石純一、福田純子、藤井ツル、湯田仁淑、吉沢正、吉田みつえ（以上発掘作業）、秋元智子、佐野由美子、中村和子、二戸捷幸、沼本敬子、林田みどり（以上整理作業）

※1 平成21年1月19日～30日調査補助。所属は発掘調査時のもの。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

独立行政法人都市再生機構の実施する東谷・中島地区土地区画整理事業地内の諸遺跡は「東谷・中島地区遺跡群」と総称されており、西刑部西原遺跡はこの東谷・中島地区遺跡群の北東部に位置している。本遺跡の総面積は138,000㎡であり、本報告の調査地点は遺跡範囲のほぼ中央部にあたる。

本遺跡は新4号国道の西側、JR宇都宮駅から南南東へ約6.5km、北関東自動車道宇都宮上三川ICから北へ約1kmに位置し、約2.5km西には田川、約4km東には鬼怒川がそれぞれ南流する。両河川により形成された河岸段丘は、西側が田原・願成寺台地、東側が岡本・磯岡台地と称されており、前者より後者の標高が高い。両者の比高は約1～2mである。この南北に細長く展開する田原・願成寺台地上の西側縁辺部に遺跡は立地する。遺構確認面の標高は約86.5mである。

本遺跡が展開する台地上はほぼ平坦な地形であり、遺跡周辺ではこうした台地の平坦面を利用して、水田や畑地が広がっている。

近年は、北関東自動車道路が開通し、新4号国道へ合流する宇都宮上三川ICが設置されたことにより、宇都宮市街地と遠隔地とを中継する交通の要衝となった。さらに、東谷・中島地区整備事業に伴い、商業施設や流通業務施設、工場などの建設が進み、遺跡をとりまく環境の変化は著しい。

### 第2節 歴史的環境

西刑部西原遺跡の周辺には、南北に延びる地形に沿って数多くの遺跡が存在する。特に、東谷・中島地区遺跡群で主体を成す古墳時代以降は遺跡数が急増し、古墳時代及び奈良・平安時代には下野国の中心地域のひとつであったと考えられている。ここでは、本遺跡で遺構や遺物が確認された縄紋時代、古墳時代及び奈良・平安時代を中心に、周辺の状況について述べることにする。

#### 旧石器時代

調査例は少ない。東谷・中島地区遺跡群では立野遺跡(7)、磯岡北遺跡(27)で遺物が出土している。本遺跡でも隣接地点の調査で遺物が出土していることから、本調査地点でも両側調査区で旧石器時代の調査を行ったが、遺物は出土しなかった。

#### 縄紋時代

縄紋時代の遺跡は大規模な集落は少ないものの、ほぼ全時期を通じて認められる。

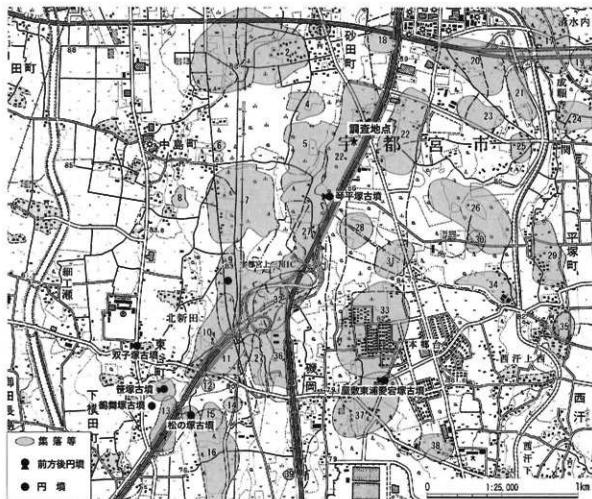
草創期は砂田姥沼遺跡(4)、仏沼遺跡、大町遺跡で遺物が出土しているが、遺構は確認されていない。西刑部西原遺跡(22)で覆土の特徴から草創期～早期と考えられる陥し穴状土坑が見つかったのみである。早期・前期になり遺物を出土する遺跡数は増加するものの、遺構を検出した遺跡は少ない。中期は石川坪遺跡や島田遺跡、根本遺跡などで多くの堅穴住居跡が検出され、比較的規模の大きな集落が存在したと考えられている。後期は遺跡数に大きな変化はないが、再び遺構の検出割合が減る。しかし、石川坪遺跡や殿山遺跡、粕内遺跡では多量の遺物が出土していることから、集落の存在が想定されている。晩期は遺跡数が減少し、遺構を検出した例も少ない。後期から引き続き、石川坪遺跡で多量の遺物が出土している。

#### 古墳時代

前期の遺跡は分布域が限られているが、中期に入り遺跡数が大幅に増え、田原・願成寺台地を中心に大規模な集落が展開する。砂田遺跡(1)、砂田東遺跡(3)、砂田姥沼遺跡(4)、立野遺跡(7)、権現山遺跡(10)、原遺跡(11)、杉村遺跡(32)、磯岡遺跡(36)などで多くの堅穴住居跡が確認されている。

また、中期を特徴づける大型前方後円墳として、本遺跡の南西約2kmの場所に笹塚古墳が存在する。笹塚古墳は後円部径63m、後円部高10.5m、前方部幅48m、前方部高9m、全長約100mを測り、5世紀前半では県内最大の前方後円墳である。墳丘規模から、水系を超えた広域的支配を行った首長による築造と考えられている。

後期には、田原・願成寺台地で前代から継続してさらに遺跡数が増加し、東側の岡本・磯岡台地遺跡へと分布範囲が拡大する。比較的規模の大きな集落としては、砂田遺跡(1)、立野遺跡(7)、原遺跡(11)、



1 砂田遺跡	9 桜船荷古墳	17 藤腰遺跡	25 後尚塚遺跡	33 西赤堀遺跡
2 砂田池遺跡	10 惣現山遺跡	18 上船田A遺跡	26 小屋原高塚群	34 下小屋原遺跡
3 砂田東遺跡	11 原遺跡	19 成願寺遺跡	27 磯岡北遺跡	35 南浦遺跡
4 砂田姥沼遺跡	12 原古墳群	20 大岡台遺跡	28 西沼遺跡	36 磯岡遺跡
5 中島笹塚遺跡	13 百鬼鬼遺跡	21 小屋原遺跡	29 平塚原榎岸遺跡	37 磯岡・西汗の古墳群
6 赤沢高塚群	14 車塚古墳群	22 西刑部西原遺跡	30 不動堂遺跡	38 西赤堀東遺跡
7 立野遺跡	15 権現塚古墳群	23 中道遺跡	31 内野遺跡	39 磯岡B遺跡
8 芋内遺跡	16 上石田遺跡	24 板戸遺跡	32 杉村遺跡	

図3 遺跡の位置と周辺遺跡

成願寺遺跡 (19), 杉村遺跡 (32), 西赤堀遺跡 (33), 磯岡遺跡 (36) などが存在する。

大型前方後円墳の分布は、中期に中心であった本地域から、より南方の姿川と思川が合流する新木市や小山市周辺へと移行し、小山市摩利支天塚古墳 (墳長 115 m, 5世紀後半～6世紀初頭), 琵琶塚古墳 (墳長 123 m, 6世紀前半), 吾妻古墳 (墳長 127 m, 6世紀後半) などが築造される。しかし、本地域での古墳数が減少するのではなく、琴平塚古墳など多くの古墳の築造が継続される。

#### 奈良・平安時代

本地域は下野国河内郡刑部郷にあたると考えられており、前代の古墳時代後期よりもさらに遺跡数が増加している。本遺跡周辺には、河内郡衙と推定されている多功遺跡、河内郡の関連行政施設と考えられている上神主・茂原官衙遺跡、大形の掘立柱建物跡が検出された西赤堀遺跡 (33) など重要遺跡が存在し、河内郡の中心地域であったと考えられる。また、東山道については、近年の調査によりその経路が明らかにされつつある。本地域では、本遺跡をはじめ、磯岡北遺跡 (27), 杉村遺跡 (32) で検出されている。



## 第3章 調査方法

### 第1節 発掘作業

#### (1) 調査区の範囲設定

使用した座標は、周辺の埋蔵文化財調査の成果との整合性を図るため、日本測地系第IX系に基づいている。まず、 $X = 54,630 \cdot Y = 7,420$ を起点として、事業計画範囲を網羅する $X = 54,630 \sim 54,540 \cdot Y = 7,420 \sim 7,520$ の範囲内に一辺10mの方眼を設定し、東西方向は西からA, B, 南北方向は北から1, 2の順に記号・番号を付した(図5参照)。検出した各遺構の位置等はこの方眼の番号を用いて示している。また、方眼の南北軸は座標北を示しており、実測図の方位も同様である。

#### (2) 表土の掘削

表土掘削作業は、重機を用いて行った。宇都宮市教育委員会の立会いのもと、確認調査の結果を参考に株式会社水澤土建及び有限会社カワヒロ産業が掘削作業に従事した。使用した重機は、表土掘削に0.4m<sup>3</sup>バックホウ1台、掘削に伴う発生土の運搬に4tダンプトラック及び3.5tクローラダンプを使用した。なお、表土掘削による発生土は調査区西側の隣接地に搬出した。調査後の開発工事の都合から、調査区南側の建物建設範囲より着手し、その後北側の駐車場範囲の掘削へと移行した。また、重機による表土除去と並行して、適宜人力による遺構確認作業を実施した。

#### (3) 遺構の発掘

遺構番号は、遺構の種類毎に略記号で区分し、検出した順に番号を付した。

平面形態を確認した遺構は、土層観察畦を設定し、遺構内に伴う遺物に留意しながら土層の堆積状況を観察しつつ精査を行った。重複関係にある遺構は、平面形態を確認した段階で新旧関係が判明するものについても同様に土層観察畦を設定し、再度確認しつつ遺構の精査を行った。また、井戸跡については、他の遺構の記録保存終了後に再度重機を搬入し、断ち割り調査を実施した。

#### (4) 遺構・遺物の表記

各遺構に付した記号・番号は、遺構を示すSに続けて種別を示す英字記号と検出順を示すものである。遺構の種別を示す記号については、基本的に独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所で用いられる表記を参考とした。本書で使用した表記は次の通りである。

S I…堅穴住居跡, S B…独立柱建物跡, S X…円形周溝遺構, S K…土坑, S E…井戸跡, S D…溝跡, P…小穴

遺構検出中に出土した遺物は、遺構毎に出土順に番号を付した。ただし、覆土中の小破片については各遺構一括出土遺物として表記した。

#### (5) 測量および遺構の実測

発掘作業に先立って、調査範囲杭の打設及び基準点測量を行った。調査範囲は、施工業者側より提示された計画図の図面を用いて設定した。基準点及び水準点については、再生機構を通じて国土交通省及び宇都宮市が設置する水準点網の座標測量成果により、2級の精度を維持した。

表土除去後、調査区内に任意の測量杭を4箇所打設し、各杭に座標値・標高値を与えて測量を実施した。遺構平面図の作成には、トータルステーションを用いて座標上に展開した。成果は測量編集ソフトウェアでDXF形式ファイルに変換して出力した。遺物出土状況図及び土層断面図については手測りで作図した。

測量および遺構実測に使用した器材・ソフトウェアは以下のとおりである。

現場測量器材：トータルステーション(4級A) Nikon-Trimble GF-203

編集ソフトウェア：BLUETORENDO V ver.7

#### (6) 写真撮影

発掘調査中は、中判カメラ(モノクローム)と35mm判カメラ(カラー・モノクローム)を中心にそれぞれ撮影し、その他にデジタルカメラを補助的に使用して記録保存に努めた。撮影フィルムは、中判、35mmともにFUJIFILM NEOPAN 100 ACROS, FUJIFILM PROVIA 100 Fを主に使用したが、状況によりFUJIFILM NEOPAN 400 PRESTOを併用した。撮影はすべて調査研究員が行い、使用した器材は以下のとおりである。

MAMIYA RB-67 (使用レンズ: 65mm, 127mm), Nikon F80 (使用レンズ: 24mm～85mm)

FUJIFILM Finepix S8000fd

また、調査中に実施した空中写真撮影は有限会社粟田商事に依頼した。撮影には、以下の器材を使用している。

産業用無人ヘリコプター (62cc ガソリンエンジン搭載)

カメラ: PENTAX645 (使用レンズ: 45 mm), CONTAX167MT (使用レンズ: 28 mm)

## 第2節 整理作業

### (1) 遺物の注記

出土遺物への注記作業は宇都宮市教育委員会の指示により、遺跡名の略称 (UTNN) と遺構略記号、検出遺構番号を記した。遺物への注記は下例のように行った。

(注記例) 西刑部西原遺跡 (E区) 1号竪穴住居跡出土1番遺物 → UTNN (E区) S1001 No.1

また、遺物台帳へは出土遺構もしくは出土地点、出土した標高及び遺物取り上げ年月日を記載した。

### (2) 遺物の接合・復元

分類・注記が完了した遺物は、本来の形状を復元できる資料を中心に接合・復元作業を実施した。接合にはセメダインCを使用し、欠損部の充填には、石膏及び有限会社新成田総合社製品のバイサムを用いた。

### (3) 遺物の実測・トレース

実測は全て手測りで行い、原図をスキャナーで取り込み、コンピュータによるデジタルトレースを行った。

### (4) 写真の整理

発掘作業で撮影したモノクロームフィルムは、中判・35mm判ともに密着プリントと併せてネガアルバムに保存した。カラーリバーサルフィルムは、すべて駒仕上げとし、遺構毎にシートに分けてスライドファイルに収納した。また、それぞれの写真台帳を作成した。

### (5) 遺物写真撮影

掲載した遺物の写真撮影は杉原豊氏に依頼したが、一部は白崎智隆が撮影した。撮影には、以下の器材を使用した。

Nikon D90 (使用レンズ: 35 mm～135 mm・55 mm), SONY Cyber-shot (DSC-F707)

## 第3節 報告書作成作業

### (1) 遺構番号について

本書中の遺構番号は発掘調査時に付した番号を基本としたが、報告書の作成にあたり、一部に欠番及び変更が生じた。欠番及び変更については、表1に示した。

表1 遺構番号対照表

調査時遺構番号	SA002	SA003	SA004	SK001	SK028	SK029	SX004
振替え遺構番号	SB017	SB019	SB019	PO44	欠番	S1013SK1	欠番

### (2) 執筆作業

報告書の作成に関わる執筆と全体編集は、埋文協千葉事務所にて行った。本文の執筆・編集は白崎智隆が行った。

### (3) 図の作成

遺跡測量図・遺構実測図は、埋文協栃木支部株式会社真和技研が作成した DXF 形式ファイルを編集し、既存の地形図及び遺物実測図は、スキャナーで取込んだ EPS 形式ファイルを編集して原稿とした。

既存の地形図は、縮尺 1/25,000 及び 1/2,500 図を使用し、図 1・3 は以下を用いて作成した。

図1 宇都宮市発行 1/2,500 都市計画図「IX-IE 11-4」(平成 11 年測量, 平成 16 年修正)

図3 国土地理院発行 1/25,000 地形図「宇都宮東」(NJ-54-30-1-2) (平成 14 年 5 月 1 日発行)

国土地理院発行 1/25,000 地形図「上三川」(NJ-54-30-2-1) (平成 15 年 5 月 1 日発行)

### 第3章 調査方法

各種測量図・実測図の縮尺は以下を原則とした。また、挿入中の尺度にも縮尺を付記した。

遺構：調査区全体図…1/400、壁穴住居跡…1/80、土坑…1/40、井戸跡…1/60、円形周溝遺構…1/80、溝跡…1/200（セクション図…1/40）、小穴…1/40

出土遺物：土師器…1/4、須恵器…1/4、土製品…1/2、金属製品…1/2、石器…1/4・2/3

遺構実測図中に示したスクリーントーンは以下を原則とした。その他、これによらない場合は各実測図中に凡例を付した。また、遺物の出土状況は●が土器・土製品、○が石器・礫、□が金属製品を表す。

 地山  電機築土・粘土  火床面  焼土  柱当たり痕  硬化面

遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、灰釉陶器を網掛け、その他を白抜きとした。拓影は表／断面／裏の順に掲載した。また、遺物実測図中に示した網掛け及びスクリーントーンは以下を原則とした。その他、これによらない場合は各実測図中に凡例を付した。

 黒色処理  赤彩  施釉範囲

土層や土器の色彩に関する観察表記は、下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2004 『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社発行  
編集には、以下のソフトウェアを使用した。

Photoshop CS4 (ADOBE) , Illustrator CS4(ADOBE) , In Design CS4 (ADOBE)





## 第4章 古墳時代以前の遺構と遺物

## 第1節 旧石器時代

とちぎ埋文により調査が行われた隣接地（第3区 平成12年度調査）で、ローム層中より石器約500点が出土していることから、南側調査区で旧石器時代の調査を実施した。

公共座標に沿って、5m間隔で2×2mの試掘坑を設定し、IV層～V層上面までローム層を精査したが遺物は確認できなかった。このため、調査期間の許す限りトレンチの拡張を行い、南側調査区500mのうち50mを残して調査を終了したが、やはり遺物は出土しなかった。この調査結果に基づき、北側調査区では旧石器時代の調査を行わなかった。

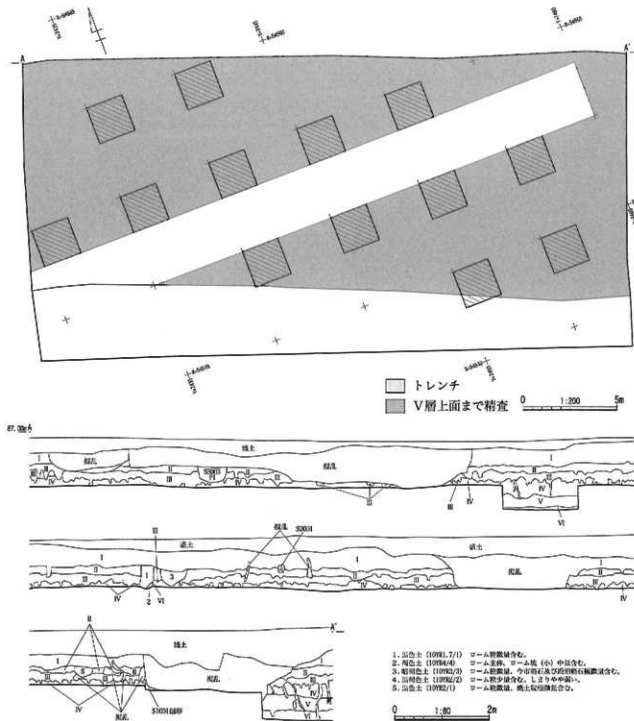


図6 旧石器調査範囲

第2節 縄紋時代

縄紋時代の遺構は、土坑3基を検出した。その形態と覆土から縄紋時代の遺構と推定したが、遺構からの出土遺物は皆無であった。

(1) 土坑

5号土坑 (SK005) (図7, 図版19)

B7グリッドで検出した。平面形態は長楕円形を呈し、長軸2.08m、短軸0.74m、深さ25cmを測り、主軸方位はN71Eであった。当初の遺構確認面では確認できず、旧石器時代の調査中、IV層上面で遺構を確認した。覆土はソフトロームを主体とする単一層で、今市軽石がわずかに含まれていた。遺物は出土しなかった。

16号土坑 (SK016) (図7, 図版20)

I4グリッドで検出した。平面形態は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸0.50m、深さ37cmを測り、主軸方位はN36Eであった。覆土は自然埋没と考えられ、II層と似る暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

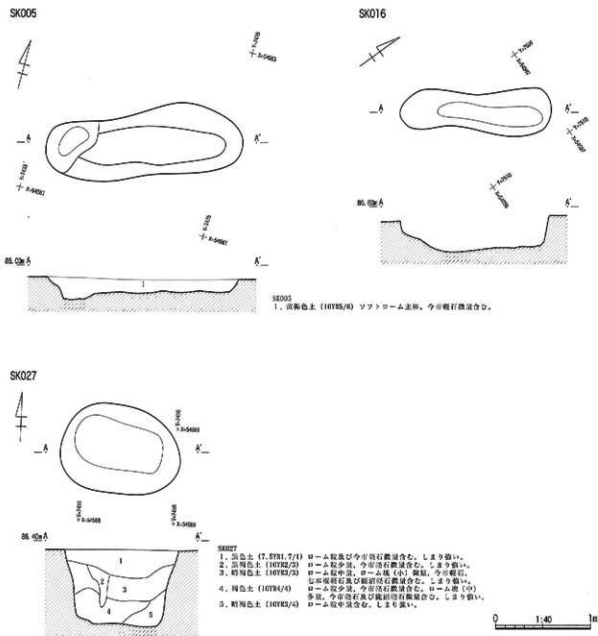


図7 5号・16号・27号土坑 (SK005・016・027)

## 27号土坑 (SK027) (図7, 図版22)

D5グリッドで検出した。平面形態は楕円形で、長軸1.26m、短軸0.95m、深さ83cmを測り、主軸方位はN75Wであった。しまりが極めて強く固い覆土で、今市軽石・七本桜軽石・鹿沼軽石が含まれていた。遺物は出土しなかった。

## (2) 遺構外出土遺物 (図8, 図版48)

古墳時代の竪穴住居跡であるSI013の覆土中から、土器片1点及び石鏃1点が出土し、全て図示した。1は加曽利E式の口縁部破片と考えられ、地紋として単節縄紋RLが施紋される。2は凹基石鏃である。計測値は、長さ27mm、幅13mm、厚さ5mm、重さ1.4g。石材はチャート。

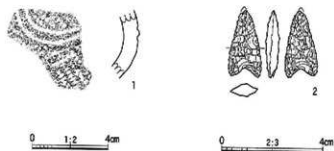


図8 遺構外出土遺物

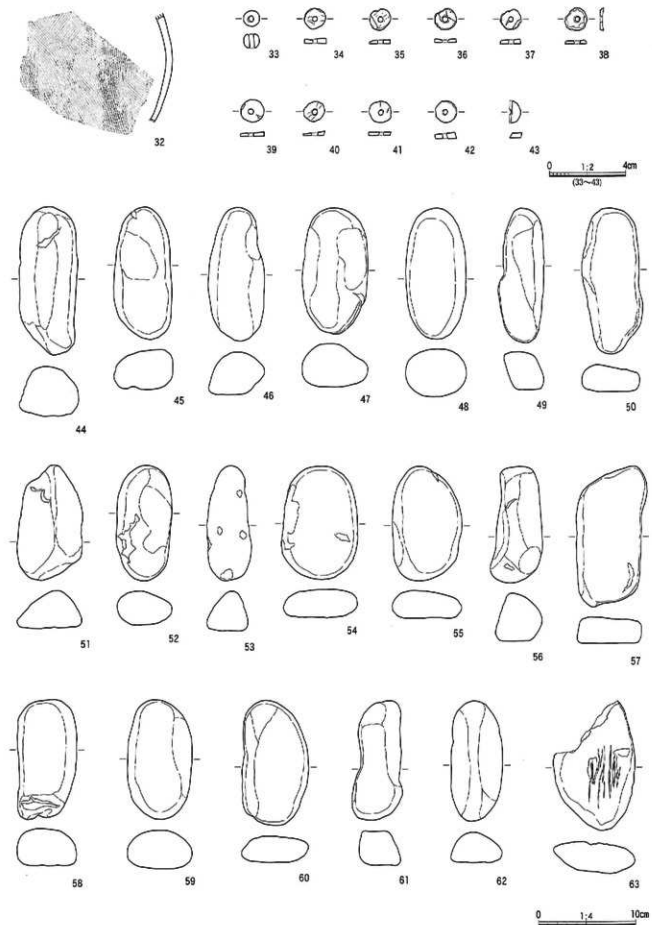


図12 1号堅穴住居跡 (S1001) 出土遺物-2

は少なく、丁寧なヘラミガキが施される。10～20, 22・23は手捏ね土器で、1～9の土師器環が床面近くで出土したのに対して、大半が覆土層～中層にかけて出土した。上記したように、かなり細かく割れて出土していることから、住居廃絶後に意図的に壊され、廃棄されたと考えられる。21は土師器高坏で、図示できなかったが漆仕上げによる黒色処理が施されたと考えられるものも出土している。24は須恵器環蓋の小片である。内面にはかえりが付く。25は須恵器環身となるか。図示できなかったが、須恵器はこの他にも甕や瓶類の小片が数点出土した。

26～28, 32のハケメ調整される甕は全て電周囲からの出土であり、26～28は電袖部に張り付くように出土していることから、焚口の補強材として利用したと考えられる。このほか図示できなかった破片も含めると、本住居跡が今回の調査で最も多くハケメ調整の土師器甕を出土した。29～31は土師器甕である。甕の出土量は多いが大半が胴部破片であり、図示できたのはこの3点のみである。31は胎土や調整の特徴から、常総型甕と考えられる。

33はチャート製と考えられる小玉で、電前の床面上から出土した。34～43は粘板岩製の白玉である。出土位置は散在しているが、床面近くからの出土が多い。44～62は編物石で、平均重量は446gである。19点と比較的出土点数が多く、床面近くからの出土が目立った。50～55の6点は床面直上からまとまって出土した(図版2-5)。P2に立てられていた柱に隣接して遺棄されたと考えられる。63は砥石である。粗砥であろう。

#### 2号竪穴住居跡(S1002)(図13・14, 図版3)

C9・D9グリッドで検出した。S1001及びP001と重複し、新旧関係はS1002→S1001・P001。北東隅は重複するS1001に壊される。住居跡南側は、平成12年度にとちぎ埋文により3区SI-84として調査が行われた。

#### 形態と規模

平面形態は正方形と推測され、規模は東西が7.4mで、南北は残存する長さが4.31m、壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で35cm、電を基準とする主軸方位はN8W。

主柱穴はP1・3の2本で、これよりはやや浅いP2・6は補助的な柱穴と考えられる。周溝は壁下をほぼ全周しており、幅14～27cm。床からの深さは6～10cmであった。間仕切り溝は5本検出したが、床面で確認できたのはD1・2の2本で、D3～5は貼床除去後に確認した。D5は埋土が電堀形によって切られており、その上に電袖部が構築されていたと考えられる。

床面の硬化範囲は、住居跡東半部で検出した。掘形は住居跡中央部から電周辺部をやや高く掘り残すが、貼床は薄く全体に構築されていた。24層が貼床構築層である。また、住居覆土3・4層は粘土を含むことから、電構築土が崩落したものと考えられる。

電は北壁の東寄りに構築されていた。煙道はほぼ垂直に立ち上がり、長さは33cmであった。電堀形は火床面の周囲を17～18cm掘り込んで、13層で埋められていた。火床面はこの掘形埋土の上に堆積した10層により形成されていた。電袖部は灰色粘土を主体とする11～12層で構築されていたが、右袖部は調査中に掘りすぎてしまったため検出できなかった。また、北壁中央部では旧電の煙道部を検出した。煙道は段を有し、北壁から47cm張り出していた。21～23層(セクション図B-B')が旧電堆積層である。

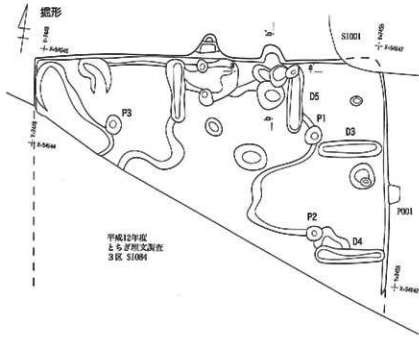
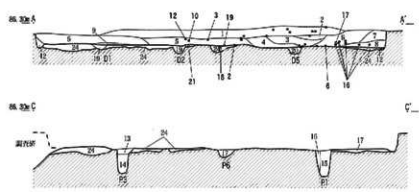
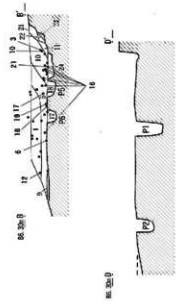
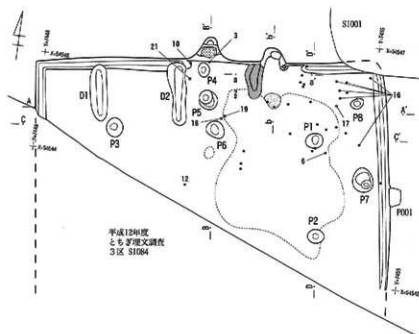
以上のことから、本住居跡では旧電及び旧間仕切り溝(D3～5)→電及び間仕切り溝(D1～2)の構築という改築が行われたと考えられる。

#### 出土遺物(図15, 図版29・30)

調査したのが住居跡北半のみのため、遺物出土量は多くないが、本来の1/2の量と考えると決して少ないと思われる。出土した遺物は土師器環・鉢・甕・瓶、編物石、白玉等で、環の占める割合が比較的高い。

1～3は土師器環身横做坏でその多くが黒色処理が施される。漆仕上げによるものが大半だが、1は炭素吸着によるものである。4は口縁部が素縁で縁を持たない半球形の土師器環で、口縁部のヨコナデの範囲が比較的広く、そこに漆仕上げが施される。5～8・10は手捏ね土器。8のみ内面に雑なヘラミガキが施される。10は、3の模做坏と共に旧電付近から逆位で出土した。完形に近い状態で出土したのはこの2点のみである。9は小形の土師器鉢である。

11・12は土師器甕の底部破片である。甕の出土量は少なくなかったが、小さな胴部破片が大半であった。



品番	長軸	短軸	厚さ
P1	35	30	56
P2	34	29	36
P3	41	34	46
P4	30	24	32
P5	41	38	40
P6	40	39	22
P7	51	43	30
P8	28	21	35
D1	119	35	17
D2	132	36	16
D3	135	35	15
D4	145	36	24
D5	140	32	17

調査状況表

1. 黒色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
2. 黒色土 (10YR2/1) 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
6. 黒色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
7. 黒色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
13. 黒褐色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
14. 褐色土 (10YR4/4) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
15. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
16. 褐色土 (10YR4/4) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
17. 褐色土 (10YR4/4) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
18. 黒色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
19. 黒褐色土 (10YR2/1) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
20. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
21. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。
22. 赤褐色土 (5YR4/6) 粘土層 (中) 多量腐植層。
23. 褐色土 (10YR4/6) 粘土層 (中) 多量腐植層。
24. 褐色土 (10YR4/4) ローム層中位, 粘土状腐植層。ローム層中位, ローム塊 (小) 腐植層。

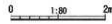


図13 2号竪穴住居跡 (S1002)

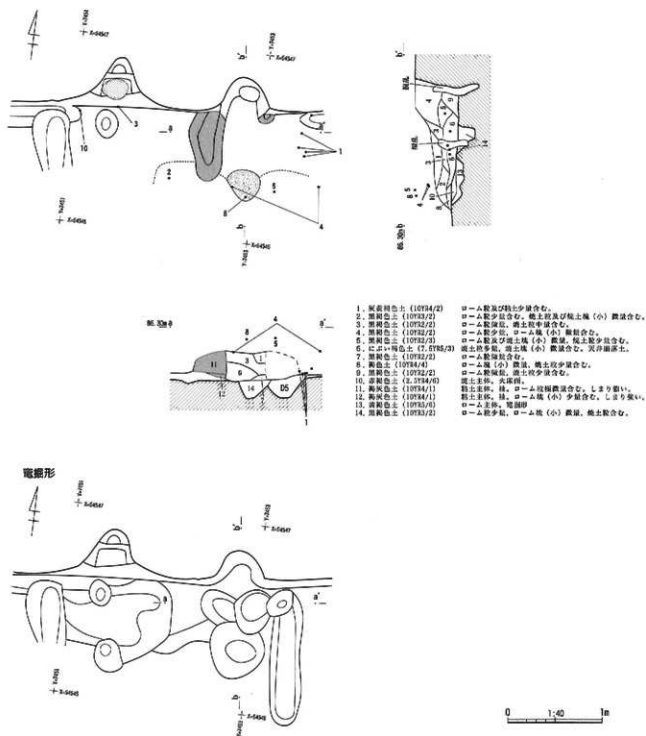


図 14 2号竪穴住居跡 (SI002) 電

13～15はハケメ調整の土師器甕である。明らかに他の土器とは異質な胎土を持つ13・14は、同一個体と考えられる。16は土師器甕である。住居跡北東隅付近の床面直上から出土した。

17～19は編石である。平均重量は641gと比較的重い。17のみ床面から10cmほど浮くが、他の2点は床面から出土した。20・21は粘板岩製の白玉である。

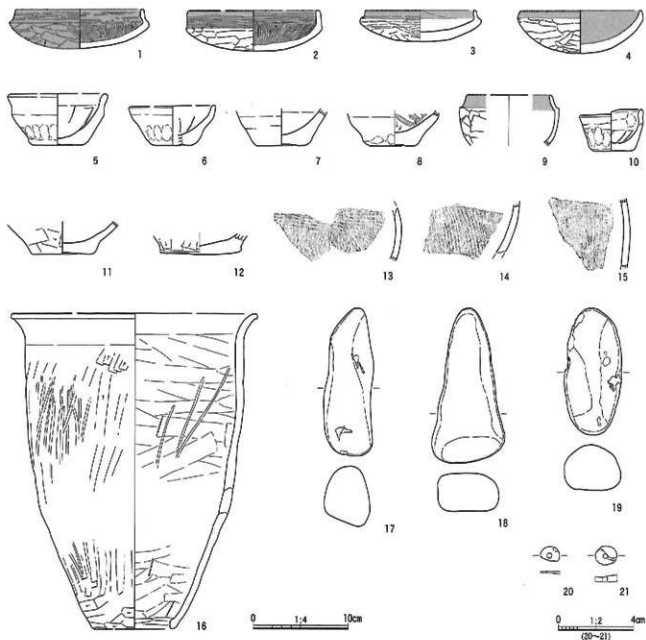


図15 2号竪穴住居跡 (SI002) 出土遺物

### 3号竪穴住居跡 (SI003) (図16～18, 図版4)

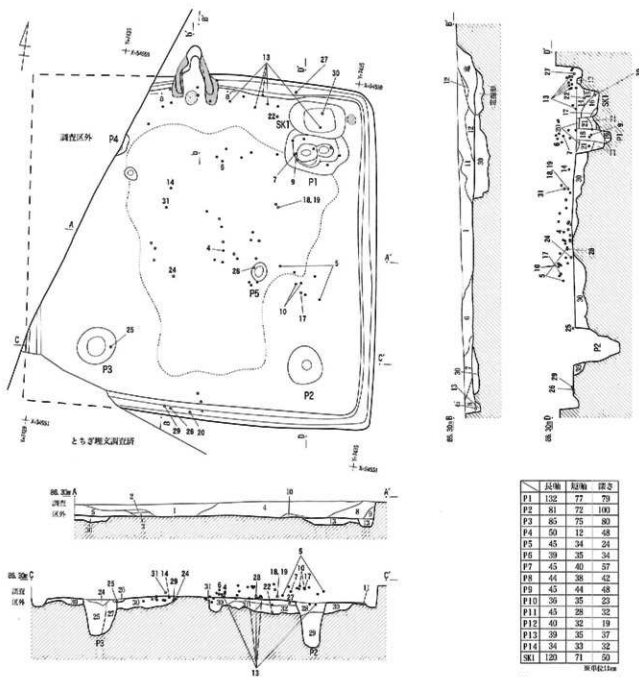
A8・B8グリッドで検出した。南西隅は攪乱により壊され、西壁の大半は調査区外で、検出できたのは一部であった。本住居跡は、2回の建て替えが行われていた。

#### 形態と規模

平面形態は正方形と推測され、規模は東西7.4×南北7.3m、壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で35cm、電を基準とする主軸方位はN8W。覆土6層は、大粒のローム塊を多量に含むことから、人為的な埋め戻しによる堆積土と考えられる。

主柱穴はP1～4の4本で、P1で認められた柱痕から柱径は約24cmと推測される。柱痕が観察できなかったP2・3は、上部が外側に広がることから柱が抜き取られた可能性がある。周溝は壁下を全周すると考えられ、幅は22～39cm、深さは10～14cmであった。間仕切り溝は検出できなかった。北東隅の貯蔵穴(SK1)は上端の角は丸味を帯びて楕円形を呈するが、底面の形態からは本来長方形であったと推測される。





1. 赤色土 (7.5YR1.7/1) ローム状中硬、粘土質少量、ローム層(小)、粘土層(小)及び炭化微塵層を含む。
2. 赤赤褐色土 (5YR3/3) 粘土質及び粘土層(小)中硬、粘質土質層を含む。
3. 赤色土 (7.5YR2/1) ローム状少量、ローム層(小)散在層を含む。
4. 赤色土 (7.5YR1.7/1) ローム状少量、ローム層(小)及び粘土層散層、白色軽石状微塵層を含む。
5. 赤色土 (7.5YR2/1) ローム状少量、ローム層(中)粘土層状少量、炭化微塵層を含む。
6. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状及びローム層(大)多量、粘土層散層を含む。
7. 赤色土 (10YR2/1) ローム状中硬、ローム層(小)少量、粘土層及び炭化微塵層を含む。
8. 赤色土 (7.5YR1.7/1) ローム状少量、粘土層散層を含む。
9. 赤褐色土 (10YR2/2) ローム状少量を含む。炭層散層を含む。
10. 赤褐色土 (7.5YR2/1) ローム状少量、ローム層(中)散在層を含む。
11. 赤褐色土 (7.5YR2/3) ローム状及び粘土層(小)、白色軽石状微塵層、粘質土質層を含む。
12. 赤色土 (10YR2/1) 粘土層状少量、粘土層散層を含む。
13. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状散層で多量を含む。炭層散層を含む。
14. 赤色土 (7.5YR1.7/1) ローム状少量、粘土層散層を含む。
15. 赤褐色土 (10YR2/4) ローム状少量、粘土層散層を含む。
16. 赤褐色土 (10YR2/4) ローム状少量、ローム層(中)少量、粘土層散層を含む。
17. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、炭層散層を含む。
18. 赤褐色土 (10YR2/1) ローム状少量、ローム層(小)及び粘土層散層を含む。
19. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状及びローム層(小)少量を含む。しまり強。
20. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(小)散在層を含む。
21. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状及びローム層(中)少量、粘土層及び粘土層(小)散層を含む。しまり中強。
22. 赤褐色土 (10YR2/1) ローム状散層、ローム層(小)少量を含む。
23. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(小)散在層を含む。
24. 赤褐色土 (10YR2/1) ローム状及びローム層(小)少量、粘土層散層、炭層散層の粘質土質層を含む。
25. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、炭層散層及びローム層(中)少量を含む。
26. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(大)少量を含む。しまり中強。
27. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(大)少量を含む。しまり中強。
28. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(大)少量を含む。しまり中強。
29. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(大)少量を含む。しまり中強。
30. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(大)少量を含む。しまり中強。
31. 赤褐色土 (10YR2/1) ローム状散層、ローム層(中)少量を含む。しまり中強。
32. 赤褐色土 (10YR2/3) ローム状少量、ローム層(中)少量を含む。しまり中強。

図16 3号竪穴住居跡 (S1003)

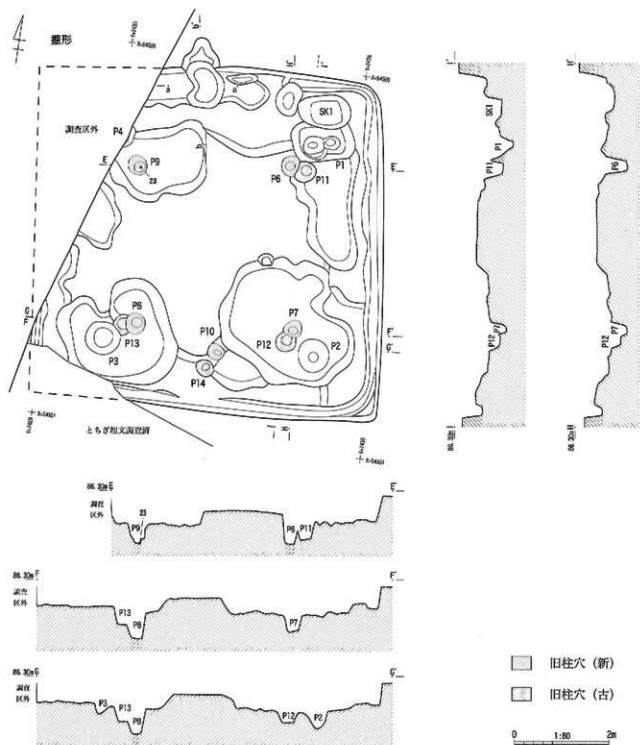


図17 3号竪穴住居跡 (SI003) 掘形

床面の硬化は、住居跡中央部で認められた。掘形は住居跡中央部以外を深く掘り込み、そこにローム塊を多く含む30～32層を充填して貼床を構築していた。また、支柱穴の周囲は特に深く掘り込まれ、床面から30～40cmを測った。また、貼床の下から住居拡張前の支柱穴(P6～9, P11～13)と入口施設に伴う小穴(P10・14)を検出した。拡張前の住居でも建て替えが行われており、P6～9・P10は建て替え後、P11～14は建て替え前の住居跡に伴うものと考えられる。

竈は北壁中央部に設置されていた。煙道は段差をもって緩やかに立ち上がり、北壁から63cm張り出していた。この竈は作り替えが行われており、1～9層が新竈、10～12層が旧竈に相当する。新竈は、掘形を

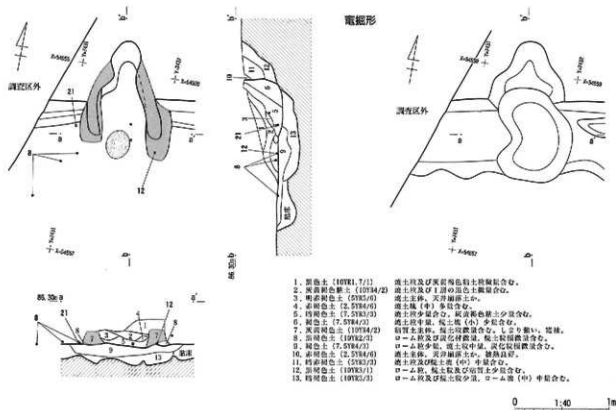


図18 3号竪穴住居跡 (SI003) 電

9層で埋め戻し、その上面を火床面としていた。残存する電柱部分は、灰色粘土を主体とする7層で構築されていた。あるいは5～6層も新電構築の際に埋め戻された層となる可能性がある。

旧電は、掘形を13層で埋め戻していた。10層が焼土主体層であり被熱も良好なことから、旧電煙道の天井部がわずかに残存したものと考えられる。

以上より本住居跡は、旧柱穴(古)P11～14→建て替え:旧柱穴(新)P6～10→拡張:主柱穴P1～4といった変遷が窺える。

出土遺物(図19, 図版30・31)

図示できた遺物は土師器が多いが、遺物の出土量は土師器類が多かった。この他、図示できなかったが土師器高坏や壺、鉢と考えられる遺物も出土した。

土師器は1～5のように漆仕上げによる黒色処理が施されるものも多く、6～8のような未処理のものは少ない。わずかにヘラミガキを施すものも確認できた。1は口径が10cmを下回る小形の坏。2は内彎口縁形で、3は口唇部に沈線を持つ。9・10は素縁の半球形の土師器坏で、両者とも内面に放射状のヘラミガキを施す。10は橙色で緻密な特徴のある胎土である。また、9は主柱穴のP1内から出土した。11は須恵器坏G身。体部下半の調整は手持ちヘラケズリ。TK217新段階併行か。この他、図示できなかったがTK217併行と考えられる須恵器坏身の小片が出土した。

12は土師器甕の口縁部破片である。電の右袖内から出土したが、補強材とするには破片が小さいようにも思われるため、電の作り替えに際して、構築材に混入してしまったものか。13は土師器甕。電の東側、ほぼ床面上から出土した。14～16はハケメ調整の土師器甕。全体に占める出土量の割合は高くないが、この時期の住居跡では比較的良好に見受けられた。

17は石製の小玉、18・19は粘板岩製の白玉である。18・19は床面から少し浮いた状態で、2つが重なって出土した。また、この2点の白玉は接合もしている。

20～29は自然礫を利用した編石である。重さは平均すると430g。23は拡張前住居の主柱穴P8の底面から出土した。柱を抜き取った際に落ち込んだものか。30は礫石で、貯蔵穴から出土した。31は礫の平坦面を利用した台石であろう。平坦面は使用による磨滅で平滑になっている。

第5章 古墳時代の遺構と遺物

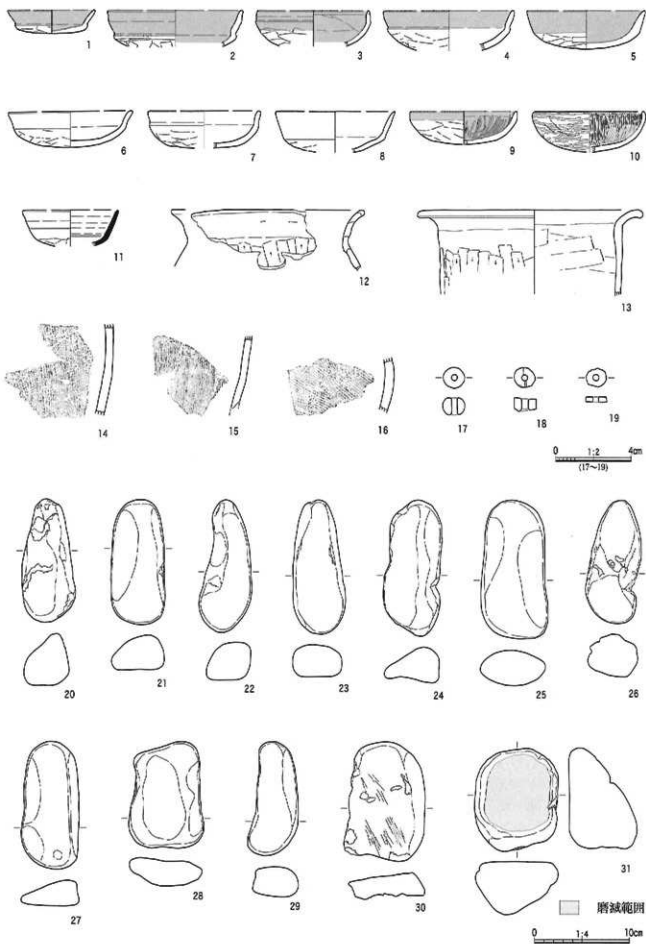


図19 3号竪穴住居跡 (S1003) 出土遺物

## 4号竪穴住居跡 (S1004) (図20, 図版4・5)

H3・I3グリッドで検出した。SB009～011と重複し、新旧関係は遺構確認面での観察から、住居跡が古いと判断した。住居跡北半は調査区外。

## 形態と規模

北壁を検出してないため明確ではないが、平面形態は正方形と推測され、規模は東西5.2m、西壁の検出できた長さが3.2mであった。壁はやや傾斜して立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で28cm、主軸方位はN2E。竈を検出してないため、主軸は南壁を基準にその垂直方向とした。

主柱穴はP1・2の2本を検出したが、P1は検出できたのが一部のため、主柱穴とはならない可能性もある。周溝は南壁下の一部で検出したが、西壁下でも断面図(A-A')に周溝が認められたため、本来は壁下を全周していた可能性がある。南壁で検出した周溝は、長さは2.56m、幅は13～21cm、深さは2cmと浅かった。

住居内の床面に明確な硬化は認められず、住居内全域に10～15cmの貼床が構築されていた。貼床構築層は7・8層である。掘形は住居周及びP2の西側をやや深く掘り込んでいた。

## 出土遺物 (図21, 図版31・32)

住居跡北半が調査区域外のため、遺物の出土量は少なかった。土器は土師器杯・鉢・甕・甔が出土したが、図示できたのは杯と甔のみである。他には編物石の出土が目立った。

1はヘラミガキの施された坏蓋模倣杯だが、図示できなかった模倣杯のなかにはヘラミガキが施されないものも少量認められた。2・3は半球形の土師器杯である。坏は1～3のように、漆仕上げによる黒色処理が施されるものが多いが、炭素吸着によるものもわずかながら確認できた。4は土師器甔である。土師器甔に比べ、緻密な胎土を有する。

5～19は編物石である。平均重量は306gと比較的軽く、やや小振りのものが多かった。全てP1・2より南側から出土した。20は台石で、平滑面を有する。21は砥石に転用された編物石と考えられる。22は磨石である。使用により磨滅した部分が平滑面となる。

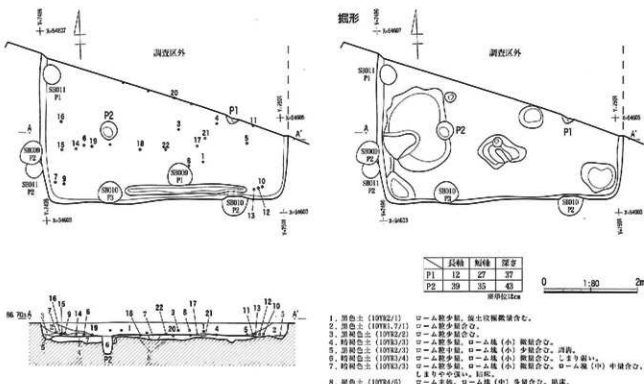


図20 4号竪穴住居跡 (S1004)

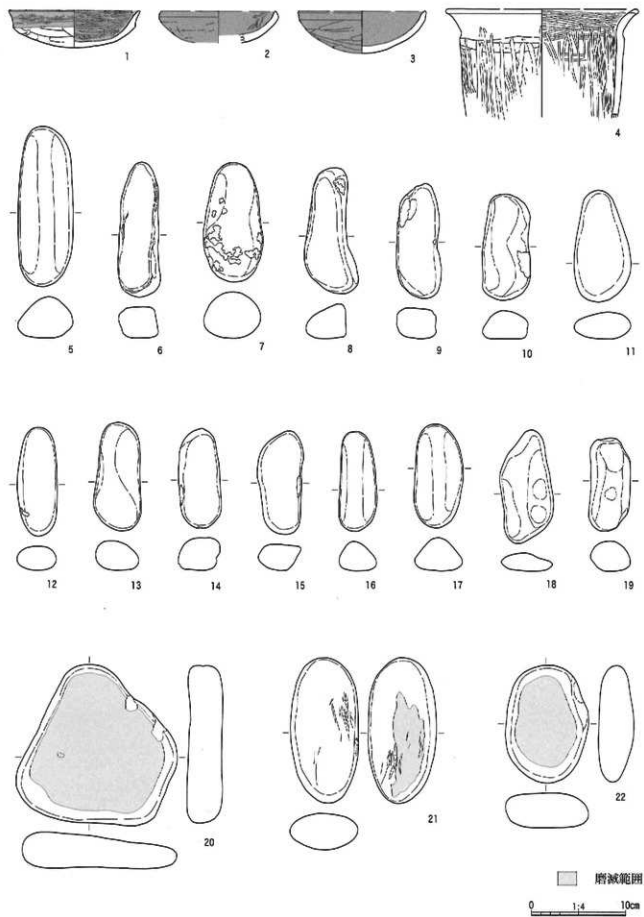


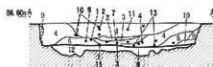
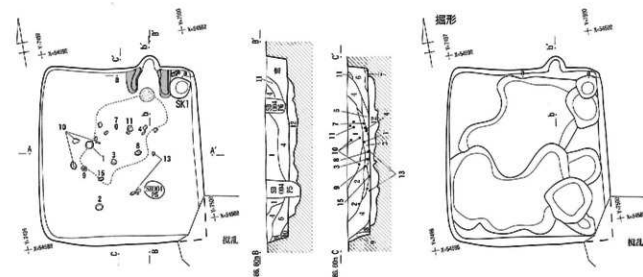
図 21 4号竪穴住居跡 (S1004) 出土遺物

## 5号竪穴住居跡 (S1005) (図22, 図版5)

H4・5グリッドで検出した。SB004と重複し、新旧関係はS1005→SB004。住居跡南東隅は攪乱により壊されていた。

## 形態と規模

平面形態は正方形を呈し、規模は東西3.4×南北3.7m、北壁及び西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁及び東壁はやや傾斜して立ち上がる。遺構確認面から床面までの深さは最大で46cm、電を基準とする主軸方位はN10E。

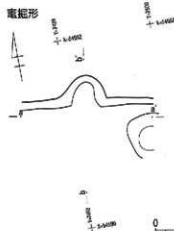
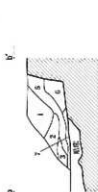
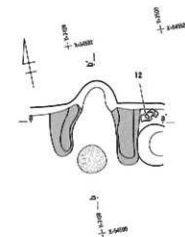


- |                    |                                |
|--------------------|--------------------------------|
| 1. 黒色土 (10782/1)   | ローム敷中層、ローム塊 (少) 及び粘土状凝縮土含む。    |
| 2. 黒褐色土 (10782/2)  | ローム敷中層、ローム塊 (少) 含む。粘土状凝縮土含む。   |
| 3. 白色土 (10781/1)   | ローム敷及び向形層。粘土状凝縮土含む。            |
| 4. 黒褐色土 (10782/2)  | ローム敷中層、ローム塊 (少) 含む。            |
| 5. 黒褐色土 (10782/2)  | ローム敷中層含む。しりりの中層。               |
| 6. 黒褐色土 (10782/2)  | ローム敷及びローム塊 (少) 中層含む。           |
| 7. 黒褐色土 (10783/1)  | ローム敷層を含む。粘土中層。                 |
| 8. 黒色土 (10782/1)   | ローム敷層を含む。                      |
| 9. 白色土 (10784/6)   | ローム敷及びローム塊 (少) 中層含む。閉鎖層土。      |
| 10. 黒色土 (10782/1)  | ローム敷中層、ローム塊 (多) 含む。            |
| 11. 黒褐色土 (10783/1) | ローム敷中層を含む。粘土中層。                |
| 12. 黒褐色土 (10783/4) | ローム敷中層、ローム塊 (多) 含む。しりりの中層に、結核。 |

長径	短径	深さ	
SK1	45	44	46

基準方位は電

0 1:80 2m



- |                    |                                  |
|--------------------|----------------------------------|
| 1. 灰黄褐色土 (10784/2) | 粘土中層、ローム房層を含む。                   |
| 2. 灰黄褐色土 (10784/2) | 粘土中層、ローム房層、粘土中層を含む。              |
| 3. 灰黄褐色土 (10784/2) | 粘土中層、ローム房層、粘土中層を含む。              |
| 4. 灰黄褐色土 (10784/2) | ローム敷及び粘土中層、ローム房 (少) 層を含む。        |
| 5. 灰黄褐色土 (10783/1) | ローム敷中層、粘土中層、粘土層 (少) 中層を含む。河津遺層土。 |
| 6. 灰黄褐色土 (10783/1) | ローム敷中層、ローム塊 (少) 及び粘土状凝縮土を含む。     |
| 7. 黒色土 (10782/1)   | ローム敷及び粘土中層を含む。                   |
| 8. 黒褐色土 (10782/2)  | 粘土中層、ローム及び粘土状凝縮土を含む。             |
| 9. 黒褐色土 (10782/2)  | 粘土中層、ローム房層、粘土中層。                 |
| 10. 黒色土 (10782/1)  | ローム敷中層。                          |

図22 5号竪穴住居跡 (S1005)

主柱穴及び周溝、間仕切り溝は確認できなかったが、北東隅で円形の貯蔵穴（SK1）を検出した。

床面の硬化は、住居跡中央部で認められた。貼床の厚さは15～25cmで、ローム塊を多量に含む12層によって構築されていた。

竈は北壁中央部より東寄りに設置されていた。煙道はほぼ垂直に立ち上がり、長さは23cmであった。残存する電袖部は、灰褐色粘土を主体とする8・9層により構築され、火床面は貼床上に形成されていた。1～3層は電構築土が崩落した層と考えられ、少量ながらも粘土を含む6層は煙道の整地土となる可能性がある。

出土遺物（図23、図版32・33）

遺物出土量は少ないが、接合率は比較的高かった。出土した遺物は土師器環・鉢・甕・壺・甔等で、壺類よりも環が多く出土した。

貯蔵穴に隣接して出土した12の鉢を除いて、他の遺物の大半は住居跡中央部から出土した。また、床面近くから出土した土器は12・13の土師器鉢のみで、他は床面より浮いた状態で出土した。これらの遺物は主に3層中より出土したことから、住居跡絶後に廃棄されたものと考えられる。

1～8は土師器環であり、その多くは漆仕上げによる黒色処理が施されるが、7のように炭素吸着による黒色処理が施されるものも少量ながら認められた。9は手捏ね土器で、底部は欠損する。10は大形の土師器壺である。内面は放射状のヘラミガキが施され、黒色処理される。11は土師器甕で、図示できた甕はこの1点のみであった。12・13は土師器鉢であるが、12は焼成前に底部に穿孔が施されるため、甔となる可能性も否定できない。14は須恵器長頸壺の口縁部破片となるか。15は下部を破損する編物石で、床面直上から出土した。

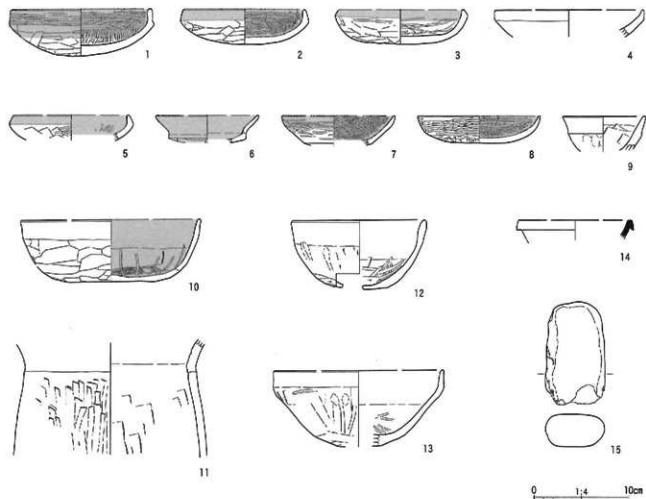


図23 5号竪穴住居跡（S1005）出土遺物



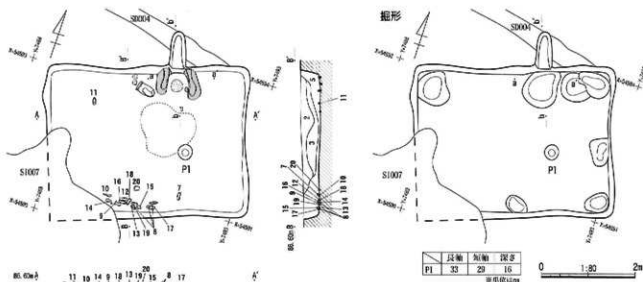
## 6号竪穴住居跡 (S1006) (図24, 図版5・6)

G4・H4グリッドで検出した。S1007・SD004と重複し、新旧関係はSD004→S1006→S1007。住居跡南西隅はS1007により壊されていた。

## 形態と規模

平面形態は横に長い長方形を呈し、規模は東西4.3×南北3.2mであった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で40cm、電を基準とする主軸方位はN18W。

住居跡中央部東寄り小穴(P1)を検出したが、深さが16cmと浅く主柱穴と考えるには難しい。そのほか、周溝や間仕切り溝等も確認できなかった。



1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) ローム中粒含む。ローム塊 (小) 埋藏含む。
2. 黒色土 (10YR2/1) ローム中粒。ローム塊 (中) 埋藏含む。
3. 黒色土 (7.5YR1.7/1) ローム中粒含む。
4. 黒褐色土 (7.5YR2/2) ローム中粒。ローム塊 (中) 少量。炭化穀類含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム中粒。ローム塊 (小) 埋藏含む。

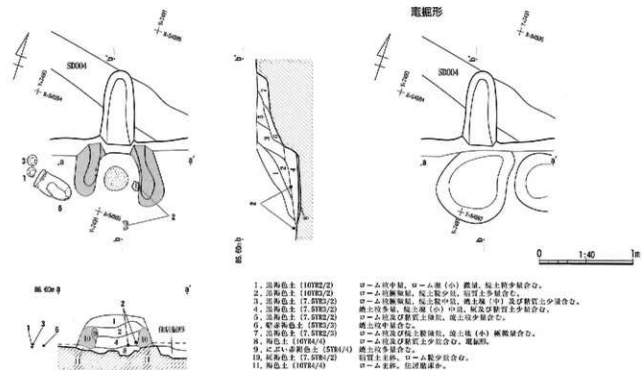


図24 6号竪穴住居跡 (S1006)

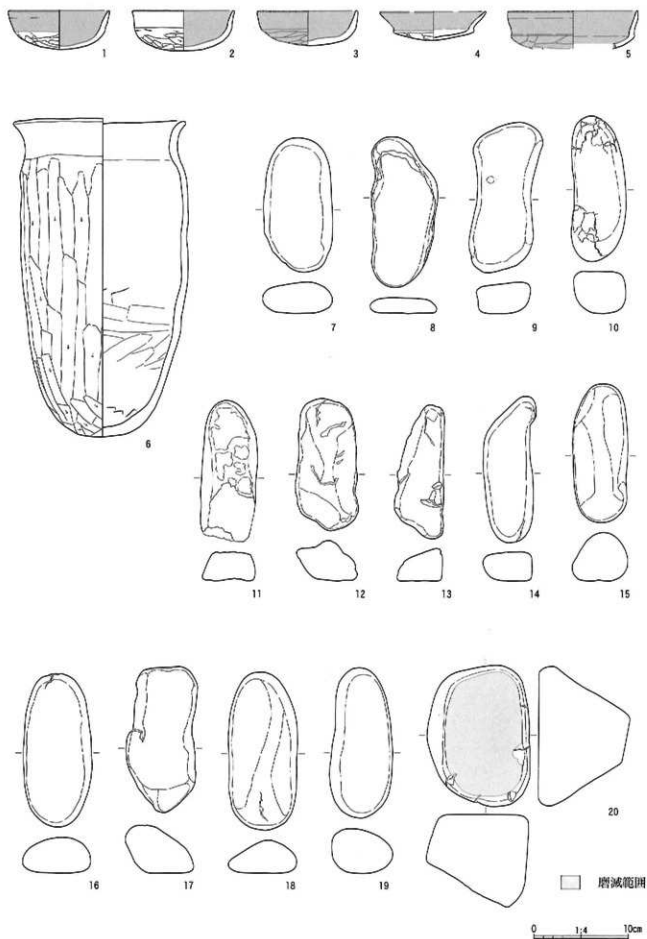


図 25 6号竪穴住居跡 (S1006) 出土遺物

住居跡中央部で床面の硬化範囲を確認した。住居跡の四隅をわずかに掘り込んで掘形とするが、大部分は地山を床面として利用していた。しかし、一部で厚さ1cm未満の貼床を検出したため、住居内全域に薄い貼床が構築されていた可能性も否定できない。

竈は北壁中央部より東寄りに設置されていた。煙道は緩やかに立ち上がり、北壁から72cm張り出していた。残存する電袖部は灰褐色粘土を主体とする9・10層により構築され、浅く掘り込まれた電掘形には8層が充填されていた。火床面はこの掘形理土上に形成されていた。

出土遺物 (図 25, 図版 33・34)

遺物出土量は少なく、遺物の大半は完形に近い形で出土した。出土した遺物は土師器環・甕、編物石等である。

土師器環は図示できた1～5も含めて、全て漆仕上げによる黒色処理を施されていた。1～3は口径が小さく、稜も不明瞭である。1・3の土師器環は、6の土師器甕と共に電西側の床面上から、2は電内から出土した。4は内頸口縁部で、体部は扁平化している。6の土師器甕はヘラケズリにより底部が丸底となっているため、自立させることは困難だったと考えられる。

7～19は編物石である。13点が出土し、その平均重量は566gであった。11の1点を除いて、全て南壁際の床面上からまとまって出土した。20は平坦面が使用により平滑となっている台石である。平坦面が上になる状態で出土した。

また、電覆土のフローテーション作業により、栽培種のイネ、マメ類の炭化種実を各1点検出した(附章参照)。

12号竪穴住居跡 (S1012) (図 26～28, 図版 11・12)

C3・D3グリッドで検出した。S1011・SK026と重複し、新旧関係はSK026→S1012→S1011。北西隅は平成12年度にちぎ理文により3区SI-43として調査が行われている。

形態と規模

平面形態は正方形を呈し、規模は東西5.6×南北5.6m、壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で34cm、竈を基準とする主軸方位はN26W。

主柱穴はP1～4の4本で、柱痕は観察できなかった。柱穴覆土は人為的な埋戻し土と考えられることから、柱は抜き取られた可能性がある。P5・P7は入口施設に伴う小穴と考えられる。新旧関係はP7→P5で、P7はローム塊を含む埋土で埋戻されていた。周溝は西壁の一部で途切れるが、南壁から北壁西半まで巡っていた。幅は12～35cm、深さは3～8cmであった。間仕切り溝は西壁側で3本を検出した。ただし、床面で確認できたのはD1・D2の2本で、D3は貼床除去後に確認した。貯蔵穴(SK1)は、住居跡北東隅で検出した。不整な楕円形を呈し、底面は平坦で壁は傾斜して立て上がっていた。このほか、床面ではP6を南西隅で検出したが、性格は不明であった。

床面の硬化は、電前と南側の一部で認められた。床面は貼床で、ローム塊を多量に含む14層により構築されていた。掘形は凹凸があり、中央部から北東隅にかけてわずかに深く掘り込まれていた。

竈は北壁中央部に設置されていた。煙道はほぼ垂直に立ち上がり、北壁から31cm張り出していた。電構築土が住居跡中央部に向かって流出しており、この構築土の直上に多量の遺物が廃棄されていた。残存する電袖部は灰褐色粘土を主体とする12層により構築され、貼床の上から掘り込まれた電掘形には15層が充填されていた。火床面はこの掘形理土上に形成されていた。また、電内覆土は全てフローテーション作業を行い、炭化種実の検出に努めた。

出土遺物 (図 29～31, 図版 37～40)

遺物出土量が多く、土師器環・甕・甕、須恵器環・甕が出土したが、主体となるのは土師器甕で編物石も目立った。完形に近い形で出土した土器は1・3・5の土師器環のみで、ほとんどの遺物は細かく破砕した状態で出土したが、復元できた個体は多く接合率が高かった。これらの遺物は、大半が覆土上層～中層にかけて出土していることから、住居廃絶後に廃棄されたものと推測される。これに対し、床面近くから出土した土師器環1・5や編物石は、この住居跡に伴う遺物と考えられる。また、土師器環1点(2)と土師器甕4点(15・17～19)、土師器甕1点(23)がS1013出土遺物と遺構間接合した。遺物は49点を図示した。

1・2は坏身模倣杯で、2は内面に漆仕上げによる黒色処理が施される。1は住居跡南東隅の床面近くか

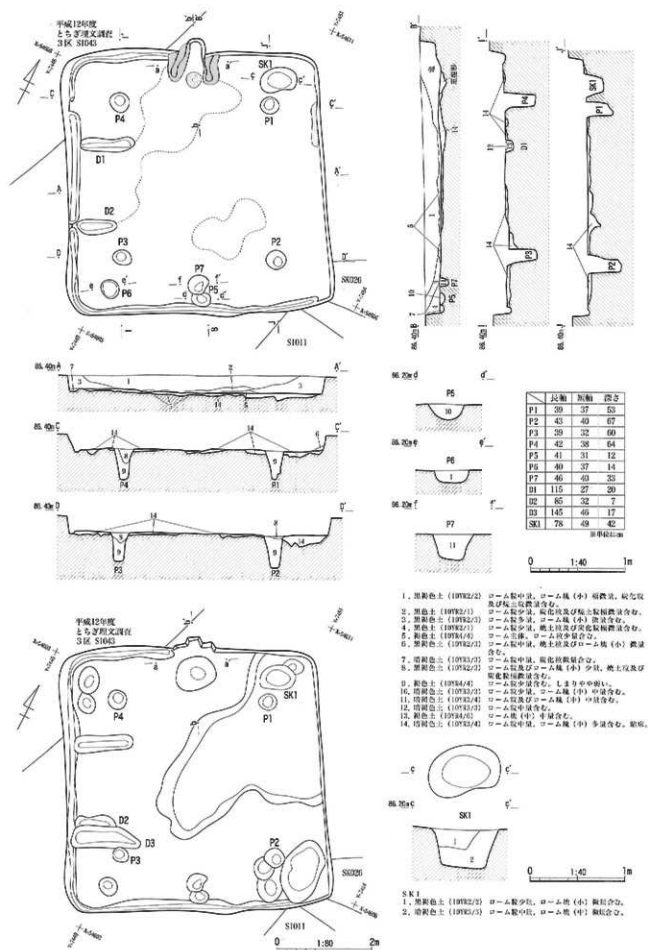


図26 12号竪穴住居跡 (S1012)

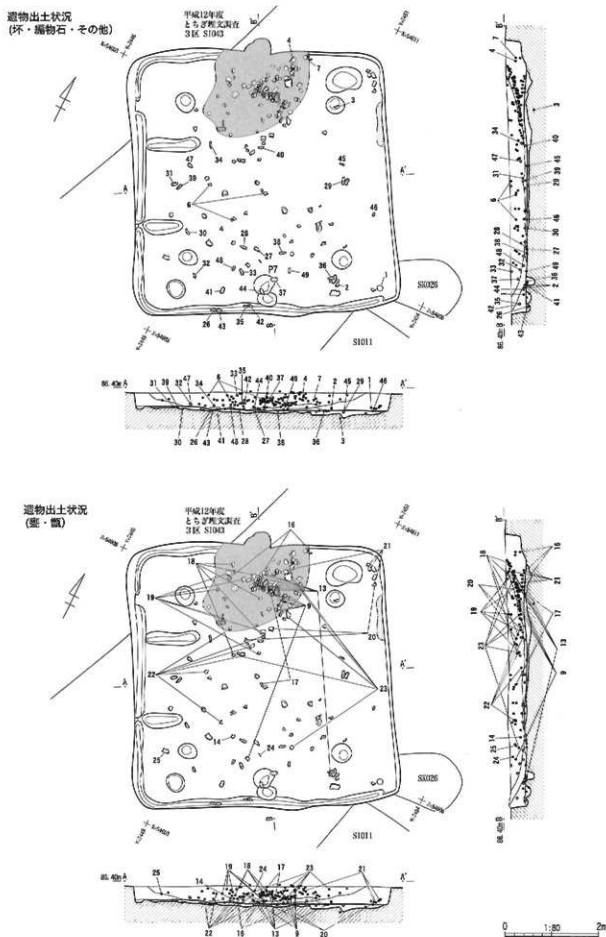


図27 12号竪穴住居跡 (S1012) 遺物出土状況



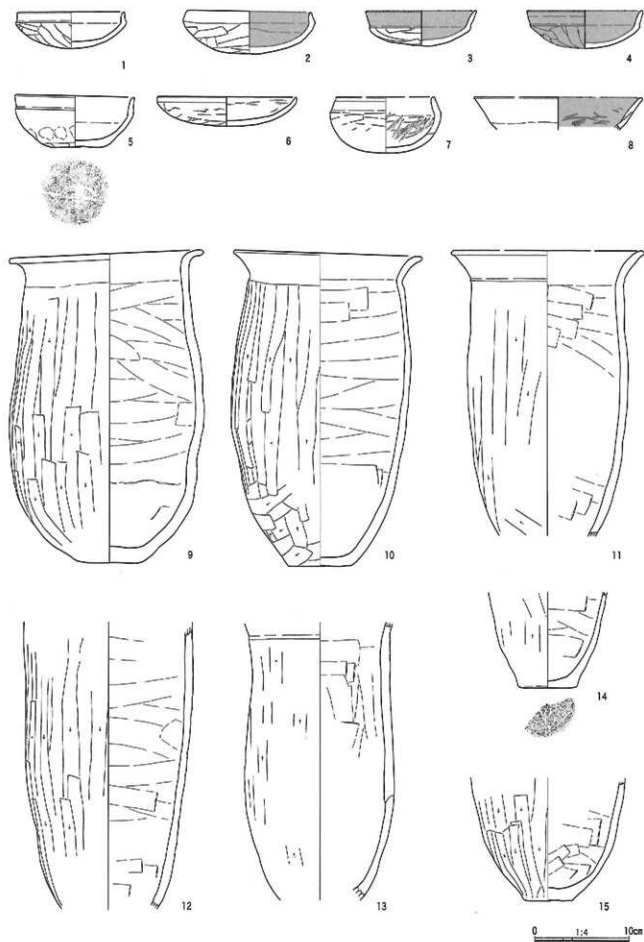


图29 12号竖穴住居跡 (SI012) 出土遺物-1

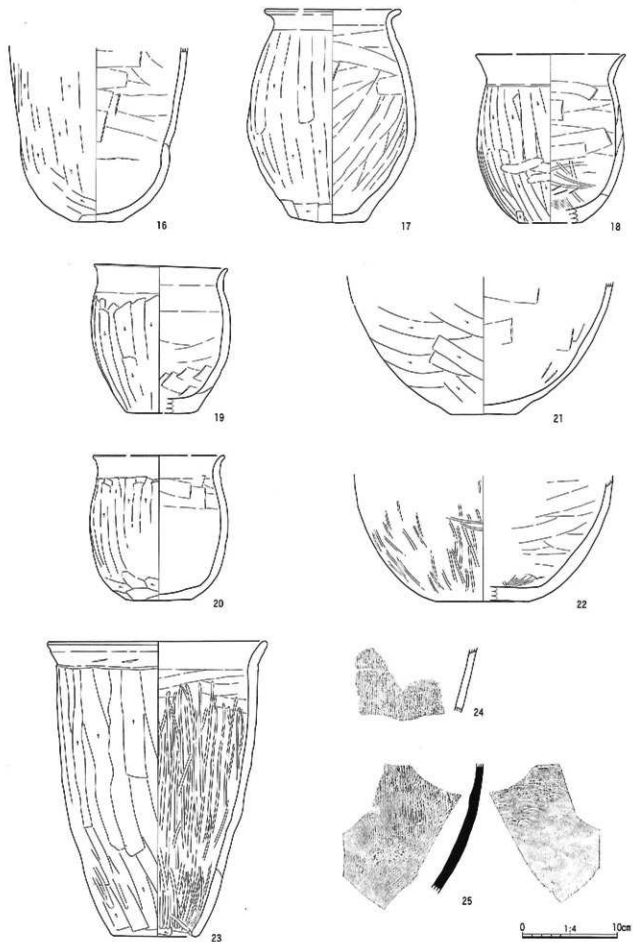


図30 12号竪穴住居跡 (S1012) 出土遺物-2



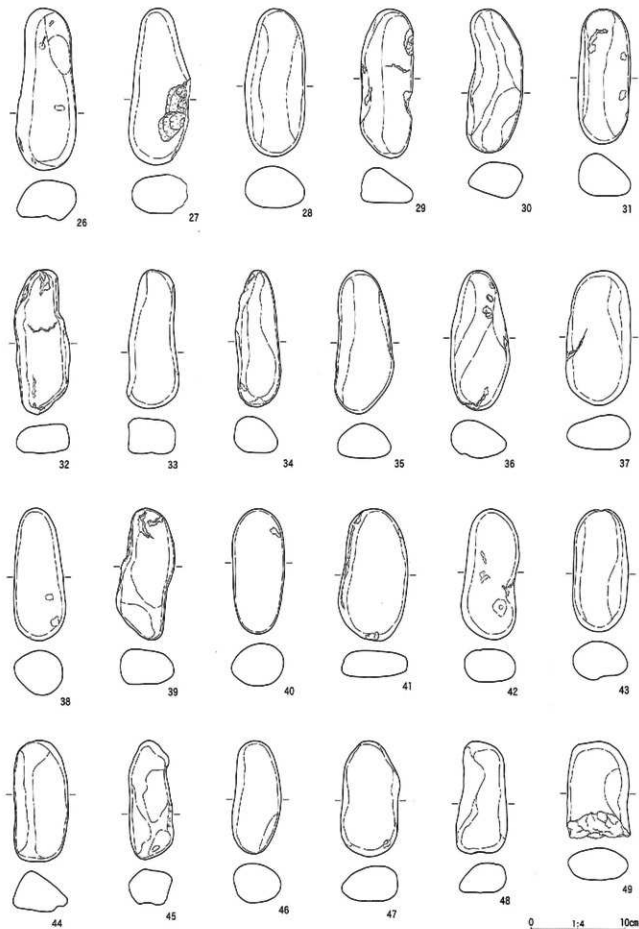


图31 12号竪穴住居跡 (SI012) 出土遺物-3

ら逆位で出土した。3・4は灰産膜被坏で、黒色処理は漆仕上げによるものである。3はP1の覆土中から、4は電構築土の流出土の上から出土した。5は底部に静止糸切り痕を残す土器器坏である。ヘラケズリが施されるのは底部周縁部のみであり、模被坏の未製品が焼成されたものか。電左袖前の床面上から正位で出土した。6は土師器皿となるか。剥離が著しく不明瞭だが、内面にヘラミガキが施される。7は土師器碗である。被熱による剥離が著しく、内面にはヘラミガキが施される。8は土師器鉢であろう。内面は雑なヘラミガキが施され、漆仕上げにより黒色処理される。

9～20は土師器甕である。大半は流出した電構築土の上から、細かく割れた状態で出土した。9～16は長胴甕で、17は中型甕、18～20は小型甕である。小型甕は9～17の甕とは異なり、緻密できめ細かい胎土が使用されている。21・22は土師器壺である。ただし、21は調整にヘラミガキが認められなかったため、球胴形の甕となる可能性もある。土師器甕に比べ、電から離れた位置で床面近くから出土した。23は土師器甕である。出土位置は土師器甕とほぼ同様であった。24は土師器のハケメ調整甕の胴部破片である。住居跡南側の覆土上層で出土した。図示できなかったが、この他にもハケメ調整甕が少量確認できた。

25は須恵器甕の胴部破片である。胎土が緻密できめ細かいことから、湖西窯と推測される。

26～49は編物石である。24点と多量に出土しており、平均重量は486.8gであった。数点が覆土上層から出土したが、大半は床面近くからの出土であった。

また、電覆土のフローテーション作業により、栽培種のイネ3点、草木のタデ属1点の炭化種実を検出した(附章参照)。

### 13号整穴住居跡(S1013)(図32～37, 図版12～14)

C4～5・D4～5グリッドで検出した。S1014・SD001と重複し、新旧関係はS1013→S1014・SD001。本住居跡は2回の拡張が行われたと考えられる。

#### 形態と規模

2回目の住居拡張で住居西半のみが南北に拡張されたため、平面形態は横方向の凸形を呈していた。規模は東西7.8×南北9.1m。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で23cmであった。電を基準とする主軸方位はN6E。

主柱穴はP1～4の4本で、P2・3で観察できた柱痕から柱径は20cm弱と推測される。また、貼床下からはP6～9の拡張前の住居跡に伴う主柱穴を検出した。同じくP10は拡張前住居跡の入口施設に伴う小穴と考えられる。周溝は壁下の一部で検出した。北壁下で検出した周溝の幅が6cmと最も細く、東壁下で検出したものが33cmと最も幅広であった。深さは何れも3～6cmとやや浅かった。間仕切り溝は東西の壁際で12本を検出した。ただし、床面で確認できたのはD1～6の6本で、D7～12は貼床除去後に確認した。D1～6のうち、少なくともD1やD6はその配置から住居跡を南北に拡張した後に構築されたものと推測され、D7～10は拡張前の住居跡に伴う間仕切り溝と考えられる。また、住居南側では貯蔵穴(SK1)を検出した。この貯蔵穴は、住居拡張前には張り出しピットとして機能していたと推測できるが、南北壁の拡張に伴い、全体が南壁の内側に取まってしまったと考えられる。覆土内からは、遺物が貯蔵穴の東側から流れ込むようにして出土しており、床面上から出土した周囲の遺物と接合した。このような出土状況から、住居廃絶時には上に蓋のようなものがされていたと推測される。

床面の硬化範囲は、一部で確認できたが顕著ではなかった。床面は貼床で、4・8・14層により構築されていた。掘形は凹凸があるもののほぼ平坦で、住居跡中央部がやや深く掘り込まれていた。

電は北壁の中央部に構築されていた。煙道は段差を有し、北壁から64cm張り出していた。電上半部が電廃絶時に壊されたため、電軸の残りはやや悪く底平であった。炭化物を主体とする3層は廃絶後に堆積した層である。残存する電軸部は灰褐色粘土を主体とする8層により構築され、電掘形はローム塊及び粘土を含む10～13層により埋め戻されていた。その掘形埋土上に焼土主体の7層が堆積する火床面が確認できた。また、電掘形に掘り込まれていた16層は、旧電の掘形埋土と考えられ、その底面の地山ロームは被熱によりやや硬化していた。このことから、旧電は新電よりも南側に位置していたと推測される。また、電内覆土は全てフローテーション作業を行ったが、炭化種実は見出できなかった。

以上のことから本住居跡は、柱穴P6～10、間仕切り溝D7～10→柱穴P1～4、貯蔵穴SK1、間仕切り溝D2～5、旧電(住居拡張)→間仕切り溝D1・6、新電(南北壁の拡張)といった変遷が推測される。

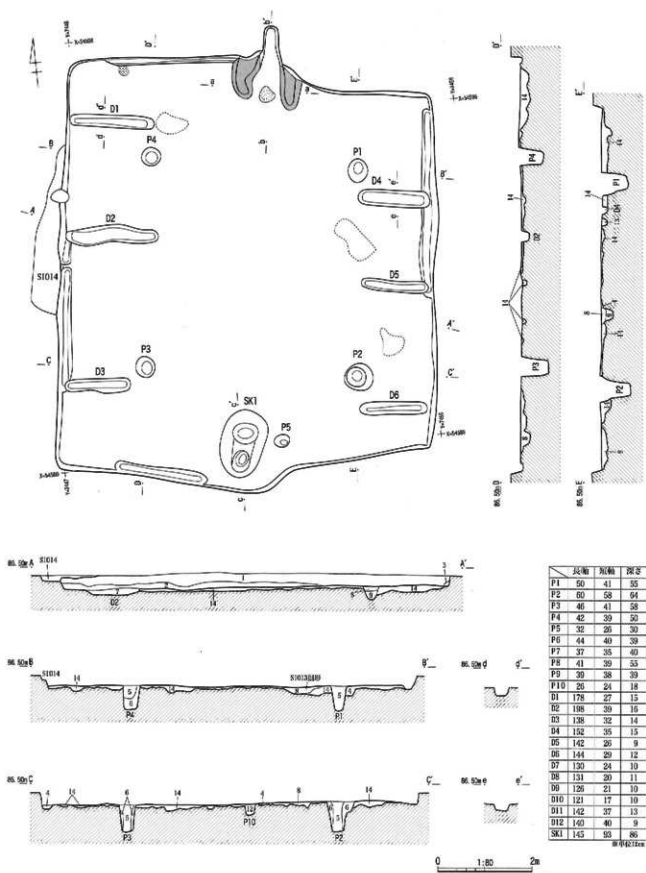


图 32 13号豎穴住居跡 (SI1013)

遺物出土状況  
(土師器・その他)

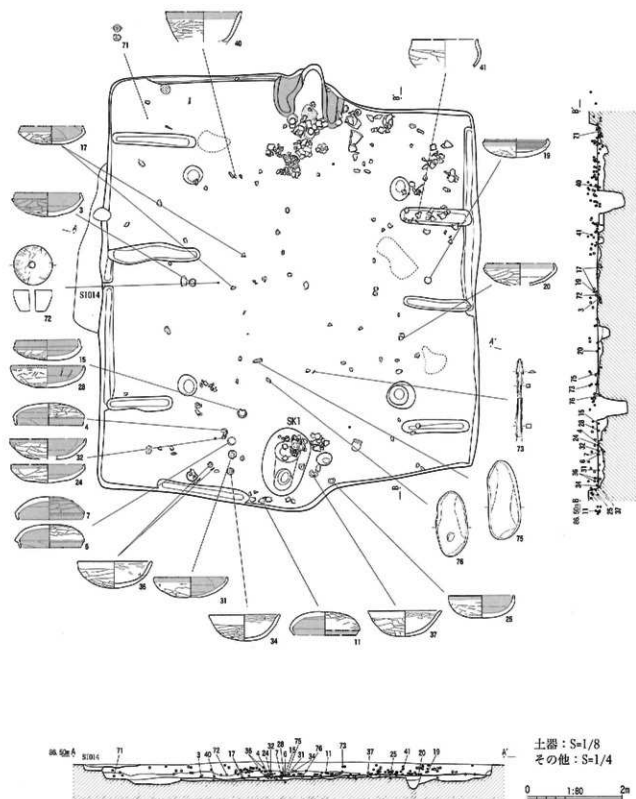


図 33 13号竪穴住居跡 (S1013) 遺物出土状況-1

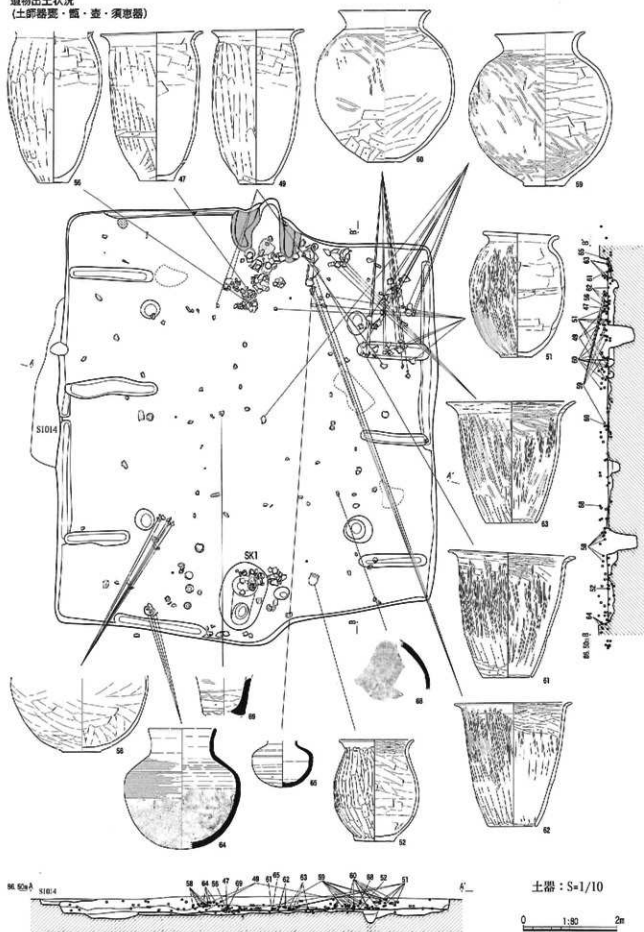
遺物出土状況  
(土師器・甗・甗・須恵器)

图34 13号竖穴住居跡(S1013) 遺物出土状況—2

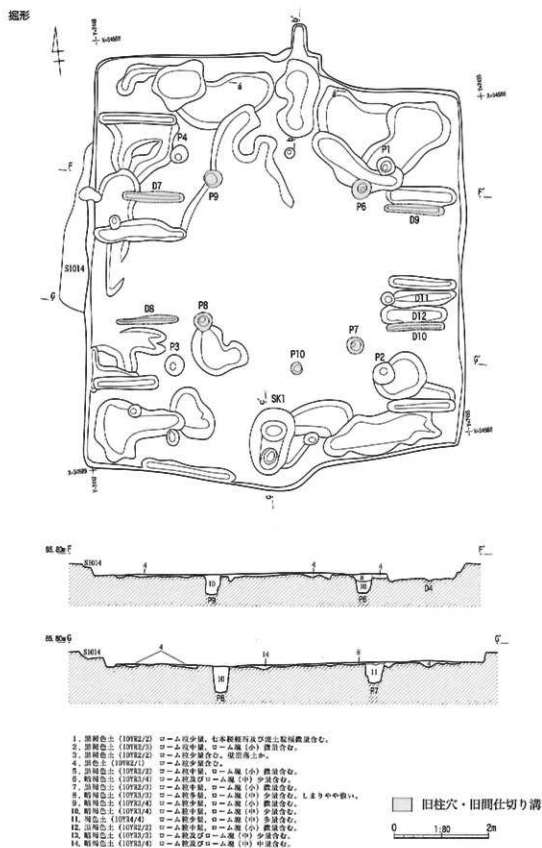
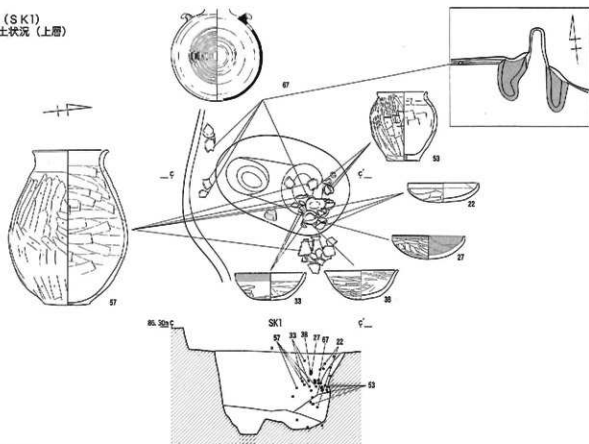
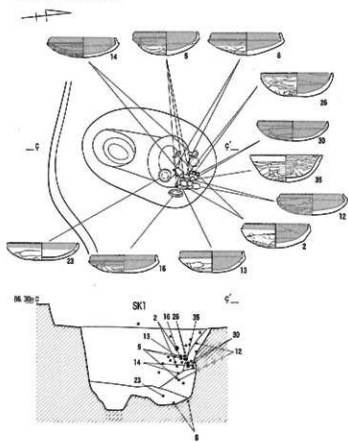


図 35 13号竪穴住居跡(SI013) 掘形

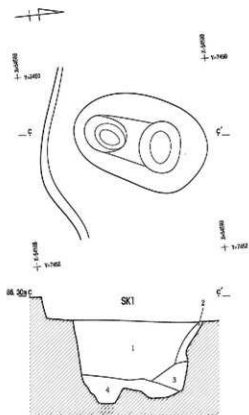
貯藏穴 (SK1)  
遺物出土状況 (上層)



貯藏穴 (SK1)  
遺物出土状況 (下層)



貯藏穴 (SK1)



1. 赤色土 (7.5YR2/1) □—ム監跡遺、ワーム痕 (小) 及び粘土質腐植層付心。  
2. 赤褐色土 (10YR2/2) □—ム監跡付心。  
3. 黄褐色土 (10YR3/3) □—ム監跡付心。  
4. 赤褐色土 (10YR3/1) □—ム監中流付心。

0 1:40 1m

图 36 13 号竪穴住居跡 (SI013) 貯藏穴

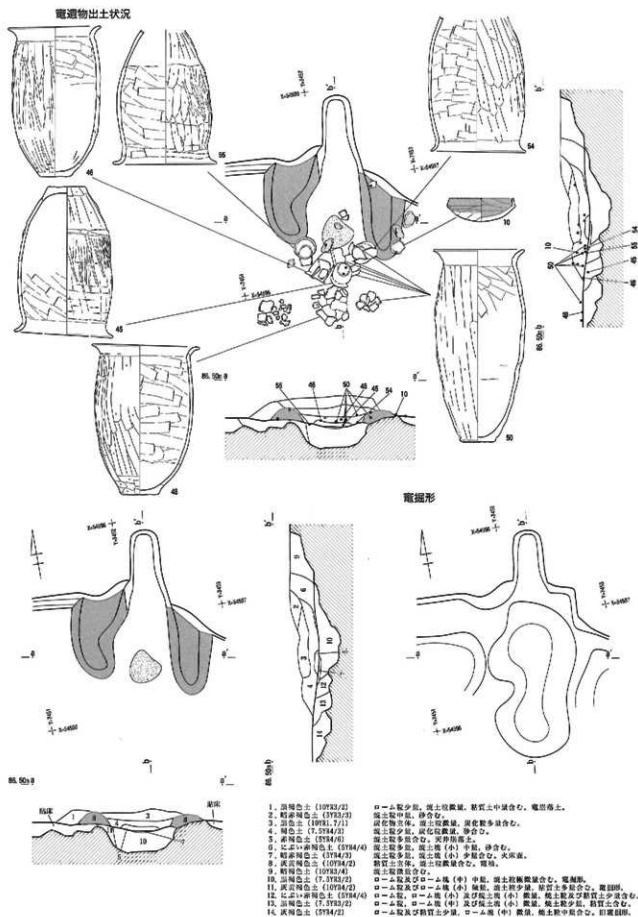


図 37 13号竪穴住居跡 (SI103) 電



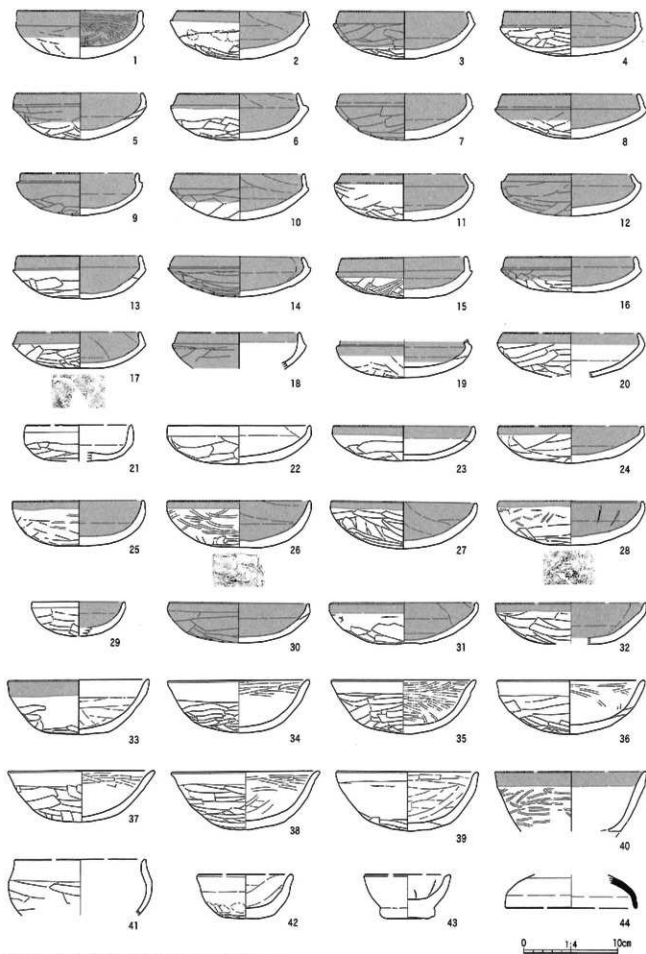


图 38 13号竪穴住居跡 (SI103) 出土遺物-1

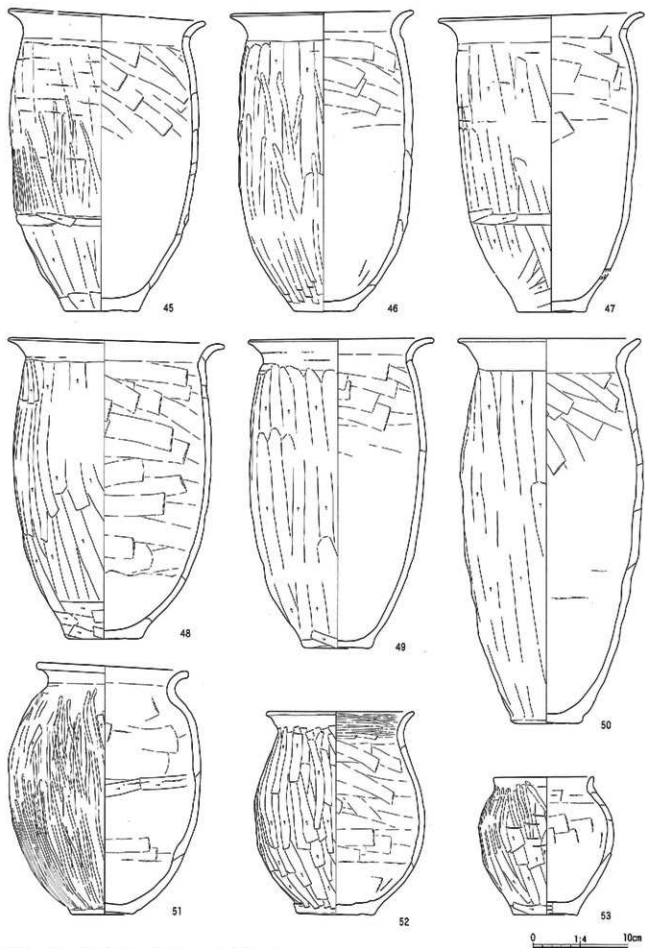


図39 13号竪穴住居跡 (S1013) 出土遺物-2

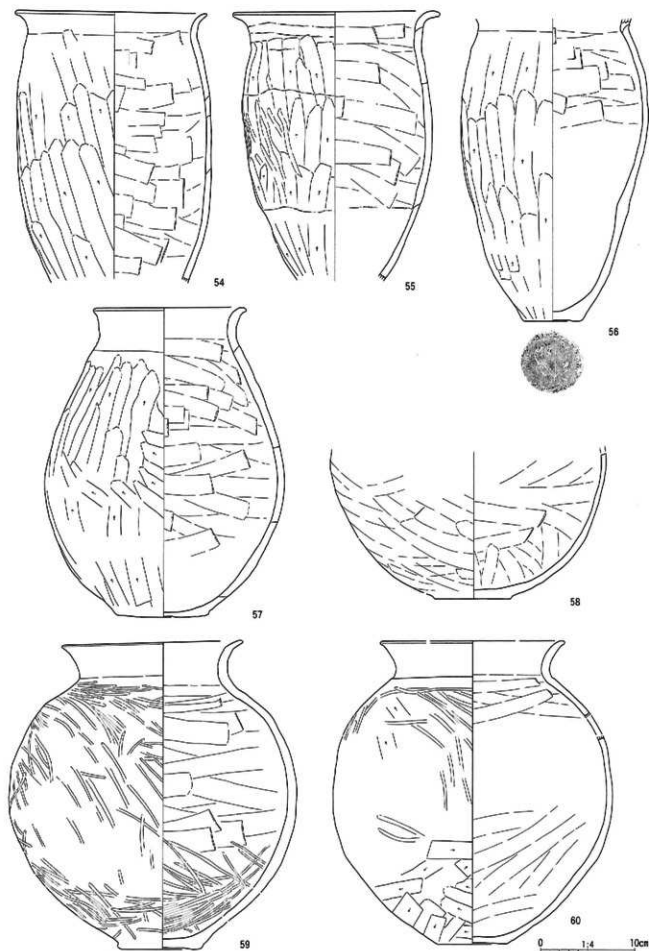


图40 13号竖穴住居跡(SI013)出土遺物-3

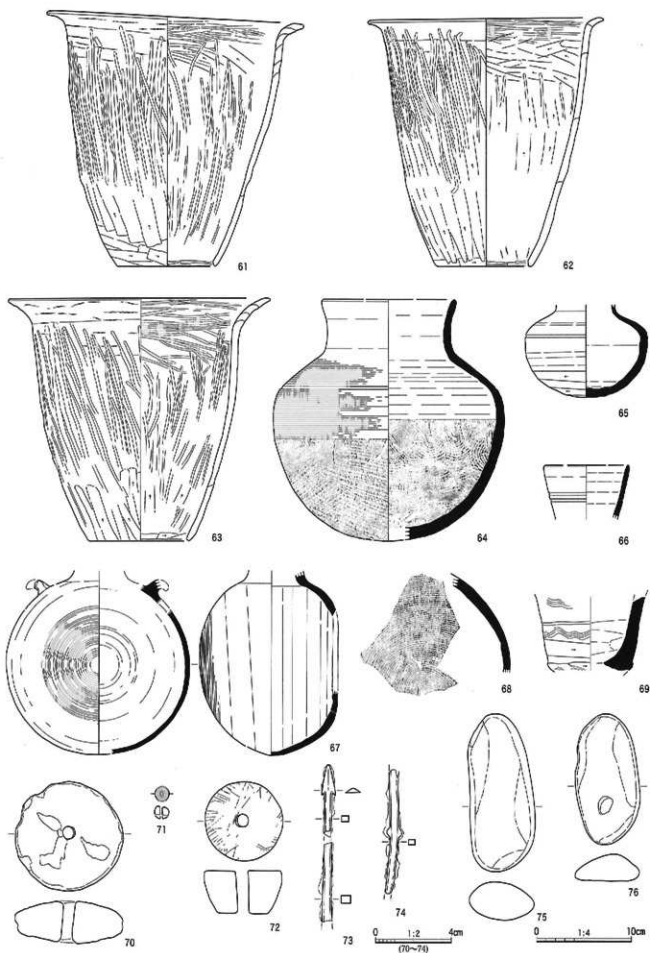


图41 13号竪穴住居跡 (SI1013) 出土遺物一4

出土遺物(図38~41, 図版40~45)

遺物出土量が極めて多く、S1012とは対照的にほとんどが完形に近い形で床面近くから出土した。器種も豊富で、土師器環・高坏・甕・甔、須恵器坏蓋・甕・壺・提瓶等が認められた。出土量は土師器甕が過半数を占めるが、土師器環や甔も比較的高い割合を占めた。これらの遺物は出土位置に偏在傾向が有り、土師器甕は電の前面、土師器甔は電右側面、土師器壺は住居跡北東隅、土師器小型甕と土師器環は住居南側の貯蔵穴周辺から集中して出土した。また、土師器壺1点(60)と須恵器小型甕1点(64)がS1012出土遺物と遺構間接合した。遺物は76点を図示した。

1~21は土師器坏身模倣坏である。ヘラミガキが施される個体は1など少数で、図示したもの以外も漆仕上げによる黒色処理のみが施されるものが多い。1は器形や器高などから、他の土師器坏に比べやや古い様相であり、対して21は口径が小さいことや体部が扁平化するなどやや新しい特徴を有する。22~32は瘦を持たない半球形の土師器坏である。模倣坏と同様に漆仕上げによる黒色処理が施されるものが主体である。6・7は逆位で、15・28は正位で重なって出土した。また、24・32も正位で重なって出土したが、その上には逆位で出土した4が入れ子状に重なっていたと考えられる。33~39は器高が高く、口縁部がヨコナデされてわずかに外反する土師器坏で、33のみ底部が平底に近くなっている。あるいは土師器壺とすべきかもしれない。40・41は土師器鉢と考えられ、40は胎土が緻密で、体部外面はヘラミガキを施される。42・43は手握ね土器である。44は須恵器坏Hの蓋である。

45~57は土師器甕である。45~50、54~56は長胴甕で、52・53は小型甕である。小型甕は緻密できめ細かい胎土を有する。51は中型の甕だが、胴部外面に縦位の丁寧なヘラミガキが施される。57は他の土師器甕と異なり、口縁部が狭く胴部下半に最大径を持つ器形であった。58~60は土師器壺である。ただし、59・60は胴部外面がヘラミガキされるのに対し、58はヘラミガキが認められないため、球胴甕となる可能性も否定できない。61~63は土師器甔で、内面は丁寧なヘラミガキが施される。

64は須恵器小型甕と考えられる。胎土は還元が不完全なため、橙色を呈している。外面は格子タタキ後胴部上半にカキメが施される。底部は丸底である。65は須恵器直口壺と考えられる。電東側の床面直上から正位で出土した。66も須恵器直口壺であるが、65とは胎土が異なり別個体である。67は須恵器提瓶である。1対の鈎状の把手を有する。側面実測図右側が円形に欠損していたため被蓋部と考えていたが、その反対側で回転紋り痕が観察できたため、こちら側が閉塞面と考えられる。68も同じく須恵器提瓶と考えられる。破断面の一部に平滑な使用面が認められたため、何らかの目的で転用された可能性がある。69は須恵器鉢となるか。

70-71は土製品で、70は土製紡錘車、71は土製小玉である。71は表面に漆が塗布されていた。このほか、焼粘土塊も数点確認できた。72は石製紡錘車である。73・74は鉄鏝である。両者とも長頸鏝で、出土地点が異なるため別個体として扱ったが、同一個体となる可能性も否定できない。73は断面形が片平鍋の鏝身部を有し、74には棘篋被が認められた。75・76は編物石である。床面直上から出土した。このほか図示できなかったが、最小1,060g、最大3,081gの被熱した礫が6点出土した。しかし、その用途は不明である。16号竪穴住居跡(S1016)(図42, 図版14・15)

C4グリッドで検出した。他の遺構と重複はしていなかった。住居跡西側は、平成12年度にとちぎ埋文が3区SI-51として調査を行った。

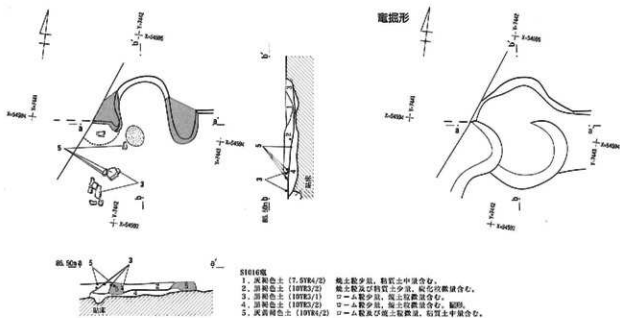
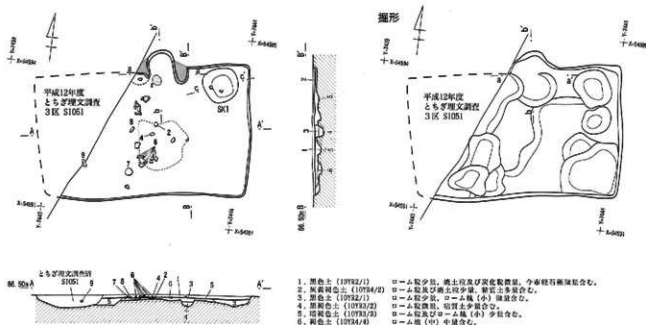
形態と規模

平面形態は東西に長い長方形を呈し、規模は南壁の検出できた長さが3.9m、南北は2.8mであった。壁はやや傾斜して立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で8cmと浅く、電を基準とする主軸方位はN7Wであった。

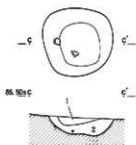
主柱穴や周溝は認められなかったが、電東側、住居北東隅で貯蔵穴(SK1)を検出した。ほぼ円形を呈し、壁は丸味を帯びて緩やかに立ち上がっていた。SK1からは土師器甕の胴部破片が出土した。

床は5~15cm厚の貼床で、5・6層により構築され、掘形は住居跡中央部をやや高く掘り残していた。

電は北壁中央よりやや東寄りに構築されていた。煙道は傾斜して立ち上がり、長さは43cmであった。残存する電袖部は灰褐色粘土を主体とする5層で構築されていたが、左袖は調査時の過失により一部を掘りすぎてしまった。電掘形は貼床を掘り込んでおり、4層により埋め戻されていた。火床面は電掘形上面で確認



貯蔵穴 (SK1)



長軸	短軸	深さ	
SK1	77	76	18

単位:cm

- S1016貯蔵穴 (SK1)
1. 黒褐色土 (10782/2) ◯-ム粒多量、黄土粒微量、炭粒微量混在。  
 2. 黒褐色土 (10782/3) ◯-ム粒中量、◯-ム粒(小) 散見。

図 42 16号竪穴住居跡 (S1016)

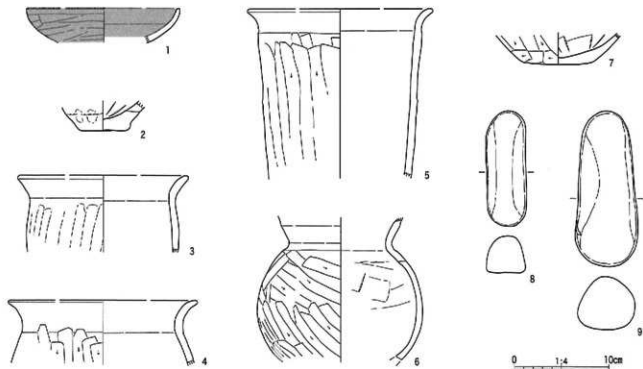


図43 16号竪穴住居跡 (SI016) 出土遺物

できたが、被熱の状態は弱かった。

出土遺物 (図43, 図版45・46)

出土遺物はやや少なく、土師器環・甕・壺・瓶、須恵器環、編物石が出土した。住居覆土が薄いこともあり、その多くは床面直上からの出土であった。器種別の出土量は、土師器甕がその大半を占めた。遺物は9点を図示した。

1は土師器環である。器形は半球形で、内外面に漆仕上げによる黒色処理が施される。貼床構築土中から出土した。2は手握ね成形による小形の土師器環である。住居中央部の床面直上から出土した。3～5・7は土師器甕である。6は土師器壺で、甕に比べ胎土が緻密である。8・9は編物石である。

そのほか、図示できなかったが、土師器甕の底部破片がSK031出土遺物と遺構間接合している。

17号竪穴住居跡 (SI017) (図44, 図版15)

B5グリッドで検出した。P293と重複し、新旧関係はP293→SI017。住居跡の大部分は、平成12年度にちぎ埋文が3区SI-10として調査を行った。

形態と規模

平面形態は正方形と考えられ、規模は東西4.9m、南北4.8mと推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で26cm、東壁を基準とする主軸方位はN3Wであった。

主柱穴は4本で、今回の調査で検出したのは南東部に位置する主柱穴であった。P1で認められた柱痕から、柱径は20cm弱と推測される。また、ローム主体の明瞭な柱裏込土(8層)が確認できた。

間仕切り溝や周溝、床の硬化面等は調査範囲内では検出できなかった。床は貼床で、7・8層により構築されていた。掘形は住居跡西壁側で深く掘り込まれていた。

出土遺物 (図44, 図版46)

調査したのが住居跡の一部だったため、出土遺物は極めて少なく、土師器環・壺、須恵器環・瓶、編物石が出土した。図示した遺物は3点である。

1は土師器環である。口径が小さく、内面は漆仕上げにより黒色処理が施される。2は須恵器提瓶と考えられる。3は編物石である。P1柱痕に隣接して出土した。

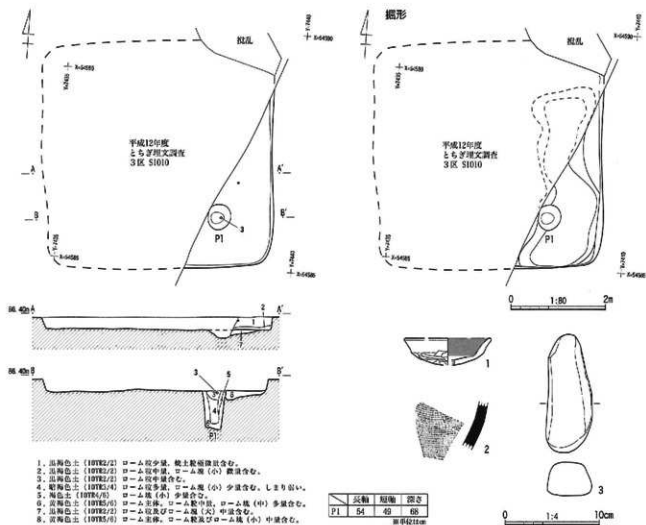


図44 17号竪穴住居跡 (SI017) 及び出土遺物

### 第3節 掘立柱建物跡

#### 1号掘立柱建物跡 (SB001) (図45, 図版15)

南側調査区, C8・9グリッドで検出した。SB002と重複するが, 柱穴同士の切り合いは確認できなかったため, 新旧関係は不明。ただし出土遺物や主軸方位から, SB001はS1003とほぼ同時期のものと推測されることから, SB001→SB002となる可能性がある。

#### 形態と規模

主軸方位をN6Wとする4間×2間の南北棟で, 桁行10.8m (36尺), 梁行5.7m (19尺)の掘立柱建物跡であった。また, P4とP7の間にP12・P13の東柱を据えていた。柱間寸法は梁行がほぼ2.7m (9尺)等間となるが, 桁行は2.6mを基調としつつも, 東柱の北側でやや広く, 南側でやや狭くなっていた。

柱掘形は円形で, 径は40~50cmを中心とするが, 深さは20~66cmと揃っていない。また, P3・5・7~9・13で確認した柱痕から, 柱径は20cm弱と推測される。

#### 出土遺物

P3・8・11から土師器環・甕の小片が計7点出土した。P8からは模倣坏と考えられる内外面に漆仕上げが施された土師器環が出土したが, 小片のため図示できなかった。

#### 2号掘立柱建物跡 (SB002) (図46, 図版15)

南側調査区, C8・9グリッドで検出した。SB001と重複するが, 柱穴同士の切り合いは確認できなかったため, 新旧関係は不明。ただし, 出土遺物や主軸方位から, SB002はS1001とほぼ同時期のものと考えられることから, SB001→SB002となる可能性がある。



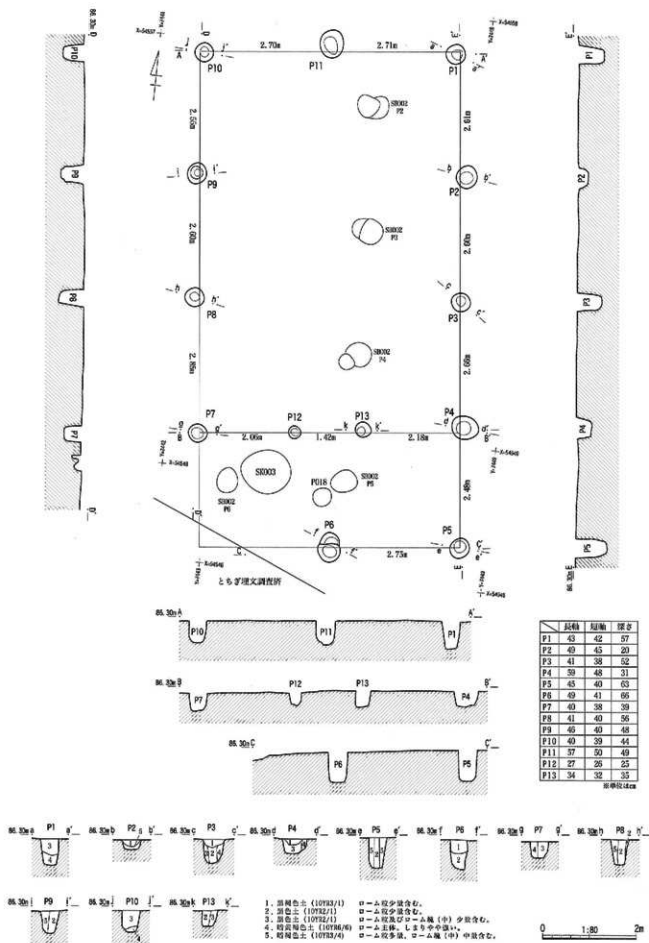


図45 1号掘立柱建物跡 (SB001)

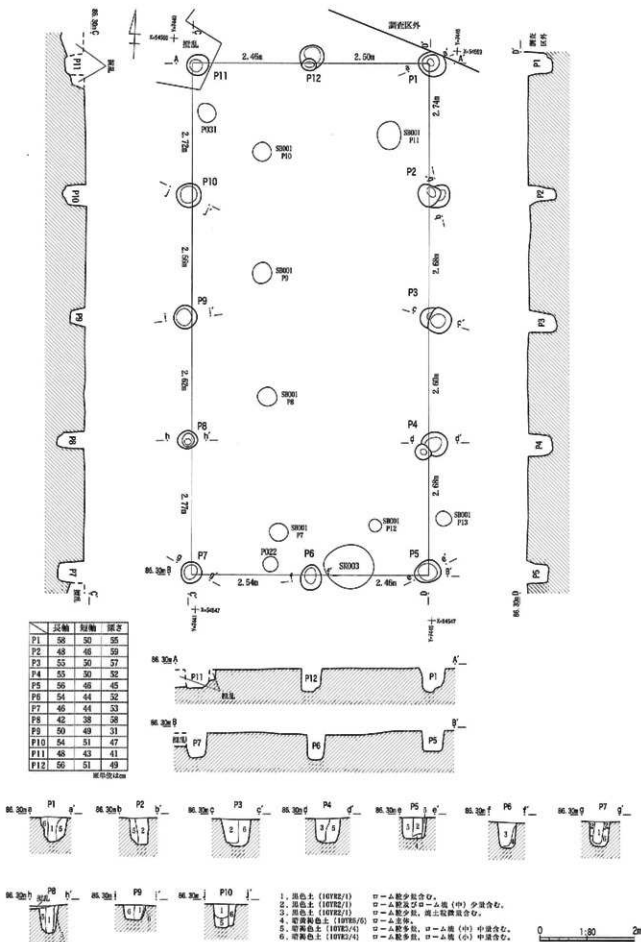


図46 2号掘立柱建物跡 (SB002)

主軸方位をN3Wとする4間×2間の南北棟で、桁行11.1m(37尺)、梁行5.5m(18.3尺)の側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が2.6~2.7m、梁行が2.5m前後とほぼ等間隔であった。

柱掘形は円形で、径は50cm前後を基本とするが、深さは31~59cmと不揃いであった。また、P1~5・7~9で確認できた柱痕から、柱径は20cm前後と推測される。柱穴の底面に段を持つものが見られることから、柱の据え替えが行われたと考えられる。

#### 出土遺物

P3・4・6・10から土師器環・甕の小片が計8点出土した。P4からはS1001-6と胎土及び調整が似た半球形の土師器環が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### 3号掘立柱建物跡(SB003)(図47, 図版16)

南側調査区, B7・8グリッドで検出した。桁・梁共に調査区外へと延びており、検出できたのは建物跡の南東隅のみであった。堅穴住居跡の主柱穴のみを検出した可能性も考慮したが、北西側で柱穴が確認できなかったため掘立柱建物跡と判断した。

#### 形態と規模

桁行・梁行共に不明であるが、南北棟と考えた場合主軸方位はN18E。また、東柱を検出していないため、側柱建物跡と考えられる。柱間寸法はP1-2間が2.6m、P2-3間が2.4mとSB001やSB002と似た値であった。このことから、南北方向が桁、東西方向が梁と考えられる。

柱掘形は円形を基本とするが、P3は楕円形であり柱痕も確認できなかったことから、柱の抜き取りが行われた可能性がある。P1に残る柱痕から、柱径は15cm前後と推測される。

#### 出土遺物

P1・2から土師器環・甕・甔の小片が計5点出土した。P2からは内面に漆仕上げを施された土師器環が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### 7号掘立柱建物跡(SB007)(図48, 図版16)

G3・H3グリッドで検出した。SB005と重複し、新旧関係は柱穴同士の切り合いがないため明確ではないが、出土物からはSB007→SB005と推測される。

#### 形態と規模

主軸方位をN87Eとする2間×1間の東西棟で、桁行3.4m、梁行2.8mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が1.5~1.6m、梁行が2.3~2.4mとほぼ等間隔であった。

柱掘形は円形を基調とし、径は30~50cmとやや不揃いで、深さは12~21cmと比較的浅かった。P1・5で確認できた柱痕から、柱径は10cm強と推測される。

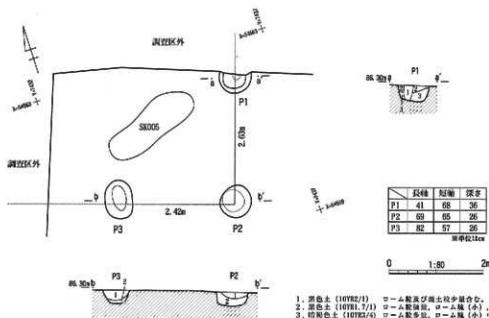


図47 3号掘立柱建物跡(SB003)

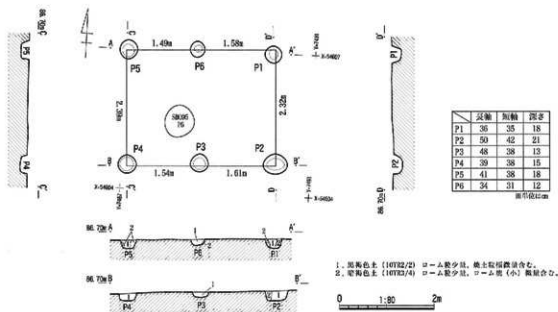


図48 7号掘立柱建物跡 (SB007)

#### 出土遺物

P1から土師器甕の胴部破片、P5から土師器壺と考えられる頸部破片が出土したが、何れも小片で図示できなかった。

#### 15号掘立柱建物跡 (SB015) (図49, 図版17)

D6・E6グリッドで検出した。SB016・SB019・SK34と重複するが、新旧関係が明確なのはSB015→SB016→SK034で、SB019との新旧関係は不明。

#### 形態と規模

主軸方位をN85Wとする3間×2間の東西棟で、桁行6.3m(21尺)、梁行4.5m(15尺)の掘立柱建物跡であった。柱間寸法は桁行、梁行共に2.0mの等間隔で、柱筋も揃っていた。

柱断面は円形で、径は30～40cmを中心とするが、深さは12～38cmと揃ってなかった。柱痕が確認できなかったことから、柱の抜き取りが行われた可能性がある。

#### 出土遺物

P5・P6から土師器甕の胴部破片が出土したが、小片のため図示できなかった。

#### 16号掘立柱建物跡 (SB016) (図49, 図版17)

D6・E6グリッドで検出した。SB015・SB019・SK34と重複するが、新旧関係が明確なのはSB015→SB016→SK034で、SB019との新旧関係は不明。

#### 形態と規模

主軸方位をN77Wとする1間×1間の東西棟で、桁行3.3m、梁行2.9mの掘立柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が2.7m、梁行が2.1～2.3mを測った。

柱断面は楕円形を基本とし、径は60～90cm、深さは30～54cmと共に揃ってなかった。P1で確認できた柱当たり痕から、柱径は30cm弱と推測される。

#### 出土遺物

P2から土師器甕の胴部破片が1点、P4から土師器甕の胴部破片が2点出土したが、何れも小片で図示できなかった。

#### 17号掘立柱建物跡 (SB017) (図50, 図版17)

C6～7・D6～7グリッドで検出した。SK036・P223等と重複し、SB017→P223、SK036との新旧関係は不明であった。



形態と規模

主軸方位をN3Eとする4間×2間の南北棟で、桁行9.7m、梁行5.4mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行がP4-P5間のみ2.5mとなるが、他は2.3m前後とほぼ等間隔であった。梁行も2.5m前後と揃っていた。P5のみやや外にずれているが、柱筋の通りも比較的良好であった。

柱掘形は円形を基本とし、径はP5を除き30～40cmとほぼ揃っていたが、深さは11～43cmと揃っていない。P3・4・7で確認できた柱当たり痕から、柱径は15～20cmと推測される。

出土遺物

P2から漆仕上げにより黒色処理された土師器杯の体部破片が出土したが、小片のため図示できなかった。19号掘立柱建物跡(SB019)(図51、図版17)

D5～6・E5～6グリッドで検出した。SB015・SB016・SK34と重複するが、SB019との新旧関係は不明。建物跡南西の隅柱は、攪乱により壊されていた。

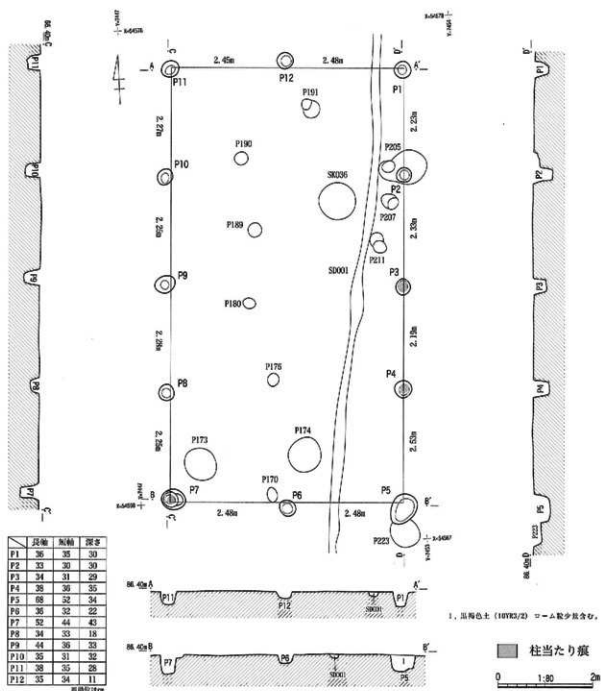


図50 17号掘立柱建物跡(SB017)

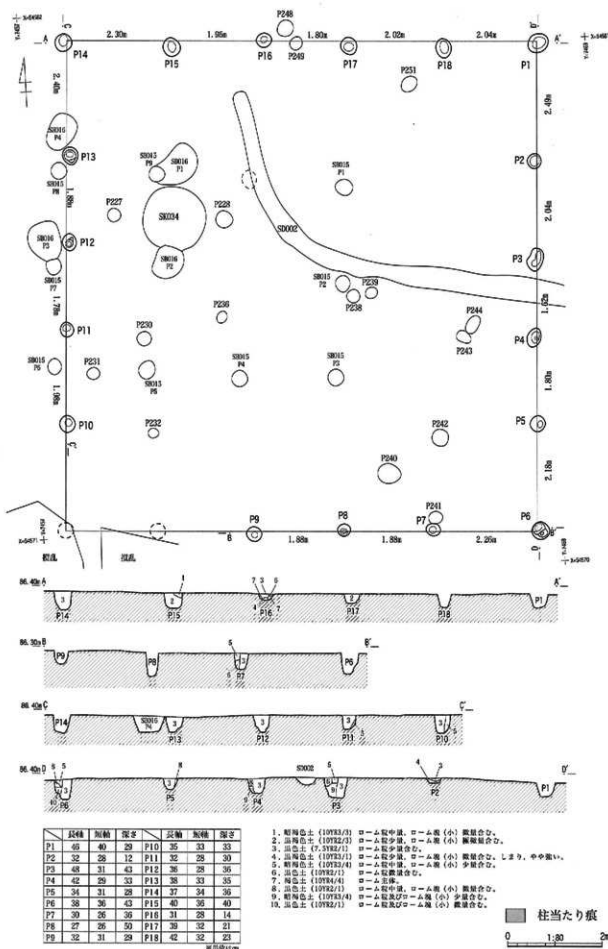


図51 19号掘立柱建物跡 (SB019)

形態と規模

主軸方位をN3Eとする5間×5間の南北棟で、桁行10.6m、梁行10.4mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が1.6～2.4m、梁行が1.8～2.3mと不揃いであった。柱筋は北辺の梁行で通りが悪かったが、他はほぼ揃っていた。

柱断面は円形を基本とし、径はP1・3が40cmを超えるものの他は30～40cmが中心であった。深さは12～50cmと不揃いであった。P3・6・7・16で認められた柱痕やP4・6・8で検出した柱当たり痕から、柱径は15～20cmと推測される。

出土遺物

P8から土師器環1点、土師器甕3点が出土したが、小片のため図示できなかった。

第4節 円形周溝遺構

円形周溝遺構は出土遺物が少なく、構築年代の特定は困難であったが、重複関係や類例等から古墳時代のものと推定した。出土遺物が乏しいため遺構の性格も明確ではないが、これらの遺構を平地式の建物跡とする説(村上1993)がある。そこで微細な遺物も見落とさないように、1mm目の篩を使用し全覆土の篩分けを行った。SX001～SX006では何も検出できなかったが、SX007で炭化種実を検出したため、改めてSX007の覆土のみフローテーション作業を行い、炭化種実を抽出した。

1号円形周溝遺構(SX001)(図52, 図版18)

H4・I4グリッドで検出した。SB004と重複し、新旧関係はSX001→SB004。溝が東側で途切れるが、これは表土除去時に誤って削平してしまったためと考えられ、本来は円形に溝が巡っていたと推測される。

形態と規模

周溝の直径は4.0mと推測され、幅は16～28cm、深さは4～10cmであった。覆土はローム粒を含む黒褐色土で、自然堆積と考えられる。

出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

2号円形周溝遺構(SX002)(図53, 図版18)

F2・G2グリッドで検出した。他遺構との重複は認められないが、北側半分は調査区外に延びていた。

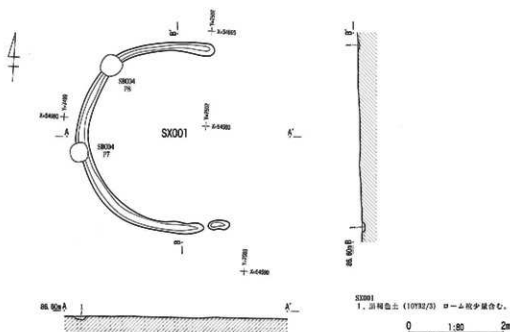


図52 1号円形周溝遺構(SX001)





ややしまりが強くローム塊を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

5号円形周溝遺構 (SX005) (図 54, 図版 18)

F3グリッドで検出した。SX006と重複し、新旧関係はSX006→SX005。東側半分は攪乱により壊されていたが、本来は円形に溝が巡っていたと推測される。

形態と規模

検出した溝の長さは5.9mで、周溝の直径は4.5mと推測される。溝の幅は33～45cmで、深さは5～10cmであった。また、周溝内からは小穴を1口検出した。

出土遺物

覆土中から、重さ2774.3gの被熱した礫が1点出土した。

6号円形周溝遺構 (SX006) (図 54, 図版 18)

E3・F3グリッドで検出した。SX005と重複し、新旧関係はSX006→SX005。

形態と規模

周溝の直径は6.0mで、幅は49～68cm、深さは12～18cmであった。溝の断面形は箱形。覆土2層はしまりが強く、人為的な埋め戻し土と考えられる。また、周溝内からは小穴を2口検出した。

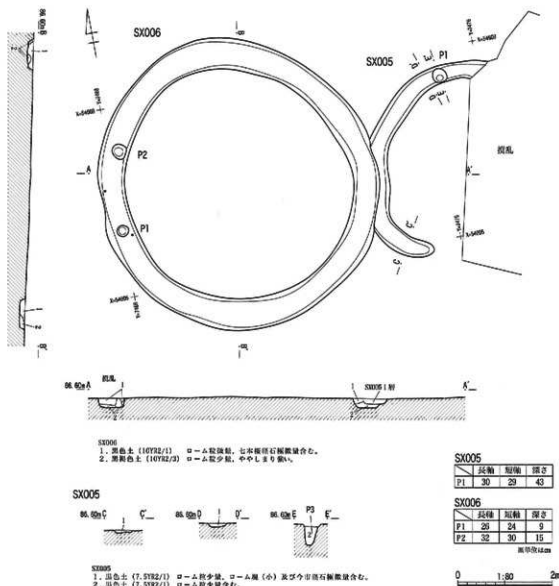


図 54 5号・6号円形周溝遺構 (SX005・006)

## 出土遺物

土師器環と考えられる小片が1点出土したが、図示できなかった。

## 7号円形周溝遺構(SX007)(図55, 図版18)

C7・D7グリッドで検出した。SD001と重複し、新旧関係はSX007→SD001。

## 形態と規模

検出した溝の長さは7.5mで、周溝の直径は7.2mと推測される。溝の幅は58~68cmで、深さは13~17cmであった。また、周溝内からは小穴を3口検出した。

## 出土遺物(図55, 図版46)

図示できたのは、1の縄物石1点であった。このほか、土師器環2点、土師器甕1点、土師器甕1点が出土したが、いずれも小片で図示はできなかった。1点出土した土師器甕は底部破片で、胴部下端にはハケメの痕跡が観察できたため、ハケメ長胴甕であろう。

また、覆土のフローテーション作業により炭化種実の抽出を行ったところ、イネ26点、アワ近似種12点、キビ近似種2点、コムギ23点などを検出した(附章参照)。

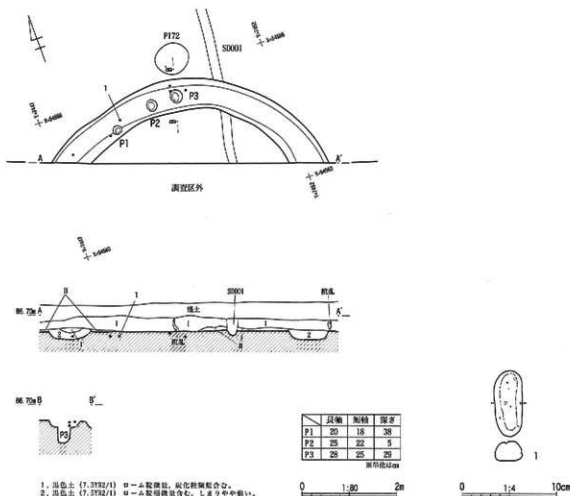


図55 7号円形周溝遺構(SX007)及び出土遺物

## 第5節 土坑

### 18号土坑 (SK018) (図56, 図版21)

H4グリッドで検出した。平面形態はほぼ円形を呈し、長軸0.81m、短軸0.73m、深さ17cmを測り、主軸方位はN17Eであった。覆土は自然埋設と考えられる。土師器鉢もしくは坏と推測される小片が1点出土したが、図示できなかった。

### 30号土坑 (SK030) (図56・57, 図版22・46)

C6グリッドで検出した。円筒形を呈する土坑で、直径は1.35m、深さ79cmであった。覆土は1層のしまりがやや強いことや2・3層中に灰を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。3層はフローテーション作業により、炭化種実の抽出を行ったところ、イネ18点、アワ近似種5点、コムギ57点、ムギ類1点等を検出した(附章参照)。

遺物出土量は土坑の中では多い方で、土師器環・甕・甗・編物石が出土したが小片が主体であり、図示できたのは3点のみであった。

土師器環は漆仕上げによる黒色処理を施されたものも少数ながら認められたが、多くは1の土師器環のように未処理であった。

2・3は編物石である。2は底面近くから出土した。3は両端に顕著な敲打痕が認められ、下部の欠損はこの敲打によるものと考えられる。

### 32号土坑 (SK032) (図56・57, 図版22・46・47)

C6グリッドで検出した。平面形態は隅丸の長方形で、長軸1.36m、短軸0.80m、深さ21cmを測り、主軸方位はN80Eであった。1層に微量の焼土粒及び炭化粒を含んでいた。

遺物出土量は少なく、土師器環・鉢・甕が出土した。3点を図示した。

1の土師器環は完形で、逆位の状態で出土した。口径が小さく体部が扁平化しており、漆仕上げによる黒色処理が施される。底部には線刻が認められた。2は口唇部内面に沈線を有する土師器環で、内外面とも漆仕上げによる黒色処理が施される。3は土師器甕である。胴部及び底部外面に赤彩が施される。土坑の底面近くから正位の状態で出土した。

### 34号土坑 (SK034) (図56・57, 図版23・47)

D6・E6グリッドで検出した。円筒形を呈する土坑で、深さは39cmと浅いが直径が1.38mとSK030とほぼ同じであった。覆土は人為的な埋め戻し土と考えられる。全覆土をフローテーションにかけたところ、アワ近似種1点、キビ近似種1点、コムギ6点の炭化種実を検出した(附章参照)。

遺物出土量は少なく、土器は土師器環・鉢・甕、須恵器甕が出土したが小片が主体であり、図示できたのは2点のみであった。

1は土師器環で、漆仕上げによる黒色処理が施される。覆土下層から細かく破砕した状態で出土した。このほか、図示できなかった土師器環も漆仕上げによる黒色処理を施されたものが主体であった。2は口縁部がやや外反する土師器鉢である。

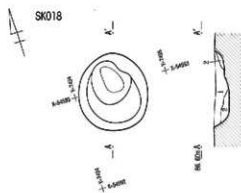
3～6は編物石である。3は表面に擦痕が観察されることから、砥石に転用されたと考えられる。3～5は覆土下層から出土した。

### 35号土坑 (SK035) (図56・57, 図版23・47)

D6グリッドで検出した。平面形態はほぼ円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.67m、深さ20cmを測り、主軸方位はN13Wであった。調査時の過失により、土層観察前に全掘してしまったため詳細は不明だが、黒褐色土が堆積していた。

遺物出土量は少なく、土師器環及び礫が出土した。図示したのは土師器環1点である。

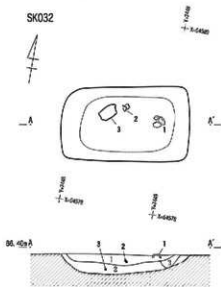
1は土師器環の口縁部破片で、小片のため口径復元はできなかった。内外面に漆仕上げによる黒色処理を施す。覆土上層より出土した。



SK018

1. 黑土 (10782/1) □—ム散少量、今春新石南層土混合。  
2. 暗褐色土 (10783/4) □—ム散程度弱、ロ—ム層 (中) 混入混合。

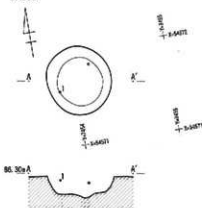
SK032



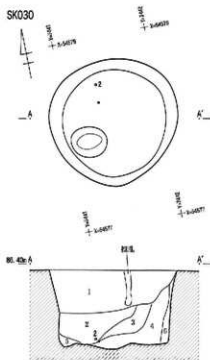
SK032

1. 黒色土 (10782/1) □—ム散、粘土粒及砂炭塵散層混合。  
2. 暗褐色土 (10783/2) □—ム散程度混合。  
3. 暗褐色土 (10783/3) □—ム散中混合。

SK035



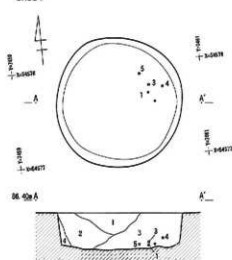
SK030



SK030

1. 黒色土 (7, 5781, 7/3) □—ム散少量混合。L 2 中中散り。  
2. 暗褐色土 (7, 2782/2) □—ム散程度、粘土散層弱、灰少混合。  
3. 黒色土 (10782/1) □—ム散程度、粘土散層弱、灰中混合。  
4. 黒色土 (10782/1) □—ム散少量、粘土散層弱混合。  
5. 暗褐色土 (10782/2) □—ム散及ロ—ム層 (中) 少量混合。  
6. 暗褐色土 (10782/3) □—ム散中混合。

SK034



SK034

1. 黒色土 (10782/2) □—ム散中散、粘土散層混合。  
2. 黒色土 (10782/1) □—ム散少量、ロ—ム層 (中) 混入混合。  
3. 黒色土 (10781, 7/1) □—ム散程度、ロ—ム層 (中) 混入混合。  
4. 暗褐色土 (10783/3) □—ム散少量混合。



图 56 18号・30号・32号・34号・35号土坑 (SK018・030・032・034・035)

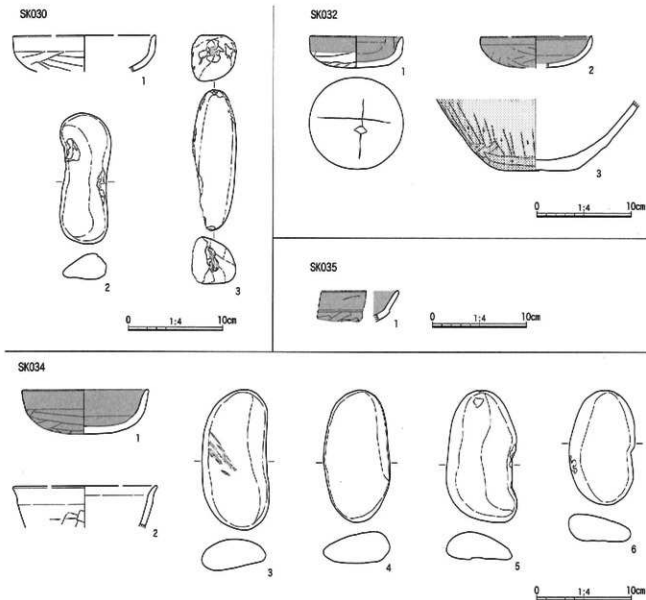


図57 30号・32号・34号・35号土坑 (SK030・032・034・035) 出土遺物

## 第6節 溝跡

### 4号溝跡 (SD004) (図58, 図版26)

F4・G4・H4グリッドで検出した。S1006・S1008・SB012と重複するが、切り合いが認められたのはS1006・008で新旧関係はSD004→S1006・S1008。溝は東西に延び、全長は15.4m、幅は20～40cm、深さは4～8cmであった。溝底面はほぼ平坦だが、底面の標高は西側が東側に比べて15cm程低かった。遺物は出土しなかった。

### 5号溝跡 (SD005) (図58, 図版26)

E4グリッドで検出した。他の遺構とは重複していなかった。長さは7.3m、幅22～44cm、深さ9～18cmを測った。溝は南側に彎曲していた。SD004とは位置的にやがずれるが、一連の遺構となる可能性がある。土師器甕の胴部破片が1点出土しているが、小片のため図示できなかった。

### 6号溝跡 (SD006) (図58, 図版26)

E3グリッドで検出した。他の遺構とは重複していなかった。長さは1.8m、幅は24～36cm、深さは4cmであった。遺物は出土しなかった。

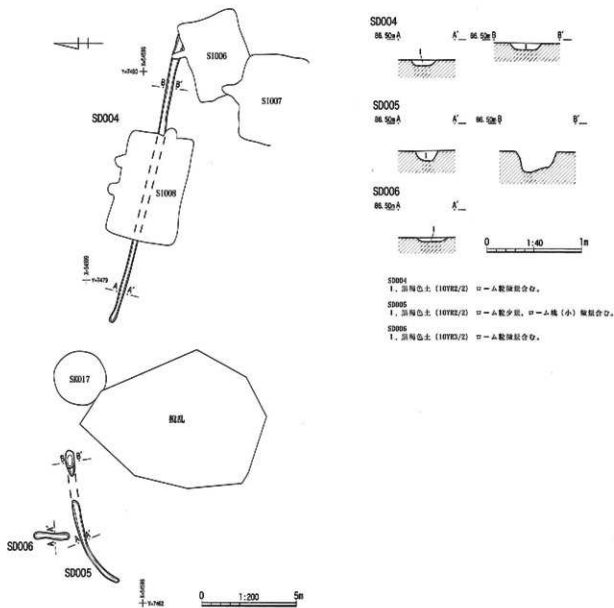


図 58 4号・5号・6号溝跡 (SD004・005・006)

## 第7節 小穴

古墳時代に属すると考えられる小穴はP 97, 98, 145, 199, 201, 202, 204, 209, 217, 219, 230, 261, 266, 282, 284, 299の16口を検出した。ただし、これらは乏しい出土遺物からの推定であり、遺物の出土しなかった小穴の中にも本時代に属するものがあつたと考えられる。また、図示したP 299以外の小穴の詳細は、表3 小穴一覧表を参照のこと。

## 299号小穴 (P299) (図 59, 図版 48)

G7グリッドで検出した。南西にはS1009, 北東にはSB018が存在する。42×36cmの楕円形を呈し、深さは11cmを測った。覆土はローム粒をわずかに含む暗褐色土が堆積していた。

出土したのは1の須恵器長頸壺1点である。表土除去中、遺構確認面から出土した。

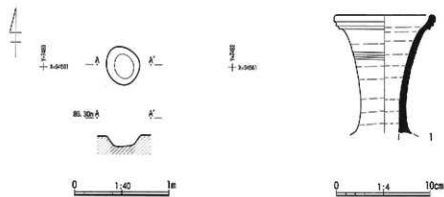


図59 299号小穴 (P299) 及び出土遺物

### 第8節 遺構外出土遺物

#### 遺構外出土遺物 (図60, 図版48)

古墳時代の遺構外出土遺物は、8点を図示した。このほかにも土師器杯や甕、須恵器甕等の破片が出土しているが、これらは全て平成20年度の土砂採取に伴って出土したものである。出土位置は、調査の対象区域外となったE9・F9周辺から出土したものが多かった。このため、南側調査区のSI001～SI003との接合を試みたが、接合したものは無かった。

1は坏蓋模倣坏で、口縁部外面及び内面上半部を漆仕上げにより黒色処理する。2は半球形の土師器坏で、内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。3は口径の大きい土師器坏で、口縁部付近に内外面とも漆仕上げによる黒色処理が施される。4は口径の小さな内彎口縁坏で、体部は扁平となる。1～4はSI001の東側E8グリッドから出土した。5は土師器高坏の脚部である。坏部内面はヘラミガキが施される。6は須恵器器台である。2段の透かし孔を有する。7・8は須恵器甕の胴部破片である。

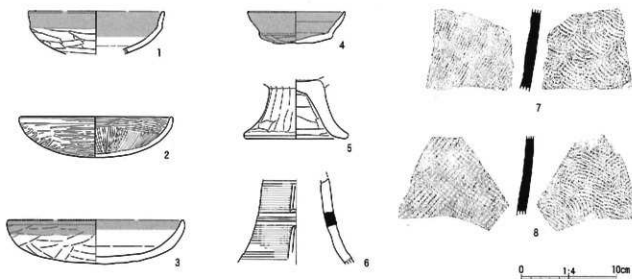


図60 遺構外出土遺物



## 第6章 奈良・平安時代の遺構と遺物

## 第1節 概要

調査により検出した奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡11棟、円形有段遺構1基、土坑3基、井戸跡3基、溝跡2条である。竪穴住居跡の主軸方位は東側に傾くものが多く、調査区北東側での検出が目立った。ただし、掘立柱建物跡に関しては、柱穴から出土した少量の遺物及び他遺構との重複関係、主軸方位などから推測したものであるため、他の時代の建物跡が混入している可能性も否定できない。

## 第2節 竪穴住居跡

## 7号竪穴住居跡 (S1007) (図61, 図版6・7)

G4・5, H4・5グリッドで検出した。S1006・SX003と重複し、新旧関係はS1006・SX003→S1007、住居跡南東隅は掘乱により壊されていた。また、住居跡は1回の拡張が行われていた。

## 形態と規模

平面形態はやや横長の長方形を呈し、規模は東西4.8×南北3.6m。壁はやや傾斜して立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で36cm、電を基準とする主軸方位はN5E。S1006と接する部分の北壁は、地山に比べ壁が崩れやすかったためか、粘土を含む土によって補強した痕跡が認められた。

東西方向に2本並んだP1・2が主柱穴と考えられ、両者とも住居中央部に向かって傾斜して開口していた。南壁際で検出したP3は、入口施設に伴う小穴と考えられる。周溝は北東隅周辺を除いて壁下を巡っていた。幅は15～34cm、深さは西壁際が6～10cm、南壁際が1～5cmと南壁際の方が浅かった。

床面の硬化範囲は、住居跡中央部で確認した。掘形は住居跡西側と四隅が掘り込まれ、ロームを主体とする8・9層で埋め戻されていた。床面の大部分は地山を直接利用していたが、一部で厚さ1cm程の貼床を検出したため、全体に薄い貼床が構築されていた可能性もある。また、住居西側の貼床除去後に拡張前の住居に伴うと考えられる主柱穴(P4)及び入口施設に伴う小穴(P5)、周溝(A-A'7層)を検出した。

電は北壁中央部に設置されていた。火床面が北壁よりも外側で確認されたことから、電自体が壁の外側に張り出すように構築されており、その長さは103cmであった。電軸は残っており、電の左右両壁は灰褐色粘土を多量に含む土によって構築されていた。また、8層も電構築土の可能性があり、電掘形は貼床を掘り込んでおり、灰褐色粘土を含む9・10層によって埋め戻されていた。火床面はこの掘形土上に形成されていた。

また、住居跡中央部で長さ35cm、幅40cmの被熱面を検出した。床面である地山のローム面が比較的に明瞭に被熱していた。掘り込みが確認できなかったことから炉跡とは判断しなかったが、注意を要する。

以上のことから、本住居跡は、旧柱穴P4・5→(住居の拡張)→柱穴P1～3といった変遷が考えられる。出土遺物(図62・63, 図版34・35)

遺物出土量は比較的多く、土師器環・甕、須恵器環のほか、金属製品の出土も目立った。出土量は土師器甕が主体を占め、環は土師器よりも須恵器の方が多かった。

1は土師器環で、内面は丁寧にヘラミガキされ、炭素吸着による黒色処理が施される。体部外面には「千万」と墨書される。南壁際の周溝内から正位で出土した。2～6は須恵器環である。4・6は甕内から出土した。2～4のように底部調整は回転ヘラ切り後未調整のものが主体的だが、5のように体部下端及び底部全面を手持ちヘラケズリされるものも少量存在する。5は底部外面に焼成前に施された線刻が認められた。

7～13は土師器甕である。比較的薄手の作りで、口唇部は上方へ縮み出され、胴部下半は縦位のヘラナデが施される。7のやや小形の甕及び12の底部破片以外は甕内から出土した。

14～17は金属製品である。14～15は鎌、16は明確ではないが手鎌となるか。15・16は住居北西隅付近の床面直上から出土した。17は刀子の茎と考えられる。住居南西隅付近の掘形底面に張り付くようにして出土した。

このほか、図示しなかったが炉跡南側の床面直上で、重さが1,017.1gの被熱した礫が出土した。

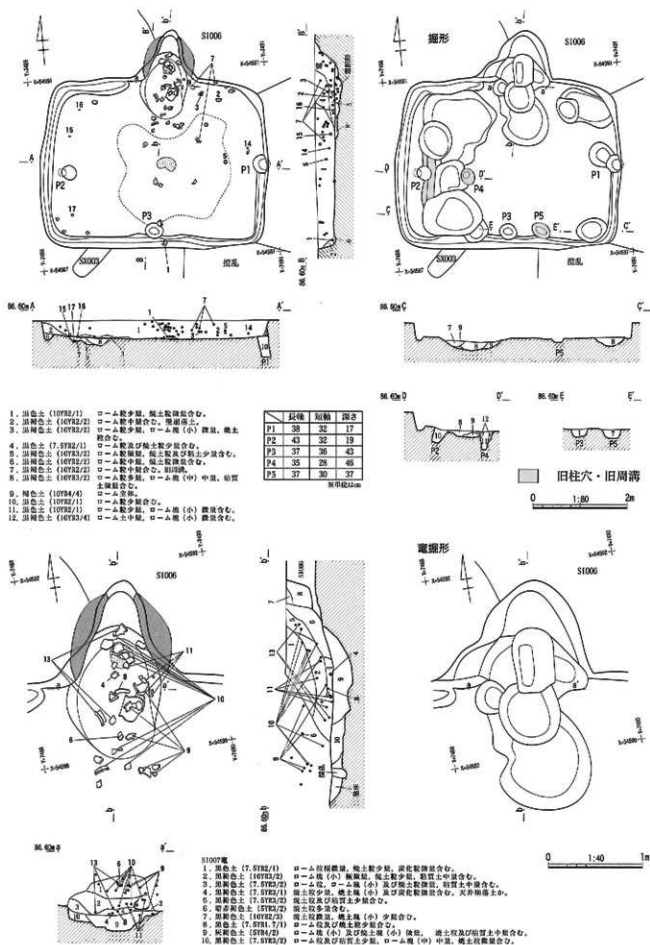


図 61 7号竪穴住居跡 (S1007)

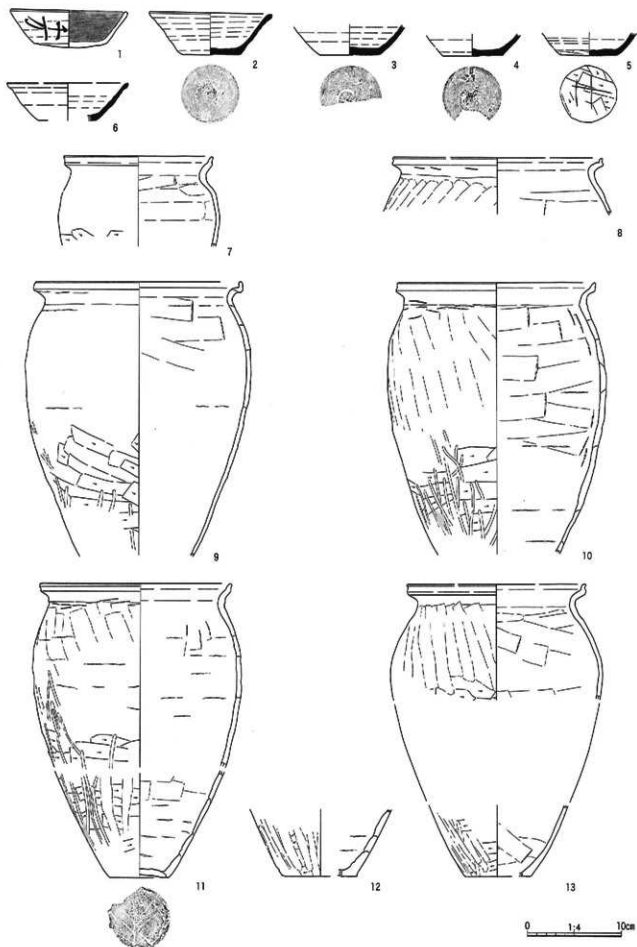


图 62 7号竖穴住居跡 (SI007) 出土遺物—1

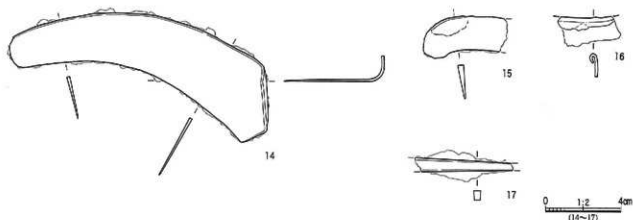


図63 7号竪穴住居跡 (SI007) 出土遺物—2

## 8号竪穴住居跡 (SI008) (図64・65, 図版7~9)

G4グリッドで検出した。SB012・SD004と重複し、新旧関係はSD004→SI008→SB012。また、住居跡は西壁を西側に拡張していた。

## 形態と規模

平面形態は東西に長い長方形を呈し、規模は東西5.7×南北3.7m。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で23cmであった。住居跡は1回の拡張と2回の電作り替えを行っており、3号電を基準とする主軸方位はN78Wとなるが、旧電の1号電を基準とした場合はN12E。覆土中に多量の炭化物粒や炭化材を含んだことから焼失住居の可能性を考慮したが、炭化材の多くは床面より5~10cm浮いた状態で出土したため、これらを焼失した上屋構築材と断定することは難しい。

硬化面は比較的広範囲で、住居跡中央部のやや東寄りで見出した。掘形は住居跡全体が浅く掘り込まれるが、住居跡四隅はやや深く掘り込まれていた。貼床は浅いところで4~5cm、深いところで10~15cmの厚さを有していた。

周溝や間仕切り溝は検出できなかった。3号電の左袖下から検出したP1及び貼床除去後に検出したP2は、住居拡張前の主柱穴と考えられる。P1は住居跡の中央部に向かって傾斜して開口していたことから、柱も斜めに据えられていたのだろう。また、拡張前の住居の西壁はP2付近に存在した可能性が高いことから、拡張前の平面形態はほぼ正方形を呈していたと推測される。

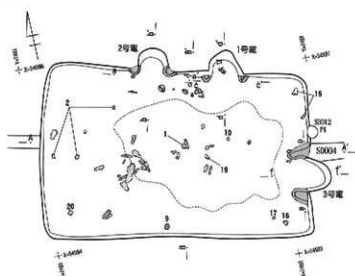
電は旧新合わせて3基を検出した。1号電が拡張前の住居に伴うもの、2・3号電が拡張後の住居に伴うものである。住居廃絶時に使用されていた電は、残存状況から3号電と考えられるが、2号電は、断面図に1号電で確認できた住居壁の立ち上がりが認められないため、3号電と併存していた可能性もある。

1号電は、北壁中央部より東寄りに設置されていたが、拡張前の住居で考えた場合、北壁のほぼ中央部に位置していたと考えられる。煙道は段を有し、緩やかに立ち上がり、北壁から48cm張り出していた。灰褐色粘土により構築されていた電袖部はほとんど残存しておらず、火床面も確認できなかった。電掘形は、粘土を含んだ9・10層により埋め戻されており、4層は灰が含まれることから電使用時における堆積土と考えられる。電覆土中から出土した遺物は、拡張前の住居跡に伴うものと考えられるが、他の遺物との時期差は見受けられなかった。

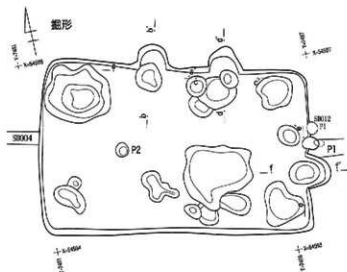
2号電は北壁中央部より西寄りに構築されていた。煙道は傾斜して立ち上がり、北壁から44cm張り出していた。1号電と同じく電袖部がわずかに残存し、火床面の検出もできなかった。電掘形は貼床を掘り込んでおり、粘土を含む5層によって埋め戻されていた。

3号電は東壁の中央部よりやや南寄りに構築されていた。煙道は緩やかに立ち上がり、東壁から48cm張り出していた。残存する電袖部は、粘土を主体とする8層により構築されるが、やはり火床面は認められなかった。電掘形は7層により埋め戻されていた。

よって本住居跡は、1号電・P1~2→(住居の拡張)→2号電→3号電といった変遷が窺える。



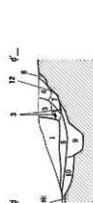
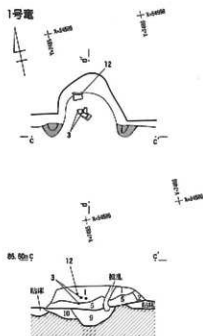
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層中位, 粘土成分少, 微土ブロック (小) 塊状を含む。
2. 黒色土 (7.5YR1, 7/1) ローム層少量, 炭化灰及び炭化材中量を含む。
3. 黒色土 (10YR1, 7/1) ローム層微量を含む。
4. 黒色土 (10YR2/1) ローム層中量を含む。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム層少量, ローム塊 (小) 中量を含む。
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘土主体, ローム粒, 粘土粒及び炭化灰少量。
7. 黒色土 (10YR4/4) ローム層 (中) 微量を含む。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム層少量, ローム塊 (小) 中量を含む。
9. 黒色土 (10YR4/5) ローム層中位, ローム塊 (中) 多量を含む。炭灰, ローム正準, 粘床。



	長軸	短軸	面積
P1	46	36	62
P2	35	28	55



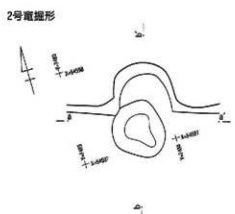
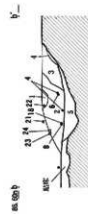
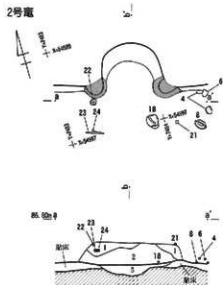
図64 8号竪穴住居跡 (S1008)



S1008 1号電

1. 赤色土 (7.5TR2/1)
2. 赤褐色土 (10TR2/3)
3. 褐色土 (7.5TR4/3)
4. 灰褐色土 (10TR4/2)
5. 赤褐色土 (7.5TR3/1)
6. 灰褐色土 (17.5TR4/2)
7. 赤褐色土 (10TR3/2)
8. 赤褐色土 (10TR2/3)
9. 赤褐色土 (10TR2/2)
10. 赤褐色土 (10TR2/3)

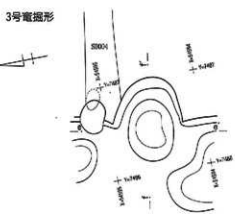
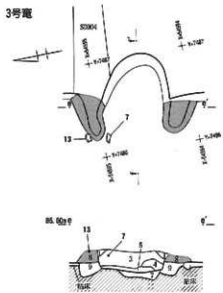
- ローム段及び礫化層少量、粘土散粒状含む、粗砂質土。  
 ローム段中量含む。  
 粘土段中量、礫土塊(小)散粒、粘質土多量含む、灰砂層薄土。  
 粘土段少量、灰中量含む。  
 ローム段及び礫土少量、礫土中量含む。  
 粘土段少量、灰少量含む。  
 ローム段、ローム塊(中)、粘土段及び粘質土少量含む。  
 粘土段中量含む。  
 ローム段、ローム塊(中)、粘土段及び粘質土少量含む。  
 ローム段及び粘質土少量、ローム塊(中)中量含む、しりり中量強い。



S1008 2号電

1. 赤褐色土 (10TR2/2)
2. 赤色土 (10TR2/1)
3. 赤褐色土 (10TR2/3)
4. 赤褐色土 (10TR2/2)
5. 赤色土 (10TR2/1)

- ローム段及び礫化層散粒、粘質土少量含む。  
 ローム段少量、粘土散粒及び礫散粒含む。  
 粘土段少量、礫土塊(中)散粒含む。  
 ローム段少量、粘土散粒含む、灰少量含む。  
 ローム段及び粘質土少量、ローム塊(小)散粒含む、粗砂質。



S1008 3号電

1. 赤褐色土 (7.5TR2/3)
2. 赤褐色土 (17.5TR4/2)
3. 黒褐色土 (10TR2/2)
4. 赤褐色土 (10TR2/3)
5. 赤褐色土 (10TR2/2)
6. 黒色土 (10TR2/1)
7. 赤褐色土 (10TR2/2)
8. 赤褐色土 (7.5TR3/1)
9. 赤褐色土 (10TR2/2)

- ローム段少量、粘質土多量含む。  
 ローム段及び礫土多量、礫土塊(中)少量、灰少量、粘質土中量含む。  
 粘土段及び粘質土中量、礫土塊(中)少量、礫化散粒状含む。  
 ローム段及び礫土少量、粘土散粒状含む。  
 ローム段、ローム塊(小)及礫土段散粒状含む。  
 ローム段少量、ローム塊(小)散粒状含む。  
 ローム段少量、ローム塊(小)少量含む、しりり中量強い。  
 粘質土多量、粘土散粒状含む。  
 ローム段中量、ローム塊(小)少量含む。

図65 8号竪穴住居跡 (S1008) 電

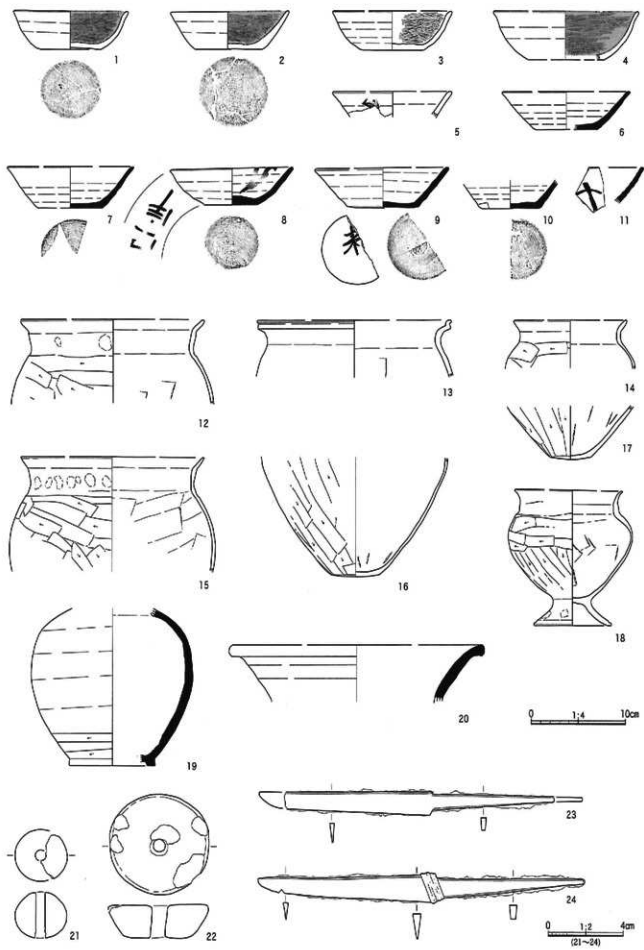


図66 8号竪穴住居跡 (S1008) 出土遺物

## 出土遺物 (図66, 図版35・36)

遺物出土量は少なかったが、土師器環・甕や須恵器環・甕のほか、土製紡錘車や刀子が出土した。環は完形に近い形で出土したものが目立った。環と甕の出土量は、甕の方がやや多く、環は須恵器の占める割合が高かった。また、墨書された土器が4点確認できた。

1～5は土師器環である。1は住居跡中央部の床面直上から、正位の状態で出土した。1・2・4は内面が炭素吸着により黒色処理されるが、4は環とするよりも壺とした方が適切かもしれない。底部は非実測遺物も含め、回転糸切り後未調整のものが多いが、3は底部全面が単一方向の手持ちヘラケズリにより調整される。3は拡張前の住居跡に構築された1号竈からの出土であるため、時期差を反映している可能性がある。5は体部外面に墨書が認められた。文字は「金」か。6～11は須恵器環である。8・11は体部外面に、9は底部外面に墨書が認められたが、8・11は判読できなかった。9は「来」か。底部切り離しは回転ヘラ切り(7・9)と回転糸切り(8)が認められた。前者は益子窯産、後者は三龜窯産と考えられる。

12～17は土師器甕である。口唇部が上方に摘み出され、胎土に長石や石英・雲母を含む13は常態型甕、その他の甕はその特徴から武蔵型甕と考えられる。18は台付甕である。比較的小法量の14は18と同じく台付甕となるか。12と17、15と16は接合しなかったが、それぞれ同一個体となる可能性がある。

19は須恵器長頸甕である。かなり細かく割れた状態で出土した。内面が被熱により弾けるように剥離している。20は須恵器甕の口縁部破片である。

21・22は土製品で、21は土玉、22は土製紡錘車である。共に2号電周辺から出土した。重なって出土した23・24は金属製の刀子である。これら21～24は、2号電の崩落土中から出土した。

このほか、図示していないが、西壁中央部で長さ20.5cm、重さ2559.2gの被熱した礫が出土した。このような礫はS1007やS1010でも出土しているが、その使用目的は不明である。

また、竈置土のフローテーション作業により、1号竈からはイネと野生種の可能性があるマメ科の炭化種子、2号竈からはイネ、キビ近似種の炭化種子を検出した(附章参照)。

## 9号竈穴住居跡(S1009)(図67, 図版9)

F8グリッドで検出した。P208と重複し、新旧関係はP208→S1009。南壁は調査区外のため、検出できなかった。

## 形態と規模

平面形態は正方形を呈すると推測されるが、南壁を検出できなかったため明確ではない。規模は東西4.4m、南北方向は検出できた長さが3.5mであった。壁はやや傾斜して立ち上がり、造構確認面から床面までの深さは最大で15cmと浅く、電を基準とする主軸方位はN22Eであった。

調査範囲内では主柱穴や周溝を検出できなかった。床は2～14cm厚の貼床で、4層により構築されていた。掘形は住居東側と北西隅をやや深く掘り下げている。貼床除去後に検出したP1は、電断面図(a-a')から貼床構築後かつ電構築前に掘られたことがわかったが、その性格は不明である。

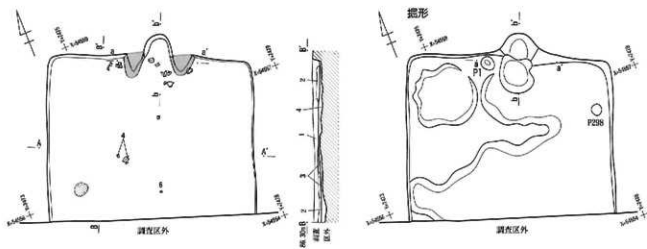
竈は北壁中央部に構築されていた。煙道は緩やかに立ち上がり、長さは41cmであった。残存する電袖部は灰褐色粘土を主体とする6層で構築されていた。電掘形は貼床を掘り込んでおり、5層により埋め戻されていた。火床面は確認できなかった。

## 出土遺物(図68, 図版36・37)

出土した遺物は少量であり、土師器環・甕・甗、須恵器環が出土した。器種別の出土量は、甕がその大半を占めた。環類は須恵器よりも土師器の方が多く出土したが、図示できたのは須恵器のみである。

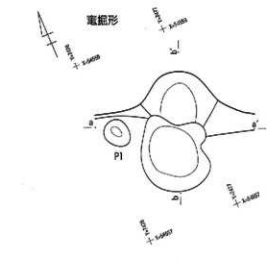
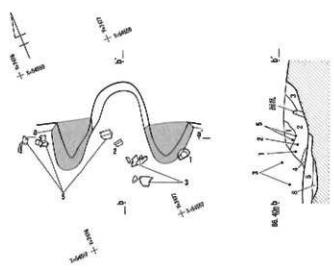
1は須恵器環である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、焼成前にヘラ記号が施されていた。また、図示できなかったが、須恵器台付環の小片も出土している。2～5は土師器甕である。小法量の2は台付甕の可能性がある。3は口縁部の形態が、他の甕に比べ古い様相を持つ。出土した土師器甕は、非実測遺物も含め武蔵型甕が主体であった。土師器甗は図示できなかったが、小片が数点出土している。6の白玉は混入したもののか。4と6以外は全て電周辺から出土した。





1. 黒色土 (7.5791.77/1) ローム数少量、粘土段層を含む。
2. 黒褐色土 (10732/3) ローム数少量を含む。
3. 黒褐色土 (10732/3) ローム粒及びローム塊 (中) 少量含む。
4. 暗褐色土 (10733/3) ローム粒及びローム塊 (中) 中量含む。

0 1:60 2m



1. 黒褐色土 (7.5793/2) 粘質土質厚、粘土段層を含む。
2. 黒褐色土 (10732/3) 粘土粒少量、粘土塊 (小) 散在含む、天井層跡土。
3. 暗褐色土 (10733/3) 粘土段層を含む。
4. 黒褐色土 (10732/2) ローム粒少量、ローム塊 (小) 及び粘土段層を含む。
5. 黒褐色土 (10732/1) ローム粒少量、ローム塊 (小) 少量含む、電線跡。
6. 黒褐色土 (10733/3) 粘質土質厚。
7. 黒褐色土 (10732/1) ローム粒及びローム塊 (小) 少量含む。
8. 暗褐色土 (10733/2) ローム粒及びローム塊 (中) 中量含む。

0 1:40 1m

図 67 9号竪穴住居跡 (SI009)

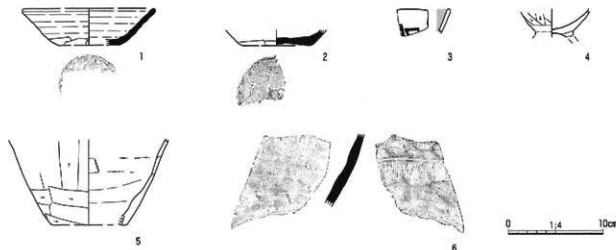


図70 10号竪穴住居跡 (SI010) 出土遺物

11A・B号竪穴住居跡 (SI011A・B) (図71, 図版10・11)

D3グリッドで検出した。SI012と重複し、新旧関係はSI012→SI011。南壁をわずかに南側に拡張する建て替えが行われていた。拡張後をSI011A、拡張前をSI011Bとした。

形態と規模

SI011Aは、平面形態がほぼ正方形を呈するが、北東隅はやや外側に張り出していた。規模は、東西3.7m、南北3.4m、確認面から床面までの深さ8cm、竈を基準とする主軸方位はN13Eであった。

床面の硬化範囲は住居跡中央部で確認したが、柱穴や周溝は検出できなかった。床は5層により構築された貼床であったが、掘形を掘り込むことなくSI011Bの床面上に直接構築土を充填して貼床としていた。貼床の厚さは5～10cmであった。

竈は北壁中央部に設置されていた。煙道は緩やかに立ち上がり、北壁から84cm張り出していた。残存する電袖部は、灰褐色粘土を主体とする6層により構築されていた。電掘形は、貼床を掘り込み、灰色粘土を含む10層により埋め戻されていた。火床面は検出できなかった。

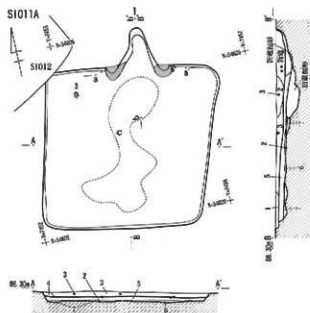
SI011Bの平面形態はSI011Aと同様にほぼ正方形を呈し、北東隅は外側に張り出していた。規模は、東西3.7m、南北3.1m、確認面から床面までの深さは20cmで、竈を基準とする主軸方位はSI011Aと同様であった。床面の硬化範囲は住居跡中央部で確認したが、SI011Aと同じく柱穴や周溝は検出できなかった。床は2～5cmの薄い貼床により構築されていた。貼床構築層は6・7層である。掘形は住居跡の四隅のみを深く掘り込んでいた。

竈はSI011Aと同じく北壁中央部に設置されていたと考えられるが、検出した火床面の位置からは、SI011Aよりもやや南寄りの位置に構築されていた可能性がある。明瞭な電袖は残っていないが、火床面の両側で認められた灰色粘土を含む7層がその痕跡と考えられる。電掘形は11～14層に当たり、15層はSI011Bの掘形埋土と考えられる。

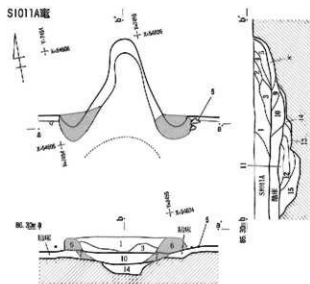
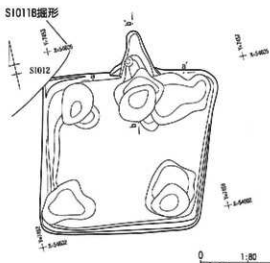
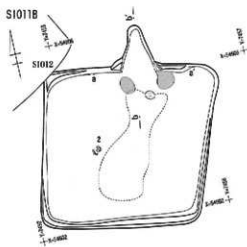
出土遺物 (図72, 図版37)

遺物出土量は極めて少なく、土師器環・甕、須恵器環・甕が出土したが、土師器環と甕の出土量はほぼ同量であった。須恵器環2・4はSI011Bに伴う遺物で、他はSI011Aから出土した。

1は土師器環である。比較的薄い作りで、底部全面に複数方向の手持ちヘラケズリが施される。2～4は須恵器環である。2はSI011Bの床面直上から逆位で出土した。5は土師器甕の口縁部破片である。器形や調整の特徴から、武藏型甕と考えられる。6は、須恵器環の底部を転用した紡錘車と判断して復元実測を行った。



1. 黒色土 (10YR2/1) □-△敷層, □-△幅(小) 傾斜面付。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量, 竪穴上部付。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量, 竪土段及び傾斜面付。
4. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量付。
5. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷中, □-△幅(中) 少量付。しまり強。
6. 黒色土 (10YR2/1) □-△敷少量付。
7. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量, □-△幅(中) 中量付。



1. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量, 竪土段傾斜面付。
2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 竪土敷少量, 竪穴上部付。
3. 灰黄褐色土 (10YR6/2) 竪土敷少量, 傾斜面付。竪穴上部付。
4. 紅褐色土 (5YR4/4) 竪土敷中量, 竪土幅(小) 少量, 傾斜面付。しまり強。
5. 灰黄褐色土 (7.5YR6/2) 竪土敷少量, 傾斜面付。
6. 灰黄褐色土 (10YR6/2) 竪穴上部。□-△敷傾斜面付。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) □-△敷及び傾斜面付。しまり中強。
8. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷及び□-△幅(中) 少量, 傾斜面付。
9. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷及び傾斜面付。竪土幅(中) 少量。傾斜面付。
10. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷少量, □-△幅(小) 少量, 傾斜面付。しまり中強。
11. 灰黄褐色土 (10YR6/2) □-△敷及び□-△幅(小) 少量, 傾斜面付。
12. 灰黄褐色土 (10YR6/2) □-△敷。
13. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷中, □-△幅(中) 少量, 傾斜面付。
14. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷及び□-△幅(中) 少量, 傾斜面付。
15. 暗褐色土 (10YR3/2) □-△敷及び□-△幅(中) 少量付。

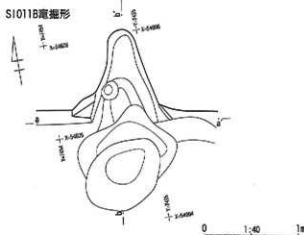
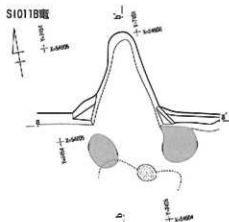


図71 11 A・B号竪穴住居跡 (SI011A・B)

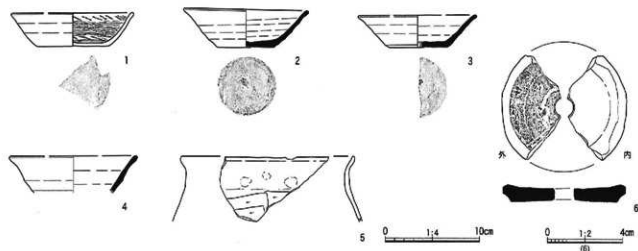


図72 11A・B号竪穴住居跡 (S1011A・B) 出土遺物

#### 14号竪穴住居跡 (S1014) (図73, 図版14)

C4グリッドで検出した。S1013と重複し、新旧関係はS1013→S1014。検出できたのは西壁と南西隅のみであった。遺構覆土もほとんど残っておらず、床面は表土除去時に削平してしまったと考えられる。

##### 形態と規模

平面形態は正方形と推測されるが、検出できたのは一部のため明確ではない。検出した西壁の長さは3.5m、西壁を基準とする主軸方位はN16Eであった。

床面の検出作業は慎重に行ったが、S1013の覆土中に硬化範囲は確認できず、土層断面でもS1013の覆土との層境は不明瞭であった。P1についても、S1013の壁柱穴である可能性は否定できない。

明確な竈は検出できなかったが、北壁中央部と思われる部分でS1013の覆土中から焼土粒が堆積する層を確認したため、S1014の竈掘形と判断した。灰色粘土など、他に竈の痕跡を確認することはできなかった。

##### 出土遺物 (図73, 図版45)

ここで扱う出土遺物は、S1013の覆土中から出土した古代の遺物を選別したものである。土師器環、須恵器環、灰軸陶器瓶類が出土したが、図示できたのは3点であった。

1は土師器環である。内面は丁寧にヘラミガキが施され、炭素吸着により黒色処理される。底部切り離しは回転糸切りである。2・3は須恵器環である。底部切り離しは共に回転ヘラ切りで、2は電掘形から出土した。

#### 15号竪穴住居跡 (S1015) (図74, 図版14)

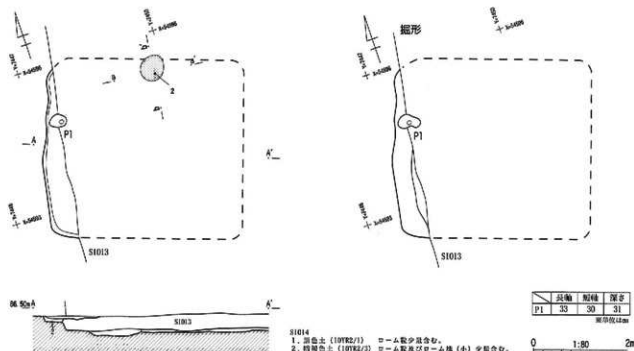
D5・E5グリッドで検出した。SB014と重複するが、新旧関係は不明。

##### 形態と規模

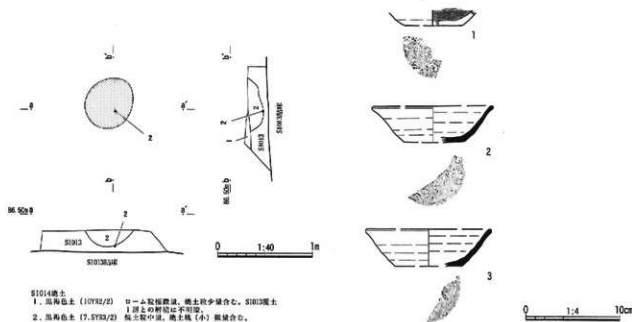
平面形態は東西に長い台形で、北壁が南壁に比べて長かった。規模は東西3.6m、南北3.0mであった。壁はやや丸味を帯びて緩やかに立ち上がり、遺構確認面から床面までの深さは最大で26cm、電を基準とする主軸方位はN70Wであった。

主柱穴や周溝などは検出できず、床面の硬化範囲も確認できなかった。掘形は住居跡西側と北東隅、南東隅をやや深く掘り下げ、ローム塊を含む4・5層を充填させて貼床としていた。貼床除去後にP1を検出したが、その性格は不明であった。

竈は東壁中央より南寄りに設置されていた。煙道は丸味を帯びて緩やかに立ち上がり、東壁から34cm張り出していた。電軸は検出しておらず、構築材の灰色粘土も全く確認することができなかった。火床面は確認できなかった。



SI014  
1. 赤色土 (10YR2/7) ローム最少混合。  
2. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム数及びローム径 (小) 少混合。



SI014遺土  
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム数極微量、焼土が少混合。SI013遺土  
1層との境界は不明瞭。  
2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 焼土が中量、焼土塊 (小) 散見含む。

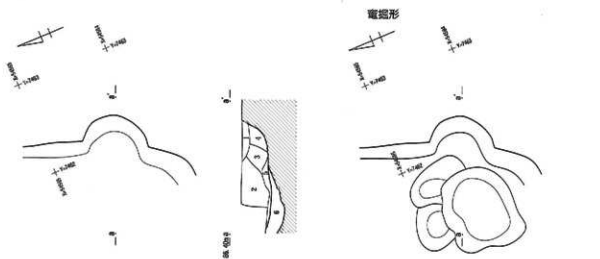
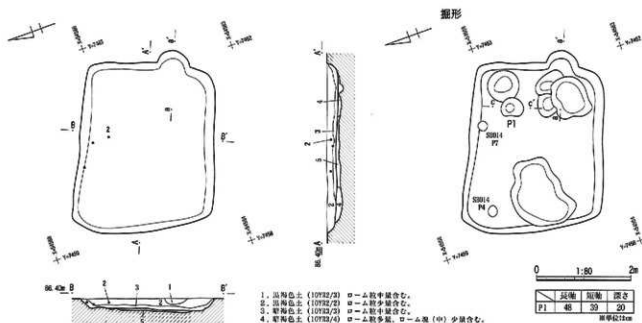
図 73 14号竪穴住居跡 (SI014) 及び出土遺物

#### 出土遺物 (図 74, 図版 45)

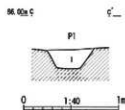
遺物出土量は極めて少なく、土師器環・甕、須恵器環・甕が出土したが、土師器甕の胴部破片が主体であった。

1は須恵器高台杯の底部破片である。2は土師器甕である。口縁部は屈曲し、口唇部は上方に摘み出される。胴部下半は縦位のヘラナデが施される。床面より浮いた状態で北壁近くから出土した。

このほか、図示できなかったが、模倣環やロクロ整形の土師器環小片が出土しているが、前者は混入であろう。



1. 黒褐色土 (10732/3) ローム状中層、ローム塊(小)少量含む。



1. 黒褐色土 (10732/3) ローム状中層、ローム塊(小)少量含む。

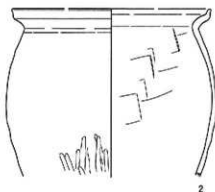


図74 15号竪穴住居跡(SI1015)及び出土遺物

## 第3節 掘立柱建物跡

## 4号掘立柱建物跡 (SB004) (図75, 図版16)

H4・5, I4・5グリッドで検出した。S1005・SX001と重複し、新旧関係はS1005・SX001→SB004。視乱により、建物跡南側の柱穴の一部を壊されていた。

## 形態と規模

主軸方位をN10Eとする3間×2間の南北棟で、桁行5.8m、梁行4.4mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が1.60~1.85mとやや不揃いだが、梁行は1.9m前後とほぼ等間隔であった。

柱掘形は円形で、径は40~50cmが中心であった。深さは22~70cmと不揃いだが、四隅の柱穴が他の柱穴に比べ深い傾向が見受けられた。P8で確認できた柱痕から、柱径は20cm弱と推測される。また、P5・6で柱当り痕を確認した。

## 出土遺物

P5・6から土師器環・甕の小片が計6点出土した。内面を炭素吸着により黒色処理された非クロロの土師器環が出土しているが、小片のため図示できなかった。

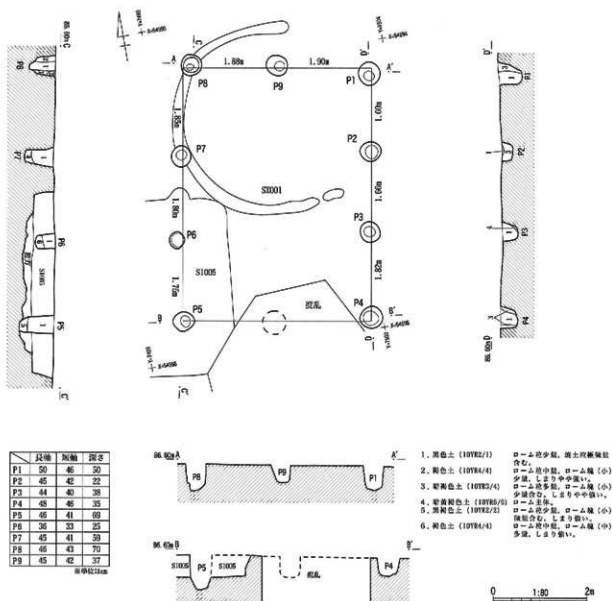


図75 4号掘立柱建物跡 (SB004)

## 5号掘立柱建物跡 (SB005) (図76, 図版16)

G3・H3グリッドで検出した。SB007・SB008・SB009・SB011と重複し、新旧関係はP2及びP5での切り合いから、SB008・SB009→SB005。SB007・SB011との新旧関係は、柱穴同士の切り合いがなかったため不明である。桁の北側は調査区外へと延びていた。

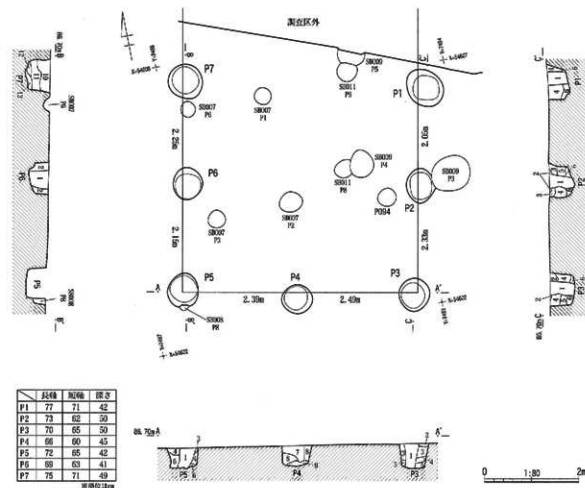
## 形態と規模

主軸方位をN11Eとする桁行3間以上、梁行2間の南北棟で、桁行は検出できた長さが5.1m、梁行5.5mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が2.1～2.3m、梁行が2.4～2.5mとやや不揃いであった。

柱断面は円形で、径は60～70cm、深さは40～50cmが中心であった。また、P1～3・5・6で確認できた柱痕から、柱径は20cm前後と推測される。柱痕が認められなかったP4・7は柱の抜き取りが行われた可能性がある。

## 出土遺物

P3から須恵器杯の口縁部と思われる小片が1点、P4から土師器杯・甕・瓶の小片が計14点出土した。この中にはロクロ整形の土師器杯と思われる小片も確認できた。このほか、内彎口縁部と推測される土師器杯も認められたが、これは混入であろう。何れも小片のため図示できなかった。



1. 当色土 (7.3781.7/1) □-△ 最少埋合凸。
2. 当色土 (7.3782/1) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 及び変化数層埋合凸。
3. 当色土 (10782/2) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 少埋合凸。
4. 当色土 (10782/4) □-△ 最少埋。□-△ 施 (中) 中埋合凸。
5. 当色土 (10784/6) □-△ 最少埋。黒色土埋合凸。
6. 当色土 (10784/4) □-△ 最少埋。□-△ 施 (中) 少埋合凸。
7. 当色土 (10782/2) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 中埋合凸。

8. 当色土 (10782/2) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 少埋合凸。
9. 当色土 (10784/4) □-△ 最少埋。□-△ 施 (中) 少埋合凸。
10. 当色土 (7.3781.7/1) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 及び変化数層埋合凸。
11. 当色土 (10782/2) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 少埋合凸。
12. 当色土 (10782/1) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 少埋合凸。
13. 当色土 (10782/2) □-△ 最少埋。□-△ 施 (小) 中埋合凸。

図76 5号掘立柱建物跡 (SB005)



## 6号掘立柱建物跡 (SB006) (図77, 図版16)

H3・4, I3・4グリッドで検出した。SK015と重複し, 新旧関係はSK015→SB006。

## 形態と規模

主軸方位をN78Wとする2間×2間の東西棟で, 桁行4.9m, 梁行4.1mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が北側で2.2mと等間隔だが, 南側は2.0m及び2.6mと不揃いであった。梁行もやや不揃いで, 1.6~2.0mであった。

柱断面は円形で, 径は50~60cmが中心であった。深さは30cm前後と60cm前後の2種があり, 四隅の柱穴が他の柱穴に比べ深い傾向が見受けられた。P1・3~5で確認できた柱痕から, 柱径は25cm前後と推測される。また, 底面に段を有するものが見られることから, 柱の据え替えが行われたと考えられる。

## 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

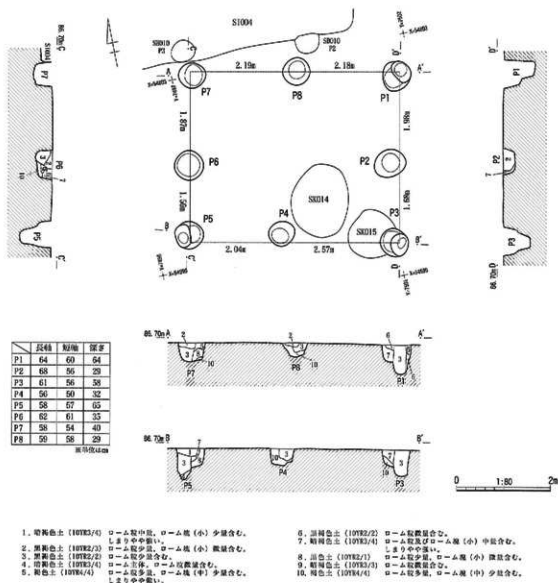


図77 6号掘立柱建物跡 (SB006)

## 8号掘立柱建物跡 (SB008) (図78, 図版16)

G3グリッドで検出した。SB005と重複し、新旧関係はP8の切り合いからSB008→SB005。

## 形態と規模

平面形態はほぼ正方形だが、東西にやや長いため、東西棟と判断した。主軸方位をN86Wとする2間×2間の総柱建物跡で、桁行は3.2m、梁行は2.9mであった。柱間寸法はP1-P8間が1.5mとやや広いが、他は1.3~1.4mとほぼ等間隔であった。

柱断面は円形を基本とするが、P1~3は建物跡の中心に向かって長い楕円形であった。径は楕円形のものを除くと25cm前後で揃っているが、深さは20~50cmと不揃いであった。P1・5で確認できた柱痕から、柱径は10cm強と推測される。柱穴が細く、平面積も小規模なことから、仮設的な建物跡であった可能性がある。

## 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

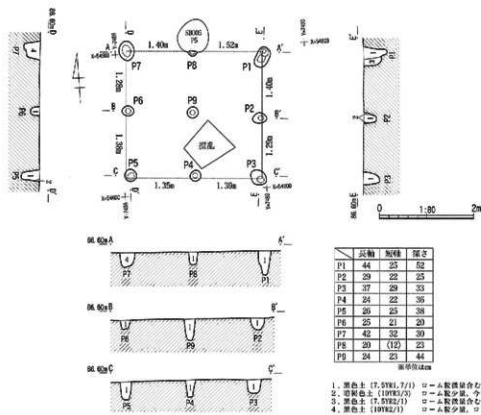


図78 8号掘立柱建物跡 (SB008)

## 9号掘立柱建物跡 (SB009) (図79, 図版16)

H3グリッドで検出した。S1004・SB005・SB011と重複し、新旧関係はS1004→SB009→SB005・SB011。建物跡北側は調査区外へと延びており、検出できたのは建物跡南辺部のみであった。

## 形態と規模

主軸方位をN80Wとする東西棟の側柱建物跡と推測した。P1より東側に柱穴を確認できなかったため、桁行は4間(7.5m)と考えられるが、梁行は不明である。北側に1間もしくは2間延びる可能性が高い。柱間寸法は桁行が東側のP1-P2間のみ広く3.1mを測ったが、他は2.0mであった。梁行は2.3m。

柱断面は円形を基本とし、径はP3のみ80cmを超えるが他は50cm前後が中心で、深さは22~70cmと不揃いであった。P2~4で確認できた柱痕から、柱径は15cm前後と推測される。

## 出土遺物 (図79, 図版46)

1は、凝灰岩製の砥石である。仕上げ砥であろう。P1から出土した。このほか図示できなかったが、P5からは「コ」の字状の口縁部を持つ武蔵型甕の小片が出土した。

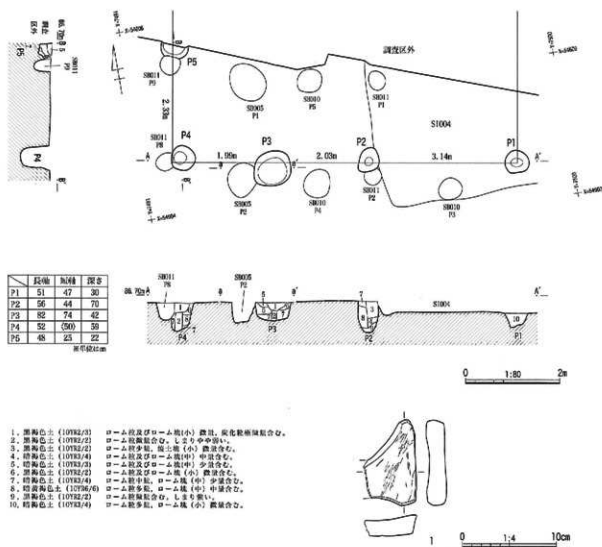


図79 9号掘立柱建物跡 (SB009) 及び出土遺物

## 10号掘立柱建物跡 (SB010) (図80, 図版16・17)

H3・I3グリッドで検出した。S1004・SB009・SB011と重複し、S1004→SB010。SB009・SB011との新旧関係は不明。建物跡北側は調査区外へと延びており、検出できたのは建物跡南辺部のみであった。

## 形態と規模

主軸方位をN 82 Wとする東西棟の側柱建物跡と推測した。P1より東側に柱穴を確認できなかったため、桁行は4間(8.1m)と考えられるが、梁行は不明である。北側へさらに1間もしくは2間延びる可能性が高い。柱間寸法は桁行が2.6~2.8mとやや不揃いで、梁行は2.2mであった。

柱掘形は円形で、径は50~60cmを中心とするが、深さは23~50cmと不揃いであった。柱穴内には焼土粒及び炭化粒を微量に含むきめ細かい黒色土が堆積しており、柱痕は確認できなかった。柱は抜き取られたと考えられる。

## 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

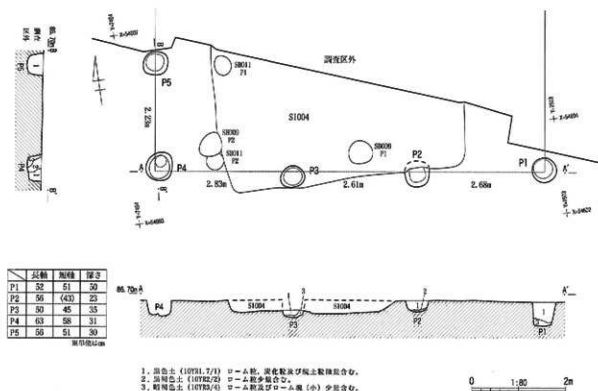


図80 10号掘立柱建物跡 (SB010)

11号掘立柱建物跡 (SB011) (図81, 図版16・17)

H3・4グリッドで検出した。S1004・SB005・SB009・SB010と重複するが、切り合いにより新旧関係が明確なのはS1004→SB009→SB011。SB005はSB009より新しいが、SB011との新旧関係は不明。同じく、SB010との新旧関係も柱穴の重複がないため、不明であった。北側棟柱のP10は一部が調査区外に延びていた。

形態と規模

主軸方位をN14Eとする3間×2間の南北棟で、桁行7.8m (26尺)、梁行4.8m (16尺)の側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が中央部で3.5m前後と広く、北側及び南側で1.8～2.2mと狭かった。梁行は北では2.2m前後とほぼ等間隔だが、南では等間隔とならず西側が狭くなっていた。また、南西隅の隅柱が内側にずれ込むため、桁行は西側、梁行は南側で柱筋の通りが悪かった。

柱掘形はほぼ円形で、径は40cm前後、深さは30～40cmとほぼ揃っていた。柱痕は確認できず、柱穴内には焼土粒及び炭化粒を微量に含むきめ細かい黒色土が堆積していた。

出土遺物

P3から土師器甕の胴部片が1点出土したが、小片のため図示できなかった。

12号掘立柱建物跡 (SB012) (図82, 図版17)

G4グリッドで検出した。S1008と重複し、S1008→SB012。西辺部北側はS1008覆土との差異を認識できなかったため、検出できなかった。

形態と規模

主軸方位をN1Eとする2間×1間の南北棟で、桁行2.9m、梁行2.3mの側柱建物跡であった。柱間寸法は桁行が北から1.4m、1.2mと南側でやや狭くなっていた。梁行は2.0mで、桁方向の柱間よりも広がった。

柱掘形は円形から楕円形を基調とし、径は20～30cmと細く、深さは37～74cmと不揃いであった。柱痕

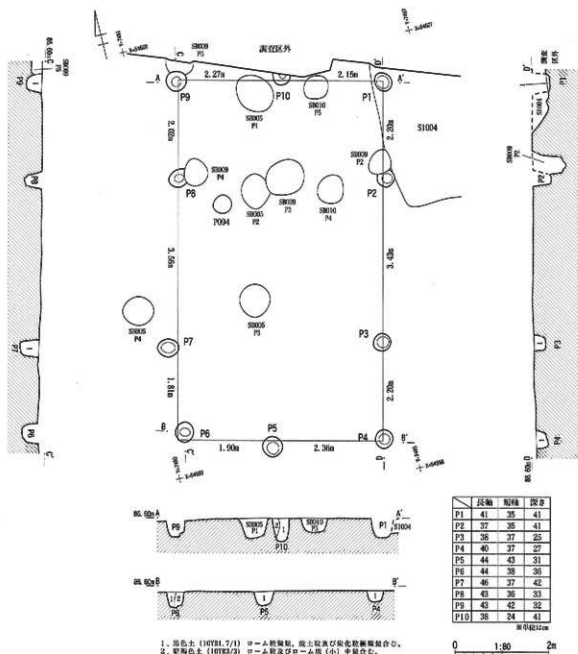


図81 11号掘立柱建物跡 (SB011)

は確認できず、柱穴内にはローム塊を含まないきめ細かな黒色土が堆積していた。柱穴が細く、平面積も小規模なことから、仮設的な建物跡であったと考えられる。

#### 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

#### 13号掘立柱建物跡 (SB013) (図82, 図版17)

D3・4グリッドで検出した。SI011A・B及びSK023と重複し、SK023よりは新しいがSI011との新旧関係は不明。しかし、SI011Aの床面が確認面から8cmと浅いことを考慮すると、その床面でSB013の柱穴を確認できなかったことから、SB013→SI011となる可能性がある。

#### 形態と規模

主軸方位をN31Eとする2間×1間の南北棟で、桁行3.4m、梁行3.4mの側柱建物跡であった。柱間

寸法は桁行が北から1.5m、1.6mであるのに対し、梁行はほぼ2倍の3.1mで桁方向の柱間よりも広がった。

柱掘形は円形を基調とし、径はほぼ30～40cmと揃うが、深さは7～25cmと不揃いであった。柱穴内には黒色土が堆積するが、P2以外は覆土中に焼土粒をわずかに含む。また、P1・3・4で柱当たり痕を確認したが、調査中に図化したため図示できなかった。平面積が狭いことから、SB012と同様に仮設的な建物跡であった可能性がある。

#### 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

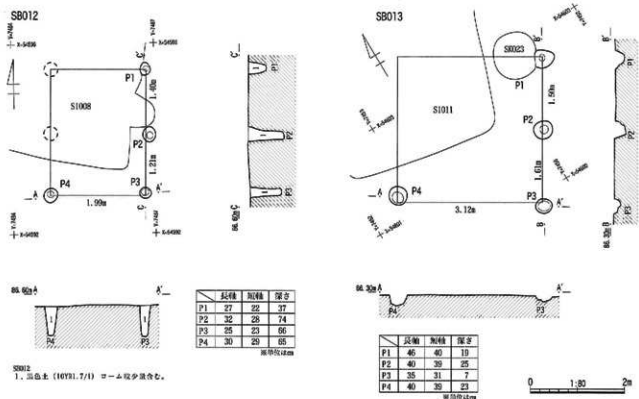


図82 12号・13号掘立柱建物跡 (SB012・013)

#### 14号掘立柱建物跡 (SB014) (図83, 図版17)

D5・E5グリッドで検出した。S1015と重複するが、新旧関係は不明。南辺部西側はS1015覆土との差異を認識できなかったため、検出できなかった。

#### 形態と規模

主軸方位をN79Wとする2間×2間の東西棟で、桁行3.9m、梁行3.7mの総柱建物跡であった。柱間寸法は1.6～1.9mとやや不揃いであった。東辺の柱筋は揃っているが、北東の隅柱(P1)がやや南にずれ込むため、北辺で柱筋の通りが悪かった。

柱掘形は円形を基調とし、径は20cm前後と細かった。深さも40cm前後とほぼ揃っていたが、P3のみ17cmと浅かった。柱痕は確認できず、柱穴内にはローム塊を含まないきめ細かな黒色土が堆積していた。

#### 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

#### 18号掘立柱建物跡 (SB018) (図83, 図版18)

G7グリッドで検出した。他の遺構とは重複していなかった。

#### 形態と規模

主軸方位をN8Eとする1間×1間の南北棟で、桁行2.4m、梁行2.1mの側柱建物跡であった。柱間寸

法は桁行が2.2 m、梁行が1.9 mであった。

柱掘形は円形で、径は21～26 cmと細く、深さも8～17 cmと浅かった。柱穴内にはローム塊を含まないきめ細かな黒色土が堆積していた。P2～4で確認することができた柱当たり痕から、柱径は10～15 cmと推測される。柱穴の細さや平面積の狭さからは仮設的な建物跡の可能性が示唆されるが、柱当たり痕が明瞭なことから疑問も残る。

#### 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

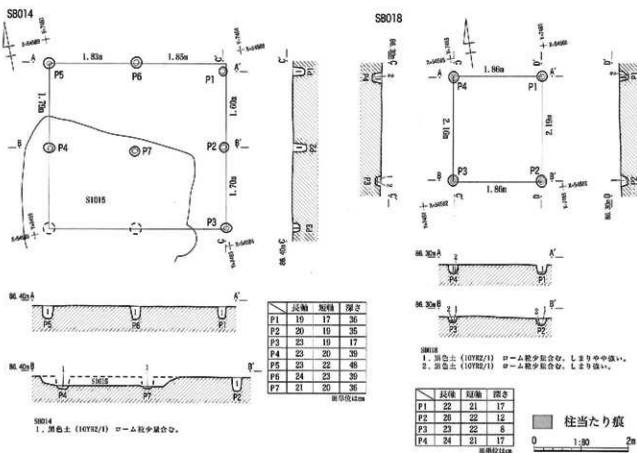


図83 14号・18号掘立柱建物跡 (SB014・018)

#### 第4節 円形有段遺構

##### 17号土坑 (SK017) (図84, 図版20・21)

F3・4グリッドで検出した。他の遺構と重複はしていなかったが、南西側の一部を掘乱により壊されていた。底面中央に小穴が掘り込まれるなどの形態的な特徴から、「円形有段遺構」や「井戸状遺構」などと呼称される遺構と考えられ、その性格は水室とする説が有力である (中山1996, 1999, 2001a, 2001b)。

#### 形態と規模

平面形態はほぼ円形を呈し、直径は2.72～2.85 mで、円形有段遺構としては小型である。深さは遺構確認面から小穴底面までが1.82 mで、土坑底面までは1.42 mであった。土坑底面で検出した小穴は隅丸の長方形を呈し、長さ83 cm、幅33 cm、深さ40 cmを測った。また、この小穴の長軸に直交する位置の北東壁上部で、入口施設に伴うと考えられる小穴 (P1) を検出した。このP1を入口施設に伴う小穴とした場合の主軸方位は、N46 Eであった。

1層はしまりが強く、人為的な埋め戻し土であった。堆積土中には埋め戻し時に廃棄されたと考えられる多量の円礫が含まれていた。これに対して、覆土下層に堆積した7層はローム塊をほとんど含まない黒色土

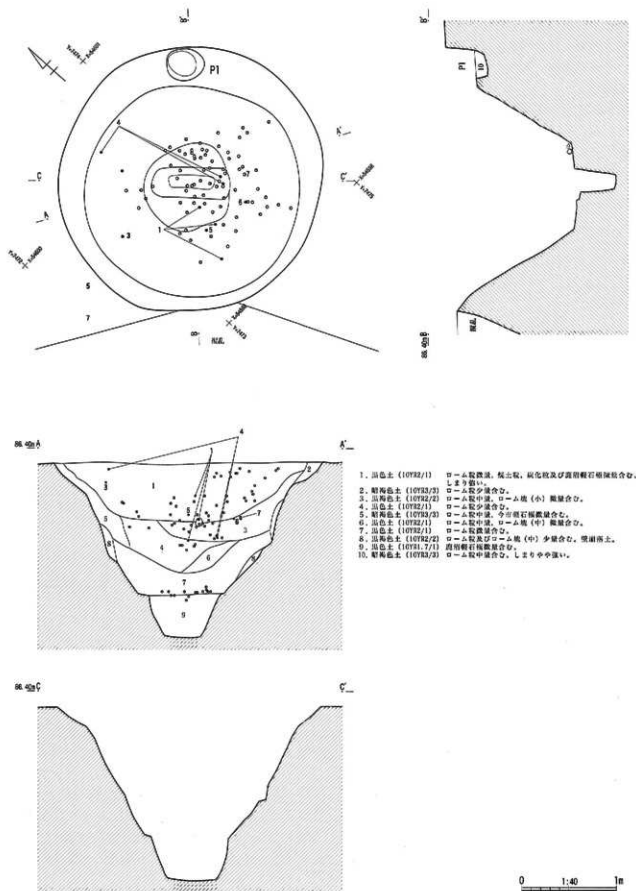


図84 17号土坑 (SK017)



であったことから、自然堆積によるものと考えられる。焼土層や灰層は確認できなかった。

出土遺物(図85, 図版46)

土器の出土量は少なく、土師器環・甕、須恵器環・甕などが出土したが、完形品は存在せず小片が主体であった。図示した遺物は7点である。

1は土師器環である。内面は丁寧にヘラミガキが施され、炭素吸着による黒色処理が行われる。底部切り離しは糸切りによるものと思われるが、痕跡が不明瞭で静止糸切りか、回転糸切りか明確ではない。

2・3は須恵器高台付環である。4は須恵器碗で、底部に線刻が施される。底部内面は平滑になっており、硯などに転用された可能性がある。また、底部内面には漆と思われる有機物の塊が付着していた。5は須恵器甕の小片である。

6は平瓦の破片であり、凹面に模骨痕が認められることから桶巻き造りによるものである。小札幌は2.0～2.2cmを測る。凸面には格子叩きが施され、運搬時に付いたと思われる押圧痕が残る。格子叩き目と桶巻き造りは、小山市の乙女不動原瓦窯産の瓦と類似する特徴である。

7は籬物石である。両端に顕著な敲打痕が認められることから、敲石として転用されたと考えられる。このほか、総重量42.5kg、平均重量505.5g、計84点の円礫が出土した。被熱したものも少なからず認められた。

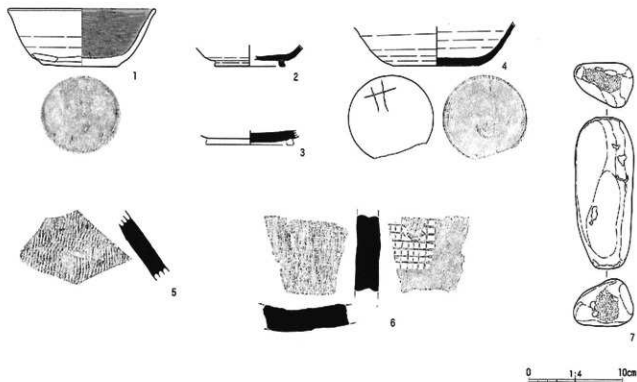


図85 17号土坑(SK017)出土遺物

## 第5節 土坑

古代の土坑は3基検出した。覆土内から遺物が出土したものを抽出したため、時期不明とした土坑の中にもこの時期のものが含まれている可能性がある。

7号土坑(SK007)(図86, 図版19)

H5グリッドで検出した。平面形態はほぼ円形で、長軸1.36m、短軸1.15m、深さ20cmを測り、主軸方位はN68Eであった。覆土はローム塊を含まない黒色土の単一層で、自然埋没と考えられる。内面に丁寧にヘラミガキが施され、炭素吸着により黒色処理される土師器環や口縁部がコの字状を呈する武蔵型甕の小片が出土したが、図示はできなかった。

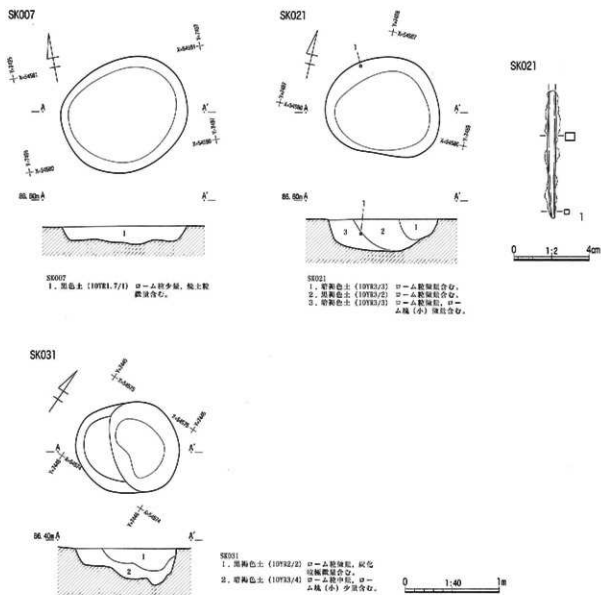


図86 7号・21号・31号土坑 (SK007・021・031) 及び出土遺物

21号土坑 (SK021) (図86, 図版21・46)

G5グリッドで検出した。平面形態は不整形の円形を呈し, 長軸1.23m, 短軸1.08m, 深さ29cmを測った。主軸方位はN75E。

覆土にはローム塊をほとんど含まないことから, 自然堆積と考えられる。

1は鉄釘と考えられる。覆土中層で出土した。このほか, ロクロ整形の須恵器坏小片が出土したが図示できなかった。

31号土坑 (SK031) (図86, 図版22)

C6グリッドで検出した。平面形態はほぼ円形を呈し, 直径は1.09~0.96m, 深さは39cmであった。覆土は自然堆積と考えられる。出土遺物は少なく, 土師器甕の胴部と底部が1点ずつ出土した。このうち, 底部破片はSI016出土の土師器甕底部と接合したが, 小片のため実測はできなかった。

## 第6節 井戸跡

## 1号井戸 (SE001) (図87, 図版24)

1.5・6グリッドで検出した。他の遺構との重複は認められなかった。

## 形態と規模

平面形態は楕円形で、開口部は長軸2.15m、短軸1.76mだが、本来の直径は90cm弱と推測される。両側に張り出す浅い凹みは、水汲みの際の足場と考えられる。この足場を含めた全体の長さは2.41mで、主軸方位はN11E。

確認面から2.2mの深さまで手作業による精査を行ったが、それ以上の作業は危険だったため、上層遺構の調査終了後に重機による断ち割り調査を実施し底面まで完掘した。底面は湧水層のXIV層を掘り抜いて、確認面からの深さは3.74mを測った。井壁の崩落が著しく、凹凸が目立った。覆土は自然堆積と考えられ、上層には多くの鹿沼軽石を含むことから、井戸掘削時の排土が周囲に盛り土されていた可能性がある。

## 出土遺物 (図88, 図版47)

遺物出土量は少なく、土師器甕、須恵器杯・甕などが出土したが、全て小破片であった。

1は土師器甕である。口縁部はくの字状に外反し、口唇部は上方に縮み出される。このほか、図示しなかったが、1・2層の層境から大きめの礫が出土した。

## 2号井戸 (SE002) (図87, 図版24・25)

E2グリッドで検出した。SE003とは2～3mの距離で隣接する。S1010と重複し、北側の一部を壊されていた。新旧関係はSE002→S1010。

## 形態と規模

平面形態は円形で、開口部の直径は1.47mだが、最も狭いVI～VII層付近くでは52cmであった。1.5～1.6mの深さまで手作業による精査を行ったが、それ以上の作業は危険なため、上層遺構の調査終了後に重機による断ち割り調査を実施し、底面まで完掘した。底面は湧水層のXV層を掘り抜き、確認面からの深さは3.95mを測った。井壁はVII層以下での崩落が著しく、凹凸が目立った。SE001と同様に覆土上層に鹿沼軽石を含むことから、周囲に盛り土されていた井戸掘削時の排土が流入したと考えられる。

## 出土遺物 (図88, 図版47)

土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土したが、坏類は須恵器が主体で、土師器はほとんど出土しなかった。また、須恵器杯は墨書されたものが3点出土した。

1・3は須恵器杯、2・4は須恵器高台付杯である。2は底部全面が回転ヘラケズリされ切り離しが不明であるが、1・3・4は回転糸切り後底部周縁に回転ヘラケズリが施される。また、1～3は底部外面に墨書されていた。墨書された文字は、1が「四」、2が則天文字の「天」、3が「佐米」と推測される。1は覆土中層から、2～4は上層から出土した。5は土師器甕の底部破片である。胎土等の特徴から、常総型甕と推測される。底部には木葉痕が認められる。6・7は須恵器甕の胴部破片である。5～7は1の須恵器杯と同じく覆土中層から出土した。

このほか、図示しなかったが、総重量39.7kg、平均重量446.5g、計89点の円礫が出土し、被熱したものが少量だが認められた。これらの多量の礫は、大半が下層からの出土であり、井戸の廃絶に伴い投棄された可能性が高い。

## 3号井戸 (SE003) (図87, 図版24・25)

E2グリッドで検出した。SE002とは2～3mの距離で隣接する。重複する遺構はなかった。

## 形態と規模

平面形態は円形で、開口部の直径は66cmだが、周囲に浅い掘り込みが広がっていた。水汲み用の足場もしくは井戸端に伴う掘り込みであろうか。この掘り込みは直径1.75～1.86m、深さ25cmを測った。

確認面から1.5～1.6mの深さまで手作業による精査を行ったが、それ以上の掘削は困難であったため、上層遺構の調査終了後に重機による断ち割り調査を実施し、底面まで完掘した。底面は湧水層のXIII層下部～XIV層を掘り抜き、確認面からの深さは3.82mを測った。井壁の崩落はSE001やSE002ほど顕著ではないことから、井戸側が存在した可能性があるが、調査時にその痕跡は認められなかった。

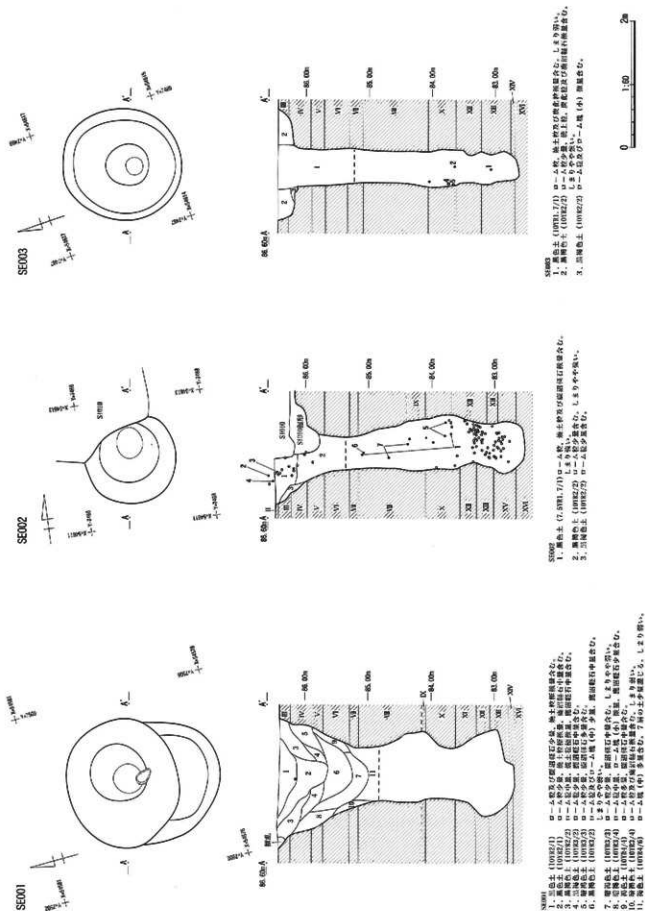


図 87 1号・2号・3号井戸 (SB001・002・003)

SB003  
 1. 黒色土 (10181/1) 中～少量、粘土質及び少量の砂質土、LとRあり。  
 2. 黒褐色土 (10182/2) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 3. 黒褐色土 (10182/3) 中～少量及び中～少量 (小) 層状土。

SB002  
 1. 黒色土 (10181/1) 中～少量、粘土質及び少量の砂質土。  
 2. 黒褐色土 (10182/2) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 3. 黒褐色土 (10182/3) 中～少量及び中～少量 (小) 層状土。

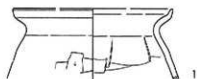
SB001  
 1. 黒色土 (10182/1) 中～少量及び少量の砂質土、粘土質及び少量の砂質土。  
 2. 黒褐色土 (10182/2) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 3. 黒褐色土 (10182/3) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 4. 黒褐色土 (10182/4) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 5. 黒褐色土 (10182/5) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 6. 黒褐色土 (10182/6) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 7. 黒褐色土 (10182/7) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 8. 黒褐色土 (10182/8) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 9. 黒褐色土 (10182/9) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 10. 黒褐色土 (10182/10) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。  
 11. 黒褐色土 (10182/11) 中～少量、粘土質、砂質土及び少量の砂質土。

出土遺物 (図88, 図版47・48)

土師器環・甕, 須恵器環・蓋・甕などが出土したが, 小片が主体であった。

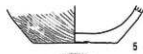
1は土師器環で, 内面は丁寧なヘラミガキが施される。2は土師器甕の口縁部で, 形態や調整等から武蔵型甕と考えられる。3は須恵器長頸壺の口縁部である。4・5は刀子の茎であろう。3の出土位置は不明だが, 他は覆土下層から出土した。

SE001



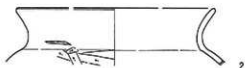
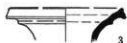
0 1:4 10cm

SE002



0 1:4 10cm

SE003



0 1:4 10cm



0 1:2 4cm

図88 1号・2号・3号井戸 (SE001・002・003) 出土遺物

第7節 溝跡

2号溝跡 (SD002) (図89, 図版25・26・48)

東側はH4～6グリッドにかけて、南側はE6～G6グリッドにかけて検出した。SB015, SB019と重複するが新旧関係は不明。溝は東側では南北に、南側では東西に伸び、G6グリッド及びE6グリッドで屈曲していた。南側部分では、溝の底面が深く掘り込まれる場所があった。全長は53.7mを測り、幅は28～48cm、深さは浅いところで5～10cm、深いところで15～24cmであった。また、溝底面の標高は、東側に比べ南側で低かった。

出土遺物は少なく、土師器環・甕、須恵器環・甕が出土したが全て小片であった。出土した土師器環は模

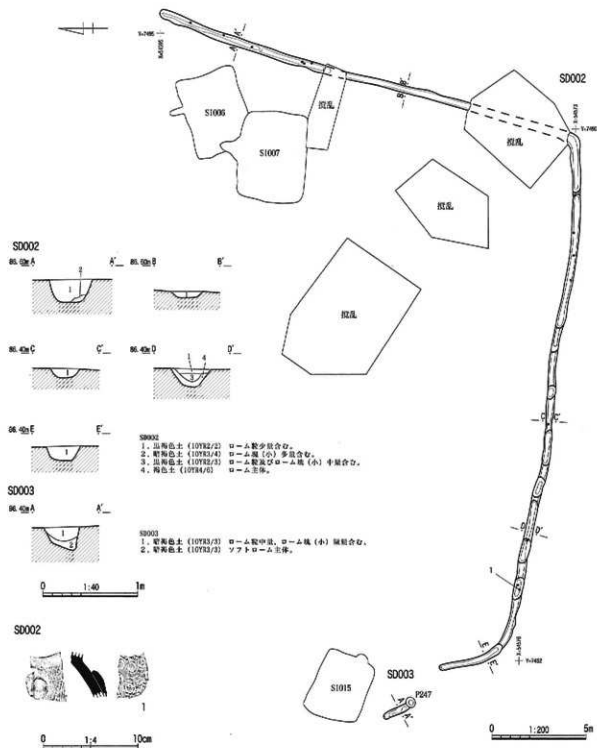


図89 2号・3号溝跡 (SD002・003) 及び出土遺物

做坏が主体だが、ロクロ整形された須恵器坏も出土した。図示した遺物は1点である。1は瓶頸と考えられ、外面には扁平な粘土が貼付される。SI006の覆土中から同一個体の小片が出土している。

3号溝跡 (SD003) (図 89, 図版 26)

D 5 グリッドで検出した。P 247 と重複するが、新旧関係は不明。長さは 1.4 m、幅は 32 ～ 36 cm、深さは 26 cm であった。SD002 とは位置的にやがずれるが、一連の遺構となる可能性がある。遺物は出土しなかった。

## 第8節 小穴

奈良・平安時代に属すると考えられる小穴は、P 100, 244, 280 の3口であった。ただし、これらは乏しい出土遺物からの推定であり、遺物の出土しなかった小穴の中にも本時代に属するものがあると考えられる。図示した P 244 以外の小穴の詳細は、表 3 小穴一覧表を参照のこと。

244 号小穴 (P244) (図 90, 図版 26・48)

E 6 グリッドで検出した。SB015 の東側、SB019 の内側に位置する。41 × 26 cm の楕円形を呈し、深さは 18 cm を測った。主軸方位は N 31 E。覆土はローム粒を微量に含む黒褐色土が堆積していた。

土師器甕 1 点、須恵器台付坏 2 点が出土し、2 点を図示した。1・2 は須恵器台付坏で、覆土上層から正位の状態でご重なって出土した。

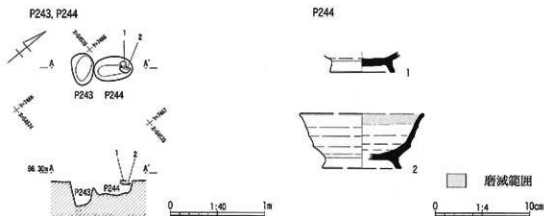


図 90 243 号・244 号小穴 (P243・244) 及び出土遺物

## 第9節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (図 91, 図版 48)

奈良・平安時代の遺構外出土遺物は、2 点を図示した。1 は須恵器坏である。体部外面に墨書(「見」?) が認められた。底部切り離しは回転ヘラ切りである。F 6 グリッド、SD002 のセクションポイント C 付近から、表土除去中に出土した。遺構外出土遺物として扱ったが、SD002 に帰属する可能性も否定できない。2 は灰釉陶器碗である。平成 20 年度の土砂採取に伴って出土した。内面には灰釉が刷毛塗りて施軸され、トチンの痕跡が認められる。猿投窯産の黒笹 14 号窯式段階のものであろう。

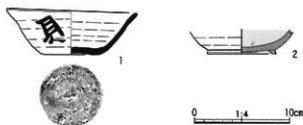


図 91 遺構外出土遺物

## 第7章 時期不明の遺構

## 第1節 概要

調査により検出した遺構のうち、出土遺物が皆無で、他遺構との重複等からも時期の特定ができなかった柵列1列、土坑26基、溝跡1条、小穴171口を本章で扱った。

## 第2節 柵列

## 1号柵列 (SA001) (図92, 図版18)

H6グリッドで検出した。他の遺構とは重複していなかった。

## 形態と規模

主軸方位をN76Eとする柵列もしくは塀と考えられ、4本1列の柱穴列が南北で対になって並んでいた。全長は北から1列目が7.3m、2列目が7.2mであった。柱間寸法は1列目が2.0~2.5m、2列目が2.2~2.4mで、両者とも中央部の間隔がやや狭かった。1列目と2列目の間隔は西端部で0.9m、東端部で0.6mであった。

柱掘形は円形で、径は35cm前後が中心となるが、深さは13~31cmとやや不揃いであった。P4・6で確認できた柱痕から、柱径は15cm前後と推測される。

## 出土遺物

柱穴覆土内から遺物は出土しなかった。

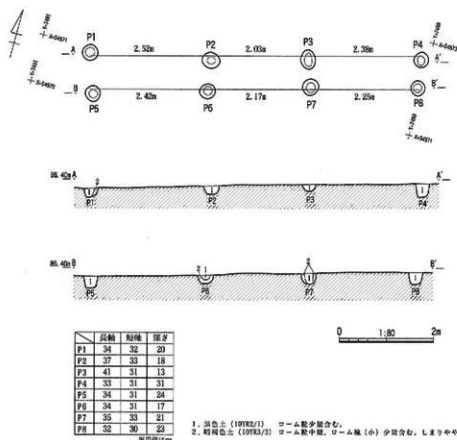


図92 1号柵列 (SA001)



## 第3節 土坑

時期不明の土坑は26基であった。しかし、これらの土坑のうち、SK002・SK008・SK010・SK012・SK015・SK019・SK020・SK022・SK025・SK026・SK033・SK040の12基は、堆積する覆土がⅡ層を主体とするため、縄紋時代のものとなる可能性がある。同様に、SK004・SK006・SK011・SK013・SK038・SK041の6基は住居跡覆土と似た黒色土が堆積するため、古墳時代以降のものとなるかもしれない。

## 2号土坑 (SK002) (図93, 図版19)

南側調査区D8グリッドで検出した。平面形態は0.75×0.65mの不整な円形を呈し、確認面から底面までの深さは19cmであった。主軸方位はN29W。壁は傾斜して立ち上がり、底面には凹凸があった。覆土は自然堆積で、ローム粒及び今市軽石粒をわずかに含む暗褐色土の単一層であった。遺物は出土しなかった。

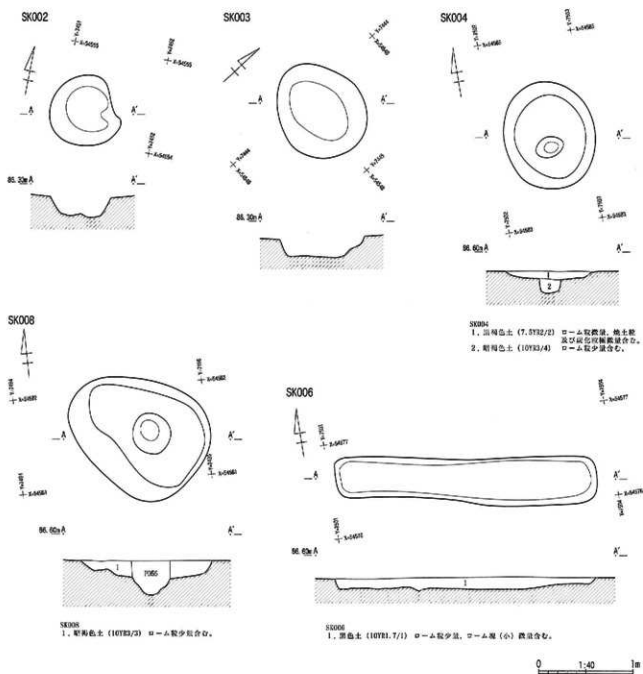


図93 2号～4号・6号・8号土坑 (SK002～004・006・008)

## 3号土坑 (SK003) (図93, 図版19)

南側調査区C9グリッドで検出した。平面形態は1.07×0.92mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは26cmであった。主軸方位はN89W。壁は傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。覆土はローム粒及びローム塊を少量含む暗褐色土の単一層であった。遺物は出土しなかった。

## 4号土坑 (SK004) (図93, 図版19)

I5グリッドで検出した。平面形態は1.44×0.97mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは5cmと浅かった。主軸方位はN10W。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦だったが、小穴を1口検出した。遺物は出土しなかった。

## 6号土坑 (SK006) (図93, 図版19)

I6グリッドで検出した。平面形態は2.77×0.52mの長方形を呈し、確認面から底面までの深さは14cmであった。主軸方位はN81W。壁は傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 8号土坑 (SK008) (図93, 図版19)

H5グリッドで検出した。P056と重複し、新旧関係はSK008→P056。平面形態は1.51×1.21mの不整な楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは13cmであった。主軸方位はN51W。壁は傾斜して立ち上がり、底面には凹凸があった。覆土は自然堆積。遺物は出土しなかった。

## 9号土坑 (SK009) (図94, 図版19)

H6グリッドで検出した。西側が攪乱により壊されていた。平面形態は短軸1.51mの長方形を呈すると推測され、確認面から底面までの深さは19cmであった。主軸方位はN54W。壁は傾斜して立ち上がり、底面には凹凸があった。覆土は自然堆積。遺物は出土しなかった。

## 10号土坑 (SK010) (図94, 図版19)

H6グリッドで検出した。西側にはSA001が隣接していた。平面形態は0.94×0.87mのほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは22cmであった。壁は傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。覆土は自然堆積。遺物は出土しなかった。

## 11号土坑 (SK011) (図94, 図版20)

H6グリッドで検出した。P084と重複するが、新旧関係は不明。東側にはSA001が隣接していた。平面形態は0.76×0.74mのほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは12cmであった。壁は傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 12号土坑 (SK012) (図94, 図版20)

G7・H7グリッドで検出した。平面形態は0.98×0.78mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは21cmであった。主軸方位はN11E。覆土は自然堆積で、しまりが強くローム粒をわずかに含む暗褐色土の単一層であった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 13号土坑 (SK013) (図94, 図版20)

H7グリッドで検出した。平面形態は0.78×0.75mのほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは20cmであった。覆土は、ローム粒をわずかに含む黒褐色土の単一層であった。壁は傾斜して立ち上がり、底面には凹凸があった。遺物は出土しなかった。

## 14号土坑 (SK014) (図94, 図版20)

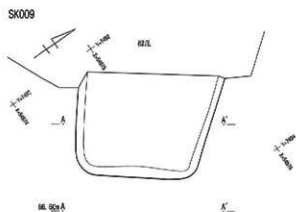
H3・4グリッドで検出した。平面形態は1.54×1.22mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは26cmであった。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。覆土は自然堆積。遺物は出土しなかった。

## 15号土坑 (SK015) (図94, 図版20)

I4グリッドで検出した。SB006-P3と重複し、新旧関係はSK015→SB006。平面形態は直径1.02mの不整な円形を呈し、確認面から底面までの深さは21cmであった。壁は丸味を帯びて緩やかに立ち上がり、底面では小穴を1口検出した。覆土は自然堆積。遺物は出土しなかった。

## 19号土坑 (SK019) (図95, 図版21)

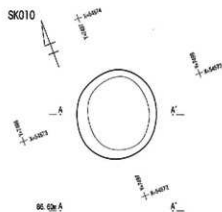
H4グリッドで検出した。平面形態は1.00×0.92mのほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは22cmであった。壁は傾斜して立ち上がり、底面は凹凸があった。遺物は出土しなかった。



SK009



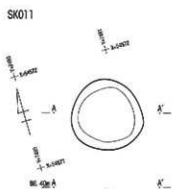
SK009  
1. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム状少量、ローム塊 (小) 散見、  
底土は細砂質粘土。



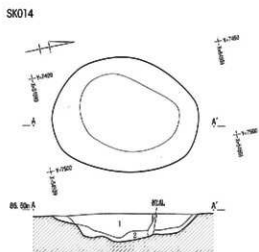
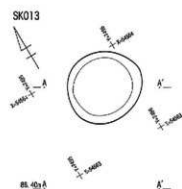
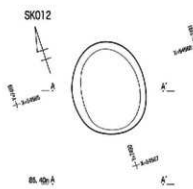
SK010



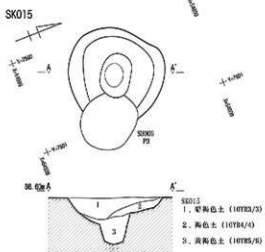
SK010  
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム状中量、今部は角礫層組合ひ、中少し多  
量なり。



SK011  
1. 暗赤褐色土 (5YR5/6) 底土較少量、粘土層  
(小) 中量混合。  
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム状少量混合。



SK014  
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム状及び底土は細砂質粘土。  
2. 暗褐色土 (10YR2/4) ローム状極少量混合。



SK015  
1. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム状散見、今部は石  
礫層混合。  
2. 褐色土 (10YR4/4) ローム状及びローム塊  
(小) 散見混合。  
3. 黄褐色土 (10YR5/6) ローム状散見。



図94 9号～15号土坑 (SK009～015)

## 20号土坑 (SK020) (図95, 図版21)

G4グリッドで検出した。北側にはS1008が隣接していた。平面形態は1.16×0.91mの不整な楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは22cmであった。主軸方位はN70E。壁は傾斜して立ち上がり、底面では小穴を1基検出した。この小穴の底面には明瞭な柱当たり痕が認められたため、本遺構は土坑とするよりも柱穴として扱うべきかもしれない。しかし、周囲には対となるような柱穴は確認できず、単独で柱が据えられていたことになる。遺物は出土しなかった。

## 22号土坑 (SK022) (図95, 図版21)

E2グリッドで検出した。北側は調査区外に延びていた。平面形態は短軸0.81mの楕円形を呈すると推測され、確認面から底面までの深さは22cmであった。壁は傾斜して立ち上がり、底面は段差があった。遺物は出土しなかった。

## 23号土坑 (SK023) (図95, 図版21)

D3グリッドで検出した。SB013-P1と重複し、新旧関係はSK023→SB013。平面形態は1.00×0.99mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは19cmであった。壁は傾斜して立ち上がり、底面は凹凸があった。遺物は出土しなかった。

## 24号土坑 (SK024) (図95, 図版22)

D4グリッドで検出した。北側にはSB013が、南側にはS1013が隣接していた。平面形態は0.84×0.73mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは11cmであった。主軸方位はN85W。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。遺物は出土しなかった。

## 25号土坑 (SK025) (図95, 図版22)

D4グリッドで検出した。南西側にはS1013が隣接していた。平面形態は1.06×0.90mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは17cmであった。主軸方位はN30W。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。遺物は出土しなかった。

## 26号土坑 (SK026) (図95, 図版22)

D3グリッドで検出した。S1012と重複し、新旧関係はSK026→S1012。平面形態は短軸1.19mの楕円形を呈すると推測され、確認面から底面までの深さは25cmであった。主軸方位はN71E。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。遺物は出土しなかった。

## 33号土坑 (SK033) (図96, 図版22)

D6グリッドで検出した。平面形態は1.64×1.08mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは22cmであった。主軸方位はN11E。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。底面では小穴を1口検出した。遺物は出土しなかった。

## 36号土坑 (SK036) (図96, 図版23)

D6グリッドで検出した。平面形態は直径0.78mの円形を呈し、確認面から底面までの深さは9cmと浅かった。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びていた。覆土2層がわずかに被熱しているように見えたが、明確ではない。遺物は出土しなかった。

## 37号土坑 (SK037) (図96, 図版23)

C6・D6グリッドで検出した。平面形態は0.93×0.69mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは6cmと浅かった。主軸方位はN67E。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であった。SK036と同様に覆土がわずかに被熱しているように見えたが、明確ではない。遺物は出土しなかった。

## 38号土坑 (SK038) (図96, 図版23)

E7グリッドで検出した。平面形態は0.98×0.92mの不整な方形を呈し、確認面から底面までの深さは18cmであった。主軸方位はN6W。壁は丸味を帯びて立ち上がり、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 39号土坑 (SK039) (図96, 図版23)

E6グリッドで検出した。平面形態は1.24×0.82mの長楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは24cmであった。主軸方位はN24W。壁は緩やかに立ち上がり、底面には段差があった。遺物は出土しなかった。

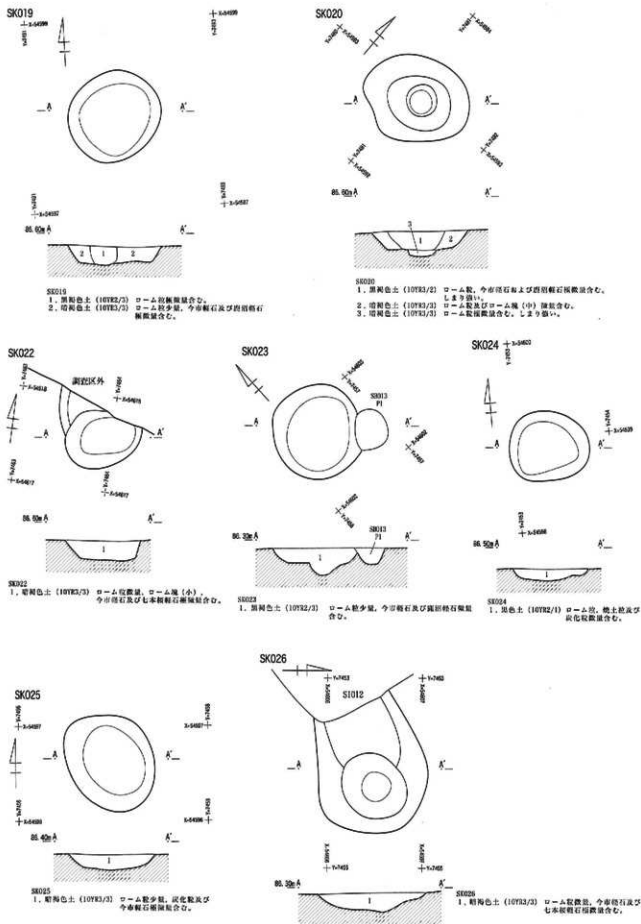


図95 19号・20号・22号～26号土坑 (SK019・020・022～026)

0 1:40 1m

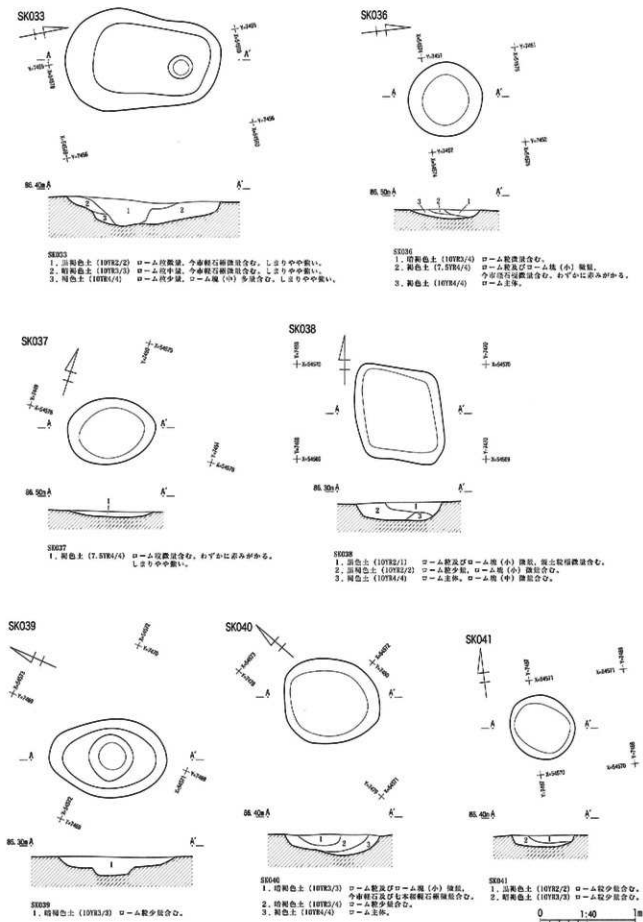


図96 33号・36号～41号土坑 (SK033・036～041)

## 40号土坑 (SK040) (図96, 図版23)

F6グリッドで検出した。平面形態は1.07×0.93mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは21cmであった。主軸方位はN14W。壁は丸味を帯びて立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 41号土坑 (SK041) (図96, 図版23)

G6グリッドで検出した。平面形態は0.71×0.64mのほぼ円形を呈し、確認面から底面までの深さは13cmであった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。遺物は出土しなかった。

## 第4節 溝跡

## 1号溝跡 (SD001) (図97, 図版25)

D5～7・C8グリッドで検出した。SI013・SB017・SX007と重複し、新旧関係はSD001が全ての遺構よりも新しかった。長さは35.7m、幅は12～23cm、深さは9～11cmを測った。溝は南北に延び、底面の標高に大きな差は認められなかった。出土遺物は円礫が1点のみであったが、図示はしていない。

## 第5節 小穴

小穴は全部で190口を検出した。これらの中には、出土遺物から時期が推定できたものもあったが、表3小穴一覧表に一括して掲載し、備考欄にその時期を付記した。小穴190口のうち、171口が時期不明であった。計測値等の詳細については、表3小穴一覧表を参照のこと。

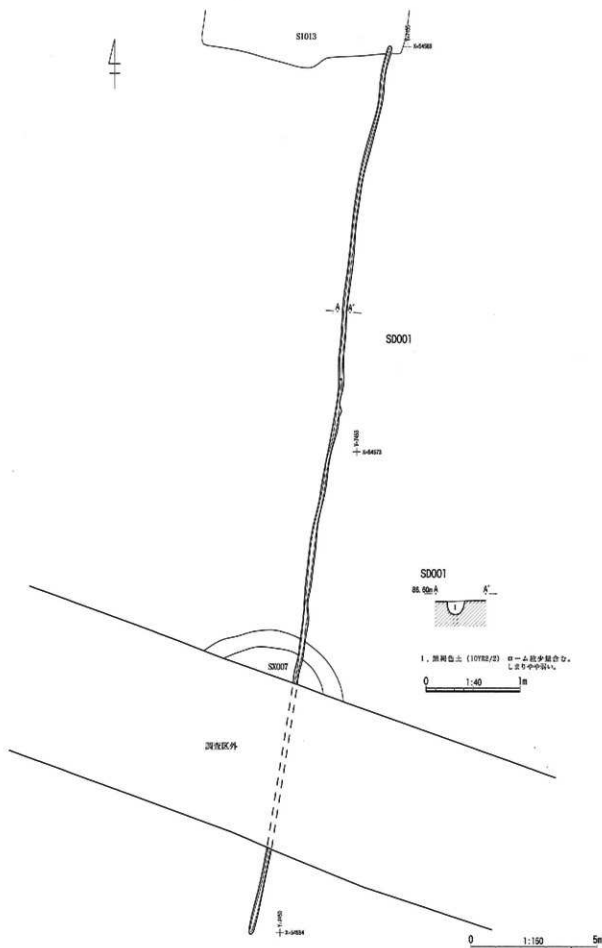


図97 1号溝跡 (SD001)



表2 出土遺物観察表

## 1号竪穴住居跡 (S1001)

※法線幅の( )は縦光沢、( )は横光沢を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調査の特徴	胎土・色調・産地	備考
1	土師器 杯	口径 131 器高 46	外面は口縁部横ナデ、体部上半は無調整。体部下半はヘラケズリか、内面は横ナデ。外面体部上半及び内面は漆仕上げによる黒色施地。	砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は明黄灰色。焼成はやや不良。	3/4 遺存 No. 45、一括
2	土師器 杯	口径 116 器高 32	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデだが、基部付近は厚縁により調整不明瞭。口縁部は内外面とも漆仕上げによる黒色施地。	胎土は緻密で、砂粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 No. 70
3	土師器 杯	口径 108 器高 33	外面は口縁部横ナデ。体部は厚縁により調整不明瞭だがヘラケズリが施される。内面は横ナデだが基部付近は潤滑により調整不明。口縁部は内外面とも黒色施地。	胎土は一部がマーブル状で、砂粒・赤色粒(大)を少量含む。色調は明黄灰色。焼成は良好。	口縁部 1/4 欠損 No. 34, 35
4	土師器 杯	口径 119 器高 34	外面は口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。内面は横ナデ、口縁部にナデ上げ痕あり。内面及び口縁部外面は漆仕上げによる黒色施地。	胎土は緻密で、砂粒を微量含む。色調は明黄灰色。焼成は良好。	3/5 遺存 一括、短形
5	土師器 杯	口径 (120) 器高 (28)	外面は口縁部横ナデ。体部は厚縁により不明瞭だがヘラケズリ。内面は横ナデでナデ上げ痕あり。口唇部内面に沈線が施される。	胎土は緻密で、細砂粒を微量含む。色調は明黄灰色。焼成は良好。	口縁部破片 カマド一括
6	土師器 杯	口径 138 器高 38	外面はヘラケズリ後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。全面に漆仕上げによる黒色施地。	胎土は緻密で、砂粒・赤色粒を含む。外面は黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 104, カマド一括
7	土師器 杯	口径 (160) 器高 43	外面は口縁部横ナデ。体部は不明瞭だがヘラケズリ後ヘラミガキ。内面は横ナデ後ヘラミガキ。	胎土は一部がマーブル状で、砂粒・白色粒を含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	1/4 遺存 No. 110
8	土師器 杯	口径 161 器高 39	外面は口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	細砂粒・赤色粒を少量含む。色調は褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 No. 28, 38, 44, カマド
9	土師器 杯	口径 160 器高 (30)	外面は潤滑により調整が不明瞭だが、口縁部からヘラケズリを施し、後ヘラミガキ。内面は縦方向のヘラミガキ後放射状のヘラミガキ。	砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部破片 一括
10	土師器 手取ね	口径 (104) 器高 48 底径 54	口縁部外面は横ナデ。体部外面はユビオサエ。底部はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭み肌面に残る。	胎土は一部がマーブル状で、砂粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 No. 00、一括
11	土師器 手取ね	口径 (112) 器高 51 底径 (58)	口縁部外面は横ナデ。体部外面はユビオサエ。底部外面はヘラケズリ。内面はヘラナデ。輪郭み肌面に残る。	砂粒・赤色粒を少量含む。外面はぶい暗褐色。内面はぶい暗褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 一括
12	土師器 手取ね	口径 (100) 器高 49 底径 (42)	口縁部は横ナデ。体部外面はユビオサエ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭み肌面に残る。	胎土は一部がマーブル状で、砂粒・赤色粒を少量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	1/3 遺存 一括
13	土師器 手取ね	口径 (102) 器高 (28)	口縁部は横ナデ。体部外面はユビオサエ。内面はヘラナデ後ナデ。	砂粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存 一括
14	土師器 手取ね	口径 (84) 器高 (42) 底径 (54)	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭み肌面に残る。	胎土は緻密で、細砂粒・白色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 (口縁部欠損) No. 33
15	土師器 手取ね	器高 (30) 底径 (41)	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭み肌面に残る。	砂粒・赤色粒を微量含む。外面は黄褐色。内面は明黄灰色。焼成は良好。	底部のみ 4/5 遺存 No. 02、一括
16	土師器 手取ね	器高 (42) 底径 (50)	体部へ底部外面はナデ。内面はナデ。	砂粒・白色粒を少量、赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	底部 No. 40、一括
17	土師器 手取ね	器高 (42) 底径 (58)	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。	砂粒・赤色粒を少量含む。底部は玉濁色だが、他は暗褐色。焼成は良好。	底部 No. 72
18	土師器 手取ね	器高 (23) 底径 32	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。	胎土は一部がマーブル状で、砂粒・赤色粒を微量含む。ぶい暗褐色。焼成は良好。	底部 No. 24
19	土師器 手取ね	器高 (23) 底径 38	体部外面はユビオサエ。底部はヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	底部 No. 76
20	土師器 手取ね	器高 (22) 底径 46	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。	砂粒を少量含む。色調は暗黄褐色。焼成は良好。	底部 一括
21	土師器 高杯	器高 (35) 底径 (64)	外部外面は腹位のヘラケズリ。杯部内面は放射状のヘラミガキ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒・細砂を微量含む。外面はぶい赤褐色。胴部内面は褐色。焼成は良好。	基部破片 No. 109
22	土師器 手取ね	口径 92 器高 51 底径 (76)	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ。	砂粒・白色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 29、一括
23	土師器 手取ね	口径 (80) 器高 50 底径 (64)	体部外面はユビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ。輪郭み肌面に残る。	胎土は緻密で、赤色粒を微量含む。色調はぶい暗褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 01、一括
24	瀬底器 蓋	口径 (170) 器高 (28)	口周縁部。天井部は回転ヘラケズリ。内面に返しを有する。	緻密だが、細砂粒・白色粒を少量、細砂を微量含む。色調は灰色。焼成は良好で硬質。	口縁部破片 一括

25	福志御 所心	口径 (140) 器高 (25)	ワコク型群。口縁部内面に線を有し、口唇部は鋭く尖る。	粘土に散骨で、白色粒を含む。色調は黄灰色。焼成は良好で硬質。	口縁部破片 一拵
26	土師器 甕	口径 (228) 器高 (231)	外面は口縁部縦位ハケム後傾ナデ。胴部縦位ハケム。内面は口縁部縦位ハケム後傾ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒・白色粒・赤色粒・黒粒を含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部～胴部 1/5 遺存 No. 11, 100, 101, コマド
27	土師器 甕	口径 (204) 器高 (101)	口縁部は内外面とも傾ナデ。胴部外面は縦位のハケム。胴部内面は傾位のヘラナデ。	砂粒・白色粒を少量含む。色調はにぶい白褐色。焼成は良好。	口縁部 2/5 遺存 No. 105, 47, 51
28	土師器 甕	口径 (202) 器高 (110)	外面は口縁部縦位ハケム後傾ナデ。胴部は縦位ハケム。内面は口縁部縦位ハケム後傾ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒・赤色粒 (大) を中量含む。色調はにぶい褐色。焼成は良好。	口縁部 1/5 遺存 No. 99
29	土師器 甕	口径 (206) 器高 (96)	口縁部は内外面とも傾ナデ。胴部外面は縦位ヘラナズリ。内面はヘラナデ。	砂粒・赤色粒 (大) を少量含む。色調はにぶい褐色。焼成はやや平足。	口縁部 1/5 遺存 No. 16, 一拵
30	土師器 甕	口径 (181) 器高 (86) 底径 82	外面は胴部縦位ヘラナズリ。胴部下端は傾位ヘラナズリ。底唇は多方向のヘラナズリ。内面はヘラナデ。	粗砂粒を中量、白色粒・赤色粒を少量含む。色調はにぶい褐色。焼成は良好。	底唇 No. 73
31	土師器 甕	口径 (181) 器高 94	胴部外面はナゲ斜位ヘラミガキ。内面はヘラナデ後ナデ。	粗砂粒及び長石・石英を中量、赤色粒・黒母を微量含む。にぶい黄褐色。焼成は良好。	胴部 1/3 遺存。定数遺棄 No. 53, 一拵
32	土師器 甕	口径 (113)	外面はハケム。内面はヘラナデ。	砂粒・白色粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は暗褐色。焼成は良好。	胴部破片 No. 98
33	石製品 小玉	長さ 8.2 mm, 幅 8.2 mm, 厚さ 7.6 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.4 g。			完存 No. 10
34	石製品 白瓦	長さ 11 mm, 幅 11 mm, 厚さ 2.5 mm, 孔径 3.0 mm, 重さ 0.4 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面の一部には鉄製の刃を打ち込んだと考えられる痕跡が認められた。			完存 No. 9, 34, コマド
35	石製品 白瓦	長さ 11 mm, 幅 10.5 mm, 厚さ 2.0 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.3 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			胴部欠損 No. 49
36	石製品 白瓦	長さ 11.5 mm, 幅 11.5 mm, 厚さ 2.0 mm, 孔径 3.0 mm, 重さ 0.3 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			胴部欠損 No. 64
37	石製品 白瓦	長さ 10.5 mm, 幅 11 mm, 厚さ 2.5 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.4 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			胴部欠損 No. 94
38	石製品 白瓦	長さ 12 mm, 幅 11.5 mm, 厚さ 2.0 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.3 g。粘板岩製。片面が粗く研削されるが、対面は潤滑面のままで研削していない。潤滑された側の孔は穿孔時のふれにより扇形となる。			胴部欠損 No. 93
39	石製品 白瓦	長さ 12 mm, 幅 12 mm, 厚さ 2.0 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.4 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			完存 No. 95
40	石製品 白瓦	長さ 10.5 mm, 幅 11 mm, 厚さ 2.0 mm, 孔径 3.0 mm, 重さ 0.3 g。粘板岩製。片面は自然面、対面は潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。穿孔は自然面の側からされていた。			完存 No. 96
41	石製品 白瓦	長さ 11 mm, 幅 11 mm, 厚さ 1.7 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.4 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			完存 No. 97
42	石製品 白瓦	長さ 11.5 mm, 幅 11.5 mm, 厚さ 3.5 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.7 g。粘板岩製。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			完存 コマド一拵
43	石製品 白瓦	長さ 11.5 mm, 幅 (9) mm, 厚さ 2.5 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 0.3 g。粘板岩製。半分が欠損する。両面とも潤滑面のままで研削していない。側面は粗く研削される。			1/2 遺存 No. 92
44	石製品 新物石	長さ 154 mm, 幅 59 mm, 厚さ 53 mm, 重さ 722.7 g。			完存 No. 32
45	石製品 新物石	長さ 137 mm, 幅 62 mm, 厚さ 42 mm, 重さ 523.1 g。			完存 No. 42
46	石製品 新物石	長さ 140 mm, 幅 59 mm, 厚さ 46 mm, 重さ 474.9 g。			完存 No. 112
47	石製品 新物石	長さ 133 mm, 幅 58 mm, 厚さ 46 mm, 重さ 548.6 g。			完存 No. 77
48	石製品 新物石	長さ 138 mm, 幅 64 mm, 厚さ 49 mm, 重さ 650.7 g。			完存 No. 80
49	石製品 新物石	長さ 142 mm, 幅 48 mm, 厚さ 40 mm, 重さ 344.9 g。			完存 No. 81
50	石製品 新物石	長さ 132 mm, 幅 60 mm, 厚さ 27.5 mm, 重さ 389.9 g。			完存 No. 87
51	石製品 新物石	長さ 121 mm, 幅 67 mm, 厚さ 43 mm, 重さ 423.4 g。			完存 No. 88
52	石製品 新物石	長さ 121 mm, 幅 57 mm, 厚さ 37 mm, 重さ 303.6 g。			完存 No. 83
53	石製品 新物石	長さ 120 mm, 幅 45 mm, 厚さ 42 mm, 重さ 312.5 g。			完存 No. 84
54	石製品 新物石	長さ 118 mm, 幅 80 mm, 厚さ 30 mm, 重さ 402.6 g。			完存 No. 85
55	石製品 新物石	長さ 130 mm, 幅 74 mm, 厚さ 30 mm, 重さ 379 g。			完存 No. 86
56	石製品 新物石	長さ 120 mm, 幅 49 mm, 厚さ 46.4 mm, 重さ 449.2 g。			完存 No. 12
57	石製品 新物石	長さ 147 mm, 幅 68 mm, 厚さ 29.5 mm, 重さ 472.6 g。			完存 No. 78

38	石製品 彫物石	長さ125mm、幅60mm、厚さ40mm、重さ434.9g。	完存 No.13
50	石製品 彫物石	長さ127mm、幅68mm、厚さ40mm、重さ513.6g。	完存 No.66
60	石製品 彫物石	長さ132mm、幅70mm、厚さ30mm、重さ406.2g。	完存 No.43
61	石製品 彫物石	長さ127mm、幅53mm、厚さ40mm、重さ387.5g。	完存 No.63
62	石製品 彫物石	長さ127mm、幅55mm、厚さ33.6mm、重さ307.1g。	完存 No.56
63	石製品 彫物石	長さ134mm、幅84mm、厚さ41mm、重さ413.2g。磨位の痕跡が顕著に残る。	彫部欠損 No.39

## 2号整穴住居跡 (SI002)

※括弧内の( )は復元色、( )は推定色を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 135 器高 42	外面は口縁部縦ナデ後横位ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後縦ナデヘラミガキ。内面はヘラミガキ、内外面とも炭素吸着による黒色処理。	胎土は緻密だが、一部がマール状である。細砂粒・白色粒・赤色粒を少量、雜物を微量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No.17, 24, 25, 26
2	土師器 杯	口径 (136) 器高 43 丸底	口縁部は縦ナデ後横位ヘラミガキ、体部外面は磨き不明瞭だがヘラケズリ後ヘラミガキか。内面はヘラミガキ。口縁部外面及び内面全面に横位ナデによる黒色処理。	胎土は一部がマール状で、砂粒・赤色粒を少量、白色粒を微量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No.34
3	土師器 杯	口径 (115) 器高 33 丸底	外面は口縁部縦ナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ。内面は縦ナデ後横位付込をナデ。ナデ上げ痕あり。口縁部は内外面とも横位ナデによる黒色処理。	砂粒を中量、赤色粒・黒粒を少量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	口縁部1/2欠損 No.15
4	土師器 杯	口径 (128) 器高 45 丸底	外面は口縁部縦ナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデか。内面は縦ナデ後横位付込をナデ。口縁部外面及び内面に横位ナデによる黒色処理。	砂粒・赤色粒を少量含む。金雲母少量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	3/4 遺存 (口縁部1/2) No.13, 33, 一様
5	土師器 手取碗	口径 (105) 器高 34 底径 36	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はニビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。	胎土は一部がマール状で、砂粒・赤色粒を少量、白色粒・黒粒を微量含む。外面炭粒褐色。内面黒褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 No.11
6	土師器 手取碗	口径 (90) 器高 42 底径 43	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はニビオサエ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。	細砂粒・白色粒・赤色粒を少量含む。外面は褐色・黒褐色。内面は褐色。焼成は良好。	1/4 遺存 No.6
7	土師器 手取碗	器高 (93) 底径 52	体部外面はニビオサエ後ナデ。底部外面はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭みねが顕る。	胎土は一部がマール状で、砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。褐色。焼成は良好。	体部一部3/5 遺存 一様
8	土師器 手取碗	器高 (97) 底径 58	体部外面はニビオサエ後ナデ。底部外面はナデ。内面はナデ後縦ナデヘラミガキ。	胎土は一部がマール状で、砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 (口縁部欠損) No.12
9	土師器 鉢	口径 (98) 器高 (52)	口縁部は内外面とも横ナデで、横位ナデによる黒色処理が見られる。外面はヘラケズリ。内面はナデ。	胎土は緻密で、細砂粒・赤色粒を微量含む。色調は明褐色。焼成は良好。	口縁部破片 一様
10	土師器 手取碗	口径 68 器高 43 底径 45	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はニビオサエ後ナデ。底部はナデ。内面はヘラナデ後ナデ。輪郭みねが顕る。	細砂粒・白色粒を微量含む。外面は浅黄褐色。内面は明黄褐色。焼成は良好。	一様 No.16
11	土師器 盃	器高 (94) 底径 38	腹部下端は横位ヘラケズリ。底部は単一方向のヘラケズリ。内面はナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を少量含む。外面は黒褐色。内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	底部3/4 遺存 P8, 一様
12	土師器 盃	器高 (21) 底径 87	腹部外面はヘラケズリ後ナデ。底部は多方向のヘラケズリ後ナデ。内面はナデ。	砂粒を多量、白色粒を少量含む。色調は暗灰褐色。焼成は良好。	底部1/2 遺存 No.14
13	土師器 盃	器高 (95) 底径 88	腹部外面は縦位ハケメ後、上半のみ縦位のハケメ。内面はナデ。	砂粒・白色粒を少量、雜物を微量含む。色調はぶい赤褐色。焼成は良好。	割部破片。SI002-14と同一 一様。SI003 一様
14	土師器 盃	器高 (54) 底径 75	外面は縦位のハケメ。内面はナデ。	砂粒・白色粒を少量、雜物を微量含む。色調はぶい赤褐色。焼成は良好。	割部破片。SI002-13と同一 一様
15	土師器 盃	器高 (75) 底径 88	外面は縦位のハケメ。内面はナデ。	砂粒・白色粒を少量含む。色調は暗灰褐色。焼成は良好。	割部破片 一様
16	土師器 盃	口径 (299) 器高 330 底径 88	口縁部は横ナデ。外面は腹部縦位ヘラケズリ、下部縦位ヘラケズリ後縦位ヘラミガキ。内面はヘラナデ後一部ヘラミガキ。孔周辺は横位ヘラケズリ。	粗砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調はぶい黄褐色だが外面に黒斑あり。焼成は良好。	3/4 遺存 No.3, 18, 21 ~ 24
17	石製品 彫物石	長さ157mm、幅32mm、厚さ63mm、重さ653.1g。			完存 No.2
18	石製品 彫物石	長さ163mm、幅78mm、厚さ45mm、重さ771.2g。			完存 No.23
19	石製品 彫物石	長さ154mm、幅60mm、厚さ48mm、重さ500.4g。			完存 No.22
20	石製品 白玉	長さ(9)mm、幅10mm、厚さ1.5mm、孔径2.5mm、重さ0.1g。粘板岩製。内面とも剥離面のみまで研削していない。表面は粗く研削される。			2/3 遺存 一様
21	石製品 白玉	長さ10mm、幅11.6mm、厚さ3.5mm、孔径2.5mm、重さ0.6g。粘板岩製。内面とも剥離面のみまで研削していない。表面は粗く研削される。			完存 No.35

## 3号整六住居跡 (S1003)

測定法欄の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 (80) 器高 丸底 24	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はヘラズリ、内面は厚底により調整不明。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量。白色色を微量含む。色調は灰黄色。焼成はやや不良。	1/4 遺存 一括
2	土師器 杯	口径 (141) 器高 (38) 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部ヘラズリ。内面は横ナデ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は微密で、砂粒を中量。白色色・赤色色を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部破片 一括
3	土師器 杯	口径 (117) 器高 (37) 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部はヘラズリだが、腹の直下は無調整。内面は横ナデだが腹部付近はナデ。ナデ上げあり。口縁部内面に灰土が塗る。体部外面上半から内面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は微密で、細砂粒を少量。白色色・赤色色を微量含む。内面はぶい褐色。焼成は良好。	口縁へ体部1/4 遺存 一括
4	土師器 杯	口径 (137) 器高 (42) 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部はヘラズリだが厚底により調整不明。内面は横ナデだが、底部付近はナデ。口縁部の内面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は微密だが、一部がマール状。細砂粒を中量。白色色・赤色色を微量含む。色調は灰黄色。焼成は良好。	1/5 遺存 No. 27
5	土師器 杯	口径 (122) 器高 35 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部はヘラズリだが厚底により調整不明。内面は横ナデだが腹部付近はナデ。口縁部外面及び内面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量。白色色を微量含む。色調は灰白色。焼成はやや不良。	1/2 遺存 No. 47, 41, 一括
6	土師器 杯	口径 (128) 器高 38 丸底	口縁部は内外面とも横ナデ。体部は調整により調整不明。内面は横ナデ。内面は横ナデ。	砂粒を中量。白色色を微量含む。色調は灰黄色。焼成はやや不良。	3/5 遺存 No. 18, 一括
7	土師器 杯	口径 (116) 器高 39 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部ヘラズリだが腹の直下は無調整。ただし、体部外面は厚底により調整不明。内面は横ナデだが、底部付近はナデ。	砂粒を中量。白色色・赤色色・細粒を少量含む。色調は灰黄色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 14
8	土師器 杯	口径 (154) 器高 (43) 丸底	検跡により器表面の調整が著しく、調整不明。口縁部は横ナデ。体部外面はヘラズリか。	胎土は微密で、細砂粒を少量。白色色・赤色色を微量含む。ぶい黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 1, 2, 3, カマド
9	土師器 杯	口径 (113) 器高 35 丸底	外面は口縁部横ナデ。体部はヘラズリだが調整不明。内面は放射状のヘラミガキ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土の一部がマール状で、細砂粒を中量。白色色・赤色色を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	1/3 遺存 No. 67, SK1 一括
10	土師器 杯	口径 115 器高 42 丸底	外面は口縁部からヘラズリ後ヘラミガキ。内面は丁寧な放射状のヘラミガキ後口縁部付近を横位ヘラミガキ。	胎土の一部がマール状で、細砂粒・白色色・赤色色を少量含む。色調は明茶褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 43, 44
11	須恵器 土師器	口径 98 器高 (38) 丸底	口縁部は口縁部横ナデ。体部外面は手持ちヘラズリ。内面は須恵器に施される。	細砂粒・白色色を少量。黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	1/2 遺存。TK17 併行 一括
12	土師器 甕	口径 (205) 器高 (53) 丸底	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラズリ。内面はヘラナデ。	粗砂粒を多量。白色色・赤色色・細粒を少量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存 No. 61, カマド 一括
13	土師器 甕	口径 240 器高 (91) 底径	口縁部は横ナデ。外面は縦位のヘラズリ。内面は横位のヘラナデ。	粗砂粒を多量。白色色・細粒を少量含む。外面は明茶褐色。内面はぶい黄褐色。焼成は不良。	口縁部 1/3 遺存 No. 4, 6, 7, 8, 10, カマド, 一括
14	土師器 甕	器高 (95) 丸底	外面は縦位ハケメ後横位ヘラミガキ。内面は調整不明。	砂粒を中量。白色色・赤色色を微量含む。外面はぶい黄褐色。内面は灰白色。焼成はやや不良。	胴部破片 No. 21, 一括
15	土師器 甕	器高 (76) 丸底	外面は縦位ハケメ。内面はヘラナデ。	砂粒を中量。白色色を少量含む。外面は灰黄色。内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	胴部破片 一括。S1002 一括
16	土師器 甕	器高 (53) 丸底	外面は縦位ハケメ。内面はヘラナデ。	砂粒を中量。白色色・赤色色を少量含む。ぶい黄褐色。外面に黒褐色部分有り。焼成は良好。	胴部破片 一括
17	石製品 小玉	長さ 11 mm, 幅 11 mm, 厚さ 9 mm, 孔径 2.5 mm, 重さ 1.2 g。			完存 No. 45
18	石製品 白玉	長さ 10.5 mm, 幅 11.5 mm, 厚さ 7 mm, 孔径 3.3 mm, 重さ 1.3 g。粘板岩製。片面は自然面、対面は調整済のままで研削していない。側面は粗く研削される。			完存。S1003-19 と接合 No. 58
19	石製品 白玉	長さ 10 mm, 幅 11 mm, 厚さ 3 mm, 孔径 3.0 mm, 重さ 0.5 g。粘板岩製。両面とも調整済のままで研削していない。側面は粗く研削される。			完存。S1003-18 と接合 No. 35
20	石製品 燧石	長さ 129 mm, 幅 51 mm, 厚さ 55 mm, 重さ 542.3 g。			完存 No. 56
21	石製品 燧石	長さ 130 mm, 幅 50 mm, 厚さ 37 mm, 重さ 439.8 g。			完存 No. 69
22	石製品 燧石	長さ 139 mm, 幅 56 mm, 厚さ 50 mm, 重さ 438.7 g。			完存 No. 70
23	石製品 燧石	長さ 140 mm, 幅 56 mm, 厚さ 33 mm, 重さ 397.6 g。			完存 No. 73
24	石製品 燧石	長さ 143 mm, 幅 60 mm, 厚さ 37 mm, 重さ 444.8 g。			完存 No. 52
25	石製品 燧石	長さ 145 mm, 幅 72 mm, 厚さ 40 mm, 重さ 644.6 g。			完存 No. 53
26	石製品 燧石	長さ 129 mm, 幅 59 mm, 厚さ 45 mm, 重さ 366.6 g。			完存 No. 55
27	石製品 燧石	長さ 134 mm, 幅 61 mm, 厚さ 28 mm, 重さ 341.7 g。			完存 No. 9

28	石製品 編物石	長さ112mm、幅80mm、厚さ28mm、重さ386.5g。	完存 No.37
29	石製品 編物石	長さ120mm、幅54mm、厚さ33mm、重さ295.7g。	完存 No.54
30	石製品 編石	長さ127mm、幅84mm、厚さ31mm、重さ347.4g。平坦面に多数の擦痕あり。	完存 No.66
31	石製品 合石	長さ109mm、幅82mm、厚さ72mm、重さ860.5g。平坦面に磨痕する。	完存 No.22

#### 4号竪穴住居跡 (S1004)

※出展順の( )は復元値、( )は遺存額を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 136 器高 39	外面は口縁部横ナデ後ヘラミガキ。体部ヘラケズリ。内面はヘラミガキ。口縁部及び内面に塗仕上げによる黒色焼成。丸底。	胎土は一部がマーブル状で、粗砂粒を少量。赤色鉄・銅燐を微量含む。色調はぶい・橙色。焼成は良好。	3/5 遺存 No.6、一括
2	土師器 杯	口径 (121) 器高 (33)	内外面とも磨耗により調整不明。外面は口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。内面は放射状のヘラミガキか。全面塗仕上げによる黒色焼成。体部に擦痕み痕が残る。	砂粒を中量。白色鉄を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良好。	1/3 遺存 一括
3	土師器 杯	口径 (133) 器高 44	外面は口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。全面塗仕上げによる黒色焼成。	胎土は緻密だが、一部がマーブル状。粗砂粒を少量。白色鉄・赤褐色・銅燐を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良。	2/5 遺存 No.4、一括
4	土師器 瓶	口径 (204) 器高 (115)	口縁部は横ナデ。胴部外面は横ナデヘラケズリ後胴部直下を横ナデヘラケズリ。さらに胴部のヘラミガキ。内面は口縁部を横ナデヘラミガキ後、胴部を横ナデヘラミガキ。	胎土は緻密で、砂粒を少量。白色鉄を微量含む。色調は淡黄褐色。焼成は良好。	口縁部→胴部1/3 遺存 No.3
5	石製品 編物石	長さ167mm、幅58mm、厚さ43mm、重さ637.7g。			完存 No.10
6	石製品 編物石	長さ141mm、幅45mm、厚さ33mm、重さ295.9g。			完存 No.16
7	石製品 編物石	長さ125mm、幅63mm、厚さ48mm、重さ484.5g。			完存 No.20
8	石製品 編物石	長さ131mm、幅39mm、厚さ41mm、重さ444.6g。			完存 No.22
9	石製品 編物石	長さ121mm、幅42mm、厚さ32mm、重さ308.3g。			完存 No.21
10	石製品 編物石	長さ112mm、幅51mm、厚さ30mm、重さ261.1g。			完存 No.25
11	石製品 編物石	長さ117mm、幅61mm、厚さ29mm、重さ276.6g。			完存 No.9
12	石製品 編物石	長さ115mm、幅42mm、厚さ35mm、重さ194.6g。			完存 No.24
13	石製品 編物石	長さ113mm、幅50mm、厚さ31mm、重さ271.1g。			完存 No.23
14	石製品 編物石	長さ105mm、幅44mm、厚さ34mm、重さ251.7g。			完存 No.17
15	石製品 編石	長さ109mm、幅49mm、厚さ27mm、重さ177.5g。			完存 No.18
16	石製品 編物石	長さ105mm、幅40mm、厚さ30mm、重さ196.2g。			完存 No.19
17	石製品 編物石	長さ109mm、幅51mm、厚さ35mm、重さ277.8g。			完存 No.12
18	石製品 編物石	長さ119mm、幅58mm、厚さ30mm、重さ175.9g。			完存 No.14
19	石製品 編物石	長さ98mm、幅42mm、厚さ31mm、重さ215.5g。			完存 No.15
20	石製品 合石	長さ171mm、幅169mm、厚さ37mm、重さ1542.5g。使用により磨滅した部分が平滑面となる。			完存 No.7
21	石製品 編石	長さ152mm、幅72mm、厚さ38mm、重さ576.8g。擦痕及び平滑面を有する。編物石を転用したものか。			完存 No.11
22	石製品 編石	長さ123mm、幅83mm、厚さ37mm、重さ586.9g。使用により磨滅した部分が平滑面となる。			完存 No.13

#### 5号竪穴住居跡 (S1005)

※出展順の( )は復元値、( )は遺存額を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 145 器高 49	外面は口縁部横ナデ後横ナデヘラミガキ。体部ヘラケズリ。内面は下部分ヘラミガキ。口縁部から体部上半に塗仕上げによる黒色焼成。丸底。	砂粒を中量。白色鉄・銅燐を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No.8

2	土師器 杯	口径 器高 丸底	125 37	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面はヘラミガキ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部剥離 No. 16、一添
3	土師器 杯	口径 器高 丸底	(129) 38	外面は口縁部横ナデ、体部は調整不明瞭だが、ヘラケズリ後一部ヘラミガキか。内面は横ナデ後継なヘラミガキ。口縁部から体部上半は漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密だが、一部がマール状。細砂粒を少量、赤色粒・細塵を微量含む。色調はぶい褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 12
4	土師器 杯	口径 器高 丸底	(156) (28)	外面は口縁部横ナデ、体部は調整不明瞭だが、ヘラケズリ後ヘラミガキか。内面は横ナデ。体部外面に陥凹み痕が残る。丸底	砂粒・白色粒を含む。色調は灰白色。焼成はやや不良。	口縁部 1/4 遺存 No. 17
5	土師器 杯	口径 器高 丸底	(120) (26)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ後継なヘラミガキ。内面は横ナデ後継のヘラミガキか。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、赤色粒を微量含む。黒褐色・褐色。焼成は良好。	口縁部 1/4 遺存 一添
6	土師器 杯	口径 器高 丸底	(107) (26)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部横ナデ、体部ナデ。全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	1/5 遺存 一添
7	土師器 杯	口径 器高 丸底	(115) (32)	口縁部外面は横ナデ後継なヘラミガキ。内面は丁寧なヘラミガキ。内面全面に黒褐色による黒色処理。	砂粒・白色粒を少量、赤色粒を微量含む。外面は褐色。内面は黒色。焼成は良好。	1/5 遺存 No. 4
8	土師器 杯	口径 器高 丸底	(120) 28	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ後継なヘラミガキ。内面はヘラミガキ。内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、白色粒を微量含む。外面は暗褐色。内面は黒褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 13、一添
9	土師器 手塚ね 手塚ね	口径 器高	(86) (37)	口縁部外面は横ナデ、体部外面はユビオヤセ。内面は横褐色のヘラナデ。	細砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。丸底。	底部欠損 No. 11
10	土師器 埴	口径 器高 底径	(160) 65 90	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はヘラケズリ。内面は底部に半方向の継なヘラミガキを施した後対称状のミガキ。内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密でまめ細かく、細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。外面はぶい褐色。内面は暗褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 10, 9, 7
11	土師器 壺	器高 頸径	(120) (182)	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面はヘラケズリ後継位置のヘラナデ。内面は横褐色ヘラナデ。	砂粒を中量、白色粒・赤色粒を少量、細塵を微量含む。色調はぶい褐色。焼成は良好。	頸部～胴部破片 No. 3
12	土師器 鉢	口径 器高	139 73	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面はナデ。胴部下端から底部は横なヘラケズリ。内面はヘラナデ後継なヘラミガキ。底部に焼成前穿孔。孔径は 24 mm。	砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は淡黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 1
13	土師器 鉢	口径 器高	(177) 70	口縁部は内外面とも横ナデ。外面はヘラケズリ後ヘラナデ、その後ヘラミガキ。内面はナデ後ヘラミガキ。口縁部の歪みが大きい。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、白色粒を微量含む。外面は淡黄褐色。内面は黒褐色。焼成は良好。	1/5 遺存 No. 14, 15、一添
14	須原寺 長形鉢?	口径 器高	(120) (20)	口縁部は折り返され、下方に下がる。	細砂粒・細塵を微量、白色粒を少量含む。灰色。焼成は堅硬。	口縁部破片 一添
15	石製品 輪切石	長さ	(106) mm、幅 63 mm、厚さ 34 mm、重さ 408.2 g。			下部欠損 No. 22

## 6号壺穴住居跡 (S1006)

※括弧内の ( ) は復元値、( ) 内は遺存率を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
1	土師器 杯	口径 器高 丸底	104 41	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調はぶい褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 2、一添
2	土師器 杯	口径 器高 丸底	(105) (42)	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はヘラケズリだが、後の底より調整不明瞭。体部内面はナデ。内面全面に漆仕上げによる黒色処理。体部に陥凹み痕が残る。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 4, 5、一添
3	土師器 器高 丸底	103 37	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部横ナデ、器高付通をナデ。内外面全面に漆仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は褐色から黒褐色。焼成は良好。	完存 No. 1	
4	土師器 杯	口径 器高 丸底	(110) 30	口縁部は内外面とも横ナデで、漆仕上げによる黒色処理が施される。体部外面はヘラケズリ。体部内面はナデ。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 一添
5	土師器 杯	口径 器高 丸底	136 (40)	口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はヘラケズリだが、底面より調整不明瞭。体部内面はナデ。全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成はやや不良。	口縁部 3/5 遺存 一添
6	土師器 壺	口径 器高 丸底	(181) 33	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦褐色ヘラケズリ。底面はヘラケズリにより丸くなる。胴部内面はヘラナデ。	細砂粒を多量、白色粒を少量含む。色調はぶい褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 3
7	石製品 輪切石	長さ	142 mm、幅 74 mm、厚さ 33 mm、重さ 510.2 g。		完存 No. 21	
8	石製品 輪切石	長さ	157 mm、幅 70 mm、厚さ 25 mm、重さ 330.9 g。		完存 No. 20, 16, 18	
9	石製品 輪切石	長さ	158 mm、幅 74 mm、厚さ 35 mm、重さ 672.5 g。		完存 No. 12	
10	石製品 輪切石	長さ	153 mm、幅 55 mm、厚さ 44 mm、重さ 702.3 g。		完存 No. 8	
11	石製品 輪切石	長さ	(146) mm、幅 61 mm、厚さ 30 mm、重さ 353.2 g。		底部欠損 No. 6	

12	石製品 彫物石	長さ 139 mm, 幅 60 mm, 厚さ 42 mm, 重さ 519.8 g.	完存
13	石製品 彫物石	長さ 141 mm, 幅 53 mm, 厚さ 34 mm, 重さ 321.1 g.	完存 No. 10
14	石製品 彫物石	長さ 154 mm, 幅 52 mm, 厚さ 30 mm, 重さ 456.9 g.	完存 No. 9
15	石製品 彫物石	長さ 146 mm, 幅 59 mm, 厚さ 51 mm, 重さ 684.9 g.	完存 No. 17
16	石製品 彫物石	長さ 160 mm, 幅 73 mm, 厚さ 39 mm, 重さ 728.2 g.	完存 No. 11
17	石製品 彫物石	長さ 154 mm, 幅 74 mm, 厚さ 50 mm, 重さ 682.6 g.	完存 No. 19
18	石製品 彫物石	長さ 166 mm, 幅 73 mm, 厚さ 37 mm, 重さ 701.7 g.	完存 No. 13
19	石製品 彫物石	長さ 158 mm, 幅 66 mm, 厚さ 47 mm, 重さ 612.5 g.	完存 No. 14
20	石製品 台石	長さ 149 mm, 幅 107 mm, 厚さ 97 mm, 重さ 2024.4 g. 平面部は磨滅し, 平滑となる。	完存 No. 7

### 7号竪穴住居跡 (S1007)

※法量種 ( ) は復元値, ( ) は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 123	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 底部は丸底を印びて, 全面単一方向の手持ちヘラケズリで切り直しは不明, 内面は丁寧なヘラミガキが施され, 炭素微着により黒色処理される。体部外面に横位の条溝 1 平方。	砂粒を少量, 白色粒を微量含む。外面は褐色, 内面は黒色。焼成は良好。	3/4 遺存, 黒書 No. 26
		器高 41			
		底径 76			
2	須恵器 杯	口径 128	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 底部は回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒を中量, 白色粒・細粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	3/4 遺存, 炭子窯焼 No. 10
		器高 45			
		底径 63			
3	須恵器 杯	口径 128	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 底部切り直しは回転ヘラ切り。	砂粒を中量, 白色粒・細粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部 3/5 遺存, 炭子窯焼 No. 16
		器高 45			
		底径 63			
4	須恵器 杯	口径 128	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 底部切り直しは回転ヘラ切り。	砂粒を中量, 白色粒・細粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部 4/5 遺存, 炭子窯焼 No. 43, カマド一話
		器高 45			
		底径 63			
5	須恵器 杯	口径 124	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 体部下端は手持ちヘラケズリ, 底部は回転ヘラ切り後多方向の手持ちヘラケズリ, 器部外面に縦目 1 寸 (炭化跡)。	砂粒を少量, 白色粒・細粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部完存, 炭子窯焼か, 黒刷 No. 23
		器高 40			
		底径 60			
6	須恵器 杯	口径 (127)	ロクロ成形, 体部はロクロナデ, 底部は調査不明。	砂粒を中量, 白色粒を少量, 細粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	1/6 遺存, 炭子窯焼か No. 5
		器高 38			
		底径 (60)			
7	土師器 甕	口径 156	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半がナデ, 下半が横位ヘラケズリ。内面はヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を少量, 白色粒・赤色粒・雲母・細粒を微量含む。色調は赤褐色。焼成は良好。	口縁部～胴部 3/4 遺存 No. 17, 14, 21
		器高 (94)			
		口径 (221)	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のナデ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を中量, 白色粒を少量, 赤色粒・細粒を微量含む。外面は明赤褐色, 内面は赤褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存 No. 37
8	土師器 甕	口径 (215)	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半がナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面はヘラナデ, 口唇部はつまみ出される。	砂粒を中量, 白色粒・赤色粒・細粒を少量含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部～胴部 3/5 遺存 No. 11, 4, 8, 12, 30, カマド, 一話
		器高 (288)			
		口径 209	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を中量, 白色粒・赤色粒・雲母・細粒を少量含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部～胴部 3/5 遺存 No. 47, 7, 9, 10, 30, 41, 44, 45, 46, 49, カマド, 一話
10	土師器 甕	口径 209	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を中量, 白色粒・赤色粒・雲母・細粒を少量含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部～胴部 3/5 遺存 No. 47, 7, 9, 10, 30, 41, 44, 45, 46, 49, カマド, 一話
		器高 (285)			
		口径 202	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 底部には木炭灰が残る。内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	砂粒・白色粒を中量, 赤色粒を微量, 細粒を少量含む。褐色・ぶい赤色散粒色。焼成は良好。	上部 4/5・底部 4/5 遺存 No. 51, 53, 42, カマド, 一話 No. 33, 38, 39, 40, カマド, 一括
11	土師器 甕	口径 184	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を中量, 白色粒・赤色粒・雲母・細粒を少量含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部 1/4・底部 1/5 遺存 No. 36, 35, 50, 一括 一話
		器高 (113)			
		底径 62			
12	土師器 甕	口径 (70)	胴部外面は横位ヘラケズリ後横位ヘラナデ, 内面はナデ。	粗砂粒を中量, 白色粒・細粒・雲母を少量, 赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	底部 1/2 遺存 一話
		器高 79			
		口径 (189)	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	砂粒を中量, 白色粒を少量, 赤色粒・細粒を微量含む。外面は明赤褐色, 内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部 1/4・底部 1/5 遺存 No. 36, 35, 50, 一括 一話
13	土師器 甕	口径 (121)	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が横位ヘラナデ, 下半が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ, 内面は横位ヘラナデ, 口唇部は上方つまみ出される。	粗砂粒を中量, 白色粒を少量, 赤色粒・細粒を微量含む。外面は明赤褐色, 内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部 1/4・底部 1/5 遺存 No. 36, 35, 50, 一括 一話
		器高 (74)			
		底径 71			
14	鉄製品 釵	長さ 136 mm, 幅 37 mm, 厚さ 1.5 mm, 重さ 45.7 g.	完存 No. 22		
15	鉄製品 釵	長さ (45) mm, 幅 18 mm, 厚さ 3 mm, 重さ 6.5 g.	先端部破片 No. 3		
16	鉄製品 手鐲?	長さ (33) mm, 幅 (15) mm, 厚さ 1.5 mm, 重さ 4.8 g.	破片 No. 2		
17	鉄製品 刀子 (筈)	長さ (52) mm, 幅 7 mm, 厚さ 4 mm, 重さ 4.3 g.	破片 No. 58		

## 8号竪穴住居跡 (S1008)

測定量欄の( )は概元量、( )は遺存額を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 114 器高 41 底径 60	ロクロ整形。体部はロクロナデ。底部は同形糸切り後無調整。内面は体部縦位ヘラトギキ。底部単一方向のヘラトギキ。内面全面を炭素焼着による黒色処理。	胎土は一部がワープル状で、砂粒を少量。赤色粒を微量含む。外面はにぶい褐色。内面は黒色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 18
2	土師器 杯	口径 126 器高 41 底径 72	ロクロ整形。体部はロクロナデ。底部は同形糸切り後一部を手持ちヘラケズリ。内面は体部縦位ヘラトギキ。底部単一方向のヘラトギキ。内面全面を炭素焼着により黒色処理。	砂粒を少量。白色粒・黒粒を微量含む。外面は褐色。内面は黒色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 16, 15, 17, 一拵
3	土師器 杯	口径 (126) 器高 (41) 底径 (66)	ロクロ整形。体部はロクロナデ。底部は全面を単一方向の手持ちヘラケズリのため切り離し不明。内面は体部が縦位ヘラトギキ。底部が単一方向のヘラトギキ。	細砂粒を中量。白色粒を微量含む。色調は灰色。炭成は良好。	1/3 遺存 No. 35, 37
4	土師器 杯	口径 (153) 器高 51 底径 (80)	ロクロ整形。底部の調整は不明。内面は細く密な縦位ヘラトギキ。内面の黒色処理は炭素焼着によるもの。	砂粒を少量。白色粒を微量含む。外面は褐色。内面は黒色。焼成は良好。	1/5 遺存 No. 6, 4, 一拵
5	土師器 杯	口径 (126) 器高 (27)	ロクロ整形。体部は内外面ともロクロナデ。体部外面に横位の素言「金」か。	砂粒を中量含む。外面は黄灰色。内面はにぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存。黒苔一拵
6	須恵器 杯	口径 (136) 器高 40 底径 (64)	ロクロ整形。体部はロクロナデだがロクロ目は不明。底部はナデ。切り離しは不明。	砂粒を中量。白色粒・黒色粒を少量。黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	1/5 遺存。蓋子黒成か No. 5
7	須恵器 杯	口径 (134) 器高 44 底径 (66)	ロクロ整形。体部はロクロナデ。底部は同形ヘラ切り後無調整。	砂粒を少量。白色粒・黒色粒・黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	1/6 遺存。蓋子黒成か No. 11, 一拵
8	須恵器 杯	口径 129 器高 39 底径 55	ロクロ整形。体部はロクロナデで、ロクロ目は不明。底部は同形糸切り後無調整。内面口縁部に施地の痕跡あり。底部外面に横位の素言「口」(判読不能)。	砂粒を中量。黒色粒を少量。白色粒・黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好だがやや軟弱。	完存。三意黒成。黒苔 No. 7
9	須恵器 杯	口径 (141) 器高 43 底径 74	ロクロ整形。体部はロクロナデ。底部は同形ヘラ切り後無調整。底部外面に素言「来」か。	砂粒を中量。白色粒を少量。黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	2/5 遺存。蓋子黒成か。黒苔 No. 13
10	須恵器 杯	口径 (200) 器高 80	ロクロ整形。体部はロクロナデ。下層の一部を手持ちヘラケズリ。底部は同形ヘラ切り後全面手持ちヘラケズリ。	砂粒を少量。白色粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部 3/5 遺存 No. 23
11	須恵器 杯	口径 (37)	ロクロ整形。体部はロクロナデ。下層はヘラケズリ。体部外面に素言「口」(判読不能)。	砂粒を中量。白色粒・黒色粒を少量含む。灰色。炭成は良好。	口縁部破片。蓋子黒成か。黒苔一拵
12	土師器 甕	口径 (182) 器高 (88)	口縁部はエビオサエ後ナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。胴部内面はナデ。	砂粒を少量。雲母を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部破片。武蔵型甕 No. 34
13	土師器 甕	口径 (204) 器高 (98)	口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ。口唇部は上方につまみ出される。内面はヘラナデ。	粗砂粒を中量。長石・石英を少量含む。色調はにぶい黄褐色。炭成は良好。	口縁部破片。常盤型甕 No. 10
14	土師器 小甕型	口径 (120) 器高 (60)	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒を少量。白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存。武蔵型甕 3号カマド一拵。黒形一拵
15	土師器 甕	口径 (182) 器高 (120)	口縁部はエビオサエ後ナデ。胴部外面は上半が縦位ヘラケズリ。下半が横位ヘラケズリ。胴部内面は縦位ヘラナデ。	砂粒を中量。雲母を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部 1/3 遺存。武蔵型甕 No. 8, 9, 一拵
16	土師器 甕	口径 (125) 器高 40	胴部外面は縦位ヘラケズリ。底部は単一方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	砂粒を少量含む。外面は黒褐色。内面は褐色。焼成は良好。	底部完存。胴部 1/6。武蔵型甕 No. 38, 一拵
17	土師器 甕	口径 (96) 器高 43	胴部外面は縦位ヘラケズリ。一部に保付着。底部は単一方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	砂粒を中量含む。にぶい褐色。炭成は良好。	底部 3/4 遺存。武蔵型甕 No. 12, 一拵
18	土師器 合弁甕	口径 (114) 器高 142 底径 82	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半が縦位ヘラケズリ。下半が横位ヘラケズリ。胴部はエビオサエ後ナデ。胴部内面は横ナデ。胴部内面はヘラナデ。	砂粒を中量。雲母を微量含む。色調は黒褐色。焼成は良好。	3/5 遺存。武蔵型甕 No. 33, カマド
19	須恵器 鉢	口径 (105) 底径 (96)	ロクロ整形。胴部下位は3段の同形ヘラケズリ。内面は縦位による調整が著しく。調整不明。	白色粒を中量。黒色粒を少量含む。色調はオレンジ褐色。炭成は良好。	胴部～底部 3/5 遺存 No. 20, 22, カマド, 一拵
20	須恵器 甕	口径 (208) 器高 (61)	ロクロ整形。口縁部内外面に自然粘付着。	砂粒・白色粒を中量。黒粒を微量含む。色調は灰色。炭成は良好。	口縁部破片 No. 14
21	土製品 土玉	径 (27) mm. 高さ 24 mm. 孔径 (5.0) mm. 重さ 5.2 g.			2/5 遺存 No. 3
22	土製品 砂鉢型	径 53 mm. 厚さ 18 mm. 孔径 6.0 mm. 底径 45.7 mm. 全面が縦位上げによる黒色処理か。			一部欠損 No. 1
23	鉄製品 刀子	長さ 172 mm. 幅 16 mm. 厚さ 4 mm. 重さ 22.5 g.			一部欠損 No. 2
24	鉄製品 刀子	長さ (142) mm. 幅 13 mm. 厚さ 3 mm. 重さ 14.6 g. 刃の金具残存。			ほぼ完存 No. 2

## 9号竪穴住居跡 (S1009)

測定量欄の( )は概元量、( )は遺存額を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 杯	口径 129 器高 40 底径 66	ロクロ整形。体部はロクロナデで、内面はロクロ目強弱。底部は同形ヘラ切り後ナデ。底部外面にヘラ記号「等」。	砂粒を中量。白色粒を少量。黒粒を微量含む。色調は黄褐色。炭成は良好。	口縁部一部欠損。蓋子黒成 No. 5, 一拵
2	土師器 小甕型	口径 (108) 器高 (45)	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。内面はヘラナデナデ。	砂粒を中量。白色粒を微量含む。色調は明褐色。炭成は良好。	口縁部 1/4 遺存。武蔵型甕 No. 11



3	土師器 甕	口径 (213) 器高 (119)	口縁部はユビオサエ後傾ナデ。胴部外面は上半が傾位ヘラケズリ。下半が傾位ヘラケズリ。胴部最大径の付近にカマド焼陶材付着。内面は厚紙により調整不明。	砂粒を中量。白色粒を少量。赤色粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 3, 4, 一括
4	土師器 甕	口径 (210) 器高 (151)	口縁部はユビオサエ後傾ナデ。胴部は上半が傾位ヘラケズリ。下半が傾位ヘラケズリ。内面はヘラナゲ後ナデ。内面に紅付。	砂粒を中量。白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 8, 7, 一括
5	土師器 小型甕	口径 139 器高 (92)	口縁部はユビオサエ後傾ナデ。胴部外面は傾位ヘラケズリ。内面はヘラナゲ後ナデ。	砂粒を中量。白色粒を微量含む。色調は灰褐色。焼成は良好。	口縁部4/5欠損。武威産 No. 10, 1, 2, 一括
6	石製 白玉	長さ11mm。幅12mm。厚さ3mm。孔径3.0mm。重さ0.7g。胎質硬質。両面とも滑潤面。両面とも滑潤面のままで研削していない。側面は粗く磨きされる。			完存 No. 9

## 10号竪穴住居跡 (SI010)

※法量欄の( )は概元値。( )は遺存数を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 杯	口径 (136) 器高 38 底径 (53)	ロクロ製。体部はロクロナゲで、下端を手持ちヘラケズリ。底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ。	砂粒・白色粒を中量。黒粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	1/3 遺存。竈子窯焼一括
2	須恵器 杯	器高 (16) 底径 (72)	ロクロ製。体部はロクロナゲで、下端を手持ちヘラケズリ。底部は回転ヘラ切り後一手持ちヘラケズリ。	砂粒・白色粒を中量。赤色粒・黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部1/3 遺存。竈子窯焼一括
3	土師器 土師甕	器高 (25)	ロクロ製。内面はヘラミガキが施され。炭素焼着により黒色地層される。体部外面に傾位の赤土「刀」か。	砂粒を少量。白色粒・赤色粒を微量含む。外面は褐色。内面は白色。焼成は良好。	口縁部破片。黒土一括
4	土師器 土師甕	器高 (28) 底径 (39)	胴部外面は傾位ヘラケズリ。底部は傾ナデ。内面はヘラナゲ。	砂粒を中量。赤色粒を微量含む。外面は白く黄褐色。内面は灰白色。焼成は良好。	破片 カマド No. 4
5	土師器 土師甕	器高 (86) 底径 (79)	胴部外面は傾位ヘラケズリ後下部を傾位ヘラケズリ。内面は傾ナゲ。	粗砂粒を多量。白色粒を中量。赤色粒を少量含む。外面は褐色。内面は褐色。焼成は良好。	底部1/2 遺存 カマド
6	須恵器 長頸甕	器高 (62)	外面は平行タケナゲナデ。下部を回転ヘラケズリ。内面はヘラナゲ。内面に残る赤土は同心円状ではない。	砂粒・赤色粒を少量。白色粒・黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	胴部片。SI02-7 と同一か No. 5

## 11号竪穴住居跡 (SI011)

※法量欄の( )は概元値。( )は遺存数を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 (164) 器高 25 底径 (74)	ロクロ製。体部はロクロナゲ。底部は全面手持ちヘラケズリ(2方向)で、切り離しは不明。内面は傾位ヘラミガキ後傾位ヘラミガキ。	砂粒を少量。赤色粒を微量含む。色調は明黄色から褐色。焼成は良好。	1/4 遺存 カマド一括
2	須恵器 杯	口径 133 器高 40 底径 61	ロクロ製。体部はロクロナゲ。底部は回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒を中量。黒粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	3/4 遺存。竈子窯焼 No. 6
3	須恵器 杯	口径 (126) 器高 34 底径 61	ロクロ製。体部はロクロナゲだが、ロクロ目不明。下縁は回転ヘラケズリか。底部は回転ヘラ切り後ナデ。	砂粒・黒粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	1/3 遺存。竈子窯焼 No. 1
4	須恵器 杯	口径 (134) 器高 (39)	ロクロ製。体部はロクロナゲで、下縁はヘラケズリか。	砂粒・黒粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	口縁部1/5 遺存 下層一括
5	土師器 土師甕	口径 (180) 器高 (95)	口縁部はユビオサエ後傾ナデ。胴部は傾位ヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	砂粒を中量。赤色粒(大)を微量含む。色調は明赤褐色。焼成は良好。	口縁部破片。武威産 No. 4
6	須恵器 鉄線甕	推定径 (96) mm。残存長 (32) mm。残存重 (55) mm。厚さ 9 mm。孔径 (10) mm。重さ 12.4 g。胎質硬質を帯用。底部回転ヘラ切り。砂粒少量。黒粒及び白色粒微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。			1/4 遺存。竈子窯を転用 No. 1

## 12号竪穴住居跡 (SI012)

※法量欄の( )は概元値。( )は遺存数を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 112 器高 38 丸底	外面は口縁部傾ナデ。体部ヘラケズリ。内面は傾ナゲ。	粘土は緻密で、細砂粒を少量。白色粒・赤色粒を微量含む。色調は明黄色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 128
2	土師器 杯	口径 130 器高 44 丸底	口縁部は内外面とも傾ナゲ。体部外面はヘラケズリ。内面はナデ。底部に布目状残存。内面全面を炭素焼着による黒色地層。	砂粒を中量。白色粒・赤色粒・黒粒を少量含む。色調は明黄色。焼成は良好。	2/3 遺存。SI013 とほぼ同焼 No. 130, 131, P2, 一括, SI013 一括
3	土師器 杯	口径 117 器高 37 丸底	口縁部は内外面とも傾ナゲ。体部外面はヘラケズリ。内面はナデ。口縁部外面及び内面全面に炭化仕上げによる黒色地層。	粘土は緻密で、砂粒を少量。白色粒を微量含む。色調は明黄色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 150, 一括
4	土師器 杯	口径 124 器高 40 丸底	口縁部は内外面とも傾ナゲ。体部外面はヘラケズリ。内面はナデ。内外面とも全面炭化仕上げによる黒色地層。	粘土は緻密で、細砂粒を少量。赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 170
5	土師器 土師甕	口径 125 器高 55 底径 65	口縁部は内外面とも傾ナゲ。体部外面はユビオサエ(無調整)。底部は布目状残り後傾位手持ちヘラケズリ。体部内面はナゲ。	砂粒を中量。白色粒・赤色粒を少量含む。色調は明黄色。焼成は良好。	体部一部欠損。滑止赤切り痕 No. 156, SK1 一括
6	土師器 皿	口径 148 器高 31 丸底	外面は口縁部傾ナゲ。体部ヘラケズリ。内面はヘラミガキ。内外面とも滑潤面により調整不明。	砂粒を中量。白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 141, 143, 146, 一括

7	土師器 甕	口径 器高 底径	(104) 59	口縁部は内外縁とも鋭ナデで、外面には段を有する。体部外縁はヘラケズリ、内面は鋭ナデ取ヘラミガキ。体部は内外縁とも熱染による調色が悪く調整不明瞭。	胎土は緻密で、細砂を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 No. 36、一括
8	土師器 鉢	口径 器高 底径	(178) 34	外縁は口縁部鋭ナデ。内面は横ナデ鋭ヘラミガキ。内面に磨き上げによる黒色焼斑、輪痕みがある。	細砂を少量、白色粒を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部破片 一括
9	土師器 甕	口径 器高 底径	(206) 325 70	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリで、一部に電鍍腐材付着。底縁は全面ヘラケズリ。胴部内面は横位ヘラナデ後ナデ。	細砂を多量、白色粒を少量、黒粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 70, 63, 68, 71, 74, 76, 81, 138, カマド、一括
10	土師器 甕	口径 器高 底径	198 329 64	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は上段から中段で横位ヘラケズリ。下段は横位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、赤色粒(大)を中量、白色粒・細砂を少量含む。色調は黒褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 No. 36, 41, 42, 49, 51, 52, 58 ~ 60, 67, 122, 158, 160, 169, カマド
11	土師器 甕	口径 器高	(204) 300	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリだが、調整により調整は不明瞭。内面は横位のヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒・赤色粒・黒粒を微量含む。色調は明赤褐色。焼成はやや不良。	1/5 遺存 No. カマド, 53, 30, 44, 64 一括
12	土師器 甕	口径 器高	(178) 301	胴部外面は横位ヘラケズリ。内面はヘラナデ後ナデ。	粗砂粒を多量、白色粒・赤色粒・黒粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	胴部 3/5 遺存 No. 46, 55, 61, 62, 65, 66, 105, 166, 167, カマド、一括
13	土師器 甕	口径 器高	(158) 291	胴部外面は横位ヘラケズリだが、調整により調整は不明瞭。内面はヘラナデ。	粗砂粒を中量、白色粒・細砂を微量含む。色調は明赤褐色。焼成は不良。	胴部 4/5 遺存 No. 159, 51, 36 ~ 58, 88, 152, 154, 157, 162, 164, カマド、一括
14	土師器 甕	口径 器高 底径	(161) 402 62	胴部外面は横位ヘラケズリ後ナデ。底面に木炭痕が残る。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を中量、黒粒を少量含む。色調は褐色。焼成は良好。	底面 1/2 遺存 No. 139、一括
15	土師器 甕	口径 器高 底径	(182) 420 82	胴部外面は横位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒・細砂を微量含む。外縁は赤褐色。内面は黒褐色。焼成は不良。	1/4 遺存。S103 と近縁同接合 No. 72, 86, 161, 162, カマド、一括、S103 一括
16	土師器 甕	口径 器高 底径	(183) 53	胴部外面は横位ヘラケズリで、下縁は横位ヘラケズリ。調整により調整は不明瞭。内面は横位ヘラナデ。胴部は電鍍腐材付着がみられる。ゆがみが多い。	粗砂粒を中量、赤色粒を少量、白色粒・細砂を微量含む。色調は明赤褐色。焼成はやや不良。	胴下部一部 1/2 遺存 No. 37, 155, 163, カマド
17	土師器 甕	口径 器高 底径	(144) 224 78	口縁部は鋭ナデ。胴部外縁は横位ヘラケズリで、下縁は横位ヘラケズリ。内面は横位及び斜位のヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を微量、黒粒を中量含む。色調は黒褐色。焼成はやや不良。	2/3 遺存。S103 と近縁同接合 No. 145, 143, 62, カマド、S103 一括
18	土師器 小型甕	口径 器高 底径	(269) 330 88	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ。底部分縁はヘラケズリ。内面は上半が横位ヘラナデ、下半がヘラナデ後ヘラミガキ。	胎土は緻密で、細砂を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	2/5 遺存。S103 と近縁同接合 No. 90, 84, 101, 103, 113, カマド、一括、S103 一括
19	土師器 小型甕	口径 器高 底径	142 155 74	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後ナデ。底部分縁はヘラケズリ後ナデ。内面は横位ヘラナデ。	胎土は緻密で、細砂を少量、赤色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存。S103 と近縁同接合 No. 92, 99, 93, 98, 110, 154, カマド、一括、S103 一括
20	土師器 小型甕	口径 器高 底径	(139) 151 70	口縁部は鋭ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後下縁を横位ヘラケズリ。内面はヘラナデ後ナデ。	胎土は緻密で、一部がマール状。細砂を中量、赤色粒を少量含む。外面は明黄褐色。内面はぶい褐色。焼成は良好。	1/4 遺存 No. 104, 107, 119, カマド、一括
21	土師器 甕	口径 器高 底径	(143) 66	胴部外面は横位ヘラケズリ。底部分縁は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒・赤色粒・黒粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	1/3 遺存 No. 43, 115, 116, 118, カマド、一括
22	土師器 甕	口径 器高 底径	(132) 311 96	胴部外面はヘラケズリ後ナデ。さらに横位ヘラミガキ。内面は横位ヘラナデ後底部分縁をヘラミガキ。	粗砂粒を中量、白色粒・赤色粒・細砂を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	胴下部一部 1/3 遺存 No. 90, 106, 109, 111, 140, 147、 一括
23	土師器 甕	口径 器高 底径	(202) 311 85	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後下半にヘラミガキ。胴部内面は横位ヘラナデ後横位ヘラミガキ。底面及び孔縁部は横位ヘラケズリ。	砂粒を多量、赤色粒(大)を少量、細砂を微量含む。外面はぶい黄褐色。内面は褐色。焼成は良好。	3/4 遺存。S103 と近縁同接合 No. 30, 47, 60, 104, 112, 114, 134, カマド、一括、S103 一括
24	土師器 甕	口径 器高	(67) 300	胴部外面は横位のハケメ。内面はヘラナデ。	粗砂粒を多量、赤色粒を微量含む。外面は黒色。内面は黒褐色。焼成はやや不良。	胴部破片 No. 137、一括
25	瀬田器 甕	口径 器高	(135)	外面は平行タキ。内面に同心円状尙具痕が残る。	胎土は緻密で、細砂・黒色粒を少量、黒粒を微量含む。外面は暗灰黄色。内面は黄褐色。焼成は良好。	胴部破片。調整部か No. 149
26	石製品 磨物石	長さ	170 mm、幅 83 mm、厚さ 43 mm、重さ 635.4 g。			完存 No. 12
27	石製品 磨物石	長さ	165 mm、幅 83 mm、厚さ 141 mm、重さ 651.1 g。側縁部に溝槽による調整。			完存 No. 23
28	石製品 磨物石	長さ	156 mm、幅 84 mm、厚さ 44 mm、重さ 625.6 g。			完存 No. 24
29	石製品 磨物石	長さ	126 mm、幅 56 mm、厚さ 37 mm、重さ 486.0 g。			完存 No. 153
30	石製品 磨物石	長さ	152 mm、幅 52 mm、厚さ 37 mm、重さ 430.8 g。			完存 No. 9
31	石製品 磨物石	長さ	141 mm、幅 54 mm、厚さ 45 mm、重さ 485.5 g。			完存 No. 6
32	石製品 磨物石	長さ	152 mm、幅 57 mm、厚さ 31 mm、重さ 492.4 g。			完存 No. 11

33	石製品 彫物石	長さ 147 mm、幅 55 mm、厚さ 38 mm、重さ 519.6 g。	完存 No. 15
34	石製品 彫物石	長さ 144 mm、幅 48 mm、厚さ 38 mm、重さ 363.4 g。	完存 No. 4
35	石製品 彫物石	長さ 150 mm、幅 61 mm、厚さ 47 mm、重さ 549.3 g。	完存 No. 18
36	石製品 彫物石	長さ 146 mm、幅 63 mm、厚さ 40 mm、重さ 480.4 g。	完存 No. 33
37	石製品 彫物石	長さ 141 mm、幅 63 mm、厚さ 27 mm、重さ 541.7 g。	完存 No. 20
38	石製品 彫物石	長さ 140 mm、幅 55 mm、厚さ 47 mm、重さ 530.0 g。	完存 No. 22
39	石製品 彫物石	長さ 139 mm、幅 57 mm、厚さ 38 mm、重さ 495.3 g。	完存 No. 7
40	石製品 彫物石	長さ 137 mm、幅 51 mm、厚さ 44 mm、重さ 433.8 g。	完存 No. 2
41	石製品 彫物石	長さ 140 mm、幅 71 mm、厚さ 27 mm、重さ 441.0 g。	完存 No. 14
42	石製品 彫物石	長さ 137 mm、幅 58 mm、厚さ 35 mm、重さ 447.5 g。	完存 No. 17
43	石製品 彫物石	長さ 130 mm、幅 59 mm、厚さ 41 mm、重さ 537.4 g。	完存 No. 13
44	石製品 彫物石	長さ 127 mm、幅 37 mm、厚さ 43 mm、重さ 429.9 g。	完存 No. 19
45	石製品 彫物石	長さ 125 mm、幅 41 mm、厚さ 45 mm、重さ 331.4 g。	完存 No. 28
46	石製品 彫物石	長さ 119 mm、幅 50 mm、厚さ 42 mm、重さ 361.3 g。	完存 No. 30
47	石製品 彫物石	長さ 121 mm、幅 61 mm、厚さ 36 mm、重さ 445.6 g。	完存 No. 5
48	石製品 彫物石	長さ 118 mm、幅 54 mm、厚さ 34 mm、重さ 633.4 g。	完存 No. 16
49	石製品 彫物石	長さ 102 mm、幅 68 mm、厚さ 34 mm、重さ 363.2 g。	下部欠損 No. 21

### 13号整穴住居跡 (SI013)

※裏面側の ( ) は復元線、( ) は遺存線を示す。

No.	器種	技法 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 130	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリだが調整著しく調整不明瞭。内面は全面ヘラミガキ。外面口縁部から体部上半及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	胎土は散密で、細砂粒を少量・白色灰・赤色炭を微量含む。外面は褐色。内面は明赤褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 一括
		器高 51			
2	土師器 杯	口径 134	外面は口縁部斜ナデ、体部は細なヘラケズリだが上半は無調整。内面は斜ナデ後底部付足をナデ。ナデ上げ痕あり。体部には輪磨み痕が散見。口縁部外面及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を中量、白色灰・赤色炭(大)を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	体部一部欠損 No. 209, 208, 220, 一括
		器高 50			
3	土師器 杯	口径 136	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリ。内面は斜ナデだが、底部付足は調整により調整不明瞭。外面底部を除いて磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を少量、白色灰・赤色炭(大)を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 130
		器高 30			
4	土師器 杯	口径 139	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリ。内面は斜ナデだが、底部付足はナデ。内面にナデ上げ痕あり。口縁部外面及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を中量、白色灰・赤色炭を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 19, 一括
		器高 46			
5	土師器 杯	口径 133	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリ。内面は斜ナデ後底部付足をナデ。口縁部外面から体部上半及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	胎土は一部がマーブル状で、細砂粒を中量、白色灰・赤色炭を微量含む。内面はぶい黄褐色。外面は黄褐色。焼成は良好。	口縁部・体部一部欠損 No. 238, 211, 223, カマド、瓶形、一括
		器高 49			
6	土師器 杯	口径 126	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリだが輪の直下は無調整。内面は斜ナデで、底部付足はナデ。ナデ上げ痕あり。口縁部外面及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	胎土は散密で、細砂粒及び白色炭を微量含む。色調は明黄褐色。外面はぶい黄褐色。焼成は良好。	完存 No. 18
		器高 49			
7	土師器 杯	口径 133	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリ。内面は斜ナデだが、底部付足は磨仕上げにより調整不明瞭。内外面とも全面磨仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、白色灰・赤色炭を微量含む。色調はぶい黄褐色。焼成は良好。	完存 No. 17
		器高 48			
8	土師器 杯	口径 (144)	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリだが、輪の直下は無調整。内面は斜ナデだが、底部付足は磨仕上げにより調整不明瞭。口縁部外面から体部上半及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	胎土は散密だが、一部がマーブル状。細砂粒・白色灰・赤色炭を少量含む。色調は褐色。焼成は良好。	3/4 遺存 No. 227, 228
		器高 46			
9	土師器 器高	口径 (123)	外面は口縁部斜ナデ、体部ヘラケズリだが上半は無調整。内面は斜ナデ後底部付足をナデ。全面磨仕上げによる黒色処理。	砂粒を中量、白色灰・赤色炭を微量含む。色調は黒褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 No. 171, 瓶形
		器高 45			
10	土師器 杯	口径 130	外面は口縁部斜ナデ、外面ヘラケズリ。内面は斜ナデだが、底部付足はナデ。ナデ上げ痕あり。口縁部外面から体部上半及び内面全面に磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を少量、白色灰・赤色炭を微量含む。色調は褐色。焼成は中々不良。	口縁部1/2欠損 No. 155
		器高 49			

11	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(130) 49	口縁部は内外面とも横ナデ、底部外面はヘラケズリだが、裏側のための調整不明。底部内面はヘラナデ集む。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒・白色粒・赤色粒を微量含む。外面は褐色、内面はぶい・褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 No. 183、一拵
12	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	132 45	口縁部は内外面とも横ナデ、底部外面はヘラケズリだが、裏側のための調整不明。内面は体部横ナデ、底部ナデ。全面漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒・赤色粒を微量含む。色調は灰黄褐色。焼成は良好。	体部を1/3欠損 No. 201, 222、一拵
13	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	129 45	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリだが後の直下は無調整。内面は横ナデ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、細砂粒・赤色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	一部欠損 No. 211, 210
14	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	135 43	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリだが後の直下は無調整。内面は横ナデだが、底部分近はナデ、ナデ上げあり。全面漆仕上げによる黒色処理。体部に輪転痕が残る。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒・白色粒を微量含む。色調は灰黄色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 217, 188, 210、一拵
15	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	131 43	口縁部は内外面とも横ナデ、外面はヘラケズリ後ミガキ状のヘラナデが施されるが、後の直下は無調整。体部内面は横ナデ後底部付近をナデ、全面漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、細砂粒を少量含む。外面はぶい・黄褐色。内面は淡黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 22、一拵
16	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	136 37	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ後底部付近をナデ。口縁部外面から体部上半及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は一部マーブル状で、砂粒を少量、赤色粒を微量含む。内面は黒褐色。外面はぶい・黄褐色。焼成は良好。	完存 No. 207
17	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(128) 38	外面は口縁部横ナデで、体部ヘラケズリ。底部に静止糸切り痕が残り、内面は横ナデだが、底部分近は横ナデより調整不明。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は灰黄色。焼成は良好。	3/5 遺存、静止糸切り痕 No. 137, 38、一拵
18	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(127) (38)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。外周全面及び口縁部内面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を中量、白色粒を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良好。	口縁部4/5 遺存 一拵
19	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(40)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリだが、調整により裏側に不調整。内面は横ナデだが、底部分近はヘラナデ後ナデ。内面とも口縁部から体部上半を漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部欠損 No. 49
20	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(144) (45)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部から体部上半が横ナデ、底部分近がナデ。口縁部の内外面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、細砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 No. 47
21	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(112) (38)	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。	砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 一拵
22	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	148 41	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部から体部上半が横ナデ、底部分近がヘラナデ後ナデ。ナデ上げあり。	細砂粒を中量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 187, 203, 222, 224、一拵、柄形
23	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	143 37	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリだが上半は無調整。内面は口縁部から体部上半を横ナデ、下半がヘラナデ後ナデ。口縁部の内外面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	完存 No. 225
24	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(154) 39	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリだが喉直上より調整は中不明。内面は横ナデだが、底部分近は調整により調整不明。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい・褐色。焼成は良好。	2/1 遺存 No. 21
25	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	137 48	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ後一部ヘラミガキだが、調整により調整は不明。内面は横ナデ後底部付近をナデ。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 3
26	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	148 40	外面は口縁部横ナデ、体部下半をヘラケズリ後全面に横ナデ。内面は横ナデだが、底部分近はナデ。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損、静止糸切り痕 No. 216, 214、カマド、一拵
27	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	137 50	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデだが、底部分近はナデ。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、砂粒を少量、赤色粒を微量含む。色調はぶい・褐色。焼成は良好。	完存 No. 188
28	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	150 47	外面は口縁部横ナデ、体部下半をヘラケズリ後全面に横ナデ。内面は横ナデだが、底部分近は横ナデ。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密だが、一部がマーブル状。細砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい・褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損、静止糸切り痕 No. 23
29	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(100) 35	口縁部は内外面とも横ナデ。体部は内外面とも横ナデにより調整不明だが、外面はヘラケズリ。内面は横ナデだが、内周全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は一部マーブル状で、細砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 一拵
30	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	145 42	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。底部分近は横ナデより調整不明だがナデが、全面に漆仕上げによる黒色処理。	細砂粒・白色粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成はやや不十分。	4/5 遺存 No. 215, 213, 214、カマド、一拵
31	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	153 44	外面は口縁部横ナデ、体部は横ナデヘラケズリだが、上部は無調整。内面は横ナデ後底部付近をナデ。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。体部に輪転痕が残り。	砂粒を中量、白色粒を少量、赤色粒(大)を微量含む。色調はぶい・褐色。焼成は良好。	完存 No. 16、一拵
32	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	(160) 43	外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。ナデ上げあり。口縁部外面及び内面全面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はぶい・黄褐色。焼成は良好。	2/5 遺存 No. 20, 19
33	土師器 灰丸	口径 器高 丸底	148 58	外面は口縁部横ナデ、体部はナデ(無調整?)後ヘラケズリ。内面は横ナデ後底部付近をナデ。体部をナデ。口縁部外面に漆仕上げによる黒色処理。	粘土は澁密で、砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は淡黄褐色から褐色。焼成は良好。	完存 No. 188, 189, 190, 191, 205、一拵

34	土師器 坏	口径 140 器高 54 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラナデ後口縁部粗ミガキ状の横位ヘラナデ、体部はナデ。	胎土は緻密で、砂粒を少量、白色粒、赤色粒を微量含む。色調は淡黄褐色から褐色。焼成は良好。	実存 No. 6
35	土師器 坏	口径 150 器高 36 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリ、内面はヘラナデ後ヘラミガキ。	胎土は緻密で、砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はふい黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 212, 200, カマド
36	土師器 坏	口径 135 器高 37 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリ、内面は調離により調整不明だが、ヘラナデ後ヘラミガキ。	胎土は一部マール状で、砂粒を中量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はふい黄褐色。焼成は良好。	体部一部欠損 No. 9, 8, 一拵
37	土師器 坏	口径 153 器高 54 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリ、内面は口縁部ミガキ状の横位ヘラナデ、体部は調離により調整不明。	砂粒を中量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は淡黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 4, カマド
38	土師器 坏	口径 156 器高 42 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリだが一部は無調整。内面は口縁部ミガキ状の横位ヘラナデ、体部ヘラケズリ後ナデだが、調離のため調整不明。	胎土は一部マール状で、砂粒を中量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はふい黄褐色。焼成は良好。	口縁部1/4欠損 No. 206, 一拵
39	土師器 坏	口径 150 器高 63 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部はナデ（無調整？）後体部の一部と底部をヘラケズリ、内面は横ナデ後ヘラナデ。	砂粒を中量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はふい黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 一拵
40	土師器 钵	口径 (160) 器高 (63) 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部はナデ（無調整？）後横位ヘラナデ。内面は横ナデ後体部はナデ。口縁部外面に横位上上げによる黒色染斑。	胎土は緻密で、砂粒を少量含む。外面はふい黄褐色。内面は淡黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 170, 一拵
41	土師器 钵	口径 (130) 器高 (58) 丸底	外面は口縁部縮みナデ、体部ヘラケズリ。内面は横ナデ。	砂粒を中量、白色粒を少量含む。色調は淡褐色。焼成は良好。	口縁部1/4欠損 No. 103, 一拵
42	土師器 手取ね	口径 (98) 器高 46 底径 60	口縁部外面は横ナデ、体部外面はユビオサエ後ナデ。底部は一部ヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 一拵
43	土師器 手取ね	口径 (98) 器高 46 底径 58	口縁部から体部外面はユビオサエ後ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調はふい黄褐色。焼成は良好。	1/2 遺存 一拵
44	須恵器 甕	口径 (140) 器高 (53) 丸底	口縁部縮みナデ、天弁部は同径ヘラケズリ。	砂粒を中量、白色粒を少量、調離を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	口縁部破片 一拵
45	土師器 甕	口径 206 器高 318 底径 78	口縁部は縮みナデ、胴部外面は縦位ヘラケズリを施し下唇を横位ヘラケズリ後中位を縦位ヘラミガキ。胴部中位と下位の境界を横ナデで閉鎖し、その上を横位ヘラケズリ。底部は全面ヘラケズリ。内面はヘラナデだが、胴部内面下半は無調整により調整不明。	砂粒を多量、白色粒を少量、赤色粒を微量含む。外面は黄褐色から褐色。内面は黄褐色。焼成は良好。	口縁部1/2欠損 No. 167, 一拵
46	土師器 甕	口径 193 器高 318 底径 63	口縁部は縮みナデ、胴部外面は縦位ヘラケズリ後縦位ヘラナデ。底部は全面ヘラケズリ。胴部内面は横位ヘラナデだが、中位は無調整により調整不明。	粗砂粒を多量、白色粒を少量、赤色粒を微量含む。外面は黄褐色から褐色。内面は黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 168, 一拵
47	土師器 甕	口径 (228) 器高 51 底径 (76)	口縁部は縮みナデ、胴部外面は縦位ヘラケズリだが、下半に一部横位ヘラケズリ。横位ナデ。底部は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデだが、下半は無調整により調整不明。	砂粒を多量、白色粒を中量、赤色粒を微量含む。色調は黒褐色～灰黄褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 No. 151, 152, 160, カマド, 煎餅, 一拵
48	土師器 甕	口径 227 器高 317 底径 81	口縁部は縮みナデ、胴部外面は縦位ヘラケズリ後下唇を横位ヘラケズリ。底部は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を中量含む。色調は淡黄褐色。焼成は良好。	3/4 遺存 No. 152, 一拵
49	土師器 甕	口径 196 器高 326 底径 75	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ後下唇を横位ヘラケズリ。底部は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ後下半をナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を中量含む。色調は黒褐色～灰黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 153, 130, 143, カマド, 一拵
50	土師器 甕	口径 195 器高 404 底径 75	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。胴部内面は斜位ヘラナデ。胴部中位～下位は内外面とも調離により調整不明。	粗砂粒を多量、白色粒を中量、赤色粒を少量含む。外面はふい黄褐色。内面は淡黄褐色。焼成は良好。	口縁部及び胴部一部欠損 No. 150, 160, 176 ~ 180, 167, カマド, カマド煎餅, 一拵
51	土師器 甕	口径 190 器高 263 底径 65	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ後縦位ヘラミガキ。底部は全面ヘラケズリ。胴部内面は横位ヘラナデだが、胴部中位の一部に横位ヘラケズリ。	胎土は緻密で、砂粒を少量、白色粒・調離を微量含む。外面は明黄褐色。内面は淡黄褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 No. 94, 95, 98, 119, 147, 148, 149, 185,
52	土師器 甕	口径 157 器高 213 底径 81	口縁部外面は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。口縁部内面はミガキ状の横位ヘラナデ。胴部内面は横位ヘラナデ。	胎土は緻密だが、粗砂粒を中量、赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	口縁部一部欠損 No. 2
53	土師器 小甕	口径 107 器高 (145) 底径 69	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ後縦位ヘラナデ。下部は横位ヘラケズリ。底部外面は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	胎土は緻密だが、砂粒を中量、白色粒・赤色粒を少量含む。外面は黄褐色～ふい黄褐色。内面は黒褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 カマド, No. 197, 198, 218, 221, 一拵
54	土師器 甕	口径 202 器高 (285) 丸底	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を中量含む。色調はふい黄褐色～灰黄褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 (底径欠損) No. 166, カマド, 一拵
55	土師器 甕	口径 219 器高 (282) 丸底	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ後中位を縦位ヘラナデ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を中量、赤色粒を微量含む。外面は黒褐色～灰黄褐色。内面は黒褐色。焼成は良好。	4/5 遺存 (底径欠損) No. 169
56	土師器 甕	器高 (318) 底径 63	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。底部には木炭痕が残る。内面は横位ヘラナデだが、下半は無調整により調整不明。	粗砂粒を多量、白色粒を中量、赤色粒を微量含む。外面は黄褐色～灰黄褐色。内面は黄褐色。焼成は良好。	3/5 遺存 (口縁部欠損) No. 151, 一拵
57	土師器 甕	口径 161 器高 326 底径 96	口縁部は縮みナデ。胴部外面は縦位ヘラケズリ。底部は全面ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。	粗砂粒を中量、白色粒・赤色粒を少量含む。色調は明黄褐色。焼成は良好。	胴部一部欠損 No. 5, 192 ~ 194, 196, カマド, 一拵

58	土師器 甕	器高 (133) 底径 82	胴部外面は斜位へラケズリ後ナデ。底部は全面ヘラケズリ。内面はヘラナデ。	砂粒を中量。白色粒・赤色粒・黒粒を少量含む。外面は明栗色〜にぶい黄褐色。内面は褐色。焼成は良好。	胴下半〜底部3/4道存 No. 24 ~ 30, 32, 一拵
59	土師器 甕	口径 191 器高 323 底径 53	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラナデ後ヘラミガキ。底部は全面ヘラケズリ。胴部内面上半は4横位ヘラナデ。下半がヘラナデ後ヘラミガキ。	砂粒を中量。白色粒・黒粒を少量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	一部欠損 No. 16, 121 ~ 127, 30, 96, 107, 110, 114, 115, 117, 118, 119, 134, 一拵
60	土師器 甕	口径 196 器高 (317) 底径 74	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半がヘラケズリ後ヘラミガキ。下半が斜位へラケズリ後ナデ。内面はヘラナデだが、測器より調整不明。	砂粒・白色粒を中量。赤色粒・黒粒を微量含む。外面はぶい黄褐色。内面は明栗色〜黄褐色。焼成はやや不良。	1/5道存。S1012と道間因接合 No. 97, 92, 93, 96, 98, 100, 104 ~ 106, 111, 120, 152, 153, カマド, 一拵, S1012一拵
61	土師器 甕	口径 208 器高 263 底径 103	口縁部外面は横ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後横位ヘラナデ。下端は横位ヘラケズリ。口縁部内面は横位ヘラミガキ。胴部内面は横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ。底面及び孔周縁部は横位ヘラケズリ。	胎土は緻密だが、粗砂粒を中量。赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	完存 No. 161
62	土師器 甕	口径 249 器高 267 底径 99	口縁部外面は横ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ。胴部内面は上位が横位ヘラケズリ後ヘラナデ。中位から下位が横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ。底面及び孔周縁部は横位ヘラケズリ。	胎土は緻密だが、粗砂粒を中量。白色粒を微量。赤色粒を少量含む。色調は褐色。焼成は良好。	一部欠損 No. 162 ~ 165, 一拵
63	土師器 甕	口径 276 器高 236 底径 100	外面は口縁部は横ナデ。胴部外面は横位ヘラケズリ後横位ヘラナデ。口縁部内面は横位ヘラミガキ。胴部内面は横位ヘラケズリ。後横位ヘラミガキ。底面及び孔周縁部は横位ヘラケズリ。	胎土は緻密だが、粗砂粒を少量。赤色粒を微量含む。色調は褐色。焼成は良好。	胴部一部欠損 No. 156 ~ 160, 一拵
64	須恵器 小甕	口径 141 器高 (152) 丸底	口縁部はロクロナデ。胴部は格子タケ後上半はカキメ。胴部内面は上半がロクロナデ。下半はナデだが、同心円状の歪みがある。	砂粒を少量。白色粒・赤色粒・黒粒を微量含む。外面は灰白色。内面は灰黄色・褐色。焼成は不良。	1/2道存。S1012と道間因接合 No. 16, 12, 13, 15, 一拵, S1012一拵
65	須恵器 直口甕	器高 (97) 丸底	口縁部は横ナデ。胴部外面は下位に4段の凹輪ヘラケズリ。肩帯には凹輪が通る。内面はロクロナデ。	細砂粒を少量。白色粒・黒色粒・黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	口縁部欠損 No. 154
66	須恵器 直口甕	口径 (88) 器高 (56)	口縁部は横ナデ。外面に2条の凹輪が通る。	砂粒・白色粒・赤色粒を少量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	口縁部のみ1/2道存 No. 147, 一拵
67	須恵器 直口甕	口径 (262) 器高 (110)	口縁部は横ナデ。胴部外面はロクロナデ後横位ヘラミガキ。反対側に凹輪ヘラケズリ。胴部内面には同心円状の歪み(カキメ)。1対の長状の把手を有するが片側は欠損。	粗砂粒・黒粒を少量。白色粒を中量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	4/5道存(口縁部欠損) No. 159, 146, 185, 186, 226, カマド, 一拵
68	須恵器 直口甕	器高 (105)	外面に格子タケ後カキメ。腕部面の一部に平指面。	砂粒・白色粒を少量。黒色粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	胴部一部 No. 45, 一拵
69	須恵器 直口甕	器高 (76)	外面には磨給波状文及び沈線が通る。体部下端は横位ヘラケズリ。内面はナデ。	砂粒を少量。白色粒・黒色粒・黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	1/3道存 No. 135
70	土師器 鉢	長さ 58 mm, 幅 55.5 mm, 厚さ 22 mm, 孔径 6.0 mm, 重さ 92.8 g.			完存 No. 149
71	土師器 土玉	径 8.0 mm, 高さ (5.0) mm, 孔径 1.5 mm, 重さ 0.3 g.	外周に磨仕上げによる黒色処理。		下部欠損 No. 144
72	石製品 鉢	長さ 41.5 mm, 幅 41.0 mm, 厚さ 22.5 mm, 孔径 7.0 mm, 重さ 64.8 g.			完存 No. 138
73	鉄製品 長尺鋸	身長 15.5 mm, 身厚 7.2 mm, 身長 2.7 mm 頂さ 4.3 mm 鋸身部の形は長三角形で、断面は片平鋸。身長 (22.5) mm × (42.0) mm, 断面 4.3 mm × 5.4 mm, 厚さ 3.2 mm × 4.3 mm, 重さ 1.4 g ± 2.0 g			鎌倉期一部 No. 43
74	鉄製品 長尺鋸	長さ (95) mm, 幅 4.5 mm, 厚さ 4.0 mm, 重さ 4.5 g, 73 と同一個体か。			胴部 一拵
75	石製品 脇物石	長さ 166 mm, 幅 70 mm, 厚さ 40 mm, 重さ 708.1 g.			完存 No. 63
76	石製品 脇物石	長さ 138 mm, 幅 68 mm, 厚さ 28 mm, 重さ 309.0 g.			完存 No. 64

#### 14号壺穴住居跡 (S1014)

※括弧内の ( ) は瓶元径、( ) は道存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 甕	器高 (16) 底径 (61)	口縁部は横ナデ。胴部外面はロクロナデ。底部は凹輪後横位ヘラケズリ。内面はヘラミガキで、縦面観察による黒色処理。	粗砂粒を少量。赤色粒・黒粒を微量含む。外面はぶい黄褐色。内面は褐色。焼成は良好。	底部破片 S1013一拵
2	須恵器 甕	口径 (128) 器高 38 底径 (64)	口縁部は横ナデ。胴部外面はロクロナデだが、ロクロナデ不明。底面はナデにより、切り離し不明。	砂粒を少量。白色粒・黒色粒・黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好だが、やや軟質。	1/3道存。三笠遺産か S1013 No. 141, 一拵
3	須恵器 甕	口径 (134) 器高 39 底径 (70)	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半がナデ。下半が横位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。口縁部は上方にのみみ出される。	粗砂粒及び石質・長石の副産物を中量。赤色粒(大)・黒粒を微量含む。外面は明栗色。内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	1/5道存。益子遺産か S1013一拵

#### 15号壺穴住居跡 (S1015)

※括弧内の ( ) は瓶元径、( ) は道存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 高台付甕	器高 (19) 底径 (72)	口縁部は横ナデ。胴部外面はロクロナデ。底部は凹輪後横位ヘラケズリ。内面はヘラミガキで、縦面観察による黒色処理。	砂粒を中量。白色粒を少量。黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	底部破片 益子遺産か 一拵
2	土師器 甕	口径 (211) 器高 (176)	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半がナデ。下半が横位ヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。口縁部は上方にのみみ出される。	粗砂粒及び石質・長石の副産物を中量。赤色粒(大)・黒粒を微量含む。外面は明栗色。内面はぶい黄褐色。焼成は良好。	口縁部一部上半1/5道存 No. 3, 一拵

## 16号整穴住居跡 (SI016)

■法量類の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 (1600) 器高 (36)	外面は口縁部縮ナデ、体部ヘラケズリだが、厚縁により調整不明。内面は縮ナデ。全面磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を中量含む。色調は灰白色。焼成は不良。	口縁部1/5遺存 底部磨片
2	土師器 手取瓶	器高 (31) 底径 (55)	体部外面はユビオヤエで、輪紋みねが残る。底部外面はナデ、内面はヘラナデ後ナデ。	胎土は一部マール状で、砂粒を少量、白色粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部破片 No. 6
3	土師器 甕	口径 (1800) 器高 (90)	口縁部は縮ナデ。体部外面は履位のナデ、内面はヘラナデ。	砂粒を多量、全部粒を少量、白色粒・赤色粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は良好。	口縁部2/5遺存 No. 3, 4, カマド、一括
4	土師器 甕	口径 (1980) 器高 (480)	口縁部は縮ナデ。胴部外面は履位ヘラケズリ。内面はヘラナデ後ナデ。	粗砂粒を中量、白色粒・赤色粒・黒粒を微量含む。色調は灰白色。焼成は中々不良。	口縁部1/4遺存 No. 7、一括
5	土師器 甕	口径 (1970) 器高 (177)	外面は履位のヘラケズリ。内面は履位のヘラナデ。	粗砂粒を多量、白色粒を微量、赤色粒・黒粒を少量含む。外面は褐色、内面は黄褐色。焼成は良好。	底部破片 (口縁部1/8残存) No. 1, 2, 3, 20
6	土師器 小瓶	口径 (174) 器高 (151)	口縁部は縮ナデ。体部外面は履位ヘラケズのヘラケズリ。内面はヘラナデ後ナデ。	胎土は緻密で、細砂粒を少量、白色粒を微量含む。外面は褐色、内面は灰白色。焼成は良好。	口縁部から胴部のみ3/4遺存 No. 11 ~ 20、一括
7	土師器 甕	器高 (33) 底径 (73)	胴部外面は履位ヘラケズリ後下端を履位ヘラケズリ。内面はヘラナデ。	砂粒を中量、白色粒を少量、赤色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	底部 No. 21
8	石製品 燧石	長さ 121 mm、幅 43 mm、厚さ 30 mm、重さ 306.1 g。			完存 No. 22
9	石製品 燧石	長さ 164 mm、幅 62 mm、厚さ 56 mm、重さ 925.9 g。			完存 No. 23

## 17号整穴住居跡 (SI017)

■法量類の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 (900) 器高 (25)	外面は口縁部縮ナデ、体部ヘラケズリ。内面は口縁部縮ナデ、体部ナデ。内面全面を磨仕上げによる黒色処理。	胎土は緻密で、細砂粒・白色粒を微量含む。外面は灰白色、内面は黄褐色。焼成は良好。	2/5遺存 一括
2	須恵器 鉄瓶	器高 (45)	口クロ型。外面はタタキ焼カキメ、内面はナデ。	黒色粒を少量、白色粒・黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部破片 一括
3	石製品 燧石	長さ 125 mm、幅 48 mm、厚さ 37 mm、重さ 329.3 g。			完存 No. 2

## 9号掘立 (SB009)

■法量類の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	石製品 磁石	長さ 91 mm、幅 (50) mm、厚さ 21 mm、重さ 140.7 g。	黒灰岩質。		底部欠損 SB009P1 No. 1

## 7号円形周溝遺構 (SX007)

■法量類の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	石製品 燧石	長さ 138 mm、幅 60 mm、厚さ 41 mm、重さ 372.2 g。			完存 No. 3

## 17号土坑 (SK017)

■法量類の( )は復元値、( )は遺存値を示す。

No.	器種	法量 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 杯	口径 (155) 器高 (80) 底径 (61)	口クロ型。外面は口クロナデ後体部下端を履位の手持ちヘラケズリ。底部は押し止り垂切り後全面手持ちヘラケズリ。内面は体部を履位ヘラケズリ。底部を単一方向のヘラミガキ。内面全面を黒色磨仕上げによる黒色処理。	細砂粒を少量、白色粒を微量含む。外面は灰白色、内面は褐色。焼成は良好。	3/4遺存 No. 14, 12, 37、一括
2	須恵器 高台付杯	器高 (22) 底径 (72)	口クロ型。外面は履位ヘラケズリ。切り離しは不明。高台付。	細砂粒・白色粒を微量含む。外面は灰褐色、内面は暗灰色。焼成は良好。	底部1/4遺存 一括
3	須恵器 高台付杯	器高 (12) 底径 (93)	断面は全面履位ヘラケズリ。高台は欠損。内面は口クロナデ。	砂粒を中量、白色粒・黒粒を微量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部3/5遺存 No. 1
4	須恵器 甕	口径 (42) 底径 (92)	口クロ型。体部は口クロナデ。底部は全面履位ヘラケズリ。底部外面に緑銅「汁」。底部内面に滑紙による平滑面を有する。	粗砂粒・白色粒を中量、黒色粒を少量含む。色調は灰色。焼成は良好。	底部4/5遺存。観察 No. 50, 44, 45
5	須恵器 甕	器高 (63)	外面は平行タタキ。内面はヘラナデ。	砂粒・白色粒を少量、黒色粒・黒粒を微量含む。灰色。焼成は良好。	底部破片。調査室前 No. 11
6	須恵器 瓦	器高 (78)	内面には布目紋が残る。縦割痕が認められる。凸面は格子タタキ。	砂粒を中量、白色粒を微量含む。色調は黄褐色。焼成は良好。	破片。乙女不動原瓦葺遺構 No. 42
7	石製品 燧石	長さ 161 mm、幅 62 mm、厚さ 47 mm、重さ 748.6 g。	両端部に顕著な縦打痕。燧石を燧石に転用。		完存 No. 33

7	須恵器 壺	器高 (86)	外面は平行タタキ。内面に同心円状の当具痕残る。	黒砂殻を中量、赤色殻・黒殻を微量含む。色調は暗青灰色。泥成は良好で硬質。	胴部破片 UT-S-15 一拵
8	須恵器 壺	器高 (82)	外面は格子タタキ。内面に同心円状の当具痕残る。	砂殻を少量、黒色殻・黒殻を微量含む。色調は灰オリーブ色。泥成は良好で硬質。	胴部破片 UT-S-15 一拵

### 遺構外（平安時代）

※法目欄の（ ）は單元値、〈 〉は遺存値を示す。

No.	器種	法目 (mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 坪	口徑 136 器高 48 底徑 63	ロクロ製形。体部はロクロナデだが、ロクロ目は不明瞭。底部は回転へく切り残らず。体部外面に黒青「見」か。	砂殻を少量、白色殻・黒殻を少量含む。色調は暗灰黄色。焼成はやや不良でやや硬質。	突存。葦子窯産か、法目 No. 1
2	灰陶器 瓶	器高 225 底徑 (72)	ロクロ製形。底部は全面回転へくズリ軟角高台付柱。内面は灰黒を刷毛塗りで染め。トシンの痕跡有り。	緻密な胎土。黒砂殻・黒色殻を微量含む。外面は灰白色。内面はオリーブ黄。焼成は強靱。	底面 1/3 露存。軟殻壺産 UT-S-15 確認

表 3 小穴一覧表

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土・出土遺物 (点数)・その他
PG01	B9	40	31	31	黒色土 (10YR1.7/1) ローム敷及び粘土殻少量含む。
PG02	D6	28	20	33	粗灰色土 (10YR4/1) ローム堆中量。焼土殻微量含む。
PG03	—	—	—	—	欠番。
PG04	—	—	—	—	欠番。
PG05	—	—	—	—	欠番。
PG06	C9	—	—	—	S801 (P4) に変更。
PG07	C8	—	—	—	S801 (P3) に変更。
PG08	C8	—	—	—	S801 (P2) に変更。
PG09	C8	—	—	—	S801 (P1) に変更。
PG10	C8	—	—	—	S802 (P1) に変更。
PG11	C8	—	—	—	S801 (P1) に変更。
PG12	C8	—	—	—	S802 (P12) に変更。
PG13	C8	—	—	—	S802 (P3) に変更。
PG14	C8	—	—	—	S802 (P4) に変更。
PG15	—	—	—	—	欠番。
PG16	C9	—	—	—	S801 (P13) に変更。
PG17	C9	—	—	—	S802 (P5) に変更。
PG18	C9	41	39	24	粗灰色土 (10YR4/1) ローム堆微量含む。
PG19	C9	—	—	—	S801 (P6) に変更。
PG20	C9	—	—	—	S801 (P12) に変更。
PG21	C9	—	—	—	S802 (P6) に変更。
PG22	C9	32	32	15	粗灰色土 (10YR3/1) ローム堆少量。焼土殻微量含む。
PG23	C9	—	—	—	S801 (P7) に変更。
PG24	C8	—	—	—	S801 (P8) に変更。
PG25	C8	—	—	—	S801 (P9) に変更。
PG26	C8	—	—	—	S802 (P9) に変更。
PG27	B8	35	32	20	粗灰色土 (10YR4/1) ローム堆中量含む。
PG28	B8	34	25	36	粗灰色土 (10YR4/1) ローム堆少量含む。
PG29	—	—	—	—	欠番。
PG30	C8	—	—	—	S802 (P10) に変更。
PG31	C8	42	37	41	堆積土不明。
PG32	—	—	—	—	欠番。
PG33	B8	—	—	—	S803 (P2) に変更。
PG34	B7	—	—	—	S803 (P9) に変更。



番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土・出土遺物(点数)・その他
PO35	B7	—	—	—	S8003 (P1) に変更。
PO36	—	—	—	—	欠番。
PO37	C8	—	—	—	S8002 (P2) に変更。
PO38	—	—	—	—	欠番。
PO39	C9	—	—	—	S8001 (P5) に変更。
PO40	C8	—	—	—	S8001 (P10) に変更。
PO41	C9	—	—	—	S8002 (P7) に変更。
PO42	C8	—	—	—	S8002 (P11) に変更。
PO43	C8	—	—	—	S8002 (P8) に変更。
PO44	D8	80	60	70	埋藏土不明。
PO45	—	—	—	—	欠番。
PO46	—	—	—	—	S8016 に変更。
PO47	—	—	—	—	欠番。
PO48	—	—	—	—	欠番。
PO49	—	—	—	—	欠番。
PO50	—	—	—	—	欠番。
PO51	15	62	40	71	黒褐色土 (10YR2/2) ローム数録量含む。しまり強い。
PO52	H4	58	42	20	暗褐色土 (10YR3/3) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO53	—	—	—	—	欠番。
PO54	H5	34	23	34	黒色土 (10YR1.7/1) ローム数録量含む。
PO55	H5	34	33	26	埋藏土不明。
PO56	H5	44	40	18	黒褐色土 (10YR2/2) ローム数録量含む。
PO57	H5	43	41	10	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO58	H5	44	43	17	暗褐色土 (10YR3/3) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO59	H5	35	33	19	褐色土 (10YR4/4) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO60	H6	41	35	28	黒褐色土 (10YR2/2) ローム数録量含む。埋土数録量含む。
PO61	H6	54	35	18	黒色土 (10YR1.7/1) ローム数録量。ローム塊録量含む。
PO62	H6	35	34	16	黒色土 (10YR1.7/1) ローム数録量含む。
PO63	H6	45	37	11	黒褐色土 (10YR3/2) ローム数録量含む。
PO64	H6	50	40	36	黒色土 (10YR2/1) ローム数録量含む。
PO65	H6	—	—	—	S4001 (P1) に変更。
PO66	H6	—	—	—	S4001 (P5) に変更。
PO67	—	—	—	—	欠番。
PO68	H6	50	30	19	柱腐有り。黒褐色土 (10YR2/2) ローム数及びローム塊数録量含む。
PO69	H6	37	34	19	黒色土 (10YR1.7/1) ローム数録量含む。
PO70	H6	39	32	31	黒色土 (10YR1.7/1) ローム数録量。ローム塊録量含む。
PO71	H6	—	—	—	S4001 (P2) に変更。
PO72	H6	—	—	—	S4001 (P6) に変更。
PO73	H6	32	30	29	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量含む。
PO74	16	45	44	17	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO75	H6	28	27	24	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量。ローム塊録量含む。しまりやや強い。
PO76	H7, 17	52	43	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO77	H7	28	27	17	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量含む。しまりやや強い。
PO78	H7	30	28	20	黒色土 (10YR2/1) ローム数録量。ローム塊録量含む。
PO79	H6	—	—	—	S4001 (P3) に変更。
PO80	H6	—	—	—	S4001 (P7) に変更。
PO81	H6	46	46	23	黒褐色土 (10YR2/3) ローム数録量。ローム塊録量含む。しまりやや強い。
PO82	H6	—	—	—	S4001 (P4) に変更。
PO83	H6, H7	—	—	—	S4001 (P8) に変更。

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	裏土・出土遺物(点数)・その他
P084	B6	47	39	14	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。しまりやや強い。
P085	G7	31	28	32	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒中量。ローム塊微量含む。
P086	H7	40	31	29	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P087	G8	40	38	19	堆積土不明。
P088	G8	34	33	40	堆積土不明。
P089	H8	37	31	19	堆積土不明。
P090	G8	38	35	20	堆積土不明。
P091	G8	27	26	13	堆積土不明。
P092	G8	32	32	13	堆積土不明。
P093	H4	28	26	11	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量。ローム塊微量含む。
P094	E3	40	38	13	暗褐色土 (10YR3/5) ローム粒少量。ローム塊微量。今市軽石及び七本椀軽石粒微量含む。
P095	G3	37	36	40	黒色土 (10YR2/1) ローム粒及びローム塊微量含む。
P096	G3	45	43	12	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P097	G3	33	31	15	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒微量含む。土師器環(1)出土。古墳時代。
P098	G3	48	43	21	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。土師器ハケ羹(1)出土。古墳時代。
P099	G3	41	40	28	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P100	G3	35	31	30	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。土師器杯(1)出土。奈良・平安時代か。
P101	—	—	—	—	欠番。
P102	E2	38	35	59	暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒中量。ローム塊微量含む。
P103	E2	37	33	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P104	E3	30	28	39	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量。七本椀軽石粒微量含む。
P105	E3	28	25	27	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P106	B2	34	31	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P107	B2	26	23	19	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P108	B3	43	41	14	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒微量。今市軽石粒微量含む。
P109	E3	30	27	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P110	E3	35	24	27	黒色土 (10YR2/1) ローム粒多量。ローム塊微量含む。
P111	B4	39	35	19	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量。今市軽石粒微量含む。
P112	B3	—	—	—	SB013(P1)
P113	B3	—	—	—	SB013(P2)
P114	B4	—	—	—	SB013(P3)
P115	B3	—	—	—	SB013(P4)
P116	G4	44	29	28	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P117	B5	38	29	17	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。
P118	—	—	—	—	欠番。
P119	B5	38	27	67	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P120	—	—	—	—	欠番。
P121	B5	28	23	39	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒及びローム塊微量含む。
P122	—	—	—	—	欠番。
P123	—	—	—	—	欠番。
P124	—	—	—	—	欠番。
P125	C5	30	30	57	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム塊微量含む。
P126	C5	24	20	90	堆積土不明。
P127	—	—	—	—	欠番。
P128	C5	29	23	34	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒微量含む。
P129	B5	45	42	37	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P130	B5	40	30	37	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム塊微量含む。
P131	B5	25	22	15	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量。ローム塊微量含む。
P132	B5	35	31	33	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒中量。ローム塊微量含む。

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	腹土・出土遺物 (点数)・その他
P133	B5	30	37	43	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, ローム塊微量含む。
P134	B5	30	28	18	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。
P135	C5	22	21	28	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム塊微量含む。
P136	C5	23	19	15	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量, 今市軽石極微量含む。
P137	C5	32	25	30	黒褐色土 (7.5YR2/2) ローム粒微量含む。
P138	C5	33	32	38	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, ローム塊微量含む。
P139	—	—	—	—	欠番。
P140	B6	23	23	24	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P141	B6	45	41	56	黒褐色土 (10YR1.7/1) ローム粒微量含む。
P142	B6	27	26	11	黒褐色土 (10YR2/1) ローム粒少量, 炭化炭粒微量含む。
P143	B6	41	33	32	黒褐色土 (7.5YR2/2) ローム粒微量含む。
P144	B6	23	21	15	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P145	B6	30	26	12	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒微量含む, 土師器類 (1) 出土, 古墳時代。
P146	B6	29	23	26	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P147	C6	76	65	38	堆積土不明。
P148	C6	31	31	21	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P149	C6	33	37	17	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量, 今市軽石及び七本塚軽石極微量含む。
P150	B6	31	28	35	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒少量, ローム塊微量含む。
P151	B6	27	25	31	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P152	B7	25	24	37	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。
P153	B6	26	25	29	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P154	B6, C6	44	41	35	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P155	C7	29	25	32	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P156	C7	38	26	31	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P157	C7	43	33	27	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, ローム塊微量含む。
P158	C7	47	42	22	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P159	C7	48	44	16	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P160	C7	47	35	18	黒色土 (7.5YR1.7/1) ローム粒極微量含む。
P161	C7	23	21	16	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P162	C7	27	25	20	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P163	C7	43	41	10	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P164	C7	30	25	17	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P165	C7	32	27	35	黒色土 (10YR2/1) ローム粒極微量含む。
P166	C7	59	52	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量, 今市軽石極微量含む。
P167	—	—	—	—	S3017 (P7) に変更。
P168	C7	46	44	16	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P169	—	—	—	—	S3017 (P6) に変更。
P170	C7	31	21	52	黒色土 (10YR2/1) ローム粒極微量含む。
P171	D7	66	57	15	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒極微量含む。
P172	C7, B7	73	65	22	黒色土 (7.5YR1.7/1) ローム粒極微量含む。
P173	C7	73	66	11	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P174	D7	75	68	62	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P175	—	—	—	—	欠番。
P176	C6	28	24	30	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒微量含む。
P177	—	—	—	—	S3017 (P8) に変更。
P178	C7	38	27	35	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P179	C6	37	31	7	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒極微量含む。
P180	C6	27	22	10	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P181	—	—	—	—	S3017 (P9) に変更。

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	覆土・出土遺物(点数)・その他
P182	—	—	—	—	欠番。
P183	06	62	62	9	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量。今市硬石粒微量含む。
P184	06	49	40	41	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P185	06	52	—	17	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量。七本硬石粒微量含む。
P186	06	—	62	16	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量。今市硬石及び七本硬石粒微量含む。
P187	—	—	—	—	S0017(P1) に変更。
P188	—	—	—	—	欠番。
P189	06	31	30	37	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P190	06	29	27	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P191	06	44	37	36	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P192	06	36	28	33	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P193	06	25	22	12	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。しまりや平強い。
P194	06	34	24	9	暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒少量。今市硬石粒微量含む。
P195	06	27	25	29	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P196	06, 06	30	23	33	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P197	06	26	25	17	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム粒微量含む。
P198	06	28	24	21	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P199	06	34	28	21	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代。
P200	—	—	—	—	S0017(P1) に変更。
P201	06	63	33	14	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒及び炭化粒微量含む。土師器片 (1)、土師器片 (3) 出土。古墳時代か。
P202	06	52	49	8	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代。
P203	06	35	28	20	黒色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P204	06	56	48	10	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代か。
P205	06	104	72	35	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P206	—	—	—	—	S0017(P2) (長 35、短 31) に変更。
P207	07	37	31	32	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P208	06	29	25	25	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P209	06	30	24	24	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代か。
P210	06	39	34	34	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P211	06	—	—	30	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P212	06	—	—	—	S0017(P3) に変更。
P213	06	34	26	25	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P214	—	—	—	—	欠番。
P215	06	68	65	42	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P216	—	—	—	—	欠番。
P217	06	44	41	14	暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒微量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代か。
P218	—	—	—	—	S0233 に変更。
P219	06	67	65	10	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒微量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代か。
P220	06	31	28	34	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P221	—	—	—	—	S0017(P4)
P222	07	86	—	30	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒少量。ローム粒微量含む。
P223	07	67	60	19	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P224	06	—	—	—	S0016(P4) に変更。
P225	06	—	—	—	S0015(P9) に変更。
P226	06	—	—	—	S0016(P1) に変更。
P227	06	29	28	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム粒少量含む。
P228	06	38	26	51	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒中量。ローム粒微量含む。
P229	06, 06	—	—	—	S0016(P2) に変更。
P230	06	32	30	22	黒褐色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。土師器片 (1) 出土。古墳時代か。

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土・出土遺物(点数)・その他
P231	D6	28	20	31	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, 焼土粒極微量含む。
P232	B6	25	21	23	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒及びローム塊少量含む。しまり強い。
P233	—	—	—	—	S8019 (P9) に変更。
P234	B5	26	24	14	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P235	B6	—	—	—	S8016 (P5) に変更。
P236	B5	27	21	31	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P237	B5	—	—	—	S8015 (P2) に変更。
P238	B5	28	28	10	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量含む。
P239	B5	27	23	29	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, ローム塊微量含む。
P240	B5	49	42	9	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P241	B5	31	25	19	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P242	B5	38	30	32	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P243	B5	33	25	24	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒中量含む。
P244	B5	41	25	18	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。土師器遺 (1), 須恵器高台坪 (2) 出土。平安時代か。
P245	—	—	—	—	欠番。
P246	—	—	—	—	欠番。
P247	B5	56	—	36	S8003 と重複。新旧関係は P247 → S8003。
P248	B5	37	33	15	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P249	B5	25	20	20	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P250	—	—	—	—	欠番。
P251	B5	38	30	36	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P252	—	—	—	—	欠番。
P253	B5	—	—	—	S8019 (P19) に変更。
P254	B5	—	—	—	S8019 (P1) に変更。
P255	B5	34	27	32	黒色土 (10YR2/1) ローム粒及びローム塊少量含む。
P256	—	—	—	—	欠番。
P257	B5	27	24	38	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P258	—	—	—	—	欠番。
P259	F5	22	21	17	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒中量含む。
P260	B5	31	26	27	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P261	F5	25	25	22	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒中量含む。須恵器遺 (1) 出土。古墳時代か。
P262	F5	35	30	25	黒色土 (10YR2/1) ローム粒少量含む。
P263	F5	30	27	27	堆積土不明。
P264	F5	28	23	16	黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒微量含む。
P265	B6	54	46	18	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒少量, 今市硬石粒微量含む。
P266	F5	44	38	47	土師器遺 (1), 土師器遺 (1) 出土。古墳時代。
P267	F6	34	31	17	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P268	F6	27	23	14	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P269	F6	38	32	39	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P270	F6	31	25	26	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量, 今市硬石粒微量含む。
P271	F6	31	31	15	暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒微量含む。
P272	B5	26	23	15	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P273	B7	19	19	9	黒色土 (10YR2/1) ローム粒微量含む。
P274	F7	32	28	23	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒少量含む。
P275	F6	45	38	35	暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒及び今市硬石粒微量含む。
P276	F6	28	25	15	黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒微量含む。
P277	F6	39	29	8	暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒少量含む。
P278	F7	27	23	10	堆積土不明。
P279	F7	31	29	21	堆積土不明。

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土・出土器物(点数)・その他
P280	F7	28	23	25	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質。今市新石標数層含む。土師器Ⅱ(2)出土。奈良・平安時代か。
P281	—	—	—	—	欠番。
P282	F7	27	21	25	黒色土 (10YR2/1) ローム軟少量含む。古墳時代か。
P283	F7	23	19	26	黒褐色土 (10YR2/2) ローム軟少量含む。
P284	F7	24	22	28	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質含む。土師器Ⅱ(1)出土。古墳時代。
P285	F7	29	21	34	黒色土 (10YR2/1) ローム軟少量含む。
P286	F7	43	41	12	黒色土 (10YR2/1) ローム軟少量含む。
P287	F7	32	30	13	黒褐色土 (10YR2/2) ローム軟少量含む。
P288	G7	26	24	35	黒褐色土 (10YR2/2) ローム軟中層含む。
P289	—	—	—	—	欠番。
P290	G7	29	27	22	黒褐色土 (10YR2/2) ローム軟硬質含む。
P291	F6, G6	30	30	17	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質含む。
P292	G7	24	18	31	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質含む。
P293	B5	57	—	20	黒褐色土 (10YR2/3) ローム軟硬質含む。須恵器Ⅱ(1)出土。S1017と関係。新田関係はP293→S1017。
P294	G7	26	24	19	黒褐色土 (10YR2/3) ローム軟中層含む。しまりやや強い。
P295	F8	28	27	12	黒色土 (7.5YR2/1) ローム軟微量。粘土軟層微量含む。
P296	F8	37	36	56	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質。粘土軟層微量含む。
P297	—	—	—	—	欠番。
P298	F8	24	23	25	黒色土 (10YR2/1) ローム軟硬質含む。
P299	G7	42	36	11	暗褐色土 (10YR3/3) ローム軟層数層含む。須恵器Ⅱ長形Ⅱ(1)出土。古墳時代。
P300	G5	34	31	13	黒褐色土 (10YR2/3) ローム軟層量含む。
P301	G5	31	31	15	黒褐色土 (10YR2/3) ローム軟層量含む。
P302	H5	82	59	20	暗褐色土 (10YR3/3) ローム軟層量含む。

## 第5章 調査の成果

西刑部西原遺跡E区における調査では、竪穴住居跡17軒（建て替え・拡張を含めると25軒）、掘立柱建物跡19棟、欄列1列、円形周溝遺構6基、円形有段遺構1基、土坑40基、溝跡6条、小穴190口を検出した。検出した遺構は、出土遺物や覆土の特徴から縄紋時代及び古墳時代後期から平安時代にかけてのものであることが明らかとなったが、主体となる時期は古墳時代終末期及び平安時代であった。

本章では古墳時代以降について、出土した遺物の特徴を簡単にまとめた上で、遺構別に若干の説明を加えつつ出土遺物や重複関係などから各遺構の時期を推定し、その変遷について検討を行いたい。

### 第1節 出土遺物について

#### (1) 土器

出土した土器の大半は、竪穴住居跡から出土したものである。これらの出土土器を、栃木県の古墳時代後期～平安時代の土器編年を基準とし、さらに周辺遺跡における土器編年を参考にして分類を行った（註1）。以下に、古墳時代、奈良時代、平安時代の3時期に大別して、その出土土器の特徴と傾向を簡単にまとめる。

##### 古墳時代

土師器は、供膳具に坏・高坏・埴・鉢、煮炊具に甕・甔など、貯蔵具に壺などが認められた。

坏は模倣坏が主体となるが、半球形の坏も一定の割合を占める。また、S1012とS1013では模倣坏の底部に糸切り痕が残るものが4点認められた。S1012-5は体部未調整のまま焼成されたもので、S1013-17・26・28は底部に施されたヘラケズリのすき間に糸切り痕が確認できる。高坏は図示できなかった小片を含めても、出土量が極めて少ない。甕は長胴甕が主体であり、大中小の法量差が認められた。このうち、小型甕に関しては坏や甔に似て胎土が緻密で、他の甕とは明らかに異なる胎土を用いて製作されている。このほか、少量ではあるがS1001等ではハケ調整の甕や常総型甕も確認できた。甔は、単孔式や多孔式のものは認められず、全て底が無い形態のものであった。また、球胴で調整にヘラミガキが施されるものを壺としたが、器表面の摩耗により調整が不明瞭なものや被熱痕跡が認められるものなどは甕との分類が困難であった。

須恵器は、供膳具に坏・蓋など、貯蔵具に甕・瓶・壺などが認められた。図示できたのは18点で、TK209～TK217 窯式に併行する段階のものが主体となる。今回の調査区で確認された最も古い須恵器は、土砂採取の際に出土した器台の脚部片（図60-6）と思われるもので、MT85～TK43 窯式に併行するものと推測される。

##### 奈良時代

検出した遺構が少ないため、出土遺物も乏しい。土師器は、供膳具に坏・埴、煮炊具に甕が認められた。甕は少数ながら、常総型甕や「く」の字状の口縁を持つ武蔵型甕が確認できた。須恵器は、供膳具に坏・埴など、貯蔵具に甕・壺などが認められた。図示できたのは11点で、坏及び高台付坏が主体を占める。

##### 平安時代

土師器は、供膳具に坏、煮炊具に甕が認められた。これまでの時期に比べ器種が少ない。坏は全てロクロ整形によるもので、甕はコの字状口縁の武蔵型甕が主体的であった。

須恵器は供膳具に坏、貯蔵具に甕・壺が認められた。坏は底部切り離しが回転ヘラ切りのものが多く、回転糸切りのものは少ないことから、益子窯産のものが主体を占めると推測される。また、土砂採取時に出土した遺物であるが、灰胎陶器碗が1点認められた。猿投窯の黒笹14号窯式のものと考えられる。

#### (2) 石製品

編物石は全部で94点出土した。奈良・平安時代の遺構から出土したのはSK017からの1点のみで、ほかは全て古墳時代の遺構からの出土である。S1001・004・006・012からは、各竪穴住居跡で10点以上の編物石が認められた。時期別に見ると7世紀中葉が37点、7世紀後葉が34点と7世紀中葉～後葉で全体の75%を占める。7世紀前葉～中葉が主体を占めた砂田遺跡例（津野2007）とはやや時期がずれるものの、7世紀代に出土量が多い点は相違しない。

石製模造品は白玉が15点出土した。出土した遺構は調査区南側に偏在し、S1001で10点、S1002で2点、S1003で2点、S1009で1点認められた。しかし、このうちS1009は平安時代の住居跡のため、混入したも

のと考えられる。また、S1003の2点が接合していることや表裏が研磨されているものがほとんど確認できなかったことから、研磨前の未成品の可能性も否定できない。

### (3) 鉄製品

石製品とは対照的に、鉄製品は古墳時代に少なく、平安時代で増加する傾向にある。古墳時代はS1013で鉄鏃が出土した。2点を別個体として図示しているが、同一個体となる可能性が高い。奈良時代にはSE003から2点が出土した。刀子と推測されるが明確ではない。平安時代には鎌や刀子など7点が認められた。S1007から鎌が2点、手鎌及び刀子と考えられるものが各1点、S1008から刀子が2点、SK021から釘と推測されるものが1点出土しており、S1007からの出土量が目立った。

### (4) 文字・記号資料

文字・記号資料は、墨書10点、線刻3点、へら記号1点が確認された(図98)。線刻の占める割合は低く、墨書が大半を占める。墨書が記された器種は全て坏であり、部位は体部外面が6点、底部外面が4点と体部外面への記入がやや多い傾向にある。また、記された文字は種類が豊富で、特定の文字への偏りは認められなかった。注目されるのは、不明瞭だが「金」と推測される文字や則天文字の「天」である。栃木県内における類例は、「金」が小山市金山遺跡及び下野市下野国分寺跡、則天文字の「天」が宇都宮市砂田遺跡や下野市落内遺跡、那珂川町吉田新宿古墳群で認められた(註2)。線刻・へら記号が記された器種は坏・坏であり、部位は全て底部外面であった。

これらの文字・記号資料は、S1007・008・009・010、SK017・032、SE002の7遺構で確認されており、墨書4点が認められたS1008や墨書3点が認められたSE003などひとつの遺構から複数出土する傾向が窺える。これらの時期を見てみると、最も古いのがSK032で確認された線刻で、7世紀中葉と考えられる。奈良時代は、SE002の墨書3点とSK017の線刻1点、平安時代は遺構外出土分を含めた7点の墨書、1点の線刻が認められた。時期を追って墨書の点数が増加する傾向が窺える。



図98 文字・記号資料集成

## 第2節 検出した遺構について

### (1) 竪穴住居跡

検出したのは、古墳時代が10軒、平安時代が7軒であった。最も古い竪穴住居跡は6世紀後葉のS1002で、最も新しいのは9世紀後葉のS1015と考えられる。また、一边が7mを超える大型の竪穴住居跡は古墳時代に限られ、S1001・002・003・013の4軒を検出した。

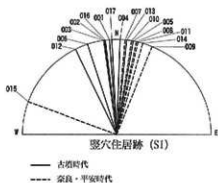
竪穴住居跡の帰属時期は、竈内や床面上から出土した遺物を基準に判断し、表4にまとめた。

#### 主軸方位

各竪穴住居跡の主軸方位は、表4に示した。6世紀後葉～7世紀は主軸が西に、9世紀は東に傾くものが



表4 竪穴住居跡主軸方位



古墳時代

遺構番号	S1001	S1002	S1003	S1004	S1005	S1006	S1012	S1013	S1014	S1017
主軸方位	N49	N59	N59	N22	N10E	N18W	N20W	N6E	N7E	N39
時期	7C後	6C後	7C中	7C前	7C後	7C後	7C中	7C中	7C中	7C後

奈良・平安時代

遺構番号	S1007	S1008	S1009	S1010	S1011	S1014	S1015
主軸方位	N5E	N12E	N22E	N6E	N13E	N16E	N70W
時期	9C中	9C後	9C中	9C後	9C後	9C中	9C後

主体となる傾向が認められた。S1015のみ主軸方位が大きすぎるが、これは電が東壁に構築されていたためであり、主軸に直交する軸の方位はN20Eとなることから、この傾向と相違するものではない。

#### 器種組成

竪穴住居跡から出土した土器を土師器環類（高環・埴等を含む）、土師器甕類（壺等を含む）、土師器甔、手捏ね土器、須恵器環類、須恵器甕類、須恵器壺・瓶類に分類して重量を計量し、表5にまとめた。

まず、遺物の出土量について見てみると、S1013をはじめS1001やS1012など古墳時代の竪穴住居跡からの出土量が、古代と比べて明らかに多いことがわかる。S1002やS1004、S1017の3軒が遺構全体を調査した結果ではないことを考慮すると、この傾向はさらに顕著となる可能性がある。また、須恵器と土師器の比率を比較すると、古墳時代における須恵器の割合はS1013の5%が最高であるのに対し、9世紀後葉にはS1008で44%、S1010で23%と高い割合を示しており、古墳時代に比べ9世紀の竪穴住居跡で須恵器の比率が高い傾向にあることがわかる。

次に、器種組成について見てみると、古墳時代～平安時代を通じて土師器甕がその主体を占めることは変わらないが、土師器環類は9世紀に入ると比率が低くなり、替わって須恵器環の割合が高くなる。また、破片も含めると古墳時代には大半の竪穴住居跡で認められた土師器甕が、9世紀の竪穴住居跡ではほとんど確認できないことは明瞭な時期差として捉えられる。唯一、9世紀中葉のS1009からは2点の土師器甕の細片が出土しているが、これも混入の可能性が高い。

このほか、土師器環の占める割合が50%を超えるS1005や、逆に土師器甕の占める割合が70%を超えるS1007やS1009、S1012は他の住居跡とはやや異なる組成を示しており注目される。また、S1001からは多量の手捏ね土器の細片が出土しており、それが20%近い割合を占めることは特筆すべき点である。

#### (2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の帰属時期は柱穴内から出土した遺物を基準に判断したが、出土量が極めて乏しく、遺物からの時期の特定は非常に困難であった。よって、他遺構との重複関係や主軸方位なども参考にしつつ、帰属時期の推測を行った。

まず、19棟の掘立柱建物跡のうち、時期判断が可能な遺物が出土したのはSB001・002・003・005・009・017の6棟である。この6棟に関しては、出土遺物を基に時期の判断を行った。次に、時期が特定されている遺構との新旧関係から時期の判断をしたのが、SB011・012・015・016の4棟である。出土遺物及び新旧関係から時期の特定が困難だった残りの9棟に関しては、主軸方位（東西棟に関してはこれに直交する軸の方位）から判断した。これは、竪穴住居跡の主軸方位が古墳時代には西に、平安時代には東に傾く傾向にあったことからの推測である。

以下に、各掘立柱建物跡の時期判断の根拠を簡単にまとめる。また、各掘立柱建物跡の主軸方位は表6に示した。

SB001は、柱穴から漆仕上げにより黒色処理を施された模倣破片の細片が出土していることから、7世紀代の遺構と判断した。また、西に隣接するS1003と主軸方位が近似するため、これと併存していた可能性が高いことから、7世紀中葉の遺構となるか。

表5 竪穴住居跡出土土器計量表

遺物番号	土 器 器					須 恵 器				計
	坏類	夾類	甗	手捏ね	総数	坏類	夾類	甗・煎類	総数	
S1001	5361.2	13161.1	45.5	4544.7	23112.5	29.2	319.8	—	349.0	23461.5
S1002	2152.1	2722.2	1712.1	755.3	7341.7	—	—	—	0.0	7341.7
S1003	2980.5	4606.0	275.6	124.8	7986.9	91.2	—	—	91.2	8078.1
S1004	437.8	711.8	28.9	—	1178.5	—	—	—	0.0	1178.5
S1005	2174.6	1574.5	42.7	79.5	3871.3	—	8.9	—	8.9	3880.2
S1006	778.8	1840.7	—	—	2619.5	—	—	—	0.0	2619.5
S1007	527.4	7938.6	—	—	8466.0	671.2	403.3	—	1074.5	9540.5
S1008	611.0	1551.0	—	—	2162.0	496.5	300.9	883.6	1681.0	3843.0
S1009	53.7	1425.7	24.9	—	1504.3	172.2	—	10.0	182.2	1686.5
S1010	245.6	829.9	—	—	1075.5	178.5	135.0	—	313.5	1389.0
S1011	270.0	229.1	—	—	499.1	5.4	36.3	—	41.7	540.8
S1012	2215.8	17345.1	1885.9	53.3	21500.1	11.7	192.4	—	204.1	21704.2
S1013	13499.3	39737.7	6740.7	483.5	60461.2	51.2	1816.5	1112.1	2979.8	63441.0
S1014	68.4	—	—	—	68.4	137.0	—	5.8	142.8	211.2
S1015	115.7	1328.8	—	—	1444.5	33.0	88.3	—	121.3	1565.8
S1016	28.9	1906.7	168.4	101.6	2205.6	—	—	—	0.0	2205.6
S1017	57.0	169.6	—	—	226.6	37.0	—	34.8	71.8	298.4

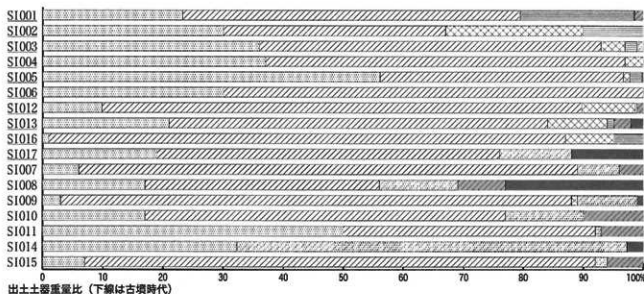
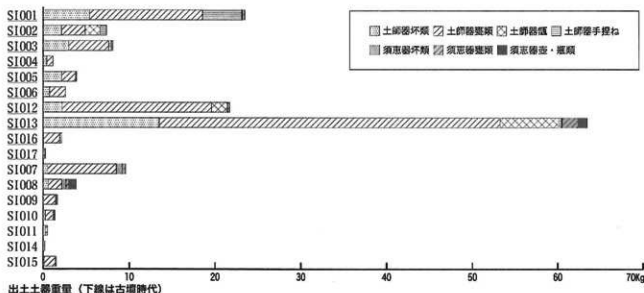


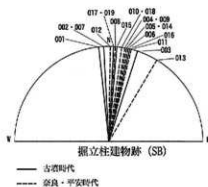
表6 掘立柱建物跡主軸方位

遺構番号	SB001	SB002	SB003	SB004	SB005	SB006	SB007	SB008	SB009	SB010
主軸方位	N9°E	N3°W	N18E	N10E	N11E	N12E	N3E	N4E	N10E	N8E
柱間単位	2.0尺	2.1尺	—	4.3尺	—	2.8尺	2.0尺	—	—	—

遺構番号	SB011	SB012	SB013	SB014	SB015	SB016	SB017	SB018	SB019
主軸方位	N14E	N1E	N31E	N11E	N2E	N13E	N3E	N8E	N3E
柱間単位	3.0尺	2.25尺	—	—	3.4尺	—	3.3尺	—	—

※東西軸に固しては主軸に直交する軸の方位を示す。



SB002は、柱穴内から半球形の環の細片が出土していることから、7世紀代の遺構と判断した。また、この細片とS1001から出土した土師器環の中に胎土・調整が類似するものがあることから、S1001と同様の7世紀後葉の遺構となる可能性が高い。

SB003は、柱穴内から漆仕上げによる黒色処理を施された模倣環が出土していることから、7世紀代の遺構と判断した。ただし、S1003と近接することからこれと併存するとは考えにくく、7世紀前葉または後葉となる可能性がある。

SB004は、柱穴内から7世紀代と考えられる遺物が出土しているが、これは重複するS1005からの混入と考えられるため、遺物から時期の特定はできなかった。しかし、新旧関係から7世紀後葉のS1005より新しいことは確実である。また、9世紀代の竪穴住居跡の主軸方位が東に振れる傾向にあることから、同じく9世紀代になる可能性が高いと判断した。

SB005はSB009と柱穴が重複しており、新旧関係はSB005が新しいことが確認されている。SB009からはコの字口縁を有する武蔵型甕の口縁部破片が出土していることから、9世紀中葉以降の年代と判断した。

SB006は柱穴内から遺物が出土しなかったため、根拠としては乏しいが主軸方位から9世紀代と推測した。SB007は、柱穴内から土師器壺と考えられる細片が出土していること及び主軸方位が西に傾くことから、7世紀代と推測した。

SB008は、重複するSB005との新旧関係からSB005より古いことは確実であるが、他に時期判断の材料に乏しい。主軸方位が南に位置するS1007と近似することから、同じく9世紀代と推測した。

SB009は、柱穴内からコの字状口縁を持つ武蔵型甕の細片が出土しているため、9世紀中葉の遺構と判断した。

SB010は、重複するS1004との新旧関係から7世紀前葉以降となることは確実だが、柱穴内から遺物が出土していないため時期特定が困難である。9世紀中葉のSB009と主軸が似ることや同じ東西棟であることから、SB009とそれほど時期差は無いと推測し、9世紀代の遺構と考えた。

SB011は、重複するSB009との新旧関係から、それより新しいことが確認されている。よって、9世紀中葉以降の遺構と判断した。

SB012は、重複するS1008との新旧関係から、それより新しいことが確認されている。よって、9世紀後葉以降の遺構と判断した。

SB013は、重複するS1011との新旧関係からそれより古くなると考えられるが、柱穴内から遺物が出土していないため時期の特定は難しい。根拠としては乏しいが、主軸が東に傾くことから9世紀代の遺構と推測した。

SB014は、S1015と重複するが新旧関係は不明であった。柱穴内から遺物が出土していないため、根拠としては乏しいが、主軸が東に傾くことから9世紀代と推測した。

SB015はSB016と、SB016は7世紀中葉のSK034と重複し、新旧関係はSB015→SB016→SK034であった。このことから、SB015・016は7世紀中葉以前の遺構と判断した。

SB017は柱穴内から漆仕上げにより黒色処理された土師器環が出土していることから、7世紀代の遺構と

判断した。北側に位置するSI013の東壁と柱筋がほぼ揃うことから、これと併存していたと推測すると7世紀中葉となる可能性がある。

SB018は出土遺物、重複ともに認められなかったため、根拠としては乏しいが主軸が東に傾くことから9世紀代と推測した。

SB019は柱穴内から非クロ整形の土師器坏が出土していることから、少なくとも平安時代より前の時期になると考えられる。また、西に隣接するSB017と主軸方位が一致することから、同じく7世紀中葉となる可能性が高い。

以上、各掘立建物跡について時期の推定を行った結果、8棟が古墳時代、11棟が平安時代と考えられた。また、これらの推測を補完するデータとして、建築単位(室伏 2006)を求めた(表6)。7世紀のSB001やSB002、9世紀のSB011などで矛盾しない値を得ることができたが、桁と梁が1:1となるような建物跡や全体が検出されていない建物跡では建築単位を求めることが困難なため、全掘立柱建物跡についてデータを得ることはできなかった。

### (3) 円形周溝遺構

円形周溝遺構は出土遺物が少なく、時期の特定は困難であった。出土遺物から時期が推測できたのは、SX007のみである。覆土中から半球形の坏が出土していることから7世紀代と考えた。SX003は南東側の開口部が入口部分とすれば、その主軸方位はSI006やSI012とほぼ一致することから、同様に7世紀中葉～後葉となる可能性がある。SX001・002・005・006の4基が、SX003やSX007と同じ時期の遺構になるとは限らないが、他の時期に構築されたとする明確な根拠もないことから、ここでは7世紀の遺構と考えた。また、直径が5m以下のSX001・005と6m以上のSX002・003・006・007に分類できることから、規模は大小の2種類が存在したようである。

円形周溝遺構は出土遺物が乏しいため、その性格についても明確にはされていない(註3)。このため、全ての覆土を対象に1mm目の篩を使用して篩分け作業を行い、微細遺物の見落としがないよう努めた。これにより、SX007で炭化種実を確認したため、SX007のみ全覆土のフローテーション作業を行い、炭化種実を抽出した。その結果、イネ26点、アワ近似種12点、キビ近似種2点、コムギ23点など多くの炭化種実を確認することができた。また、今回の調査では竪穴住居跡の竪内覆土や円筒形土坑の覆土についてもフローテーション作業を実施し、SI006・008・012やSK030・034でも炭化種実を検出している(附章参照)。これらのうち、検出数が目立つのはSX007やSK030であり、竪穴住居跡の竪内を凌駕する数の炭化種実を確認することができた。ただし、SX007に関しては、ほかの遺構よりも覆土量が多い点も注意すべきである。

また、SX007やSK030では穎が残存したイネやアワ、キビ等を確認できたが、竪穴住居跡内では認められなかった。このことは、SX007やSK030では脱粒前のものが火を受けた可能性を示していると言える。本遺跡と同じく東谷・中島地区遺跡群に属する立野遺跡では、時期が異なるもののSK030のような円筒形の土坑を屋外貯蔵穴と推定している(内山 2005)ことから、やや飛躍するもの出土した炭化種実からは円形周溝遺構もこれと同様の性格を想定できる可能性がある。しかし、SK030の覆土中層から炭化種実が出土している点やこれらがなぜ炭化したのかについては説明が難しい。今後の課題である。

### (4) 円形有段遺構

SK017は、掘り鉢状を呈し底面中央に小穴が掘り込まれるなどの形態的な特徴から、「円形有段遺構」や「井戸状遺構」などと呼称される遺構と考えられ、その性格は氷室とする説が有力である(中山 1996, 1999, 2001a, 2001b)。

直径は3m未満と円形有段遺構としては小型で、排水施設と考えられる底面の小穴は長方形であった。この小穴の長軸に直交する位置に、入口施設と考えられる小穴も検出している。覆土は最下層を除いて人為的な埋め戻し土と考えられるが、焼土層や灰層は確認できなかった。この埋め戻し土中からは、多量の円礫とともに8世紀中葉のものと考えられる土師器や須恵器のほか、小山市乙女不動原瓦窯のものと推測される平瓦の破片が出土している。遺構廃絶時に伴う破片とはいえ、下野薬師寺との関連を窺わせる遺物が氷室と推定されている円形有段遺構から出土した点は興味深い。これらの出土遺物から、少なくとも8世紀中葉には本遺構が廃絶されたと推測される。また、今回の調査で8世紀に帰属すると考えられたのはSK017とSE002・003のみであり、これらの遺構が近接して検出された点も注目される。

## 第3節 遺構の変遷

検出した各遺構の所属時期について、出土した遺物や重複関係などから特定を行った。各時期に属する遺構については、表7にまとめた。この各時期における遺構数の増減などを勘案して、4段階の集落変遷案を想定した(図99～100)。以下に、各時期について簡単に説明する。

## Ⅰ期(6世紀後葉～7世紀前葉)

この時期の遺構としてはSI002やSI004が挙げられるが、遺構数は少なく分布も散在的である。当調査区における集落の成立期である。

## Ⅱ期(7世紀中葉～後葉)

この時期の遺構としては、SI001・003・005・006・012・013・016・017、SB001・002などが挙げられる。遺構数が急激に増加し、一辺が7mを超えるSI001・003・013やSB001・002・017(2×4間)、SB019(5×5間)など大型の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が目立つ時期である。集落は調査区全体に展開するが、7世紀中葉の遺構は調査区の西半分に偏在する。また、掘立柱建物跡も一定の範囲に集中する傾向が窺えた。

## Ⅲ期(8世紀～9世紀前葉)

この時期の遺構としては、円形有段遺構のSK017と井戸跡のSE002・003が挙げられ、これらは調査区北側中央に偏在する。前時期に比べて遺構数が激減し、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を確認することはできなかった。このことから、少なくとも当調査区においては、居住域としての利用が低調な時期であったと考えられる。このことは、SE002やSE003などの井戸跡が、生活用水の確保を目的としたものではなく、SK017の円形有段遺構と関連して掘削された可能性を示唆しているといえよう。

## Ⅳ期(9世紀中葉～後葉)

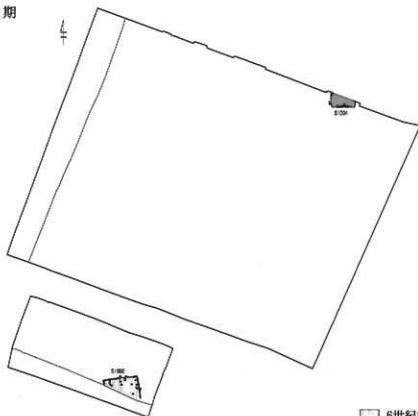
この時期の遺構としては、SI007・008・009・010・011・014・015、SB005・009・011、SE001などが挙げられる。集落の空白期ともいえる前時期から、集落が再び展開する時期である。遺構数は急増するが、分布は調査区の北東側に偏在する傾向が窺える。特に、掘立柱建物跡はSI007・008よりもさらに北東側に密集する。SD002は出土した遺物の主体は7世紀代のものだが、ロクロ整形の土師器環が少量含まれることや溝の延びる方向がSI008やSB011などの竪穴住居跡や掘立柱建物跡とほぼ一致することから、当該期のものと推測した。

以上、今回の調査における成果を概観した。西刑部遺跡全体から見れば、調査範囲は一部に過ぎないため明確ではないが、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の検出数がほぼ同数であることから、ある程度の拠点的な集落であった可能性を指摘できる。また、円形周溝遺構について炭化種実等のデータを蓄積できた一方、新たな課題も挙がることとなった。最後に反省すべき点として、縄紋時代の遺構を見逃さないようするため、遺構確認面をやや下げてしまったことから、円形周溝遺構や平安時代の竪穴住居跡など覆土が薄い遺構の検出状況を悪化させてしまったことが挙げられる。今後はさらなる調査精度の向上に努めたい。

表7 遺構時期一覧表

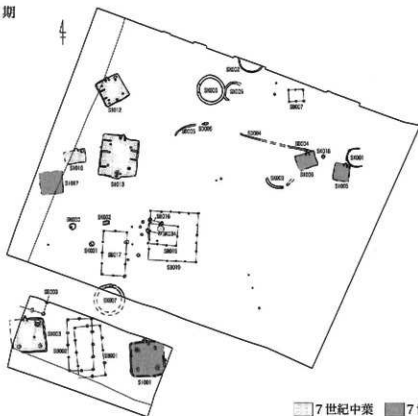
時期	竪穴住居跡(SI)	掘立柱建物跡(SB)	土坑(SK)	井戸(SE)
6世紀後葉	002			
7世紀前葉	004			
7世紀中葉	003・012・013・016	001・017・019	015・016	003・007
7世紀後葉	001・005・006・017	002		030・031・034・018 032
8世紀前葉				
8世紀中葉			017	003
8世紀後葉				002
9世紀前葉				
9世紀中葉	007・009・014	009	004・006・008・010・013・014・018	007
9世紀後葉	008・010・011・015	012	005・011	021
				001

I期



6世紀後葉 7世紀前葉

II期



7世紀中葉 7世紀後葉 7世紀

0 1:800 40m

図99 遺構変遷図-1

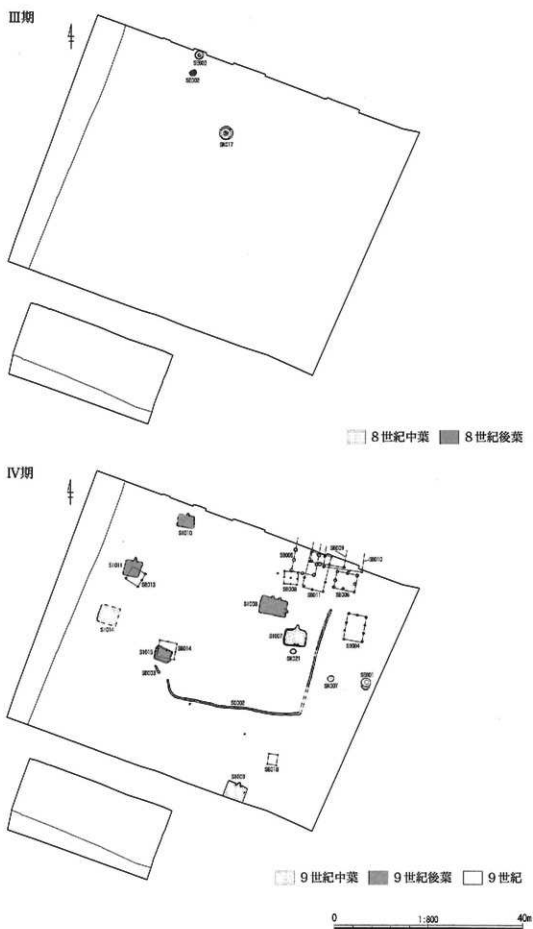


図 100 遺構変遷図-2

註

- 註1 出土土器の分類と年代観は池田(2001・2008), 内山(2005), 田熊・梁木(1990), 津野(1995・1997), 橋本澄朗・藤田典夫ほか(2001), 梁木・田熊(1989)を参考にした。
- 註2 明治大学古代学研究所 栃木県墨書土器データベース(吉村武彦 平成16年～20年度「私立大学学術研究高度化推進事業(学術フロンティア推進事業)」「日本古代における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」)を参考にした。
- 註3 これらの遺構を「環形圍繞遺構」と呼称し, 群馬県や埼玉県での類例から上屋構造を有する簡易な建築物で, 「何らかの動産の貯蔵ないしは保管施設, または作業を行う施設」と推定する意見がある(村上1993)。

参考文献

- 池田敏宏 2001 「大関台遺跡出土土器の位置付けと集落の変遷」『大関台遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2008 「栃木県の土器様相」『古代社会と地域間交流—土師器から見た関東と東北の様相—』国士舘大学考古学会
- 内山敏之 2005 「古墳時代の集落と遺物」『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 大塚雅之・土生朗治ほか 2007 「西刑部西原遺跡発掘調査報告書」宇都宮市教育委員会
- 勝見一品 2005 「磯岡北遺跡」宇都宮市教育委員会
- 田熊清彦・梁木誠 1990 「栃木県の黒色土器—奈良・平安時代を中心に—」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 津野 仁 1995 「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 津野 仁 1997 「栃木県の須恵器編年」『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 津野 仁 2007 「第4章 調査の成果」『東谷・中島地区遺跡群5 砂田遺跡(4～6・18・19・23・24区)』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 中村岳彦ほか 2010 「傾城塚遺跡」佐野市教育委員会
- 中山 晋 1996 「古代日本の「氷室」の実体—栃木県下の例を中心に—」『立正史学』第79号
- 中山 晋 1999 「古代日本の氷室の研究」『食文化助成研究の報告』9 味の素食の文化センター
- 中山 晋 2001a 「氷室研究の現状と課題」『研究紀要』第9号(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 中山 晋 2001b 「大関台遺跡発見の円形有段遺構=氷室について」『大関台遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 橋本澄朗・藤田典夫ほか 2001 「権現山・百目鬼遺跡」(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 初山孝行・塚原考一ほか 1999 「東谷・中島地区遺跡群No. 1 磯岡遺跡(1区)」(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 藤田直也・田代隆 2002 「東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)」(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 藤田典夫・安藤美保 2000 「杉村・磯岡・磯岡北」(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村上泰司 1993 「環形圍繞遺構小考—古墳時代における集落内施設の様相—」『土曜考古』第17号
- 室伏 敏 2006 「奈良・平安時代建築解析法としての建築単位の提言」『古代考古学フォーラム2006 掘立柱・礎石建物建築の考古学—都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法— 資料集』帝京大学山梨文化財研究所
- 梁木誠・田熊清彦 1989 「古代下野の土器様相(1)—古墳時代後期から奈良時代前期を中心として—」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会



## 附章 自然科学分析

### 西刑部西原遺跡 (E区) 出土種実遺体の同定調査

#### <目次>

はじめに	p. 150
1. 試料	p. 150
2. 分析方法	p. 150
3. 結果	p. 150
(1) 遺構別検出状況	p. 150
(2) 種実遺体の記載	p. 150
4. 考察	p. 152
引用文献	p. 152

#### <表・図版一覧>

表 1 種実同定結果

図版 1 種実遺体

## 西刑部西原遺跡（E区）出土種実遺体の同定調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

栃木県宇都宮市西刑部西原遺跡は、田川と鬼怒川より形成された河岸段丘の西側に展開する、田原・願成寺台地上の西側縁辺部（標高約86.5m）に立地する。今回の分析調査では、本遺跡E区の発掘調査で検出された、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡や円形周溝遺構、土坑の覆土のフローテーション作業で回収された種実遺体の同定を実施し、当時の植物質食糧等の利用状況に関する資料を得る。

### 1. 試料

試料は、古墳時代後葉と推定されている竪穴住居跡 S1006・S1012 の電と円形周溝遺構 SX007、土坑 SK030(3層)・SK034、平安時代と推定されている竪穴住居跡 S1008 の1号電・2号電の覆土のフローテーション作業より回収された種実遺体8点約200個である。各試料の詳細は、結果とともに表1に記す。

### 2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、種実等を種類毎に容器に入れて保管する。

### 3. 結果

#### (1) 遺構別検出状況

種実同定結果を表1に示す。栽培種のイネ55個、アワ近似種18個、キビ近似種4個、アワーヒューキビ4個、コムギ86個、ムギ類1個、マメ類1個と、草本のタデ属15個、マメ科6個と、不明12個の種実計202個が検出され、全て炭化している。以下に、遺構別検出状況を記す。

#### ・竪穴住居跡電

S1006電からは、栽培種のイネ、マメ類が各1個検出された。S1012電からは、栽培種のイネ3個と草本のタデ属1個が検出された。S1013電からは、種実は検出されなかった。S1008は、1号電から栽培種のイネ6個と野生種の可能性があるマメ科6個、2号電から栽培種のイネ、キビ近似種が各1個が検出された。

#### ・円形周溝遺構 SX007

栽培種のイネ26個、アワ近似種12個、キビ近似種2個、アワーヒューキビ4個、コムギ23個と、草本のタデ属2個、不明1個が検出された。

#### ・土坑

SK030の3層からは、栽培種のイネ18個、アワ近似種5個、コムギ57個、ムギ類1個と、草本のタデ属12個、不明11個が検出された。SK034からは、栽培種のアワ近似種1個、キビ近似種1個、コムギ6個が検出された。

#### (2) 種実遺体の記載

以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

#### ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや扁平。胚乳は長さ4～5mm、幅2.5～3mm、厚さ1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2～3本の隆条が縦列する。米を蒸したり炊いたりなど調理した場合には、このように明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられ、生米の状態では火熱を受けたことが推定される。また、表面に穎の破片が付着する個体もみられる(SK030)。穎は、完形ならば長さ6～7.5mm、幅3～4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をも

表1. 植実同定結果

分類群	部位	状態	古墳時代後葉						平安時代		
			竪穴住居跡			円形周溝遺構		土坑		竪穴住居跡	
			S1006	S1012	S1013	SX007	SK030	SK034	S1008	S1008	
	電	電	電		3層		1号電	2号電			
イネ	穎・胚乳	完形	炭化					1			
	胚乳	完形	炭化	1	2	15	10		4	1	
		破片	炭化		1	11	7		2		
アワ近似種	穎・胚乳	完形	炭化			3	2				
		破片	炭化				2				
	胚乳	完形	炭化			9	1	1			
キビ近似種	穎・胚乳	完形	炭化			1					
	胚乳	完形	炭化			1		1		1	
アワ・ヒエ・キビ	胚乳	完形	炭化			4					
コムギ	穎・胚乳	破片	炭化				1				
	胚乳	完形	炭化			19	50	6			
		破片	炭化			4	6				
ムギ類	胚乳	破片	炭化				1				
タデ属	果実	完形	炭化		1	2	7				
		破片	炭化				5				
		破片	炭化								
マメ類	種子	破片	炭化								
マメ科	種子	完形	炭化	1					6		
不明植実A		完形	炭化				7				
不明植実		破片	炭化				4				
		完形	炭化			1					

ち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P. Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。胚乳は長さ1.3～1.5mm、幅1.0～1.3mm、厚さ0.8～1.0mm程度の半楕球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑。穎の破片が付着する個体が確認される (SX007-SK030)。穎は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。穎の走査型電子顕微鏡下観察を行うことで、アワに特定される可能性がある。

・キビ近似種 (*Panicum cf. miliaceum* L.) イネ科キビ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。長さ1.8mm、幅1.7mm、厚さ1.2mm程度のやや扁平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上には、径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。表面は粗面で穎の破片が付着する個体が確認される (SX007)。穎は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様で縦列する。穎の走査型電子顕微鏡下観察によりキビと特定される可能性がある。なお、遺存状態が悪く、アワやヒエ属ヒエ (*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) との区別が難しい胚乳を、ハイフォンで結んでいる。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳と穎が検出された。炭化しており黒色。長さ3.5mm、径2.6mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は粗面で、頂部に穎の破片が付着する個体が確認される (SK030)。穎は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。なお、頂部を欠損するなど遺存状態が悪く、オオムギ属オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) との区別が難しい胚乳をムギ類としている。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。炭化しており黒色。長さ1.7mm、径1.5mm程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面。

・マメ類 (*Leguminosae*) マメ科

種子の破片が検出された。炭化しており黒色。破片は子葉の合わせ目から割れた半分未満で、長さ2.3mm以上、幅3mm程度の長楕円体。腹面の子葉の合わせ目上にある長楕円形で縁が隆起する細長い脚を欠損する。

種皮表面はやや平滑で、子葉内面は不明瞭。なお、長さ2.2mm、径1.7mm程度の小型の種子を、野生種の可能性があることから、マメ科として区別している。

#### 4. 考察

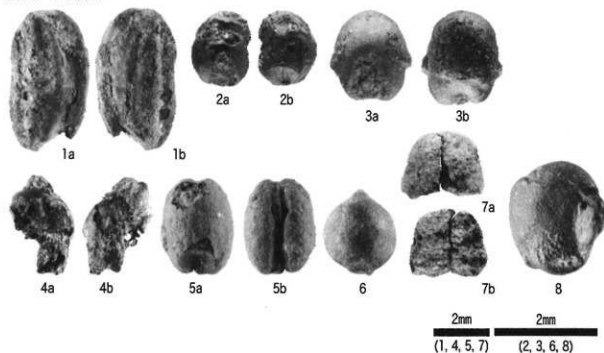
古墳時代～奈良・平安時代と推定されている竪穴住居跡の竈や土坑、円形周溝遺構からは、炭化した栽培種を主体とする炭化種実が確認された。栽培種は、円形周溝遺構 SX007 と土坑 SK030 で比較的多く、全試料を通じてイネ、アワ（近似種）、キビ（近似種）、コムギ、ムギ類、マメ類が確認された。これらは、胚乳や種子が食用される主要な植物質食糧の可食部であることから、当時利用されていた穀類と推定される。また、イネ、アワ近似種、キビ近似種、コムギには、表面に穎が付着した胚乳が確認されることから、穎果（稲穂など）の状態で火を受けたことが推定される。栽培種を除く種実は、草本のタデ属とマメ科が確認された。生態性を踏まえると、調査区周辺に普通に生育していたと考えられる種類であり、何らかの過程を経て遺構内に混入したものと推定される。

#### 引用文献

石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.

図版1 種実遺体



1. イネ 穎・胚乳 (SK030; 3層)
3. キビ近似種 穎・胚乳 (SX007)
5. コムギ 胚乳 (SX007)
7. マメ類 種子 (S1006; カマド)

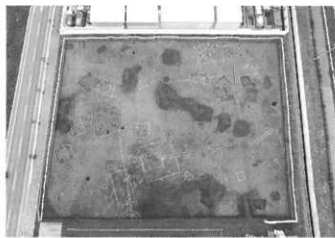
2. アワ近似種 穎・胚乳 (SX007)
4. コムギ 穎・胚乳 (SK030; 3層)
6. タデ属 果実 (SK030; 3層)
8. マメ科 種子 (S1008; カマド)

# 写真図版

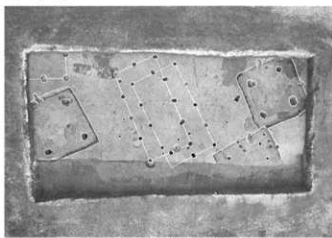




1. 調査区全景空撮(合成)



2. 調査区北側全景(南から)



3. 調査区南側全景(南から)



4. 調査前風景(西から)



5. 作業風景



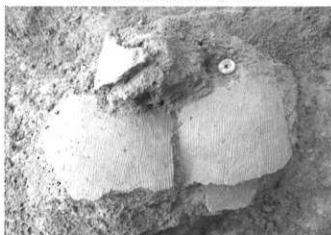
1. 旧石器時代調査完了状況（東から）



2. 調査区南側基本土層（南から）



3. S1001 遺物出土状況（南から）



4. S1001 遺物出土状況（東から）



5. S1001 遺物出土状況（東から）



6. S1001 完掘（南から）



7. S1001 竈完掘（南から）



8. S1001 掘形（南から）





1. S1001 電掘形 (南から)



2. S1002 遺物出土状況 (南から)



3. S1002 完掘 (南から)



4. S1002 電完掘 (南から)



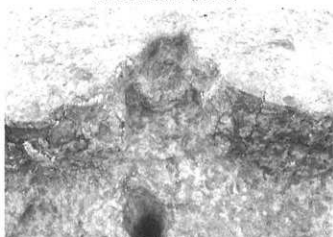
5. S1002 旧電完掘 (南から)



6. S1002 掘形 (南から)



7. S1002 電掘形 (南から)



8. S1002 旧電掘形 (南から)



1. S1003 遺物出土状況 (南から)



2. S1003 完掘 (南から)



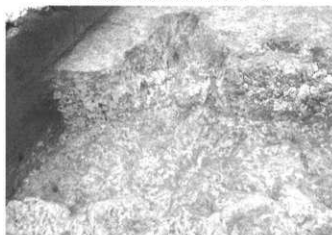
3. S1003 竈完掘 (南から)



4. S1003 柱穴及び貯蔵穴 (東から)



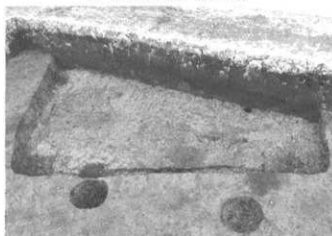
5. S1003 掘形 (南から)



6. S1003 竈掘形 (南から)



7. S1004 遺物出土状況 (南から)



8. S1004 完掘 (南から)



1. S1004 掘形 (南から)



2. S1005 遺物出土状況 (南から)



3. S1005 遺物出土状況 (西から)



4. S1005 完掘 (南から)



5. S1005 甕完翻 (南から)



6. S1005 掘形 (南から)



7. S1005 甕掘形 (南から)



8. S1006 遺物出土状況 (南から)



1. S1006 遺物出土状況 (西から)



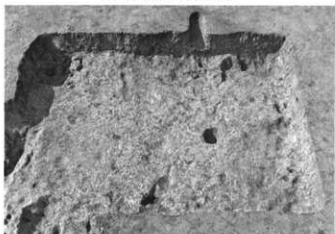
2. S1006 遺物出土状況 (南から)



3. S1006 竈 (南から)



4. S1006 完掘 (南から)



5. S1006 掘形 (南から)



6. S1006 竈掘形 (南から)



7. S1007 遺物出土状況 (南から)



8. S1007 遺物出土状況 (西から)



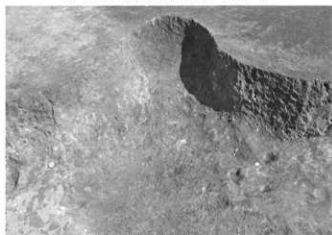
1. S1007 遺物出土状況 (南から)



2. S1007 電遺物出土状況 (南から)



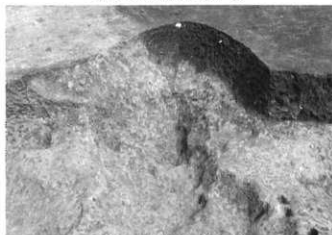
3. S1007 完掘 (南から)



4. S1007 電完掘 (南から)



5. S1007 掘形 (南から)



6. S1007 電掘形 (南から)



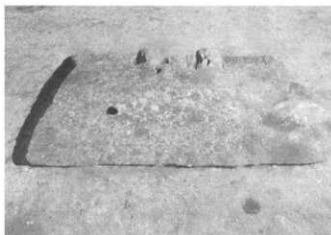
7. S1008 遺物出土状況 (南から)



8. S1008 遺物出土状況 (南から)



1. S1008 遺物出土状況



2. S1008 完掘 (南から)



3. S1008 完掘 (西から)



4. S1008 1号竈完掘 (南から)



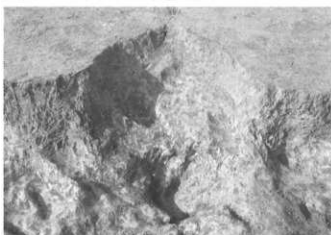
5. S1008 2号竈完掘 (南から)



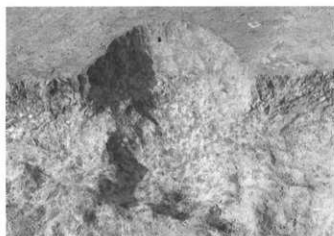
6. S1008 3号竈完掘 (西から)



7. S1008 掘形 (南から)



8. S1008 1号竈掘形 (南から)



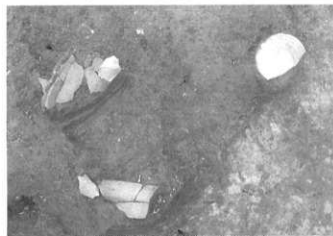
1. S1008 2号電掘形 (南から)



2. S1008 3号電掘形 (西から)



3. S1009 遺物出土状況 (南から)



4. S1009 遺物出土状況 (南から)



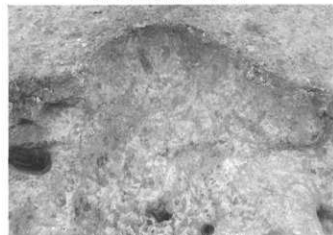
5. S1009 完掘 (南から)



6. S1009 電完掘 (南から)



7. S1009 掘形 (南から)



8. S1009 電掘形 (南から)



1. SI010 遺物出土状況 (南から)



2. SI010 電遺物出土状況 (南から)



3. SI010 掘形 (南から)



4. SI010 電掘形 (南から)



5. SI011A 完掘 (南から)



6. SI011A 電完掘 (南から)



7. SI011B 完掘 (南から)



8. SI011B 遺物出土状況 (南から)

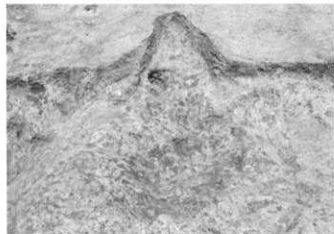




1. SI011B 甕完掘 (南から)



2. SI011B 掘形 (南から)



3. SI011B 甕掘形 (南から)



4. SI012 遺物出土状況 (南から)



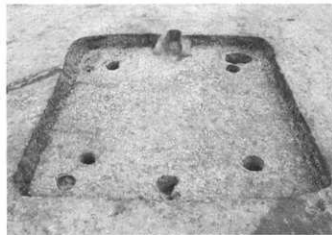
5. SI012 遺物出土状況 (南から)



6. SI012-P1 遺物出土状況 (南から)



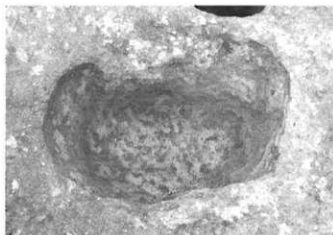
7. SI012 甕遺物出土状況 (南から)



8. SI012 完掘 (南から)



1. SI012 竈完掘 (南から)



2. SI012 貯蔵穴完掘 (北から)



3. SI012 掘形 (南から)



4. SI012 竈掘形 (南から)



5. SI013 遺物出土状況 (南から)



6. SI013 遺物出土状況 (東から)



7. SI013 遺物出土状況 (南から)



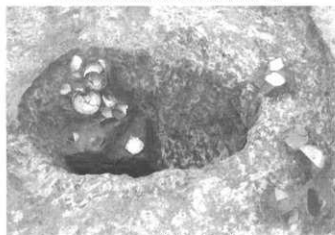
8. SI013 遺物出土状況 (東から)



1. SI013 電前遺物出土状況 (南から)



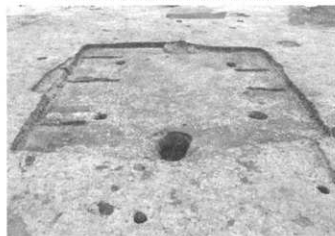
2. SI013 電横遺物出土状況 (南から)



3. SI013-SK1 遺物出土状況 (西から)



4. SI013-SK1 遺物出土状況 (西から)



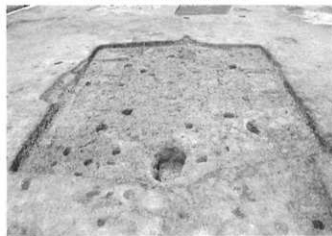
5. SI013 完掘 (南から)



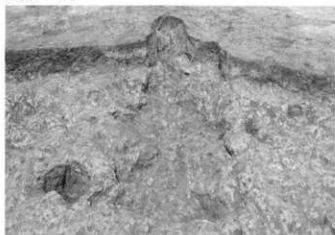
6. SI013 電完掘 (南から)



7. SI013-SK1 完掘 (南から)



8. SI013 掘形 (南から)



1. SI013 電掘形 (南から)



2. SI014 完掘 (南から)



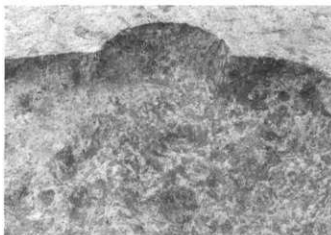
3. SI015 遺物出土状況 (西から)



4. SI015 電完掘 (西から)



5. SI015 掘形 (西から)



6. SI015 電掘形 (西から)



7. SI016 完掘 (南から)



8. SI016 電完掘 (南から)



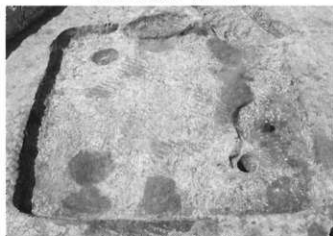
1. SI016 貯蔵穴 (南から)



2. SI016 掘形 (南から)



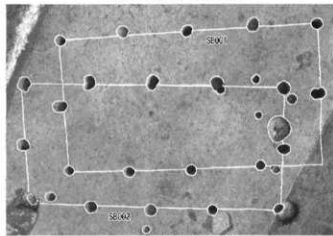
3. SI017 検出状況 (南から)



4. SI017 完掘 (南から)



5. SI017 掘形 (南から)



6. SB001-002 (西から)



7. SB001 完掘 (南から)



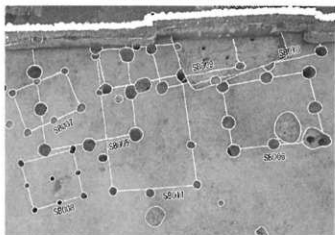
8. SB002 完掘 (南から)



1. SB003 完掘 (東から)



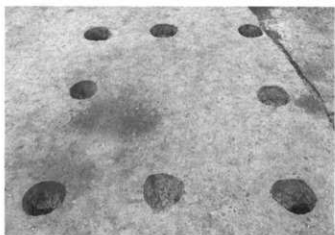
2. SB004 完掘 (南から)



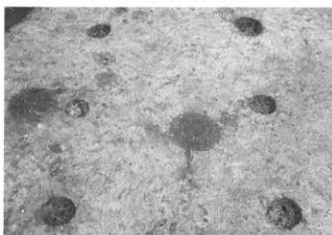
3. SB005～011 (南から)



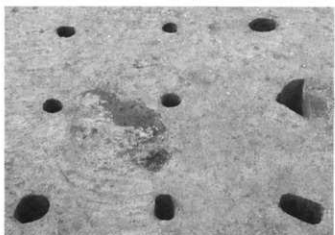
4. SB005 完掘 (南から)



5. SB006 完掘 (東から)



6. SB007 完掘 (西から)



7. SB008 完掘 (東から)



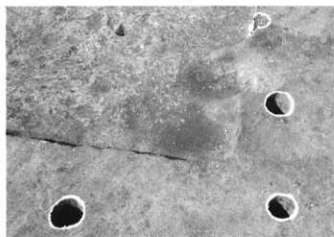
8. SB009 完掘 (西から)



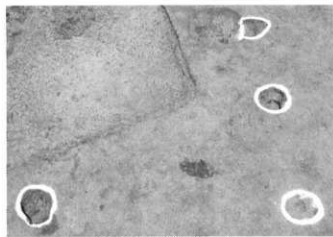
1. SB010 完掘 (西から)



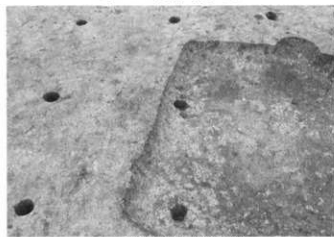
2. SB011 完掘 (南から)



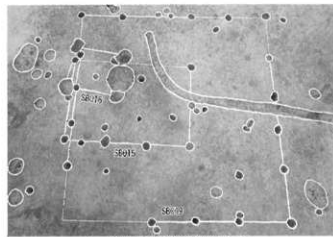
3. SB012 完掘 (南から)



4. SB013 完掘 (南から)



5. SB014 完掘 (西から)



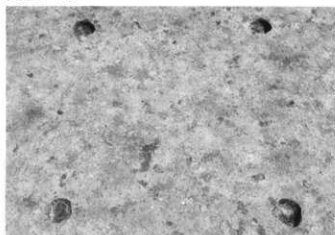
6. SB015-016-019 (南から)



7. SB016 完掘 (南から)



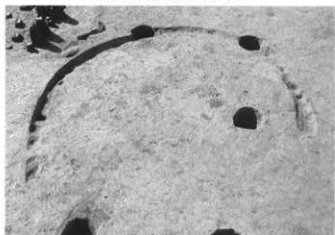
8. SB017 完掘 (南から)



1. SB018 完掘 (南から)



2. SA001 完掘 (東から)



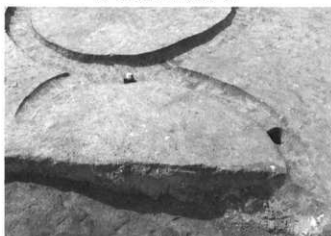
3. SX001 完掘 (東から)



4. SX002 完掘 (南から)



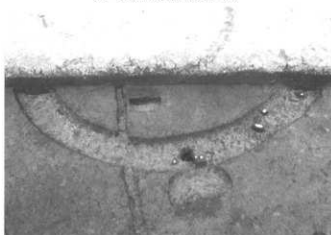
5. SX003 完掘 (西から)



6. SX005 完掘 (東から)



7. SX006 完掘 (西から)



8. SX007 完掘 (北から)

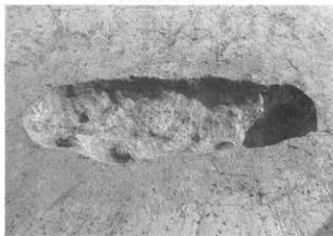




1. SK002 完掘 (東から)



2. SK004 完掘 (東から)



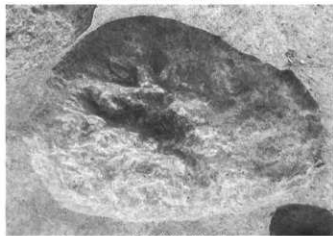
3. SK005 完掘 (北から)



4. SK006 完掘 (東から)



5. SK007 完掘 (南から)



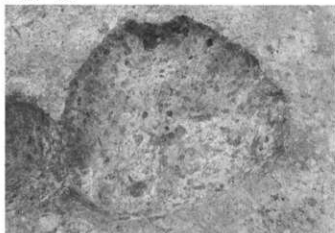
6. SK008 完掘 (東から)



7. SK009 完掘 (北から)



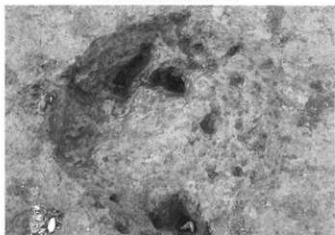
8. SK010 完掘 (東から)



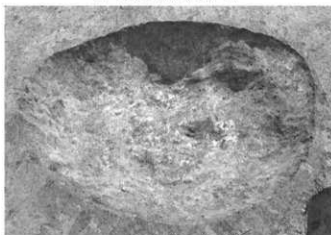
1. SK011 完掘 (東から)



2. SK012 完掘 (東から)



3. SK013 完掘 (東から)



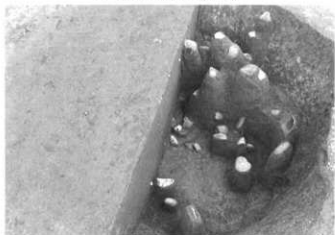
4. SK014 完掘 (西から)



5. SK015 完掘 (東から)



6. SK016 完掘 (北から)



7. SK017 遺物出土状況 (西から)



8. SK017 出土瓦 (西から)



1. SK017 セクション (南から)



2. SK017 完掘 (西から)



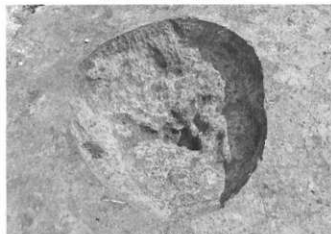
3. SK018 完掘 (東から)



4. SK019 完掘 (南から)



5. SK020 完掘 (東から)



6. SK021 完掘 (西から)



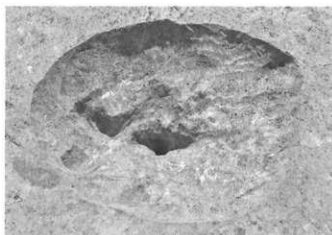
7. SK022 完掘 (南から)



8. SK023 完掘 (東から)



1. SK024 完掘 (西から)



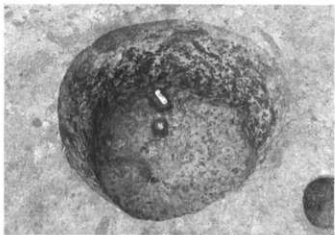
2. SK025 完掘 (東から)



3. SK026 完掘 (東から)



4. SK027 完掘 (南から)



5. SK030 完掘 (南から)



6. SK031 完掘 (南から)



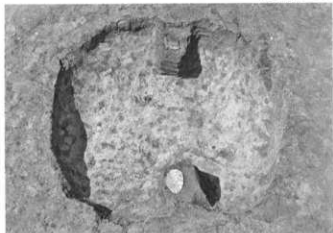
7. SK032 遺物出土状況 (北から)



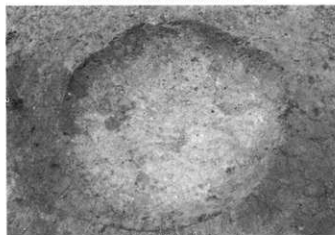
8. SK033 完掘 (西から)



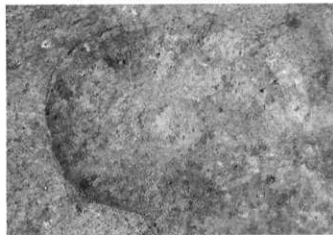
1. SK034 遺物出土状況 (西から)



2. SK035 遺物出土状況 (東から)



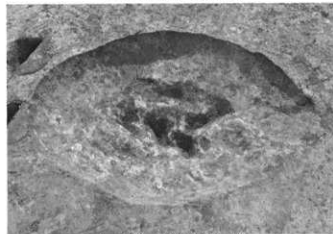
3. SK036 完掘 (東から)



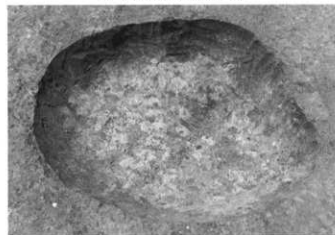
4. SK037 完掘 (南から)



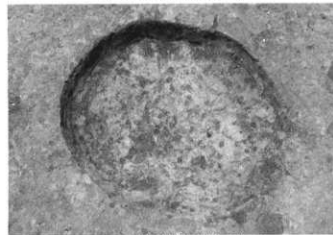
5. SK038 完掘 (南から)



6. SK039 完掘 (東から)



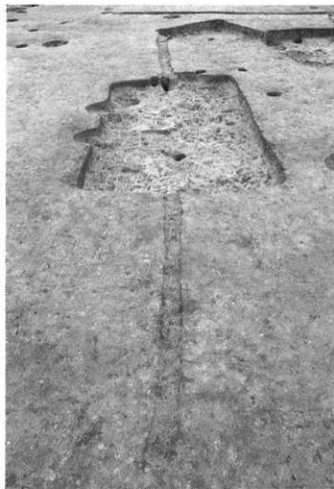
7. SK040 完掘 (東から)



8. SK041 完掘 (北から)



1. SD002 南側完掘 (西から)



2. SD004 完掘 (西から)



4. SD005・006 完掘 (西から)



3. SD002～007 (南から)



5. P244 遺物出土状況 (西から)



S1001-1



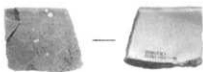
S1001-2



S1001-3



S1001-4



S1001-5



S1001-6



S1001-7



S1001-8



S1001-9



S1001-10



S1001-11



S1001-12



S1001-13



S1001-14



S1001-15



S1001-16



S1001-17



S1001-18



S1001-19



S1001-20



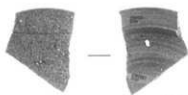
S1001-21



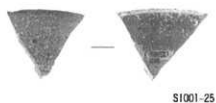
S1001-22



S1001-23



S1001-24



S1001-25



S1001-26



S1001-28



S1001-27



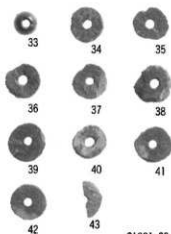
S1001-29



S1001-30



S1001-31



S1001-33 ~ 43



S1001-32



S1001-44



S1001-45



S1001-46



S1001-47



S1001-48



S1001-49



S1001-50



S1001-51



S1001-52



S1001-53





S1001-54



S1001-55



S1001-56



S1001-57



S1001-58



S1001-59



S1001-60



S1001-61



S1001-62



S1001-63



S1002-1



S1002-2



S1002-3



S1002-4



S1002-5



S1002-6



S1002-7



S1002-8



S1002-9



S1002-10



S1002-11



S1002-12



S1002-16



S1002-17



S1002-18



S1002-19



S1002-13



S1002-14



S1002-15



S1002-20



S1002-21



S1003-1



S1003-2



S1003-3



S1003-4



S1003-5



S1003-6



S1003-7



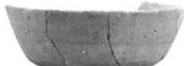
S1003-8



S1003-9



S1003-10



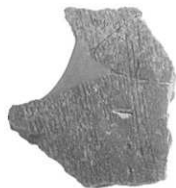
S1003-11



S1003-12



S1003-13



S1003-14



S1003-16



S1003-15



S1003-17



S1003-18



S1003-19



S1003-20



S1003-21



S1003-22



S1003-23



S1003-24



S1003-25



S1003-26



S1003-27



S1003-28



S1003-29



S1003-30



S1003-31



S1004-5



S1004-6



S1004-7



S1004-8



S1004-9



S1004-10



S1004-11



S1004-12



S1004-13



S1004-14



S1004-15



S1004-16



S1004-17



S1004-18



S1004-19



S1004-20



S1004-21



S1004-22



S1004-1



S1004-2



S1004-3



S1004-4



S1005-1



S1005-2



S1005-3



S1005-4



S1005-5



S1005-6



S1005-7



S1005-8



S1005-9



S1005-10



S1005-10 内面



S1005-11



S1005-13



S1005-12



S1005-14



S1005-15



S1006-1



S1006-2



S1006-3



S1006-6



S1006-4



S1006-5



S1006-7



S1006-8



S1006-9



S1006-10



S1006-11



S1006-12



S1006-13



S1006-14



S1006-15



S1006-16



S1006-17



S1006-18



S1006-19



S1006-20



S1007-1



S1007-1 墨書



S1007-3



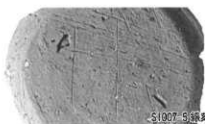
S1007-2



S1007-4



S1007-5



S1007-9 縁則



S1007-6



S1007-7



S1007-9



S1007-10



S1007-11 上



S1007-8



S1007-11 下



S1007-13



S1007-12



S1007-14



S1007-15

S1007-16

S1007-17



S1008-1



S1008-2



S1008-3



S1008-4



S1008-5



S1008-5 墨書



S1008-6



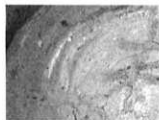
S1008-7



S1008-8



S1008-9



S1008-9 罫雲



S1008-10



S1008-11



S1008-12



S1008-13



S1008-14



S1008-15



S1008-16



S1008-18



S1008-19



S1008-17



S1008-21 上

S1008-22 上



S1008-20



S1008-21



S1008-22 側面



S1008-23



S1008-24



S1009-1



S1009-1 へら記号





SI009-2



SI009-4



SI009-5



SI009-3



SI009-6



SI010-1



SI010-2



SI010-3



SI010-4



SI010-5



SI010-6



SI011-1



SI011-2



SI011-3



SI011-4



SI011-5



SI011-6



SI012-1



SI012-2



SI012-3



SI012-4



SI012-5



SI012-6



SI012-7



SI012-8



SI012-9



SI012-10



SI012-11



SI012-12



SI012-13



SI012-14



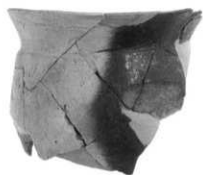
SI012-15



SI012-16



SI012-17



SI012-18



SI012-19



SI012-20



SI012-21



SI012-23 上



SI012-23 下



SI012-22



SI012-24



SI012-25



SI012-26



SI012-27



SI012-28



SI012-29



SI012-30



SI012-31



SI012-32



SI012-33



SI012-34



SI012-35



SI012-36



SI012-37



SI012-38



SI012-39



SI012-40



SI012-41



SI012-42



SI012-43



SI012-44



SI012-45



SI012-46



SI012-47



SI012-48



SI012-49



SI013-1



SI013-2



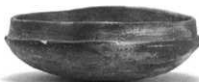
SI013-3



SI013-4



SI013-5



SI013-6



SI013-7



SI013-8



SI013-9



SI013-10



SI013-11



SI013-12



SI013-13



SI013-14



SI013-15



SI013-16



SI013-17



SI013-18



SI013-19



SI013-20



SI013-21



SI013-22



SI013-23



SI013-24



SI013-25



SI013-26



SI013-27



SI013-28



SI013-29



SI013-30



S1013-31



S1013-32



S1013-33



S1013-34



S1013-35



S1013-36



S1013-37



S1013-38



S1013-39



S1013-40



S1013-41



S1013-42



S1013-43



S1013-44



S1013-45



S1013-46



S1013-47



S1013-48



S1013-49



S1013-50



S1013-51



S1013-52



S1013-53



S1013-54



S1013-55



S1013-56



S1013-57



S1013-58



S1013-60上



S1013-59



S1013-60下



S1013-66



S1013-61



S1013-62



S1013-63



S1013-64



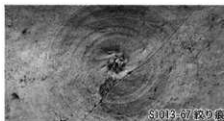
S1013-67 側面



S1013-67



S1013-65



S1013-67 紋り部



S1013-68





S1013-69



S1013-70



S1013-71



S1013-72



S1013-73



S1013-74



S1013-75



S1013-76



S1014-1



S1014-2



S1014-3



S1015-2



S1015-1



S1016-1



S1016-2



S1016-3



S1016-4



S1016-5



S1016-6



S1016-7



SI016-8



SI016-9



SI017-1



SI017-2



SI017-3



S8009-1



SK007-1



SK017-1



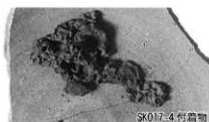
SK017-2



SK017-3



SK017-4



SK017-4 付着物



SK017-6 凹面



SK017-6 凸面



SK017-5



SK017-7



SK021-1



SK030-2



SK030-3



SK032-1



SK030-1



SK032-1 線刻



SK032-2



SK032-3



SK034-1



SK034-2



SK034-3



SK034-4



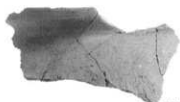
SK034-5



SK034-6



SK035-1



SE001-1



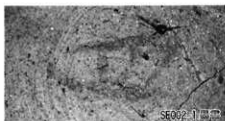
SE002-1



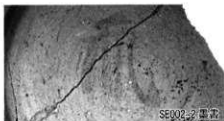
SE002-2



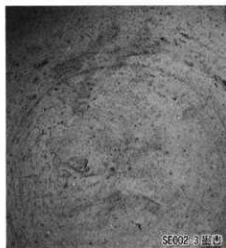
SE002-3



SE002-4



SE002-5



SE002-6



SE002-7



SE002-8



SE002-9



SE002-10



SE003-1



SE003-2



SE003-3



SE003-4



SE003-5



S0002-1



P244-1



P244-2



P299-1



遼橋外 (古墳)-1



遼橋外 (古墳)-2



遼橋外 (古墳)-3



遼橋外 (古墳)-4



遼橋外 (古墳)-5



遼橋外 (古墳)-6



遼橋外 (古墳)-8



遼橋外 (古墳)-7



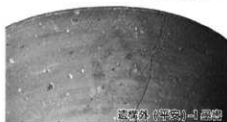
遼橋外 (平安)-1



遼橋外 (平安)-2



遼橋外 (縄文)-1



遼橋外 (平安)-1 内部



遼橋外 (平安)-2 内部



遼橋外 (縄文)-2

# 報告書抄録

ふりがな	にしおさかべにしはらいせき いーく							
書名	西荆部西原遺跡 (E区)							
副書名	独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	白崎 智隆							
編集機関	埋蔵文化財発掘調査支援共同組合 (埋文協)							
所在地	〒169-0073 東京都新宿区百人町2-5-8 TEL03-3365-2277							
発行年月日	2010年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
栃木県宇都宮市インターパーク4丁目7-5, 7-6 西荆部西原遺跡		09201	4354	36° 29' 42"	139° 54' 46"	2009.01.05 ～ 2009.06.12	4,400 m <sup>2</sup>	社屋建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西荆部西原遺跡	包蔵地	縄紋	土坑	3基	縄紋土器, 石鏃			
	集落	古墳	竪穴住居跡	10軒	土師器, 須恵器, 石製紡錘車, 白玉, 縄文石, 砥石, 鉄鏃	古墳時代終末期の集落。複数の円形周溝遺構を検出し, その内の1基で炭化種実を確認した。		
			掘立柱建物跡	8棟				
	集落	奈良・平安	円形周溝遺構	6基	土師器, 須恵器, 瓦, 土製紡錘車, 鉄製鎌, 鉄製刀子		円形有段遺構を1基検出。同じく奈良時代の井戸跡からは則天文字「天」の黒書土器が出土した。	
土坑			5基					
溝跡			3条					
			小穴	16口				
		時期不明	柵列	1列	なし			
			土坑	26基				
			溝跡	1条				
			小穴	171口				
要約	縄紋時代は草創期～早期と考えられる陥穴を検出した。加曾利E式土器が出土したが遺構は検出できなかった。古墳時代は終末期を中心とする集落で、4×5間や5×5間など大型の掘立柱建物跡が目立った。奈良時代は円形有段遺構が目されるが、竪穴住居跡は確認できなかった。平安時代は竪穴住居跡に比べ掘立柱建物跡が多い集落が展開され、複数の黒書土器が出土した。							

判 型 : A4判  
頁 数 : 202頁  
本文組版 : 14級 (10 p) 明朝を基本  
図版製版 : 400dpi, 200線2色  
図版印刷色 : 墨+DIC2169  
印刷方式 : オフセット印刷  
用 紙 : 表紙 特種製紙レザック66 ぞうげ菊判 連量121.5kg  
本文 日本大昭和板紙淡クリーム琥珀A判 連量57.5kg  
図版 王子製紙サテン金藤N菊判 連量76.5kg

©2010 Maibunkyou.

---

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第76集

## 西刑部西原遺跡 (E区)

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年6月30日 発行

---

編 集	埋蔵文化財発掘調査支援共同組合 (埋文協) 〒169-0073 東京都新宿区百人町2-5-8	TEL 03-3365-2277
発 行	宇都宮市教育委員会 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5	TEL 028-632-2764
印刷・製本	株式会社 共同印刷所 〒183-0056 東京都府中市寿町3-13-8	TEL 042-368-2001

---

埋蔵文化財発掘調査支援共同組合 (埋文協) <http://www.maibun.jp/>